

---

# うそつきは世界を救う

榊慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うそつきは世界を救う

### 【Nコード】

N2115S

### 【作者名】

榊慎

### 【あらすじ】

俺はある日事故で死んだ。そして目覚めた場所には神様がいた。そしたらその神様が俺に世界を救ってほしいとかいいやがる。俺にそんなんできるはけねえだろ。とかなんとか言ったらやることになっちまった。はあめんくせえ。

## プロローグ

目を開けるとそこは森だった。

空は高く澄んでいる。

見知らぬ場所だ。

つて、あれ？なんで俺こんなところにいるんだ。

よし、まず状況を確認してみよう。

え〜と服は俺の高校の制服のままだ。制服のポケットの中を探ってみると財布と携帯、家の鍵それと工藤要と書かれた生徒手帳がはいっていた。財布の中身を確認するととられてはいないようだった。

次に周りみると、木がある。まあ森の中なんだから当然なんだが。俺がさつきまで寝ていたところにはちょうどいい弾力のある草が茂っていた。寝心地がよかったのはこのおかげか。

そんな感じで俺はいま、THE自然みたいなところにいる。

「まったく何も分からん。」

まじで、なんでこんなところにいるんだろう。誘拐かな？いや誘拐したのにこんなところに放置するのはないだろう。そしたら夢遊病か？って夢遊病でこんなどこのかすらわからない場所に來るありえなさすぎるわ！！

「やっぱ何にもわかんねえ〜。」

とりあえず、空の色からして朝か昼ぐらいか。今何時だ？

俺は携帯で時間をみよとした。

「充電切れかよ。」

これじゃ助けもよべない。

俺はもう一度周りを見る。俺はふと気づいた。

なんかおかしい。いくら見知らぬ場所だからってさすがに県外ってことはないずだ。木にさえぎられたとしてもビルの頭くらいは見えるはず。それにさつきから静かすぎる。森の中なのに鳥の声わおるか物音ひとつ聞こえないのはおかしすぎる。そもそも俺はここに来るまでなにをしていたんだ。

俺がそのことを思い出そうとしたとき

「やっと見つけました。ここにいたんですね。」

そんなおっとりとした声を聞いた。

「ついてきてください。」

声の主は女だった。髪は金色、瞳は青と日本人でないのはたしかだ。おまけに服はどこかの貴族が着ていそうな豪華な物だ。

「ちょっとまって。そのまえに俺の質問にこたえろ。」

俺をつれていこうとした女にいった。出会ってそうそう見ず知らずの人間の言うことなんてきるか。訳のわからないまま犯罪の片棒を担がされるのもいやだしな。

「質問なんでしょう?」

女は首をかしげておっとりとした声で言った。

「ここはどこだ。何で俺はここにいる。それとあなたの目的はなんだ。」

俺は身構えながら言う。

「あなたはなんでここにいるのか分かってないんですか?」

「それはどういつ」

「まあいいでしょう。そのことについても私についてこられたらわかります。」

女は俺の言葉をさえぎって歩きだした。ここでは話す気はないらしい。俺も黙ってついていくことにした。

三十分くらい歩いたところで俺はため息をついた。結構歩いているはずなんだが一向に目的地に着く気配がない。しかも会話が一切ないからなんだか空気が重い。そこで俺はもう一度質問しようとしたらまた女の声にさえぎられた。

「つきました。ここで少々お待ちください。」

そういうと女は俺から離れた。女は連れてきた場所は湖だった。湖の水はそれ自体が光っているかのごとくきれいだ。そして湖の真ん中には空の雲の上まである大樹がたっていた。まさに絶景だった。

「すげえところだな。」

「そろそろよろしいかな？」

俺が景色に見とれていると後ろから老人のような声が聞こえた。

「あんた誰だ？」

振り向いた俺は声をかけてきたじいさんに言った。白い長髪にたくわえられた髭、服も女と同じく貴族みtainな豪華な物。また変なのがでてきたな。

「変なのとは失礼だな。」

「こころを読まれただど!!」

「まあよい。話をはじめてもよいかの。」

なるほど。この変なじいさんが俺を呼んだ張本人って訳か。

「いいぜ。まずあんた達はなにもんなんだ。」

「うむ。わしは神だ!!」

## プロローグ（後書き）

紳慎です。

二作目になります。

誤字脱字がありましたらいらいつてくださいます。  
感想まっています。

## プロローグ2

「おいじいさん。病院いくんだったらいいところ紹介するぜ。」

「わしは別に頭がおかしくなった訳ではない!!」

「大丈夫だって、ほら老後一人の生活にたえられなくなって起きてる間も夢見がちになったただけだろう。そういうのは病院にいったらちゃんとなおるから。」

「だから違うといっておるじゃろうが!!」

このじいさん何をいいたすかと思えば神様だとかいいやがって。本当に頭大丈夫か？

「はいはい、分かったから。今救急車呼んであげるから。おとなしくしてなさい。」

俺は携帯に手をかけようとしたが充電切れだったのを思い出す。

「ああ、悪いけど電話とかないこ。」

「残念ながらここにはそのようなものはないんです。申し訳ありません。フツッ。」

「そりゃ残念だ。」

俺はじいさんの少しうしろにいた女に聞いたが電話はないらしい。しかしこいつ改めてみるとすごい美人だなあ。そんなことを考えて



いると頭に激痛が走った。

「いって~~~~っ!!」

「いい加減にせんこの杖で殴るぞ。」

「殴ったあとに言うんじゃねえ!!」

この変態じいさんどっから杖なんてだしやがった。頭割れるかとおもったぞ。

「レイルカも笑うでない。仮にもわしの部下じゃろう。」

「すみません。フツ。でもアウレオルス様とその方のやりとりがコントみたいでおもしろくて。フフフ。」

レイルカと呼ばれた女は口にてをあててわらっている。俺は殴られた頭をさすりながら立ち上がった。

「おい、そこの遊んでる二人、そろそろ話し進めたいんだが。」

「遊んでなどおらん！もとはといえばお主のせいだろうが!!」

「アウレオロス様少し落ち着いてください。」

「そうだが、そんなに騒ぐと血糖値あがるぜ。」

「だからそれはお「はいはい分かったから落ち着けて。」

このままではずっとこのやりとりが続きそうだったので強制的に終

わらせる。そろそろ俺がここに来た理由とかも知りたいし、早くかえりたいし。

「で、もう一度聞く。あんた達はなにもんだ。」

「神じゃ。」

「そういうんじゃないくて」「うそではありません。」「」

「わたしはアウレオロス様に使える天使レイルカ。そしてこの方はあなたの世界を管理する神と呼ばれる存在です。」

向こうはこちらを見つめている。どうやら全部がうそって訳じゃないらしい。だがいまいち信じられねえし。

「じゃあ、お前たちが神や天使って言われてるんなら、何か証拠はあんのか?」

「証拠ですか。」

「そうだ。何かそういう証明できるような力とかみせてくれりゃいい。」

「わかりました。ではいきますよ。」

レイルカがそういうと一歩前に出て目を閉じた。そると彼女の体が光だした。眩しかったので俺は目をふさいだ。その光がおさまるとゆっくり目を開けた。

「猫?」

目を開けた俺が見たのはごく普通の白い猫だった。俺は猫の前にしゃがんで考えた。えっこれがその力ってやつか？どっからどう見ても普通の猫にしか見えないんだけど。さっきの光ってるときに女と猫いれかえただけじゃねえの？だうなんだ？

「信じていただけましたか？」

「うわっ猫がしゃべった！！」

「猫ではありません。私はレイル力です。」

淡々と返事をする猫もといレイル力。いきなりしゃべるからびっくりした。

「どうやら神様ってのもうそじゃないらしいな。」

「最初からそういつておるじゃろうが。」

「わかった信じるぜ。次の質問いいか。」

「はい。」

レイル力は微笑んでうなずくが神様はなんか不機嫌だ。まあいいや。

「神様はなんで俺をここに連れてきたんだ。」

「お主に頼みたいことがあってな。」

「へえ〜神様が俺に頼みごとねえ。分かった用件いつてみ。手っ取

り早く解決して帰って寝たいから。」

そういうとレイルカと神様は少し驚いたような気になる。

「やはり気づいていなかったんですね。」

「そのようじゃな。」

「おいそれは何のことだ。気づいていないって俺は何を気づいていないんだ。」

口ごもる二人。俺はそのことが何かとても重大なことのようなきがしてならない。そしてレイルカが口を開く。

「あなたがもう死んでいるということにです。」

その言葉を聞いた瞬間俺の頭の中には忘れていた記憶がよみがえった。

そうだ俺はあの時トラックに

あの時俺はいつものように買い物していた。

天涯孤独だった俺はずっと一人だった。

ただ目的もなく生きてるだけの生活だった。

俺が横断歩道で待っているとなりの子供が急に飛び出した。

そこにはトラックが迫っていた。

俺は走って子供を突き飛ばした。なんで体が動いたかは分からない。  
俺はそのままはねられて死んだ

## プロローグ2（後書き）

プロローグが長くなってしまった。  
後一話くらいでおわります。

### プロローグ3

「そうか。俺はもう死んでんのか。」

「あまり驚いていないようですね。」

「ああ？何も変わってないからな。」

「？」

レイルカは俺の答えの意味が分かっているらしく首をかしげている。俺は何も変わっていない。だって生きている間も死んでいたからだ。俺は天涯孤独でずっと一人だった。ただ生きているだけ。目的もなく生きているだけ。そんなのは死んでいるのと変わらない。

「それで頼みってなんだよ。」

「え？」

「だからあんた達は俺になんかやってほしいことがあるんだろ。それを言えっかっていったんの。」

「あ、ああはい。わかりました。でもよろしいのですか？」

「なにが？」

「私達の頼みを聞くことです。」

「まあ死んじまったし、神様の頼み聞くのも悪くないかなあって思

「ったから。」

このまま何もしなかったら天国か地獄に行くだけだろうし。それじやつまんねえしな。あ、でも天国って善人だけがいけるらしいからな。俺いけねえかもしれねえ。

「分かった。お主にその気があるならわしの頼みを聞いてもらおうとしよう。」

「じゃあ早く言ってくれ。」

「うむ。世界を救ってはくれぬだろうか。」

「はい？」

せ、世界を救ってくれて、そんな無理に決まってるだろうが!!  
神様が俺に頼んだことはあまりにも難題すぎた。

「前言撤回。帰って寝るわ。」

「ちょ、ちょっと待て。どうゆうことじゃ!!？」

「どうもこうも、いくら頼みごとでも物には限度ってもんがあるだろが!!！」

「しかしお主はやると言ったではないか。」



「ああ言ったさ。でもな世界を救ってくれていち高校生が解決できるレベルじゃないだろ！！そんなもんはどこぞの英雄にでも頼みやがれ！！」

まったくなにを言い出すかと思えばこのじいさんは。なんで俺が無理難題を解決しなくちゃいけないんだ。むしろ世界を救うのって神様の役目だろう。

「とにかく世界を救うなんて俺には無理だ。他当たってくれ。」

「まってくれ！これはお主にしか出来んのじゃ。」

「いやむしろ、一番俺にできないことだろ。」

「いえ。あなたを選らんだのはちゃんとした理由があります。」

理由？別に俺には特殊な能力もないし、運動能力も人よりちょっと上なくらいなだけなのに。

「理由ってなんだよ？」

「あなたが器を持っているからです。」

器？また意味が分からない言葉が出てきた。器なんて持ってないぞ。ひょっとして家の食器棚の中にあるのか？いやそんなのあるはずないよな。

「悪いけど俺はそんなもん持ってないし、家の食器棚の中にもないぞ。」

「いえ多分、あなたの考えているようなものではありません。」

「はあ？俺の考えているようなものじゃない？じゃあ器って言う名前別のなにかということか？」

「なんなんだよ。その器ってというのは。」

「はい。正確にいうとあなたの中にある歪みを倒せる証とでもいいましょうか。」

「また変な単語が聞こえた。今度は歪み？それで俺はそれを倒せる証を持つてるて。意味わかんねえ。」

「はあ。もういいや。まずそっちの用件全部聞いわ。質問はそのあとにする。」

「はい。分かりました。では説明しますね。」

レイルカは丁寧でおっとりした口調で説明しだした。

「まず、このようなことになった経緯を説明します。あなたが死んでしまう前に私達のほうで少しミスをしてしまって三人の人間をころしてしまったのです。」

自分達のミスついで三人も人殺しておいてそれを少しって言うのはどうなの！？

「その方達はまだ死ぬはずではなかった人でした。この時点でこのようなことはあってはならないことでした。そこで私達はその方達

の魂を別の世界へ転生させることにしたんです。そして、その方達を転生させる際にお願いをされたのです。」

「お願い？」

「はい。その方達は『転生をするのなら何か力がほしい』と申されました。」

まあなんとも傲慢なやつらだなあ。

「私達も死なせてしまった手前できる限りの要望にこたえようとしたのでアウレオルス様がそれぞれに別々の力を授けたのです。そして、その方達は転生しました。」

「ですがその方達が転生したことによって新たな問題が発生したのです。」

「その問題ってやつはさつき言ってた歪みにつながるのか？」

「はい。彼らに力を与えて転生させたことによって、その世界に負荷がかかり歪みが生まれました。その歪みは放置しておくとな人の負<sup>マイナス</sup>の感情を取り込み、肥大化し、やがて世界を跡形もなく破壊してしまいます。それだけではなくほかの世界にも干渉し、その世界も滅ぼしてしまう可能性があります。」

おいおいこれってかなりやばいことなんじゃないか。

「次にあなたの中にある器についてです。正式な名称は“正浄の器”。すべての世界で唯一歪みを浄化できる者が持つ証です。」

「ちょっと待つてくれ。なんでそんなものが俺の中にあるんだ？」

「器は前の所持者が死ぬと別の人間に移り変わります。今回はそれがあなただったのです。」

「俺以外には所持者はいないのか？」

「先ほども言いましたが、器はすべての世界でひとつしかないのです。だからあなたにしか出来ないのです。」

「さて、そろそろ聞かせてもらおうぞ。お主がこれからどうするか。神様に聞かれて俺は黙り込んでしまう。俺に世界なんて救えるのか？いくら歪みを倒す力があるからって成功するとはかぎらない。もしかしたらまた死ぬかもしれない。失敗したら世界が滅びる。俺に出来るのか。」

「俺がやらなかったらどうなる？」

「次の器が現れるまで待つことになるじゃろう。」

「次のってどのくらい待つんだ？」

「わからん。」

それって次のやつが現れる前に世界がなくなってしまう可能性がある。あるってことか！それだったら・・・けど俺がいつたって確実にできるわけじゃない。

「お願いです！！力を貸してください！！！」

レイルカの言葉を聞いた時俺はとまった。“力を貸してください”  
か。誰かに必要とされたのは初めてかもしれない。その言葉は何  
度も俺の頭の中に響いた。

「俺がいけば救えるのか？」

「わからん。」

「救える確立は上がるのか？」

「お主にその意思があるなら少なくとも今よりはあがるじゃろう。」  
「  
それだけ聞けたら十分だ。」

「やる。やってやるよ神様。世界を救ってやるよ。」

「ほ、ほんとですか!？」

「ああ。やってやるよ。」

「よかったです。ありがとうございます。」

レイルカはなみだ目になりながらお礼を言ってくる。まだ何もして  
いないんだが。

「本当にいいのじゃな。死ぬかもしれないのじゃぞ。」

「んなことは分かってるよ。てかっやるって決めたのにそういつい  
とというなよ。」

「そうか。愚問じゃったか。ならばさっそく行ってもらうじやない。」

「え？もう行くのかよ。」

「そうじゃ。いつ歪みが現れるかわからんのじゃからな。」

いやだからってなんの説明も受けてないんですけど。

「そつえば俺がいく世界ってどんなところなんだ？」

「言っておらんかったか。確か『魔法少女リリカルなのは』というアニメの世界じゃ。」

「え？俺アニメの世界にいくのか！？」

へえ〜世界にもいろいろあるんだなあ〜

「よし、ではお主をおくるぞ。」

神様がそついうと俺の足元に魔法陣がでてきた。

「うわっマジですぐだなあ。俺一人で大丈夫かあ？」

「安心せい。レイルカもお主のサポートとして行くことになっておる。」

「本当か！」

「はい。これからよろしくお願いします。」

「ああこっちもよろしくな。」

「アウレオルス様いままでありがとうございます。」

「うむ。そちらのことはまかせたぞ。」

俺は首をかしげた。なんだか一生の別れたいだなと思ったからだ。

「お主もよろしく頼んだぞ。」

「おう。とりあえずがんばってみるわ。」

そういった瞬間俺の視界は真っ白になった。目的の世界に送られるのだろう。

そうしてうそつきの物語は始まった

## プロローグ3 (後書き)

やっとプロローグがおわった。  
次からは本編です。



## 異世界での受難

「えええええええん。えええええん。」

あれ？ここどこだ？なんか赤ん坊の泣き声がするんだけど。

「ユキノ！！生まれたぞ！！」

「ええ。この子が私達の愛の結晶なのね。」

どうやらどこかの夫婦の子供が生まれたいらしい。おめでたいねえ。ま、それはおいといて。俺は今どうなってんだ？と俺は首を動かさうとしたら、動かなかった。あれ？何で動かねえんだ？すると、突然うわつとした、浮遊感に襲われた。

「おめでとうございます。元気な男の子です。」

俺を持ち上げたのは看護婦だった。それよりも元気な男の子って、まさか！？俺のこと！！ってことは俺は赤ん坊になったのか！！！！聞いてねえぞこんなこと！！俺は看護婦からユキノと呼ばれた女性に移された。

「そっいえば、まだ名前を決めてなかったわね。」

「んっそうだったな。なにがいいかな。」

「そうね。レインっていうのはどうかしら。」

「どうしてだい。」

「ほら雨って人の心を洗い流すっていうじゃない。この子も誰かの心を洗い流して前へ進められるようにすることが出来ることになってほしいから。」

「いいじゃないか。よし今日からお前はレインだ。よろしくな。」

「よろしくね。」

あ、こちらこそよろしく。ってそんなのんきなこと言ってる場合じゃないなかつた！！なんで俺赤ん坊になるの！！これからどうしりゃいいの！！

こうして俺は新しい名前と新しい親を手に入れた。

俺の異世界での生活が始まった。

俺、マジでこれからどうなるんだろ。

こちらの世界に来て一日がたった。とりあえず今の状況で分かったことを説明しよう。

まず、こちらの世界での俺の名前はレイン・オルハルト。はじめはこの名前を聞いて外国人かと思ったがそうでもないらしい。

今俺は病室のベッドの横に寝ているのだが、そのベッドに寝ている女性。この人が俺の母親にあたる人名前は雪乃・オルハルト。日本人だ。容姿はつややかな黒髪におおきな黒い瞳、肌は白く顔立ちを整っている。十人に聞けば十人が美人だと答える容姿だ。

そして今はいないが父親の名前はレオン・オルハルト。青い瞳に髪は白いオールバックで肌は少し日焼けしている。身長は190cmはあり体も結構筋肉質だ。なんというかかなり体育会系な人だ。まあ実際そうなのだが。ちなみにアメリカ人だ

というわけで俺はハーフということになる。だが白い髪に白い肌。瞳の色は紫とあまり日本人の要素が少ないハーフだ。多分父親の血が濃いのだろう。

次に俺は今どこにいるのかというと日本の病院にいる。名前などは分からないがときどき様子を見に来ていた看護婦が日本語でしゃべっていたから間違いないだろう。

以上が今俺が分かっていることだ。だがあまり意味のない情報だ。今いる場所や親の名前が分かってもしもどうすることもできない。世界がどういふふうになっているかが知りたいところだ。もしかしたらもう歪みが出てきているかもしれないし、そうだとしても赤ん坊だから退治しにいけないんだが。そういえばあの天使はどうなったんだ？そんなことを考えていると腹が減ってきた。

（どうしようか。とりあえず飯を貰おう。）

俺は飯を貰おうと母親を呼んでみることにした。

「ええええん。えええん。」

だがなぜか俺は泣き出してしまった。

（あれ？なんで泣くの？おかしくね？思考と行動がかみ合っていない

よ！この体！！）

すると俺の泣き声を聞いた雪野が俺を抱き上げた。

「どうしのかな。レインちゃん。」

俺をあやすように言ってくる。

「そうかあ。おなかすいたんだね。ちよつとまってね。」

少し考えて閃いたように呟く。今ので分かったのか。すげえな親つていうのは。俺はこれで飯にありつけると思いながら安心していられたのもつかの間だった。雪乃はいきなり着ている上着のボタンをはずしはじめた。え？あのちよつとなにやってるんですか？雪乃はさらにブラジャーをめくって胸を露出させた。そしてその胸に俺の顔をちかずけた。

「さあどうぞ。」

いやさあどうぞって言われても。どうしろって言っただ。これは母乳を飲めということなのか？百歩譲ってそうだとしても人としてどうなんだ？いや今は赤ん坊だから別に問題はないだろうが、でも精神的に言えば高校生だ。それでそんなことしたらただの変態なんじゃないか。

「あれ？飲まないの？おなかすいてないのかなあ。」

俺が精神で葛藤しているとそんな呟きが聞こえてきた。どうする俺このままじゃ飯にありつけない。かといって飯を食おうとしたら変態になる。どうすりゃいいんだ！！俺のいっこうに減るばかりそし

て俺が出した結論は……

（よし俺も男だ。腹くくるぜ。）

俺は意を決してその行為に及んだ。

そして俺がその行為に及んだあとマジで死のうかと思った。

ちなみにはいていたオムツを替えられたときは心の中で殺してくれと叫ぶこととなった。

## 異世界での受難（後書き）

やっと本編に入れた。

でもしこし短くなってしまうた。

誤字脱字があったらいつてくください。

感想もよろしく願います。

## 再会

俺が転生して五年の月日がたった。

え？時間過ぎるのが早いつて？細かいこと気にしちゃいけないぜ。

ともあれ五年たったんだ。しかしこの五年何にもなかった。

どうゆうことなんだろう？この世界は滅びるんじゃないのか？まあ一回情報を整理してみよう。え〜つとこの世界は歪みによってなくなっちゃうかもしれない、それは俺の前にこっちに来た転生者のせい。そして俺はそれをくいとめるためにここに来た。が、こっちに生まれて何もしていない。以上で情報整理終了〜。

これ大丈夫なの？俺が何もしてなくて滅んじゃうとか嫌だよ。

そういえばあの天使はどうなったんだろう？俺と一緒にこっちに来るって言ってたけど。名前は確かレイルカだったけ。俺のサポートとかだっけか、でもあれから何の連絡もないしな。神様にもっといういろ聞いとけばよかった。

俺はそんなことを考えながら食器の片付けをやっていた。

「母さん。片付け終わったよ。」

「ありがとう。偉いね〜。」

そういつて母さんは俺の頭をなでる。転生してすぐには混乱していたのか本当の親とは思えなかったが五年の歳月の中で人は変わるもの。今では本当の親と思っている。実際本当の親だが。

「母さん、俺ちょっとそといつてくる。」

「お外に行くんだっいたら気をつけてね。あと俺じゃなくて僕でしょ。」

「分かってるよ。」

「もう。」

母さんは俺の口調を注意するが俺はいつも曖昧に返す。母さんは父さんの真似をしていると思ってるが実際は生まれたときの精神年齢が17歳だからだ。いくら体が幼いといっても口調まで直すのは面倒だと思っただけだからだ。今思えば周りより断然大人びている俺を変な子のように扱わないこの夫婦はすごいんじゃないかと感じる。

「じゃあ、いつてきます。」

「日が暮れる前には帰ってきてね。」

「へーい。」

俺は短く返事をする。

家を出て目に入ったのはとても広い野原と森だった。RPGによく出てきそうな風景だ。一応ここは地球だ。だが日本ではない。ここはアメリカのとある郊外に位置する場所だ。

なぜこんな場所にいるのかというと。三年前、母さんが癌にかかったからだ。母さんの癌は少し重いものらしくアメリカの病院で治療



する必要があった。そして父さんが自然が豊かな場所だったら病気も早く治るだろうと言いここになった。俺的にはあまり関係ないように思えるが病気は順調に回復していった。

そんなわけでここにいる。だがここにはあまり娯楽がない。さつきも言ったようにここはアメリカの郊外。公園もなければ、近所にもない。なので必然的になにかするには一人になる。

だから俺はよく森に行っている。森の長い道の先に川が流れていてそこでよく釣りをしている。だが、ただ釣りをしにいくのではなく、長い道を歩いて体力をつけようと思ったからだ。いや本当。

そんなことを考えているいつもの川についた。

「さてと、今日はなにが釣れるかな。」

いつものように俺は釣りを始めた。

十分後・・・

(釣れねえな。)

二十分後・・・

(釣れねえ〜。)

四十分後・・・

(さすがに尻が痛くなってきたな。)

一時間後……

(ふあゝああ、ねみい。何も釣れねえや。)

釣りをして一時間。何も釣れないからそろそろ帰ろうかと思ったとき、雨が降り出してしまった。

「ん？雨か。」

俺はすぐに道具を片付け、川の近くにある岩場のちよつとした洞窟のようなところに入った。

「結構強くなってきたな。」

これじゃ当分は帰れそうにないな。雨が少し弱くなったら帰るか。そう考え俺は岩を背もたれにして座り込んだ。

何もすることがないのでずっと外を眺めていた。そうして十分ぐらいたった頃だろうか。何かがちらに近づいてきているのが見えた。

(なんだ？熊か？いや熊より断然小さいな。)

それが近づいてくるにつれて、シルエットがはっきりしてきた。近づいてきたのは

(猫？)

猫だった。大きさは子猫より一回りほど大きい程度で色は白。どこかで見たことのある姿だった。

(何でこんなところに猫が？それにあの猫どっかで見たことあるよ  
うな。)

そして猫は俺のいる岩場まできて俺を見上げる。猫の青い瞳と目が  
合う。

(こいつ、もしかして・・・)

俺はことに気づき確かめようとした瞬間

「やっと見つけました。」

「え？」

猫から発せられた言葉にさえぎられた。

「やっと見つけましたあ~~~~~!!」

「!?!」

猫は急に光だし一人の少女に変わった。そして、その少女は泣きな  
がら俺に抱きついてきた。裸で。

「うええええん!!」

「お、おい。」

こいつやっぱりあの時の天使か。でもなんですぐに来なかったんだ  
？それ以前になんで裸なんだ!!

「よかつたあゝ。よかつたですう。」

「と、とりあえず離れてくんない。なんか色々やばいような……」

俺はそう言ったが天使は俺を放さない。というかもっと力を強くしたような気がした。

「ひっぐ……うっ……」

「お、おい。大丈夫か。」

泣き声はおさまったがまだ泣いている。俺は「はあ。」とため息をついた。そして天使の頭に手を置いて軽く抱きしめる。

「大丈夫。大丈夫だから。」

俺は優しく声をかける。そう声をかけてからしばらくすると天使は泣き止んだ。が、まだ離してくれない。

「そろそろ離れてくれるとたすかるんだが。」

「……」

「おい。」

「……少し……」

「えっ？」

「もう少しこのままでいさせてください。」

「……………分かったよ。」

少し考えてうなずく。それから十分ぐらいしたらようやく落ち着いたようだ。

「ありがとうございました。もう大丈夫です。」

そう言つて腕がするりと解けた。俺がホツとしているとその判断が間違いだと気づく。それは俺が立ち上がった彼女を見てしまったからだ。彼女は今何も付けていない。

「……………」

「……………」

無言。

そのあとに俺は彼女と目があつた。彼女の顔はみるみると赤くなり涙目になってきた。そして

「うええええん。」

本日二度目の号泣。彼女は岩場の隅でうずくまって泣き出した。

またしばらくかかりそうだな。そんなことを考えながら俺は上着を彼女に着せた。

## 現状確認

「なあ。いい加減、機嫌直してくれよ。」

「……………」

「悪かったって。謝るからさ。」

「……………」

「はあ。」

俺は深くため息をついた。さっきからこの調子で俯いたまま顔を赤くして黙り込んでいる天使の名前はレイルカ。俺がさきほどレイルカの裸を見てしまい、こんなことになってしまった。

やっと俺のところに見れたと思ったら、泣くは、わめくは、泣きじやくるはで大変だった。

当の本人はというと、ときどきこちらに目を向けては何か考えてから急に顔を赤くして俯くのを繰り返している。あ、まただ。

雨もいつこうに止む気配がないし、どうしたもんかねえ。川が氾濫しておぼれたりしないだろうか？

そして、待つこと十分ほど、ようやくこの沈黙が終わった。

「……………」

「え？」

「さっきのことは忘れてくださいと言ってるんです！！」

「は、はい！」

急に声だすからびっくりしたあゝ。まあいいや。これで話がきけそうだ。

「え〜と、じゃあ話聞いてもいいか？」

「・・・はい。」

「よし。まずはお前はあの子の天使でいいんだよな。名前はレイルカだったな。」

「はい。そのとうりです。」

「じゃあ次。お前は今まで何をしていたんだ？どうしてすぐに俺のところに来なかったんだ？」

「それは私がこちらに来るときに少し問題がありました・・・」

「問題？」

「はい。歪みの影響で本来あなたの近くにいけないはずだったものがずれが生じたのです。」

「ちなみにこっちに来たときどこにいたんだ？」

「カナダというところです。」

カナダ！？俺が生まれた日本とめっちゃくちや離れてるじゃねえか！！

「あと私、こちらに来たとき猫の姿だったんです。」

「なんで？」

「それは分かりません。しかしその所為で猫として生活することになりました。」

「どうしてだ。人に戻ればいいじゃねえか。」

そういうとレイルカは何かいいにくそうな感じでもじもじとじだした。ちょっと考えて何か決心したようだ。

「……服がなかったんです。」

レイルカは顔を赤くして言った。服がなかった？ああ、それでさっき……

「忘れるって言ったじゃないですか！！！」

「ちょっと待て！！別に思い出しては……まあちょっとは思い出したけども。」

「やっぱり覚えてるんじゃないですか！！もういやです。」

レイルカはまたうずくまっていじけた。ああ、もうまためんどくせー。



「悪かった。もう絶対に思い出さないから。このとおりだ。」

俺は頭を下げながら言う。このままじゃ話がすすまねえ。

「……本当ですか？」

「ああ。本当だ。」

「本当に本当ですね！」

「ああ。」

「……分かりました。話を続けましょう。」

「でもさあ。前にあったときは服も一緒に変身出来てたじゃねえか。」

「それはあの服が私の一部だったからです。天使や神は存在こそはしていますが実は結構曖昧なものなんです。あの時あなたが見た服は“物ではなく体”と認識されていたからです。その気になれば姿だって変えられますよ。」

「だったらなおさら服がないとおかしいぜ。」

「私はもう天使ではありません。こちらの世界にくるときに人間になっただけです。」

「どうしてそんなことをする必要があるんだ？」

「私のような天使やアウレオルス様のような神が世界に干渉すると余計に世界に負担をかけてしまいます。それに世界に別の世界の者が干渉することは難しいのです。ですからこれは負担を軽減するための処置です。」

「俺がこっちに来るときもその負担はあったのか？」

「はい。多少ですがありました。ですがもう私もあなたもこの世界の住人です。」

この世界の住人ね。ん？ちょっと待てよ。今までの話からすると世界に干渉することは難しく、レイルカはこちらにくるために人間になったんだよな。じゃあ戻るときはどうするんだ？

「お前まさか天使にはもどれないのか？」

「……はい。」

レイルカは一瞬驚いた表情をして答えた。

「おしゃるとりり私は二度と天使には戻れません。すべてが終わったときに私が天使に戻ろうとして世界に負担をかけてしまえば歪みが生まれる可能性があるからです。それほど歪みは放置しておけないものなんです。」

レイルカは真剣な表情だがどこか悲しげに語った。

「……そうか。」

俺は頷くことしかできなかった。俺はこっちに来て能天気にいきて

きたが、こいつはとてつもない覚悟をもってこっちに来たことを知ったからだ。

「でも天使じゃなくなったんならどやって俺を見つけたんだ。」

「いえ天使じゃないといつても力がなくなったわけではありませんからその力を使って探していたんです。そして今私の力はこの世界の理に沿った力、魔法となっています。ですがこちらにきて人間の子供になったことと私の力が魔法となったことでうまく力が使えず時間がかかってしまいました。」

「そっちはかなり大変だったんだな。」

そうこう話しているうちに雨が上がり雲の間から夕日が差してきた。そろそろ話しもひと段落してきたところだし帰るか。俺はそう思い立ち上がった。

「どうしたんですか？」

「いや雨も上がったしそろそろ帰ろうかなって思ったから。」

「そうですか。あっそうだ。忘れるところでした。」

「何をだ？」

「ではこれを。」

レイル力はそういうと青い宝石が埋め込まれた細い腕輪を出してきた。なんだこれ？

『はじめまして。マスター。』

その腕輪は急にしゃべり出した。

「うわっ、なんだ？」

「それはあなたの武器です。丸腰では戦えないでしょう。」

「あ、ああ。そうだが。」

『マスター。私はまだ名前がありません。なのでマスターが名前をつけてください。』

「えっ、名前か。急に言われてもな。そうだな、じゃあエリスで。」

『分かりました。よろしくお願ひしますね。』

「ああ。よろしくな。よし、じゃあ帰るか。」

俺はそのままレイルカの前行き、背を向けて腰を下ろした。

「かえるのではないのですか？」

「そうだ。だからさっさと乗れ。」

「え？」

「だ〜からおんぶだよ。お前そのまま帰ったら足けがするだろ。」

「い、いいですよ！そんなことしなくても／＼／＼」

「いいから。早くしないとおいでくぞ。」

「・・・分かりました／＼／＼」

レイルカはそういつて俺の背中に乗った。俺はそのまま帰り道を歩いた。

「お、重くないですか／＼／＼」

「いや全然。」

俺がそういうとレイルカは背中に顔をうずめてしまった。きっと恥ずかしいのだろう。

「・・・あたたかいです。」

レイルカはそういうと強く俺に抱きついた。

## 現状確認（後書き）

やっと物語らしくなってきた。

## 守ってやる

ぞっぞっぞっ、と俺の足音が響く。

今俺はレイルカをつれて家に帰っているところだ。それについていろいろと考えなければならぬ。

まず、レイルカのことをどう説明するかだ。俺の友達って紹介するか？ いやいやこんな人気のないところに住んでいる俺に友達なんてできるわけないし。森をさまよっていたってことにするのは・・・だめだな。それを言うとお親に連絡をとろうとするな。多分、レイルカには親はいない。だから親のことを聞かれても答えられない。明らかに不自然すぎる。あゝだめだ。後で考えよう。

次にレイルカのこれからだ。歪みを退治するためには少なからずレイルカの力が必要になる。それにまだ聞きたいこともある。だからレイルカとは連絡のとりにやすいところにいてほしい。そうすると近隣になにもないこの地では必然的に俺の家に住むことになる。大丈夫かな？・・・いや、大丈夫か。普通に了承しそうだな母さん達。この問題はクリアか。

「はあ。」

「どうかしたんですか？」

「いやお前のごと母さん達にどう説明しようかなくて。」

「あゝ。でも私が一緒に住んで大丈夫なんですか？」

「それは大丈夫だ。むしろお前は可愛いから歓迎されそうだな。」

「か、可愛いですか／＼／＼」

「エリス。なんかいい案ないか？」

『そうですね。杯を交わした義兄弟というのはどうでしょう。』

「いつの時代の話だ。」

『では、腹違いの妹というのは。』

「お前は家庭崩壊でもさせたいのか？」

「そういえばお前名前なんていうんだ。」

「え？私の名前はレイルカだと言いましたが。」

『マスターばけたんですか？』

「違うわ。そうじゃなくて苗字だよ。」

レイルカは俺の質問の意味を理解したようだ。ていつかこの武器はなんでさらっと毒を吐くんだ？

「あ、はい。苗字はシーリン。レイルカ・シーリンです。」

「そうか。」

そうこうしているうちに家の前に着いた。なにも思いつかなかった



な。

「まあいいや。ただいま。」

「お帰りなさい。雨に濡れなかった？大丈夫ってその子どうしたの！」

若干あせりながら聞いてくる。

「俺は濡れてないけどレイルカがずぶ濡れだから風呂に入れてあげてよ。」

「えっ？あ、うん。分かったわ。え〜っとレイルカちゃんだったかしら。こっちにきてくれる。」

俺はおぶっていたレイルカを下ろした。そして母さんはレイルカをつれて風呂場のほうにいつてしまった。

「さてとどうすっかな。」

『私も言い訳を考えるのを手伝いますよ。』

「お、サンキユ。でも今度はまともなのだしてくれよ。」

『善処します。』

そうして俺はエリスとともに言い訳を考えるのであった。

三十分後・・・

レイルカと母さんが風呂場から戻ってきた。レイルカは今俺のパジャマを着ている。体が小さいからだぼだぼになっている。それと心なしか疲れがましているような気がする。

「どうしたんだ？」

「え！あ、あのそれはお母様が・・・／／／／」

俺は母さんのほつを見る。するとそこには満面の笑みを浮かべた母さんがいた。若干いつもより肌にはりがあるような。あんた一体何をしたんだ？

「なんかすまん。」

「い、いえ別に気にはしていません。」

「とりあえずこっちに座ってくれ。母さんもこっちに来て。」

俺は母さんとレイルカをテーブルのいすに座らせる。俺の前に母さん、俺の横にレイルカが座った形だ。

「よし。」

俺はレイルカのことを話し出した。レイルカは森で倒れていたことにした。そしてそれを偶然見つけてここにつれてきた。さらにレイルカは記憶喪失という設定も付け加えた。こんな感じで大体のことを話し終えた。

「つまりレインくんは森で倒れていたレイルカちゃんを助けてあげてつれてきた。けどレイルカちゃんの名前以外は何も覚えてなくて

困ってるってことでいいのかな？」

「うん。まあそんな感じ。」

「レイルカちゃんは本当に何も覚えてないの？」

「はい。すいません。」

「いいよ。それはレイルカちゃんが誤ることじゃないよ。」

「そこで母さん、提案なんだがレイルカをしばらくうちで預かれな  
いかな。」

「うん。いいよ。」

早っ！即答かよ！！まあ大丈夫だろうとは思っていたけど、すごい  
な俺の親は。

「あ、ありがとうございます。」

「本当のお母さんやお父さんが見つかるまでだけどここを自分の家  
だと思ってくつろいでね。」

「母さん。父さんには言わなくていいの？」

「多分あの人も同じことを言うと思うから。大丈夫よ。」

レイルカのことはずんなりと解決した。もう少しかかると思ってい  
たが結果オーライだ。

「さてと、それじゃご飯食べよつか。」

俺たちは用意された夕飯を食べた。疲れていたせいかな食欲はあまりなかったが夕飯はうまかった。夕飯を食べたあと今日はもう寝ようということになり俺は部屋に行った。が、問題が発生した。

「どうする。」

「どうしましょう。」

その問題というのは俺とレイルカと一緒に寝るということだ。はたから見れば何も問題はないように見えるが俺は精神的にはもう成人だ。レイルカもそうだろう。だからかなり抵抗がある。

「俺、床で寝るわ。」

「いえ。そこまでしなくてもいいですよ。それになんとか悪いです。」

「いや、でもさあ〜。」

この状況を作った母さんが恨めしい。何が部屋が足りないだ。まだあるだろうが。それにお休みって言ったときものすごい笑顔だったしな。そうこう考えていても仕方がないのでどうするか検討していたら最終的に一緒に寝ることになった。

「どうしてこうなった。」

俺は愚痴をこぼした。レイルカは俺が床で寝るのは断固拒否した。別にいいって言うてんのに。まあいい今日一日だけだし。俺は目を

閉じて眠ろうとした。

「レイン。起きてますか？」

「起きてる。どうした。」

「あの今日はありがとうございました。」

「別にいい。」

俺はレイルカに短く返す。しばらく沈黙が続く。するとレイルカはおもむろに語りだした。

「私ずっと不安だったんです。もしかしたらもう会えないんじゃないかって。ずっと、ずっと不安でした。けど会えて良かったです。」

俺はそれを黙って聞いた。少し声が震えているから泣いているのかもしれない。レイルカはずっと一人だったのだ。俺みたいに親がいたわけではない。見知らぬ場所に放り出されて一人誰も頼らずに生きていく。それがどれだけつらいことか俺は想像できなかった。俺はレイルカの手を握った。

「大丈夫だ。もうお前は一人じゃない。これからは俺が守ってやる。」

その言葉を聞いた瞬間レイルカの振るえがとまった。するとレイルカは俺のほうに向き抱きついてきた。

「レイン……レイン……。」

俺の名前を呼びながらレイルカは泣いた。俺はレイルカの頭をやさしく撫でた。そういえば昼にもこんなことあったなと思いつつ俺の意識は闇に沈んだ。

## 何事にも練習は必要

「お母様、この食器お願いします。」

「ありがとうございます。そこに置いていて。」

「母さん、こっちも頼む。」

「それも同じところに置いてね。」

レイルカが俺の家に来て一ヶ月がたった。俺に会うまで猫の姿で生活してたって聞いたから人としての生活は大丈夫かと思っただが問題はないようだ。最初のほうは母さんと父さんにどう接すればいいかわからなくて困っていたがそっちのほうも大丈夫みたいだしな。

「さてと飯も食ったし。レイルカそろそろ行こうぜ。」

「あ、はい。ちょっと待ってください。」

俺は昼飯を食った後にレイルカと森に行くのが日課となった。だが遊んでいる訳じゃない。レイルカに魔法を教えるもらっているんだ。それで分かったのだが俺の魔法の才能はいたって平凡らしい。というか中の下くらい。魔力も多くもなく少なくもないそうだ。だからあまり魔法は覚えられていない。

「あらあら、本当にレインちゃんとレイルカちゃんは仲がいいわね。行くのはいいけど、あんまり遅くなちゃだめよ。」

「分かってるよ。いつも行ってるどころだし大丈夫だよ。そいじゃ

行ってきます。」

「行ってまいります。お母様。」

「行ってらっしゃい。」

そういつて俺たちは家を出た。家を出たら三十分くらいで河原に着く。あそこはずっと通ってたし多少大きな音が出ても誰も来ないからな。まあ普段から誰も来ないけどな。

「レイルカ。もう生活には慣れたか？」

「はい。それは慣れたんですがちょっと申し訳ない気分です。」

「どうしてだ？」

「お母様たちをだましている気がして。」

「そのことか。」

レイルカには親がない。だがレイルカは記憶喪失の女の子という設定だ。当然母さんたちは本当の親を探す。だがそれは絶対に見つからない。そのことを気にしているんだろう。

「大丈夫だって。母さんたちはお前のことすげえ気に入ってるからいつまでいたって迷惑になんてならねえよ。だから気にすんな。」

「はい！」

レイルカは大きくなずいた。元気が出たみたいだ。



「お、着いたぜ。」

話をしているうちに河原に着いた。

「レイルカ今日は何すんだ？」

「そうですね。昨日の復習と防御魔法の展開でもやってみましょうか。」

「またかよ。」

「できないんだから仕方ないじゃないですか。がんばってください。」

「わかったよ。エリス起きろ。」

『・・・・・・』

「おいこらとつと起きやがれ。」

『ふあゝああ、あれ朝ですかマスター。』

やっと起きたか。こいつ機械みたいなもんなのに寝る必要なんてあるのか？エリスは基本家ではしゃべらない。母さんたちに見られると厄介だからだ。しゃべるとしても俺の部屋だけだ。なので家ではよく寝ているらしい。そのせいか寝る癖がついてしまった。

「残念。今は昼だ。今から魔法の練習だ。」

『そうですか。がんばってください。』

「お前もやるんだよ。」

『え〜めんどくさいです。マスター一人でやってくださいよ。』

「めんどろってなんだよ！！お前がいないと魔法が使えねえだろ！

」！

『おいエリスちゃんと主の言うことは聞かなければいけないだろう。

』

「そっだちゃんとしろ。」

『はあ、分かりましたよ。仕方ないなあ。』

仕方ないって、こいつ絶対俺のことマスターとか思ってないだろうな。そして今さっきしゃべったやつの名前はアルク。レイルカのデバイスだ。男の声で礼儀が正しく結構な忠誠心があって武士みたいなやつだ。

「よし。じゃあはじめるぞ。」

こうして俺は魔法の練習を始めた。

二時間後・・・

「はあく疲れた〜。ちょっと休憩しようぜ。」

「そうですね。休憩にしましょうか。」

『この程度でダウンですか？マスター？情けないですね〜。』

エリスが罵倒してくるがめんどろなのでスルーした。こいつは一度スクラップにしたほうがいいのだろうか？

俺がやった練習はスフィアを発生させてターゲットに当てることと防御魔法の展開だ。一つ目は結構前からやっているのでうまくできた。がスフィアはまっすぐにしか飛ばない。俺がコントロールしようとするのでたらめな方向に飛んで言ってしまう。二つ目はなんとか展開できた。が実戦では使い物にならないレベルだ。

「なかなかうまくいかないもんだな。」

『マスターは魔法を使うのがへたくそですからね。』

「お前は本当に容赦ねえな。」

『レイン殿が魔法をうまく使えないのはしっかりイメージできてないからではないか？』

「そうですね。曖昧なイメージではうまくいかないことは確かです。」

レイルカとアルクは的確にアドバイスをしてくれる。ポンコツも見習ってほしいぜ。

『マスター。今馬鹿にされたような気がするんですが。』

「気のせいだ。ポンコツ。」

『やっぱり馬鹿にしてるじゃないですか!?!』

「にしてもイメージねえ。」

『え、無視ですか?』

エリスはしよぼくれたような声を出す。俺を馬鹿にした罰だ。

「俺が魔法を使えるってこと自体曖昧なんだけどな。レイルカはどういうふうな感じで魔法使ってたんだ?」

「え、私ですか?そうですね。私は以前からこのような力を使っていましたからほとんど感覚的に覚えているんです。」

「感覚的にか。はあやっぱり数やらないといけないのかな。」

「頑張ってください。イメージです。イメージ。」

レイルカは腕をガッツポーズにして応援してくる。そのイメージができたら苦労はしないんだけどな。

「そういえば神様が転生者にあげた能力ってなんなんだ?」

「え?確か一人目の方が“頭に思い描いた物質の投影”でしたね。」

「それってどんな能力だ?」

「簡単に言うと頭に食べ物を思い浮かべてそれを現実に出現させることができるという感じですよ。」

「次は？」

「二人目の方は“超能力”ですよ。」

「サイコキネシスとかテレパシーみたいなもんか。」

「はい。その認識であつてると思います。三人目の方は“ヴィクトー化”といっていました。」

「なんだそれ？」

「なんでも相手からエネルギーを吸い取って自分のエネルギーに変換する能力だそうです。」

「どいつもこいつもごつい能力もってんな。」

「そいつらは俺みたいに歪みを倒せるのか？」

「いえ。前にも言ったとおり歪みを倒せるのは器をもっているあなただけです。例外はありますけど。」

「例外？」

「はい。歪みは負な感情マイナスを食らって肥大化するだけでなく、物語のシナリオを変えることでも肥大化します。」

シナリオを変えることか。ここはアニメの世界だったな。

「歪みが肥大化した場合そのシナリオで起きたことを起こせば歪みはなくなるって事か。」

「はい。この世界の歴史を変えてしまった場合のみその方法が使えます。」

「それじゃ俺も気をつけないな。」

「この世界の住人が歴史を変えることは問題ないので私たちは大丈夫です。転生者イレギュラーが変えることが問題なのです。」

「そうか。」

「でもどうして急にこんなことを聞いたんですか？」

レイルカは俺に疑問をぶつけてくる。

「今後どうするかを決めようと思ってな。」

「今後ですか。それでどうするんですか？」

「まず、転生者は必ず物語りに介入すると思う。だが俺はそいつらに関与しない。」

「そんなことをしたら歴史が変わってしまいますよ。」

「ああそうだな。でも俺がかかわることでもっと歴史が変わるかもしれない。」

「ですから私たちは問題ないと・・・」

「向こうはそうはいかないかもしれないだろ。」

レイルカは分からないという顔をしている。

「物語に介入するんだ、そしたら当然向こうは主要人物と何らかの関係を持つていると思う。そこで俺がそいつらがする歴史の改変を邪魔するとそいつらが改変するより大きく歴史が変わるかもしれないからだ。俺はこの世界の住人だが物語に対してはイレギュラーになってるってことだ。」

「そんなことをしたらあなたの負担が大きくなりますよ。」

「もともと歪みを倒すことが目的なんだ。それが少し大きくなるだけだ。」

「・・・」

レイルカはそれを聞いたらだまっってしまった。

「分かりました。私もレインの言うようにします。ですが無理はなさらないでくださいね。」

「ああ、分かってるよ。今日はもう帰るとするか。」

「・・・はい。」

レイルカはまだちょっと浮かない顔をしている。俺はレイルカの頭

に手をのせた。

「大丈夫だ。俺は強くなる。無理はちょっとするかもしれないけど死んだりとかはしないと思うからさ。あゝなんていったらいいか分かんないけどそんな顔すんなよ。俺は笑顔のほぅがいいと思うぞ。」

一応励ましたつもりだがなんかぐだぐだだな。

「はい！」

一瞬だめかと思ったがレイル力はさっきので元気が出たらしい。結果オーライだ。

俺たちはゆっくりと家に帰っていった。



## 何事にも練習は必要（後書き）

なんというか中々話進まないな。

次はバトルを書くつもりです。

感想とかもよろしくお願いします。

## 別れと旅立ち

レイルカが俺の家に来て五年がたった。

俺はこちらに来て十年がたった。この十年間特に変わったことは起こらなかった。歪みを倒すためにこちらに来たがその歪みはいつこに現れなかった。

そういえば変わったことといえば母さんの病気が少し悪化したことだ。二年前くらいから母さんはよく体調を崩すようになった。ときどき入院を繰り返している。なんだか心配になってくる。

そんな母さんも今は俺たちと食事をしている。最近は調子もいいみたいだ。が、母さんは少しやつれたような気がする。

「レインくんどうしたの？さっきから黙っちゃって。」

「いや少し考え事してただけだよ。」

「よかった。私の料理がまずいから失神してるのかとおもちゃった。」

「いや母さんの料理はいつもおいしいぞ。なあレイルカ、レイン。」

「はい。」

「ああ。」

父さんは母さんのことを豪快に褒める。俺とレイルカも同意する。

母さんが料理をするのは久しぶりだ。病院の検査などでいないときが多いので最近はおれが作っている。家の家事などはレイル力がやってくれている。父さんも仕事で忙しいので必然的にそうなるとう。ちなみに学校にはいっていない。ここからだめちゃうくちや遠いからだ。行かなくてもあまり問題はない。

「ありがと。よしそういうことなら明日も張り切って作るわ。」

「でもあんまり無理しちゃだめだぜ。母さん。明日は俺も手伝うよ。」

「え、別にいいのに。まあいいわ。ところで二人は勉強ちゃんやってる？」

「はい。レインに教えてもらいながらですが。」

「俺もばっちりだ。」

「よし。あとでお母さんが見てあげよう。」

「いいって。母さんだって検査で疲れてるだろ。今日は少し早く寝たほうがいいんじゃないの。」

「大丈夫だって。」

母さんは笑顔で答える。これだけ見れば病気になるてかかってないように見える。けどそう見えるだけだ。多分無理をしているはずだ。

「そういう油断はだめだ。だから今日は早く寝る。」

「そつだな。今日はレインの言つとつりにしたほづがいいんじゃないか。」

「そうです。あまり無理をなさらないでください。」

「無理してるつもりはないんだけど。みんながそこまで言つなら仕方ないか。」

父さんとレイルカにも忠告され母さんは折れた。みんな母さんのことを心配しているようだ。

「じゃあ今日はみんなで寝よう。」

「え!？」

「な!？」

「おお、それはいいな。」

俺とレイルカは驚きの声を上げる。いきなり何を言い出すんだこの人は。

「母さん流石にそれはちょっと。」

「私もそれは。」

「いいじゃない。スキンシップよ。スキンシップ。」

「いやもう俺十歳だぜ。」

「関係なし。それともレインくんはレイルカちゃんと二人っきりがいいのかな？我が息子ながら大胆ね。」

さらにめっちゃくちなことを言い出す。どこのオヤジだこいつは。

「そうなんですか！レイン！」

「断じて違う！！！」

はあ。もうなんか疲れるな。だけど嫌な感じは微塵もなかった。

俺はこんな日常がずっと続けばいいと思った。

だが運命は残酷だった。

翌日。

母さんは今日も検査だ。だから俺はいつものように家の家事や勉強を終わらせ河原に向かった。五年間欠かさずに魔法の練習をしている。魔法も大分上達した。魔力はそれほど変わらずAランク程度だとレイルカが言っていた。魔法の才能もあまりないから最近では基礎的なことをちよっとする程度だが。そのあとは体術や剣術の練習をしている。こっちのほうは鍛えたらどうとでもなるので順調に進んでいる。

そんなことを考えているともうすぐ河原に着きそうになった。レイルカは一足先に河原にいつている。俺が片付けに手間取ったからだ。俺が小走りになり河原に行こうとしたとき妙な感覚に襲われた。一瞬背筋が凍るような感じがして、胸が少し苦しくなる。なんだこの感覚は？

少ししてレイルカが来た。

「レイン。どうやら現れたようです。」

「現れた？あぁそういうことか。」

俺はすぐに言葉の意味を理解した。とうとう歪みが現れたらしい。

「これから向かうことになりましたがよろしいですか？」

「別にかまわないぜ。」

「では行きますよ。」

レイルカはそういうと足元に魔方陣を発生させる。どこかに転移するらしい。

「初仕事。開始だな。」

俺たちは光に包まれた。

目を開けるとそこは夜の森だった。さっきまでは昼だったのに日本にでも来たか？

「レイルカここどこだ？」

「え〜と、名前はわかりませんが無人世界にきました。」

「転移って世界も超えられるんだな。」

俺は少し驚きながら答える。

「さてと敵さんはどこにいるのかな？」

緊張感のない声で言う。戦いに来ているとは思えない声だ。俺は周りを見回す。いない。だが胸の苦しみはまた少し強くなったような気がする。

「近づいてきてるのか？」

するとザツという音が聞こえた。俺とレイルカは音のした方に目を向ける。

「ヴオオオオオオオオ！！」

突然獣のような咆哮が聞こえてきた。現れたのは二メートルはありそうな体に真っ赤な眼。四本の足には鋭い爪がついている。顔は大きく人間を丸呑みできそうな口もある。そして体は闇のような漆黒

でところどころ炎のように揺らめいていた。狼とかライオンとかいろいろ混ぜた感じだ。

「マジで化け物だな。こりゃ。」

「呑気な事いってないで早くデバイス展開してください!」

レイルカに突っ込まれた。そっぴやまだ丸腰だった俺。

「エリス。仕事だぜ。」

「え?仕事?はあくなんだか面倒ですね。」

「そう言っつなよ。面倒なのは俺も同じだ。頼んだぜ。」

「分かりました。いきますよ。」

「『セットアップ!』!」

俺は光に包まれた。エリスはバングルから巨大な刀になった。刀といても日本刀みたいに細くない。全体で一メートル五十はあり今の俺よりでかい。刀身は青で少し装飾が施されている。鍔より少し上にリボルバーのカートリッジのようなものがついている。

俺の服装は青い半そでのシャツに黒いジーパン。腰にはポーチがクロスするようについていて、さらに体を覆えるくらいのマントを羽織っている。右手には指なしの茶色の手袋をして左手には青い籠手があった。

「準備オーケーだ。」



「こちらもです。」

俺はレイルカを見る。レイルカは赤を基調としたスーツのような上着に白いロングスカートをはいていた。頭に薔薇を模した髪飾りをつけている。腰には小さなポーチがついていた。

そして彼女の腕には大きな弓があった。こちらも赤を基調としている。弓は籠手と接合されていて手の甲あたりに赤い宝石がついていた。

「ヴオオオオオ！」

突然歪みが待ってましたといわんばかりに襲い掛かってきた。俺たちは左右に跳んでそれをよける。

「あぶね〜な。気をつけろよ。」

「そんなこといっても意味ありませんよ。」

「そつだな。じゃあいくぜ！」

俺は地面を蹴り駆け出す。まだこちらには向いていない狼モドキに向かって斬りつける。が、手ごたえはなかった。

「チツ。」

狼モドキは跳躍してかわしたのだ。そると横から光の矢が飛んできた。レイルカが射ったらしい。

「レイン今です!!」

「おう!!」

俺は矢で打たれてバランスを崩した狼モドキに向かって跳ぶ。そしてそのままなぎ払う。狼モドキは前足から背中にかけて大きな傷を負った。斬られた前足は地面に落ちる。が、なぜか狼モドキは難なく着地する。そしてみるみる傷は回復していき落ちた前足ももとうりになった。

「え?どゆこと?」

「何ででしょうか?」

少し考えてレイルカがひらめく。

「レイン、器の力使ってませんね。」

「力?そういえばそんな暇なかったな。」

「なかったなじやないですよ!!歪みは器の力でしか倒せないんですよ!!」

「しょうがねえじゃねえか!!戦闘なんて初めてだしまだやり方だつてはつきりしてねえんだぞ!!ぶつつけでなんて無理にきまってるんだろ!!」

「この前にちゃんと教えたでしょう!!」

「いやだからイメージするとか曖昧なんだって。」

レイルカは呆れたという表情でこちらを見てくる。

「仕方ないですね。私だひきつけている間に力を発動させてください。いいですか！絶対ですよ！！」

「分かったよ。ていうか大丈夫なのか？」

「心配するんですしたら早く終わらせるように努力してください。いきますよ。アルク。」

『承知いたしました。』

そういつてレイルカは狼モドキのところへ行った。

『女性に守られるなんて情けないですね。マスター。』

「うるさい黙ってる。」

とはいえ自分でもそんな気がした。とつとと終わらせるためにも俺は力を発動させようとする。目を閉じ、エリスを両手でつかんだ。確か何かを浄化するイメージだったな。でも何かってなんだ？まあなんでもいいや。俺は狼モドキを思い出し黒を思い浮かべた。そのあとにその黒を塗りつぶすように白を思い浮かべた。するとエリスが白いオーラのようなものを纏った。

「レイン！！」

「ヴオオオオオ！」

どうやら俺のほうに狼モドキが来たらしい。ちょうどいい。俺は狼モドキが来るのをじっと待った。そして狼モドキが俺に噛み付こうとした瞬間エリスを振るった。狼モドキは胴体を真つ二つにされ倒れた。今度は再生することなく霧のようになって消えた。

「はあ〜疲れた〜。」

「お疲れ様です。」

『なかなかよかったぞ。レイン殿。』

『まったくもつとうまくやってく下さいよ。』

レイルカとアルクが賞賛の言葉をかけてくるがエリスはあいかわらず嫌味を言ってくる。なぜこいつはマスターを敬うことをしないんだ。

「はあ。まあいいや。帰ろうぜ。」

「はい。」

レイルカは魔方陣を展開させ転移した。

「お、家の前じゃねえか。」

転移したのは家の前だった。まあすぐに休むつもりだったし好都合だ。ちなみにバリアジャケットではなく普通の服だ。

「ただいま〜。」

「ただいま帰りました。」

母さんたちは帰っていないようだ。俺はそれを確認したら部屋に行こうとした。

そのとき一本の電話が鳴った。

今雨が降っている。

その雨の中傘もささずに二人の子供が西洋人墓地にいた。レインとレイルカだ。二人がいる墓にはレオン・オルハルトとユキノ・オルハルトと書かれていた。

あのときの電話は母さんたちが交通事故にあつたという知らせだった。俺たちは迎えにきた病院の関係者に連れられすぐに母さんたちのところに向かった。が母さんたちは手術中で会うことはできなかった。そして母さんたちは助からなかった。

事故の原因は子供が道に飛び出してきた父さんあわててハンドルをきった。がそのまま対向車線に出てしまい車と衝突したそうだ。母さんと父さんが死んだと聞いたとき俺は胸に穴が開いたような気がした。だが不思議と涙は流れなかった。そんな自分が少し嫌になつた。

「このまえさあ母さんが俺に言ってきたことがあるんだよ。」

「……？」

「がんばれつて。今思ったら母さんは全部知ってたのかな。」

「……そうかもしれないね。」

レイルカは静かに答える。自分でもずいぶん馬鹿なことを言っていると思っている。でもそんなことでも言わないと自分がもたない気がしたから。俺は首に掛けているペンダントを見る母さんが掛けていたものだ。中には父さんと母さんの写真がある。それを見てもう一度母さんの言葉を思い出す。

「がんばれか……」

そして俺はおもむろに立ち上がる。

「いいんですか？」

「ああ。ここいったって何も変わらない。」

「ですが……」

「それに俺はがんばらなくちゃいけないみたいだしな。」

「……そうですか。」

レイルカは微笑みながら答える。

「行ってくるぜ。母さん。父さん。」

俺はそう呟き前へと歩き出した。

別れと旅立ち（後書き）

戦闘シーンを書くのは難しい。  
ぜんぜん魔法が出せなかった。



## 新しい家

おれは今日本の海鳴市というところに来ている。両親が死んでしまったため家を離れることになったからだ。俺たちは母方の祖父に引き取られることになった。葬式も日本で行った。母さんたちも日本の西洋人墓地に埋められている。そのほうが墓参りもしやすいだろうと爺さんの計らいらしい。

葬儀が終わったあと俺たちは一度アメリカに帰り荷物の片付けや家の引き払いなどをしていた。短期間で何度も飛行機に乗ったせいか時差ボケでキモチ悪い。で今は荷物をまとめて日本に帰ってきたところだ。爺さんの家に向かっている。

「はあ。だるい、眠い、キモチ悪い。」

「ほらちゃんと歩かないと危ないですよ。」

「いやさ、時差ボケがひどくてさあ。まともになんか歩けねえよ。」俺はふらふらした足取りで言う。時折人にぶつかったり、ぶつかりそうになったりしている。そのたびレイルカは慌てている。

「もうすぐですからがんばってください。」

「はあ。」

母さんと父さんが死んでもう三週間はたつ。それだけあれば人は変わるものだな。母さんたちが死んだって聞かされたときはなんともいえない感情が渦巻いていたのに今はこれぼっちも感じない。レイ

ルカもはじめは泣きじゃくっていたが今はなんともない。だが少し無理して明るく振舞っているところもある。

「あ、ほら見えてきましたよ。お爺様の家。」

そんなことを考えていたら爺さんの家の近くにきたらしい。そして顔を上げてみると大きな屋敷が見えてきた。外観は時代劇とかに出てきそうな武家屋敷だ。一般家庭の家とは思えないほど広い。この爺さんは何をやっていたんだろうか。そして家の門の前についていた。

「はあ。やっとついたか。」

「つきましたね。」

俺はインターホンを押す。しばらくして女性の声が聞こえてきた。

『どちらさまですか？』

「え〜と、レインです。とりあえずついたので中に入れてもいいですか？」

『ええ。門は開いてるから入っていいわよ。』

俺とレイルカは言われたとうりに屋敷に入る。入ってみると本当に江戸時代にもタイムスリップしたんじゃないかと思う。入ってすぐに玄關から人が出てきた。黒髪黒目で髪は肩までしかない。肌はとても白く、十人中十人が美人というだろう。どことなく母さんに似ている。

「あなたたちが雪乃の子供ね。男の子がレイン君で女の子がレイルカちゃんていいのよね。」

「どうもよろしく。」

「よろしくお願ひします。」

「あんたは誰？」

「こら年上にあんたなんていつちや駄目でしょう。」

「す、すま……すいません。」

俺は敬語が苦手だからなんだかぎこちなくなってしまう。こんなやりとり前にもあつたような。

「まあ、素直に謝つたから許すとしよう。」

「それであなたは誰なんですか？」

レイルカが聞き返す。

「あれ？覚えてない？一応葬式にも出てたんだけど。まあ仕方ないか。それじゃあ改めて、私は泉桜、雪乃のお姉ちゃんよ。あなたたちからしたら私は叔母さんていうことになるかな。」

母さんに似ていると思つたが姉妹だったのか。

「ここでは父さんの世話をしているわ。あなたたちも父さんに挨拶してきなさい。」

「それじゃ、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「待った。」

俺たちが家に入ろうとすると桜さんに呼び止められた。なんかしつたけ。

「今日からここはあなたたちの家になるのよ。家に帰るときお邪魔しますなんていうの?」

確かにそれは言わないな。

「え〜と、ただいまでいいのか?」

「ただいま、です。」

桜さんは笑みを浮かべて

「おかえり」

俺たちを迎えてくれた。

「よし。それじゃあお父さんのところに行って挨拶してきなさい。」

「その爺さんはどこにいるんだ・・・ですか?」

やっぱり敬語はなれないな。

「あ、まだ知らなかったね。それじゃ案内するからついてきて。」

桜さんはそういうと奥へと歩き出した。俺とレイルカも靴を脱いで追いかける。それにしても広い家だな。何個部屋があるんだ？すると桜さんはある部屋の前でとまる。

「父さん。入りますよ。」

桜さんはそう言って襖を開く。ここに爺さんがいるのだろう。

「あれ？父さんいないや。どこいったんだらう？」

部屋の中には誰もいなかった。部屋は当然のことながら和式。部屋の隅にテレビがありその横に将棋盤、囲碁盤、花札と遊ぶためのものが置かれていた。壁には掛け軸がかかっておりその下には高そうな壺が置いてあった。見た限りでは質素な部屋だった。

「父さんどこか出かけたのかな？」

桜さんが部屋の前で思案しているのを無視して俺は部屋の中に入る。そして向かい側の障子を開く。開くとそこは庭が見えた。ここはどつやう縁側らしい。よこを見ると60代くらいの老人がいた。白い髭を蓄えていて髪も真っ白だ。その老人は庭を見ながらのんびりとキセルで煙を吹かせていた。

「爺さんいたぜ。桜さん。」

「あ、また煙草吸ってる。体に良くないから吸ったら駄目っていつてるでしょう。」

その声を聞いた爺さんはこちらに気づいたようだ。

「おや？その子達はどつしたんだい？」

「雪乃の子よ。今日からここに住むつて言つてたでしよ。」

「おお、そうか。年をとると物忘れがひどくてかなわんわ。どれこつちに来て顔をよく見せてくれ。」

俺とレイルカは言われたとつりにした。目線を合わせるために正座する。とりあえず挨拶するか。

「レイン・オルハルトだ……です。」

「レイルカ・シーリンです。」

自己紹介をしたが爺さんはこちらを見続けるばかりだ。なんだこれ？そして一分くらい見続けたら爺さんは口を開いた。

「いい目をしておる。流石雪乃の息子じゃ。」

「はぁ……」

なぜ褒められたのかいまいちよく分からない。流石つてなんだよ。

「わしは泉源一郎じゃ。レインにレイルカよ。これからここはお前たちの家じゃ。好きに使うといい。これからがんばるのじゃぞ。」

がんばれその言葉を聞いたとき俺はなんだか見透かされているよう

な気がした。

「父さんへの挨拶も終わったし。今度は家を案内するからついてきて。」

そんな声が聞こえたが俺はすぐには動こうとしなかった。するとシルカに話かけられた。

「どうかしましたか？」

少し心配そうに見つめてくる。それを見て俺はさっきの気のせいだろうと結論付けた。

「いや、何でもねえよ。」

俺は立ち上がり桜さんの後を追った。

夜

あの後家の案内が終わったところにはもう日は落ちていたので夕食になった。夕食は結構豪華なものだったので少し驚いた。毎日あんなもの食べてるのか？その後は疲れていることもあって風呂に入り俺の部屋に戻った。今は布団に入り天井を見上げている。

頭には爺さんの言ったがんばれという言葉が離れない。なぜあんな

ことを言ったのだろうか？この家系には心を読む力でもあるのだろうか？そんなわけないよな。よし、もう寝るか。俺は横に向き目を閉じようとしたとき誰かが襖を開ける音がした。

「誰だ？」

「あ、起きていらしたんですか。私です。」

レイルカがこんな時間になんのようなのだろうか？

「どうした？」

俺は体を起こしてレイルカのほうを見る。とレイルカは枕を持って立っていた。

「あの・・・その・・・暗いところで一人だどうしても眠れなくて。レイン、その・・・今日だけ一緒に寝てくれませんか／＼／＼」

「あ、いや、なんかそれまじくはないか？」

「・・・駄目ですか？」

少ししょんぼりとした声で聞いてくる。そんな声で言われたら断れんだろうが。

「わかったよ。いいぜ。」

「ありがとうございます。」

そういうとレイルカの声は明るくなった。そして俺の布団に入って



くる。こいつは男と寝るのに抵抗とかないのか？しばらくするとレイルカから寝息が聞こえてきた。仕方ないので俺も寝ることにした。

翌日、桜さんにこのことであつちやからかわれた。

## 新しい家（後書き）

なかなか多くのキャラを登場させるのは難しい。  
誤字脱字があったら言ってください。

## 命の選択（前編）

ぱちっ、ぱちっ と駒をうつ音響く。

爺さんの家に来てもうそろそろ半年が経つ。俺は今爺さんと縁側で将棋をしている。こっちに来ても学校には通わなかった。桜さんに進められたが今までずっと家で勉強していたのでなんというか今更のような感じがしたからだ。

この半年で歪みはあまり現れなかった。三ヶ月に一回程度で現れた。戦った回数は計三回だ。世界の危機とか言われたけど全然そんなこととはないような気すらしてきた。

学校に通っていないので最近爺さんと暇をつぶすのが日課になっている。魔法の練習のほうも若干滞り気味だ。もうほとんど基礎的なことは終わってしまったし。かといってこんな人の多いところで上級魔法を試して見る気にも慣れない。下手したらばれる可能性もあるからな。

「王手。」

「む、待った。」

「爺さん。これには待ったなしだぜ。」

そんなことを考えていると爺さんとの勝負に決着がついた。今日は俺の勝ちだった。

「そんじゃ、今日はこれで終わりにするか。」

「そうじゃの。」

俺は将棋盤を片付けて自分の部屋に向かおうとした。ふと空を見上げた。

「今日も暑いな。」

蝉の音が耳鳴りのように聞こえた夏の日のことだった。

俺は爺さんとの将棋が終わったあとやることも特になかったので部屋で大の字になって寝転がっていた。我ながら時間の無駄遣いだと思う。かれこれ一時間くらいこうしている。

そろそろ何かしようと思いき上がるうとしたときまたあの感覚に襲われた。そういえばもう三ヶ月たった。俺はレイルカの部屋に向かった。

「レイルカ歪みが現れた。」

「ええ。分かっています。すぐ準備をしてください。」

「分かっている。……一応爺さんに出かけてくるって言ったほうがいいのかな?」

「そうですね。断っておいたほうがいいでしょう。」

俺は爺さんのところに行き今から出かけるということを伝えた。そしてまたレイルカの部屋に戻った。部屋に戻るとレイルカはバリヤジャケットに着替えていた。

「俺たちもとつと準備するか。」

『そうですね。女性を待たせるのはいけませんよ。』

「セットアップ！」

俺もレイルカと同じようにバリヤジャケットを展開した。

「では行きますよ。」

レイルカは足元に赤い六芒星の魔方陣を展開させ転移した。

転移したところはどこかの山奥だった。またしても夜だった。夜行性なのかあいつらは。

「さて、探しましょう。」

「それだったら俺がやるよ。」

俺は器のおかげで歪みの存在を認識することができる。集中すれば正確な位置もつかむことができる。俺は目を閉じて歪みを探す。なんだ？近づいてきている。それも速い。

「レイルカ！上だ！」

俺はとっさに叫ぶ。レイルカもかろうじて反応してよけることができたようだ。さっきまで俺たちが経っていた場所には黒い巨大なものが地面に数センチのくぼみを作っていた。それは真っ赤な眼をしていて足の爪は鋭く、羽を広げたら4メートルはありそうだった。ところどころが炎のように揺らめいていて形は梟に似ていた。

「今回は梟モドキか。行くぜエリス！」

『了解！』

俺はエリスを展開し梟モドキに斬りかかる。が、空に飛ばれてかわされてしまう。

「アルク行きますよ。」

『承知。』

レイルカはアルクを構え空中にいる梟モドキを狙い打つ。しかしこれもかわされてしまう。思った以上に相手の動きが速い。

「ちっ、あのでかさであんなに動けるのかよ。」

俺は魔力で作った半透明のブロックを足場にして相手に近づく。レイルカも一对の羽をだして飛ぶ。だが動きが速くて攻撃があたりな

い。  
「どうするレイルカ。このままじゃ消耗するだけだぞ。」

『マスターちゃんと狙ってくださいよ。』

「お前は黙ってる。」

「なんとか動きをとめれたらいいんですけど。」

「それじゃあのバインドていうやつやればいいんじゃないね。」

「ですが動きが速すぎて捕らえられません。」

「そうか。」

『レイン殿。どうするのだ?』

どうするって言われてもな。とりあえずあいつの動きをとめないといけないからな。だが速すぎて普通には無理。どうにか動きを制限できたら・・・お、そうだいい魔法があるじゃねえか。

「レイルカ俺がなんとかあいつを捕らえる。その際にバインドを掛けてくれ。」

「出来るんですか?」

「じゃないとこんなことはいわねえよ。」

「分かりました。がんばってください。」

『本当に大丈夫ですか?』

「お前はちょっとは信用しろよ。」

そういつて俺はブロックを蹴って梟モドキに近づく。当然のことながらかわされる。無防備になった俺の背中めがけて梟モドキが突進してくる。俺は振り向きエリスを盾にして受け止める。

「かかったな。」

突如三メートルくらいの正方形のブロックが俺と梟モドキを閉じ込める。すぐさま俺は梟モドキから離れる。そいつはそのまま壁に激突した。ブロックが激しく揺れる。

「レイルカ！いまだ！」

「はい！」

それを合図に梟モドキにバインドが掛けられた。羽が広げられなくなったのでブロックの床でもがいていた。

「終わりだ。」

俺は器の力を付与したエリスで斬りつけた。斬りつけられた梟モドキは霧のように消えた。

「ふう。疲れた〜。ん？なんだあれ？」

「どうかしましたかレイン？」

空中から下を見たら山の中に何かを見つけた。動いてはいない。まさか歪みか？いやでも器は反応してないし。

「行って確かめるか。」



「何をですか？」

魔法をとき地面に降りる。そしてさっき何かを見たほうに走り出す。

「ま、待ってください。」

レイルカも慌ててついてくる。

『どうしたんですか？マスター。』

「山の中に変なものを見つけてな。」

『見間違いでは？』

「それを確かめに行くんだ。」

しばらく走ったらさっき見た何かの形が鮮明になってきた。その正体は人間だった。紫の長い髪の女が倒れていた。

「おい大丈夫か！」

俺はすぐに駆け寄り声を掛ける。女はかなり出血をしているようだった。バリアジャケットをしているところから魔導師のようだ。ここで戦闘があったのか？

「レイルカ！すぐに手当てをしてくれ！」

「！？っ、はい分かりました。」

レイルカも驚いているようだ。まあ無理もないか。

「俺はまだほかに人がいないか確かめてくる。レイルカこの世界に文明はあるのか？」

「残念ながらここは無の世界です。」

「地球に連れて行くわけにもいかないし。・・・レイルカ魔法の文明がある世界にはいけるか？」

「それでしたらなんとかなりそうです。」

「じゃあ頼んだ。エリスこのあたりに人がいないか探してくれ。」

『もうやってます。ここから北に微弱ですが魔力の反応があります。』

それを聞いて俺は走り出す。何があったっていうんだ。変なおいもするし。多分血のおいだろう。それと何かがこげたようなおいもする。エリスがいったように俺が向かった場所には男が倒れていた。ひどい怪我だ。

「おいあんた！しっかりしろ！」

反応はない息を確認してみる。まだ生きてる。俺は器の力を発動する。本来歪みを倒しことしかできないがこの力は怪我の治療にも使える。男の怪我の部分に手を当て集中する。すると手から光が出て傷を癒していく。

「っ！・・・」

「意識が戻ったのか。」

「お・・・お前・・・は？」

「そのことは後だ。今はしゃべるな。」

『マスターよけてください!!』

エリスの言葉に反応して俺はそこから跳び退く。すると俺のいた場所にナイフが刺さっていた。

「まだ生き残りがいたとはな。」

「誰だ!!」

現れたのはコートを羽織った銀髪の少女だった。右目は怪我をしているのか血を流して閉じている。胸元には？というエンブレムがついている。

「貴様に名乗る名などない。」

そう言いながら少女はナイフを投げってくる。エリスでそれをはじくとそのときはじいたナイフが光だし爆発した。俺はよけようとするがふきとばされてしまった。

「なんだあれは!？」

「レイン!どうしたんですか!？」

「変なやつにいきなり襲い掛かれたんだ。」

「大丈夫ですか？」

「まあなんとかな。」

「それでしたら早く逃げましょう。転移する世界のめぼしはつきま  
したから。」

「その前に何とかしてあの男を連れてこないと。」

「向こうにもいたんですか？」

「ああ。治療してる最中に襲われたんだ。エリスさっきの男を捜し  
てくれ。」

『はい。分かりました。』

「どうだ。」

『反応がありません。』

「なっ！まさか、どういふことだ！」

『推測ですがあの怪我ですし、もし爆発に巻き込まれていたら多分  
もう……』

俺は強く舌打ちをする。助けられなかったのか俺は。

「！？、レイルカよける！」

またあのナイフが飛んできた。ナイフは地面に刺さると爆発した。今度は巻き込まれることなく耐えた。しつこいな。

「レイルカここはもう退くぞ。さっきのところに行って転移魔法を  
! !」

「はい！」

「逃がすか! !」

銀髪の少女はなおもナイフを投げってくる。俺は走ってそれをよける。そしてさっきの倒れている女のところについた。

「いきますよ！」

「待て貴様ら! !」

少女はナイフを投げってくるがそれは当たることはなかった。

俺たちは何とか逃げ切った。

命の選択（前編）（後書き）

クイントが死んだ事件を作ってみました。  
原作知識がないとちよつとつらい。

## 命の選択（後編）

光が収まり目を開けるとそこはどこかの工場だった。何年も使われていないのか埃まみれで天井には穴が開いている。

「ぐっ！」

右腕に痛みがはしった。さっきの爆発に巻き込まれたときの傷だ。戦闘中は気づかなかつたが緊張を解いたから痛みだした。結構痛いな。

「レイン、大丈夫ですか！すぐに治療をしないと！」

「なんとか大丈夫だ。怪我も見た目ほどひどくない。それよりこころは？」

「魔法の文明がある世界の街の郊外といったところでしょうか。病院などの位置まではわからなかったの。」

「そうか。なんにしても助かったぜ。」

「それより腕を出してください。治療をしますから。」

俺は黙って腕を出す。レイルカは俺の腕に回復魔法を掛ける。傷をふさぐための応急処置みたいなものか。

「何があつたんですか？」

「え？ああ。俺が微弱な魔力の反応を見つけてそこにいったら男が

倒れててな。そいつを治療してる最中になんか銀髪の女がきたんだよ。そしたら生き残りがいたとか言っただけ。襲い掛かってきたわけ。」

「そうですか。生き残りというのはどういうことでしょうか？」

「まあ大体は予想つくけどな。」

「レインは分かったんですか？」

レイルカが驚いたように聞いてくる。

「多分あそこでは戦闘が行われていた。それも殺し合いだろう。」

俺の言葉を聞いた瞬間レイルカの動きが止まった。顔も若干青くなっている。

「どうしてそんなことが？」

「さあ、それは俺にも分からない。調べるすべもないしな。それよりさっき助けた人はどうなんだ。」

これ以上このことについて話しても意味がないので話題を変えた。

「はい。傷は直しましたが血液が足りないんです。早く病院につれていかないと少々まずいです。」

「それだったらまずはそっちが優先だ。急ごう。」

俺は立ち上がり、気をうしなっている女性をおぶる。



「レイルカ病院まで転移できるか？」

「はい、なんとかいけます。」

「頼んだ。」

すると足に六芒星の魔方陣が現れ俺たちは転移した。

あの後病院に行った俺たちはまず女性の怪我のことを伝え急遽輸血が必要だということを出院側に教えた。女性は重症患者として病院のおくに連れて行かれた。そしてやることなくったのといろいろ聞かれるのが面倒だったので俺たちはいったん家に帰ることにした。

帰ったら帰ったでひどかった。帰った時間が七時で桜さんにめっちゃ怒られた。それに俺が怪我をしていたから何をやってたのかしつこく聞かれた。ごまかすのが大変だった。

「はあ、なんにしても疲れたな。」

あの日からもう三日たっている。あの日のことはいまだによく分かっていない。すると部屋の襖が開けられた。

「レインちょっとよらしいでしょうか。」

「なんだレイルカ。」

入ってきたのはレイルカだった。俺は起き上がりながら聞いてみる。

「そのこの前助けた女性のところにお見舞いにいこうと思うのですが一緒にきてくれませんか。」

「見舞いにいくのか。でもあの人重症患者だけ。面会謝絶だったりしたらどうするんだ？」

「それでも構いません。少し確認したいことがあるのです。」

「確認したいこと？うん、まあいいか。あんときのことも聞きたいし。行くか。」

「ありがとうございます。それでしたらいきましよう。」

俺は立ち上がりレイルカの魔法によって転移した。着いた場所は薄暗い路地だった。

「なんでこんなところに？」

「基本的に一般人の魔法行使は禁止されているので人目につくと問題があるかなと思ひまして。」

「まあいいや。行こうぜ。」

路地から出て舗装された道を歩き出す。一般人の魔法行使が禁止されてるなんてはじめて知ったぞ。ていうかもうばんばん使ってるん

だから気にすることないんじゃないか。歩きはじめて十分くらいしたら例の女性を運んだ病院が見えてきた。

「そういえば一応見舞いにきたけど手ぶらでよかったのか？」

「そうですね。急いでいたので考えが回りませんでしたね。このあたりでなにか買いますか？」

「いやこの世界の通貨持ってないし。別にいいだろ。」

そうやって俺たちは病院の中に入っていった。中に入ると結構な人がいた。とりあえず例の女性の病室を聞くためナースステーションに向かう。

「すみません。見舞いに来たんですけど病室教えてくれませんか。」

「はい。どなたのお部屋でしょうか？」

「え？え〜となんつつたけな。」

そういえば俺はあの人の名前知らなかったな。どうしようか。このままだと不審者に間違われるかもしれない。

「クイント・ナカジマさんです。」

「クイント・ナカジマさんのお部屋ですね。少々お待ちください。・  
・お待たせしました。クイント・ナカジマさんのお部屋は346  
号室になっております。」

「ありがとうございます。」

それを聞くとレイルカは歩き出した。レイルカは名前を知ってたのか。でもいつの間にか？レイルカに聞こうとそちらを見るがなんだか思いつめたような顔をしていた。

「レイルカ大丈夫か？」

「え？あ、はい。何でもありません。」

なんでもないといい表情は変わらないままだ。本当にどうしたんだ？疑問に思いつつ病室に向かう。そして病室の前に来た。表札はクイント・ナカジマと書いてある。俺はドアをノックしてみる。

「はい。どうぞ。」

中からこもった声が聞こえたのでドアを開けた。ドアを開けると清潔感のある白で塗り固められた部屋のベッドに紫の長い髪をした女性が出た。

「あら？あなたたちは？」

「そうだな、発見者Aと発見者Bだ。」

「もしかしてあなたたちが助けてくれたの？」

「いや助けたのはBのほうだ。」

「レインいい加減自己紹介をしてください。」

レイルカに頭を小突かれる。

「分かったよ。俺はレインだ。見舞いなのに手ぶらで悪いな。」

「私はレイルカです。お加減はどうですか。」

「おかげさまで大分良くなったわ。助けに来てくれて本当にありがとう。」

「それはあんたの運が良かったただけだ。礼なんていらねえよ。」

感謝の言葉を言われているがそれを受け流す。その言葉を聞きにきたわけではないから俺はすぐに本題に入った。

「さてといろいろ聞かせてもらっせ。あそこで何があったかを。」

「分かったわ。けど私も何が起こったかははっきり分かってないの。それでもいい?」

「知ってることだけで十分だ。」

その言葉を聞いてクイントは一瞬間をおいて話始めた。話を要約するとあの日クイントは自分たちの部隊の任務である世界に来ていたようだ。その任務中に二人のアンノウンに遭遇し、戦闘に入った。アンノウンは予想以上に強く部隊は全滅。そしてたまたま居合わせた俺たちに助けられたということらしい。

「そのアンノウンに見覚えは?」

「ないわ。今調べてもらってるけど多分分らないと思うわ。」

「結局分かったことは少ないか。」

「ごめんなさいね。力になれなくて。」

「いや別にいいよ。悪かったな。怪我してるのに。」

「それよりあなたたちどこの部隊の子なの？随分若いみたいだけど。」

「俺たち別に管理局じゃないぜ。」

「え！？じゃあなんで事件のこと聞きに来たの？」

「まあ一応何があったかぐらいは知っておきたいからかな。さてと今日は帰るか。あ、あと俺たちがここに来たことは内緒にしてくれねえか？」

「いいけど。あなたたちは何者なの？」

「とつりすがりの一般人のAとBだ。」

俺は病室のドアを開けながら呟いた。

病院から出て今は家に帰っているところだ。が、病院に行ったときからレイルカの様子がおかしい。さっきクイントと話しているときでも全然しゃべらなかつたし。聞いてみるか。

「そういえば確認したいことがあるって言ってたけどできたのかレイルカ？」

「え！あ、はい。できました。」

「なんだっただんだそれ？」

「それは・・・その。」

なんでこんなに挙動不審なんだこいつ。

「何を隠しているんだレイルカ。」

「何も隠してなんていませんよ。」

「うそつくなよ。明らかに隠してるだろ。ばればれだ。」

「うっ。」

「で、なんなんだ。」

「名前です。あの人の名前を確認しようとしてんです。」

名前？それだけ？なのになんでそんなにいいにくそうなんだ。

「それでなにが分かったんだ？」

レイルカは言うか言わないか迷っているようだ。少し考えて口を開いた。

「クイント・ナカジマはあの事件で死ぬはずだった人間でした。」

それを聞いたとき俺は何もいえなかった。

あの後俺たちは無言で帰った。何も話す気にはならなかった。俺たちは歴史を変えてしまったからだ。別に俺たちが歴史を変えても問題は無い。がクイントはこの物語にかかわってくるのが問題なのだ。クイントは必ずかかわることになるだろう。かかわったことよって未来がどれだけ変わるのだろうか？大きく変わるのか、小さく変わるのか。

どちらにせよ何らかの対処をしなければならない。クイントに警告するか？いやもうクイントが生きていることは認知されているし無理か。一番手っ取り早いのは物語で起こったことを起こせばいいだけだ。つまりクイントを殺すことだ。できるのか俺に？すると部屋に誰かきた。

「レイン。入りますよ。」

きたのはレイルカだった。予想はしてたけど。

「どうしたんだ。」

「いえ、ただ様子を見にきたんです。」

「……………」

「……………」



しばらく沈黙が続く。さきに口を開いたのは俺だった。

「レイルカ俺は・・・」

「クイントさんを殺す、ですか？」

「・・・ああ。そうだ。」

俺は静かにうなづく。レイルカも鋭いな。

「私たちが歴史を変えても大丈夫といったでしょう！」

「だが、クイントは必ず物語にかかわることになる。そうすれば未来がどうなるかは分からない。」

「ですがまた歴史が変わるたびにそうしていたらあなたが耐えられなくなってしまう！」

「俺はそんなことじゃつぶれない。」

「嘘です！人を殺して平気な人なんていません。」

レイルカの声はだんだん力がなくなってきた。若干目も潤んできている。

「けどそれじゃ世界が・・・」

するとレイルカが俺に抱きついてきた。そしてやさしい声で話してきた。

「それでもつらい道ばかりを選ばないでください。あなたが傷つく理由なんてないですから。」

「けど……」

「私も一緒にがんばりますから。だから殺すだなんて言わないでください。」

それを聞いたとき俺は何も言い返せなかった。

「分かったよ。クイントは殺さない。悪かったな。」

「いえ、ありがとうございます。」

「礼を言うのはこっちのほうだよ。」

俺はクイントを殺さない選択をした。が、それが世界にとって正しい選択だったのかは分からない。

命の選択（後編）（後書き）

やっと物語らしくなってきた。

## 編入

カリカリと鉛筆の音が静かな部屋の中に響く。あれから約一年がたった。

俺は今勉強をしている。まあ勉強といっても小学校高学年レベルの問題だ。前世で高校生だった俺にとっては解くことに何の問題もない。

だが俺の隣でこの問題に取り組んでいるやつはちがった。隣にいるのはもちろんレイルカだ。レイルカはこちらの世界に来て初めて勉強というものを知ったようだ。流石にこれには驚いた。試しに小学四年くらいの問題を出したが解けなかった。そのときは母さんに俺も勉強をやらされていたのでついでに教えることになった。その甲斐あってか今では一般人程度の知識を持っている。だがまだ分からないところがあるので俺が教えながら勉強しているのだ。

「.....」

「.....」

さきほどから勉強に集中しているのかレイルカは無言。俺も自分のノルマが終わってやることもなくなったのでうちわで扇ぎながらぼーとしている。とてつもなく暇だ。

そもそもなぜこんなことをしているかというそれは一週間前にさかのぼる。

一週間前.....

「レインくんちょっと居間にきてくれない？」

部屋の襖が開けられ桜さんから急に呼ばれた。

「何ですか？」

「今から話があるから居間にきてほしいの。」

「分かりました。」

俺はさつきまで読んでいた本を置いて居間に向かった。居間に向かうとレイルカがいた。どうやらレイルカも呼ばれたらしい。

「あ、レインも呼ばれたのですか？」

「そうみたいだ。」

俺はレイルカの隣に腰を下ろした。少しして桜さんがきた。

「で、話ってなんですか？」

「二人には学校に通ってもらおうと思うのよ。」

「学校ですか……」

レイルカが静かに呟く。学校か、でも何で今更なんだ？学校に通わせるなら日本にきたときにすればいいのに。まあ俺が断ったつてもあると思うが。

「私ね、いつまでもこのままじゃ駄目だなんて思ったの。二人の将来のためにも学校くらいはいつておかないといけないでしょ。それに友達もいないっていうのもちょっとかわいそうだし。」

「それはそうだけど・・・。」

桜さんの話には一理ある。確かに学校にいつてないと将来の働き口も見つからないだろう。俺もニートになるつもりはないからな。それにこの国には義務教育という法律もあるしな。あと保護者の視点からすると友達がいないというのは心配なのだろう。そういったことをふまえると俺は学校に行くのはやぶさかではない。

「え〜と俺たちはいつから通うことになるんすか？」

「本当は早いほうがいいと思ったんだけど準備する期間も必要と違って来年からにしようと思うんだ。きりもいいしね。」

となると中学からか。

「ちなみに一応試験があるから勉強もしてね。通う学校の名前は私立聖祥大附属中学校。編入というかたちで入ることになるわ。それじゃがんばってね。」

桜さんは一通り話し終わると居間から去っていった。それにしても学校か、面倒だな。

「レイン先ほどの学校のことですが。」

「何だ？」

「そのこれからの歴史に大きくかわる人物達が通う学校です。」

「マジ？」

「ええ、本当です。」

なんだかもう不安になってきたんだけど。まあかわらければいい話か。はあ、めんどくせえ〜。

回想終了・・・

とそんな話があったわけであれから一日二時間くらいの勉強会が開かれることが日課になってしまった。俺がレイルカに教えるだけだけど。レイルカも時間はまだあるんだからゆっくりやればいいのに。

俺は唯一この部屋についている窓から空を見た。空は雲ひとつない快晴だった。そんな夏も終わりかけている八月下旬のことだった。

三月・・・

あれから半年がたった。今日は私立聖祥大附属中学の編入試験がある日だ。俺たちは今その試験会場に向かっている。試験といっても緊張なんてしたりしない。問題のレベルは中学生くらいなので落ちる気もしなかった。だが隣を歩いているレイルカは結構緊張しているようだ。レイルカも勉強したので問題ないと思うが生まれて初めてのこと緊張しているのだろう。

「なんだか不安になってきました。」

「そんなに固くなるなよ。リラックスしろ。」

「ですが・・・」

「大丈夫だ。あんだけ勉強したんだから。」

先ほどからレイルカは妙にそわそわしている。今のレイルカの学力なら問題ないはずだが、こいつ本番に弱いタイプか？そんなことを考えながら試験会場に向かっていった。

試験から一週間後・・・

俺は玄関から出て門の外に向かう。外に出たらすぐそばにあったポストからひとつの封筒を取り出した。差出人の欄には私立聖祥大附属中学校と書かれていた。そう今日は合格発表の日だ。俺は封筒を開けて中身を確認する。

「・・・」

中身を見た俺はレイルカのもとに向かった。レイルカは居間にいた。どうやらテレビを見ているようだった。

「レイルカ試験の合否の結果が出たぞ。」

その言葉を聞くとレイルカの体がびくつと反応した。そしてゆっくりこちらに向いてくる。



「・・・それでどうだったんですか？」

レイルカはおそろおそろ聞いてくる。

「じゃあ結果を言っぞ。」

「はい。」

「その、なんとというか。」

「なんとというか？」

「少し言いくいんだが。」

「え！まさか!？」

「お前は・・・合格だ。」

「そんな・・・って合格!？」

どんどん暗くなっていたレイルカ表情が一気に驚きの色に染められた。

「おうそうだぞ。ていうか落ちるわけないだろ。」

「良かったです。落ちたのかと思いました。でもなんであんな紛らわしいいいかたを？」

「いや、あんまり真剣に聞いてくるからついからかいたくなって。」

「もう!?!」

俺の悪ふざけに怒ったのかレイルカは俺をぼかぼかとたたいてくる。

「悪かったって許してくれ。」

「本当に駄目かと思ったんですよ!これくらいじゃ許しません。」

「じゃあ今度なんか言うこと聞いてやるから。」

「む・・・分かりました。今回はそれで手を打ちます。」

どうやら許してくれたようだ。だがレイルカはそれでも不満なのか頬を膨らませている。

「レイルカ。」

「何ですか?」

「合格おめでとう。」

それを聞くとレイルカは一回ため息をついて

「レインも合格おめでとういいます。」

笑顔で返してくれた。

二週間後……

三月も終わり四月となった。街道には桜が満開に咲いていた。この桜を見ながら花見でもできたら最高だな。若干親父くさいな。そんな俺は白を基調とした制服を来て学校へと向かっている。本当は昨日から学校は始まっていたのだが編入組みは今日から登校することになっていた。

「なんだかどきどきしてきました。」

レイルカがふと呟く。

「どうしたまた緊張してきたのか？」

「いえ今回のものはそういうのではなくてなんとというか嬉しい感じに近いです。」

「嬉しい感じか。良かったじゃねえか。」

「はい！」

レイルカは強く頷く。学校に行くのが楽しみで気持ちが高ぶっているのだろう。そしてしばらく歩くと学校の門が見えてきた。

「お、そろそろ到着か。」

「そうみたいですな。レイン早くいきましよう。」

「おい走るなよ。転んでもしらねえぞ。」

レイルカはよほど嬉しいのか走って校門まで行ってしまった。俺はその背中を見ながらこんなのも悪くないなと思った。

## 編入（後書き）

次から新キャラ登場です。

## 出会い

校舎にたどり着いた俺たちはまず職員室に向かった。職員室にいつて担任の教師を見つけないとどのクラスに入るか分からないからだ。だがまだ担任の教師も知らない。

職員室に入ると十数人の教師がいた。入ってきたとき数名の教師がこちらを見てきたがすぐに自分のしている作業に戻った。突っ立っているだけじゃ始まらないので俺は近くの教師に話しかけることにした。

「すみません。」

「何かしら?」

声を掛けられた教師はこちらに向いた。三十代くらいの女教師だ。

「俺たち今日から編入することになってるんですけど担当の人ってしないですか?」

「あなたたちが。知ってるわ。ちょっと待ってね。山中先生」

と女性教師が誰かを呼んだ。すると一人の男性教師が机から離れてこちらに来た。

「浅井先生、なんででしょうか?」

「例の編入生が来たんです。確か先生が担任でしたよね。」

「あ、はいそうです。わざわざありがとうございますとついでにきました。」

「いえ、それでは私はこれで。」

そういうと浅井と呼ばれた教師は自分の机に戻った。山中と呼ばれた教師は一礼してこちらに向いた。

「ドアの前で話すのもなんだからまずこっちにきてくれ。」

俺たちは言われるがままについていく。さきほどこの教師が座っていた机にきた。教師は椅子に座るとこちらに向いた。

「じゃあまずは自己紹介だな。俺は山中明俊だ。これからお前たちの担任をすることになる。ちなみに担当教科は国語だ。よろしくな。」

「レイン・オルハルトだ……です。よろしく。」

「レイルカ・シーリンです。よろしくお願いします。」

教師につられてこちらでも自己紹介をする。歳は二十代半ばくらいだろうか、好青年という印象がある。それに少しフレンドリーな感覚がある。

「おう。二人はこの後にあるHRで紹介するからな。クラスは一年二組だ。もうそろそろ時間だから行こうか。ついてきてくれ。」

山中先生は立ち上がり職員室を出た。俺たちはそのあとをついていく。そして階段を上りしばらく歩くと一年二組という表札が見えた。そしてチャイムが鳴った。

「それじゃあ、俺が呼んだら入ってきてくれ。」

そついうと教室の中に入っていった。先生が入ると騒がしかった教室が静かになった。中からは号令と挨拶が聞こえた。

「みんな突然だが今日からこのクラスに編入生が来る。分からないこともあるだろうから色々と手助けしてやってくれ。」

「先生ー、編入生は女子ですか？」

「女子もいるが男子もいる。」

質問の回答が返ってくると教室から歓喜の声が聞こえてきた。なんかどっかのアニメにたいだな。

「期待されてるぞレイルカ。」

「あまり緊張させること言わないでください。」

レイルカは若干困ったような表情をしている。さっきまではあんなにはしゃいでたのにな。

「二人とも入ってきてくれ。」

合図がきたので俺は扉を開けて教壇の横まで行く。するとクラス中から視線が注がれた。編入生というのもあるが一番は俺たちが外国人ということだろう。なんだかパンダにでもなった気分だ。

「二人とも自己紹介をしてくれ。」



「レイン・オルハルトだ。これからよろしく。」

「レ、レイルカ・シーリンです。これからよろしくお願いします。」  
自己紹介が終わると教室は妙に静まりかえった。なんだ？

「おお〜！！金髪美人キタ　　！！」

「お母さん生んでくれてありがとう〜！」

「結婚してください〜！！」

急に教室の男子どもが騒ぎ出した。うるさすぎて鼓膜が破れるかと思った。レイルカもこの騒ぎについていけずキョトンとしている。俺がパンダならレイルカはシーラカンスだな。それにしても初対面で求婚を求められるとは流石美人だな。

「お前ら少しは静かにしろ。ほかのクラスに迷惑だろ。じゃあ自己紹介も終わったところだしHRはこれで終わりだ。二人は空いてる席に座ってくれ。」

「はい。」

「分かりました。」

空いてる席は一番後ろの窓際の席と真ん中の席だ。俺は迷わず後ろの席に向かう。

「それじゃあ授業を始める・・・と言いたいところだか編入生に聞

きたいこともあるだろうから一時間目は自習だ。だがあんまりうるさくするなよ。」

先生はそういうと教室から出て行った。すると先生が出て行ったとたんにクラスのほとんどがレイルカの席に向かっていった。

「ねえねえレイルカさんってどこからきたの？」

「血液型は？誕生日は？」

「好きなタイプは？」

「結婚してください！！！」

「え！あ、あの・・・え」と。

レイルカは投げかけられる質問に対応しきれずにしどろもどろになっている。ていうかさつきから求婚を求めているのはだれだ？あ、レイルカがこっち向いた。そんな視線を向けられてもどうしようもできなねえよ。

「ちよつとみんなそんなに一気に質問したら編入生も答えられないわ。一人ずつ順番に聞きなさい。」

淡い橙色の髪をした女子が助け舟を出してくれた。さきほどまで騒いでいたクラスメイトは静かになり今度は一人ずつ聞いている。向こうはもう大丈夫だろう。さて俺はどうしようか。と周りを見ると隣の席のやつと目があつた。

「よう、編入生。俺の名前は望月弾だ。よろしくな。」

青に近い紺色の髪で青い目をした在校生は気さくに話掛けてきた。

「レイン・オルハルトだ。よろしく望月。」

「弾でいいぜ。」

「じゃあ俺もレインでいい。ところでお前は行かないのか？」

「ん？ああ行きたいのはやまやまんだけどお前にも挨拶しよう  
と思っただけ。」

「そうか。」

「なんだよつれないな。まあいいや。それでさ、お前ってあっちの  
金髪美人の編入生とどんな関係なんだ。」

どんな関係かか〜そういわれるとどうなんだろうな。

「そうだな、幼馴染みたいなものだな。」

「マジか！あんな美人と幼馴染だなんて羨ましいねえ〜」

「そうか？」

「そうだよ。」

なにがそんなに羨ましいのかが分からない。すると教室の黒板の上  
につけられているスピーカーからチャイムが鳴った。

「授業は終わりみたいだな。」

「どこ行くんだ？」

「トイレに行くだけだ。」

俺はそういうと席を立ち教室を出た。やっぱりこういうのは疲れるな。俺はあんまり他人と話すのはうまくないしな。

俺が帰って来たらもう次の授業が始まる前だった。授業はまたもHRだった。今日は勉強はしないらしい。HRでは委員会の役員や係りなどを決めた。俺はなにもするつもりはなかったのだがなぜか美化委員になってしまった。理由はレイルカが美化委員になったからだ。委員はもう一人必要でしたら先生が「親しいやつの方がいいだろう。」と行って強制的に入れられた。そのとき他の男子に睨まれたような気がする。

と、まあそんな感じで授業は終わった。そして今日は午前授業だから今日はもう帰るだけとなった。他のクラスメイトもおのおの変える準備をしている。ちなみに弾は部活があるからといってもういない。入学してまもないというのにご苦労なこった。

「レインちよつといいですか？」

「どうしたレイルカ。」

「このあと彼女たちと校内を見て回ろうと思うのですがレインも一緒にどうですか？」

レイルカの後ろを見ると黒髪の子と淡い橙色の髪をした女子がい

た。片方はさつきレイルカに助け舟を出したやつか。

「私は霧島深澄だ。よろしくオルハルト。」

「私は九曜明日香よ。よろしく。」

「ああ、よろしく。」

黒髪の方は凜とした雰囲気がある。そういえばさつきクラス委員長に立候補してたような気がする。橙色の方はなんだか高飛車な感じだ。

「それでどうしますか。」

「うーん、そうだな今回はいいや。疲れたし先に帰っとく。」

「そうですか。すこし困りました。」

「なんでだ？」

「帰り道にまだ自信がないので一緒に帰ろうと思っていたのですが。」

「レイルカが申し訳なさそう呟く。

「だったらどうかで暇つぶしして待っててやるよ。どのくらいかかる？」

「一時間くらいで終わると思う。」

「じゃ、そのくらいしたら正門で待ち合わせだ。」

「はい、分かりました。」

「しかし君たちは仲がいいんだな。」

「そうね。帰る道が同じで家も近いなんて。」

「あ、家は近いというわけではありませんよ。私とレインは一緒に住んでいるんですよ。」

その言葉を聞いたとき二人の顔が驚きに染まった。

「な、き、君たちはい、一緒にすんでいるのか!?!」

「だ、大丈夫なのそれ!?!」

「おいおい、あんま大声だす『何~~~~~!!』!?!」

俺の言葉残っていた男子の声でさえぎられた。

『どついうことだオルハルト!?!』

男子はものすごい剣幕で迫ってきた。くそなんだこいつら。俺はとつさに鞆をとり教室を出る。

「じゃあなレイルカまた後でな。」

『さてこのリア充野郎~~~~!!』!?!』

こうして俺の逃走劇が始まった。

「くそどこへいった!!」

「探し出せ!! 異端審問会にかけるんだ!!」

「出て来いリア充!!」

大声で俺を探している男子を屋上に隠れてやり過ごす。俺が今いる場所はドアの上の屋根になっているところだ。ここはドアから死角になっているのでみつからなかったのだ。それにしても疲れた。

『マスターなんだか面白いことになってますね。』

「こっちは全然おもしろくねえ。」

『それで何をしたんですか?』

「別になにもしてねえよ。」

『ならなんで追いかけてらるんですか?』

「こっちが聞きてえよ。はあ、エリス疲れたから俺は少し寝る。一時間くらいしたら起こしてくれ。」

『仕方ないですね。ではごゆっくり。』

俺は目と閉じてゆっくりと眠りについた。

数十分後・・・

ガタン、と扉が開く音がした。そして少し下が騒がしくなった。時間を確認しようと携帯を取り出してディスプレイを見る。十一時三十分と表示されていた。十一時くらいにここにきたからちょっと早く起きすぎだな。もっかい寝るか。

「そこにあんたそんなところにいたら危ないわよ。」

「ん？」

後ろから声があったので振り返ってみると六人の女子がいた。話しかけてきたのは金髪の女子だった。

「なんだ？」

「危ないからそこから降りなさいって言ってるの。」

「そうか。」

俺はそのまま体を倒しました昼寝を始めようとした。がまた下から声が聞こえた。

「ちょっと人の話を無視してんじゃないわよ!!」

「無視はしてねえよ。ちゃんと返事しただろ。」



「だったら降りてきなさいよ!！」

「なんで？」

「危ないから!！」

「そうか。忠告ありがとう。お休み」

「だからなんで忠告無視すんのよ!！」

あゝもう、うるさいな。俺はこれ以上怒鳴られるのも面倒なので昼寝を諦めそこから飛び降りた。

「これでいいだろ。」

俺はそういうと校舎に戻ろうとした。

「ちょっと待って。あんなところで何してたの？」

今度は栗色の髪の子が話しかけてきた。

「何って昼寝だけど。」

「何であんなところぞ？」

「最終的にたどり着いたのがあそこだったからだ。」

「？」

回答の意味が分からないのか首をかしげている。俺は今度こそ屋上をでようとした。

「あ、ちょっとあなた名前は？」

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、その聞きたいからじゃ駄目かな。」

なんなんだ本当に？

「人に名前を聞くときはまず自分から言うのが礼儀じゃないのか？」

「そうだね。私は高町なのは。よろしくね。」

「私はアリサ・バニングス。」

「私は月村すずか。よろしくね。」

「私はフェイト・テストロッサ・ハラウン。よろしく。」

「私はアリシア・テストロッサ・ハラウンだよ。よろしく。」

「私は八神はやてや。よろしゅうな。」

高町が自己紹介をするにつれの五人もついでに言うてきた。しかしこの学校は金髪が多いんだな。

「レイン・オルハルト。一年だ。」

「あんた一年だったの。なら私たちは先輩なんだから敬語使いなさいよ。」

「それは失礼しました。バーニング先輩。」

「バーニングスよ!!」

「あんたはいちいち大声でしゃべらないと会話できないのか?寝起きだから頭に響くんだが。」

「あんたが悪いんでしょ!!ていうか敬語使いなさいよ!!」

「アリサちゃん落ち着いて。」

おとなしそうな先輩が止めに入った。猛獣使いとその猛獣感じか。

「俺のモットーは人類皆平等だ。」

「何やそれ。」

関西人の先輩がツッコミを入れてきた。流石関西人といったところか。

「本当の所はどうなん?」

「単に敬語を使うのがめんどろなだけだ。」

「やっぱりかい!!」

ていうかなんでこんなことになってるんだろ。そういえば時間は大

丈夫か？俺は携帯を取り出して時間を見る。十一時五十分だった。もうそろそろいったほうがいいか。

「ちょっと聞いてるのあんた。」

「んあ？なんだ？」

「やっぱり聞いてなかった！！むかつくわねその態度！！」

「あんたこそ感情の発露に遮蔽物がないひとだな。もうちょっとカ  
ルシウムとったほうがいいぜ。」

「なによー！！」

この先輩はもう俺に殴りかかってきそうな勢いだ。高町と月村が必  
死に抑えている。

「なあそこのあんた。用件がないならもう俺帰っていいか？」

俺は近くにいた長つたらしい名前の金髪の先輩に声をかけた。

「え？あーうんもついいと思うよ。」

「そうか。」

俺はそれだけいうととっとと屋上を出た。後ろで何か言っていたよ  
うだが気のせいだ。そういえばあの先輩たちの名前どっかで聞いた  
ことあるな。どこだっけ？まあいいや。俺は足早に校門に向かった。

## 体育祭

俺とレイルカがこの中学に編入して一ヶ月がたった。春の暖かな日差しが降り注ぐ四月から気温が高くなり夏に入ろうとしている五月になった。

この一ヶ月でレイルカは随分と学校に慣れたようだ。真面目で誰に対しても優しく、勉強も出来る。おまけに金髪美人ときたもんだ。レイルカの噂は学校中に広まった。レイルカのファンクラブが出るほどだ。流星天使だっただけはあるな。

それに引き換え俺の評判はあまりよろしくない。授業中は寝てたりボーとしてたりするし。話しかけられても無愛想に返すだけ。そんな駄目な俺がレイルカと行動しているので周りのやつらは気に食わないらしい。ときどき異端審問会にかけられそうになる。

そんな俺だが別にはぶられたりイジメられてるわけじゃない。話し相手くらいはいる。隣の席に座っている望月弾だ。弾は俺によく話しかけてくる。たわいもない話だがそれなりにおもしろい。最近は弾をいじって遊んでいることが多い。そういえば弾は女たらしだったな。レイルカにデートを申し込んではそのつどふられていた。

委員長や明日香にもよく話かけられるな。委員長は俺の面倒くさがりなところと不真面目なところが気に入らないらしく更正させようと注意してくる。明日香の方はレイルカと一緒に住んでるという話を聞いてから妙に警戒されている。なんでもレイルカを守るためだそう。ちなみに明日香もよくからかったりしている。

そんなこんなで俺は学校生活を満喫していた。で、俺が今何をやっ

ているかという白い玉を投げていた。これはぞくにいう玉入れという競技だ。そう、今日は体育祭だったのだ。

『ただいまの結果一位は三組です。』

というアナウンスが聞こえるとグラウンドを囲うように置かれているテントから歓声が聞こえた。

『選手の皆さんは退場してください。』

曲が流れ始め選手はぞろぞろと退場していく。俺もそれに伴いグラウンドから出る。やっと終わった。今ので午前の競技は終わり昼休みに入る。ちなみに俺たちのクラスの順位は三位と微妙なところだ。

「腹減ったな。」

「レイン、ここにいたんですね。」

「どうしたんだ。レイルカ?」

「桜さんが昼ご飯を用意してくれているのでレインを呼びにきたんです。」

「そっかわざわざ悪いな。」

「いえ、かまいません。」

「じゃ、案内よろしく。」

「はい。」

レイルカは歩き出し俺はそれについていく。周りからの視線が気になる。レイルカといいつもこれだな。

「あ、委員長だ。おーい委員長ー」

しばらく歩いていると委員長を見つけた。委員長は呼ばれると周りを見渡し俺たちを見つけるとこちらに来た。

「レイン、どうしたんだ。なにかようか？」

「いや、見かけたんで声かけただけだ。それより今から昼飯か？」

「ああ、今から何か買ってこようと思って。」

委員長の手には小さな財布が握られていた。

「一人なんですか？」

「そう・・・だな。」

レイルカの質問に委員長はなぜだか一瞬答えにくそうな表情をした。

「あーそれだったら俺たちと一緒に食わねえか？」

「え？いやそれはそちらに迷惑だろう。」

「別にいいって。ほらよく言っじゃん。食事は大勢でとったほうがうまいってさ。」

「・・・分かった。」

「そうか。じゃあ行こうぜ。」

俺たちはまたレイルカについて歩き出す。そしてしばらくしたら保護者席という札がテントのポールにつるされているのが見えた。さまざまな生徒の保護者がレジャーシートを敷いて座っていた。

「レインー、レイルカーこっちよー」

桜さんが大声で呼んできた。あんまりそういうことはやめてほしいんだけど。そんなことを考えながら桜さんのところに向かう。

「あれ？爺さんも来てたのか。珍しいな。」

爺さんははっぴのような上着に半ズボン着てあぐらをかいて座っていた。爺さんはあまり外に出ない。いつも家で日向ぼっこしているかテレビを見ているかぐらいしかしないのに。

「死ぬ前に孫の晴れ姿を見ておこうと思っとな。」

「死ぬ前ってまだ五十年くらい生きていけそうだけ爺さん。」

「ほらほら早く座りなさいな。あら、そちらは？」

桜さんは委員長に目を向けた。目が合った委員長は慌てて姿勢を正



した。

「初めまして。霧島深澄です。よろしくお願いします。」

「ご丁寧にも。私は泉桜。レインとレイルカの叔母よ。」

「さあ委員長もとつと座りな。桜さん委員長も一緒でもいいよな。」

「いいわよ。それじゃ、昼ご飯にしましょうか。」

桜さんは隣においてあった重箱を前に持ってきて蓋を開けた。まず一段目にはおにぎりがびっしりと入っていた。二段目と三段目にはから揚げや玉子焼きなどのおかず、四段目にはデザートとして果物が入っていた。ていうかどう見ても四人分じゃないだろこれ。

「委員長を呼んだのは正解だったな。俺たちだけじゃ食べ切れなかったと思うぜ。」

「そうですね。流石にこれは無理ですね。」

「いや、ちょっと張り切りすぎちゃって。」

「まあいいや。食べようぜ。」

俺たちは昼食を楽しんだ。

「はあく食った食った。」

時刻は十二時四十分。次の競技が始まるまでまだ時間はある。俺は今出されたお茶を飲んでいるところだ。

「レイルカお前ってこの後何に出るんだ？」

「私は午前中の競技でもう終わりました。」

「ちなみに私ももう出る種目はないぞ。」

「いいよな。二人とも昼はゆっくり出来るのか？」

「レインは何かあるんですか？」

「借り物競争と全学年対抗リレーがある。」

そう俺はあと二つも競技にでなければならぬのだ。しかもそのうちの一つは体育祭の目玉ともう言えるものらしく、一年から三年の学年で足の速いやつが600mを走る競技だ。体力テストで好成績を出した自分の足が恨めしい。それでも本気じゃなかったんだけど。ちなみに二、三年は手加減として女子を二人入れる決まりがある。

「やる気のない言い方だな。」

「実際なからな。」

「またそうやって、いつも言っているだろう。少しは真面目に取り

組めと。」

「え、だってみんなガチでくるんだぜ。俺そついつの一番むりなんだけど。」

「そつよ。少しはしっかりしなさい。父さんにいいとこ見せるんでしょ。」

「いやそんなこと言った覚えはないんだが。ていうかいいとこって何すればいいんだ？」

「最下位から一位に躍り出るとか。」

無理だな。

「ていうか二人しかいない相手を抜いてもあんまり盛り上がらないようなきもするんだが。お、もうそろそろ時間だから俺行くわ。」

俺は立ち上がり入場門を目指す。どこの世界でもこついつことは変わらないんだな。

「がんばってきてください。」

「応援しているからな。」

「まあそれなりにがんばるわ。」

ところ変わって今俺はグラウンドのレーンの上に立っている。今から借り物競争が始まるのだ。

『さあ、始まりました。体育祭午後の部。と、その前に前の司会が貧血で倒れたのでここからの司会はサッカー部の望月弾がお送りしたいと思います。』

なんでありつが司会なんだ？普通は放送委員とかに任せるんじゃないのか？それになんかテンション高いなあいつ。

『まず、午後の部最初の競技は借り物競争です。今年はどんな無理難題が出るのか楽しみです。それでは選手は準備してください。』

ちよつと待て！無理難題つてなんだ！

『位置についてよーい、「パン！」』

とこなんとか言ってたらもう始まってしまった。仕方ない、俺はそう思いながら借りる物が書いてある紙へと走り出す。紙が置いてある机の前に来た俺は目の前にあつた紙をとり中を見る。

『ハズレ』

「いやハズレって何だよ！！くじ引きじゃないんだぞ！！」

『おっとレイン選手ハズレを引いたようです。ハズレを引いた場合は近くにあるボックスから紙を選ん

でください。なおボックスの中のお題は少しばかり難しくなります。」

俺は机の端にあった白いボックスに手をいれ紙を取り出した。そして中を見る。

『猫』

「もうこれ難しいってレベルじゃないよね!!どっから連れてくればいいんだこんなもん!!」

俺はまた盛大に突っ込む。もうこれビリ決定だろ。ん、いや待てよ。確かレイルカは猫になれたよな。よし頼んでみるか。俺はすぐさま念話をした。

(レイルカ猫になってくれないか?)

(え!?!レイン急に何を。)

(借り物のお題が猫なんだ。なんとかならないか?)

(う、うん。わ、分かりました。準備するので中庭で待っていてください。)

(分かった。)

俺はすぐさまグラウンドを出て中庭に向かった。すると一分くらいすると白い綺麗な毛並みをした猫がこっちに来た。もちろんレイルカだ。

「よし、じゃあ行くぞ。」

「あ、ちよつと待って!!」

俺はレイルカを抱きかかえて再びグラウンドに戻ってきた。後はゴールするだけだ。

『先ほど校舎に消えたレイン選手何かをかかえて戻ってきました。あれは猫でしょうか？なんとレイン選手のお題は猫だったようです。難しいお題を短時間で見つけるとはすごいですね』

このアナウンスで少し観客が驚いた声を上げた。ていうかアナウンスうまいな。そして他の選手もゴールした。今から借り物の審査が始まる。

『それでは借り物審査の時間です。まずは一着の方から行きましようお題を見せてください。』

弾が選手に近づきお題を見る。ていうか審査もお前がするのかよ。

『一着の方女子の体操着オーケーです。では次。』

なかなかベタなもんだな。

『二着の方のお題は高橋先生のカツラですね。確認してください。教師のズラってこの学校結構思い切ったするんだな。』

『えー確認したところ高橋先生のカツラはとれていなかったの偽物と判断されました。よって失格です。では次。』

どんな判定のしかただ！！次は俺の番か。

『お題を見せてください。猫ですね。確認しますよ。』

弾はじろじろと猫になったレイルカを見る。これで何を確認するのだろうか。

『よし、ちゃんと生きていますようです。それでは次。』

確認が終わったらほっといきをついた。ばれるわけもないんだけど。

(レインもう戻ってもいいですか?)

(これが終わるまでは待ってくれ)

(はあ、仕方ないですね。)

レイルカの苦勞はもう少し続きそうだ。残りの選手の審査は面倒なので割愛させてもらおう。

あれから一時間くらいがたった。もう体育祭は終わりに差し掛かり次で最後の競技だ。その競技は全学年対抗リレーだ。俺はまた入場門のところと並んでいる。はあもう疲れたから帰りたい。

「ようレイン。どうしたんだそんな顔して？」

後ろから弾が話しかけてきた。こいつはなんでこんなに元気なんだ？俺より多くの種目に出て、さっきまで司会もやってたのに。

「疲れたからだよ。それよりなんで司会なんかやってたんだ？」

「いやさ。倒れたやつが俺の友達でさ。そいつ以外誰も台本覚えてないから代わりに俺が立候補したんだよ。」

相変わらずこいつの交友関係は広いな。

『選手の皆さんは入場してください。』

と、アナウンスが入ったので周りのやつらが動き始めた。俺もそれについていく。

「お、とうとう始まりか。がんばろうぜレイン。これで一年が勝てば俺たちの組優勝だぜ。」

「めんどくさい。」

「おい、そこは「任せる！」とか言うもんだろ。まあいいや。」

俺たちはグラウンドのレーンの内側まで来ると駆け足をやめとまる。ふと横を見てみるとどこかで見たような金髪が目に入った。向こうもこちらに気づいて横を向いてきた。

「あ。」



「あ。」

二人同時にそんな声を出した。

「え〜とバーニング先輩だったか？」

「バニングスよ！！人の名前も覚えられないのあなたは！！」

「あんだだつて俺の名前呼んだことないだろうが。それといちいち大声出さないでくれ。」

「何でそんなに上から目線なのよ。敬語使いなさい。」

「いちいち大声出さないでくれ、ですます。」

「あなたの物言いむかつくわね。」

「こらそこ静かにしなさい！！」

近くにいた教師に注意されてバーニング先輩は黙った。めっちゃ睨んでるよ。

「あんたも走るの？」

「走るからここにいるんだが。」

「そう。あなたには絶対負けないからね。覚悟しておきなさい。」

若干フラグみたいな台詞を言ってからバーニング先輩は横に向いた。もう話す気はないらしい。

「おいレイン。今の先輩ってバニングス先輩か？」

「ああ、そうだな。」

弾が小声で話してきた。ていうかよく知ってたな。

「なんでお前学校の六大美少女とあんなに親しげなんだよ。」

「あれが親しげに見えたのかお前は。ていうか何だよ六大美少女って。」

「知らないのか？お前。いいか、よく聞けよ。」

「あゝはいはい、もう始まるぞ。静かにな。」

なんだか長そうな話になりそうだったので強制的に終わらせた。それにリレーが始まるうとしてるしな。

『位置についてよゝい、パン！』

甲高い火薬の発火音でリレーは始まった。第一走者はスタート直後は互角ぐらいだったが中盤くらいになると差がではじめた。一年は二位だ。そのまま第二走者にバトンが渡る。第二走者も順位を保つたまま走っている。そして第三走者にバトンを渡そうとしたとき手が滑ったのかバトンが落ちてしまった。慌てて拾うが今の後ろにいた二年に抜かれてしまいビリになった。二年はそのまま三年を抜いて一位になった。第三走者も全力で走っているが差は埋まらず第四走者が走り出した。次は第五走者かって俺か。俺はレーンに向かう。行くこうと思ったら背中をつつかれた。

「何だよ。弾。」

「いや緊張してるかな〜と思って。」

「俺がそんな風に見えるか？」

「いや、お前なら大丈夫だと思うけど一応言っとこうと思ってな。頼んだぜ、レイン。」

「・・・おう。」

そういつて俺はレーンに向かった。

「あんたも一緒だったのね。」

「はあ。」

「なんでため息つくのよ。」

「いや深い意味はないから。」

今日はバーニング先輩と縁があるな。そろそろ第四走者が帰ってきた。そしてバーニング先輩、三年生という風に走っていった。結構差があるな。ちょっと本気でいってみるか。一年の第四走者が帰ってきてバトンを受け取った。俺は前の走者を追いかけた。すると空いていた差はぐんぐんと縮まっていった。グラウンドの四分の三ぐらいのところでは俺は三年を抜いた。そのままバーニング先輩も抜こうと思ったが距離がたらずアンカーに同時にバトンを渡すことになった。

「あゝ疲れた。」

走り終わると俺はグラウンドに座り込んだ。なんか走った後って無償に疲れるよね。

「あんだ、なんで、そんなに、速いのよ。」

「バーニング先輩、息整えてからしゃべったほうがいいぜ。」

「あたしの、名前は、バニン、グスよ。」

ツッコミにも切れがなくなってる。そうとう疲れてるな。

「お、弾が帰って来たな。」

弾はそのままゴールテープを切った。

「一位かすげーなあいつ。ん、てことは。」

リレーが始まる前の弾の言葉を思い出す。弾の言葉からすると俺たちの組は優勝したことになるな。

「優勝か。ま、がんばったかいはあったかな。これで爺さんにもいいとこ見せられたし。」

こうして俺たちの体育祭は幕を閉じた。

体育祭（後書き）

今回はサイドストーリーみたいになりました。  
文才無いな俺。

## 異変

「はあゝあぢ〜」

「レインしつかり歩いてください。」

「なんでこんなに暑いんだよ。もう夏は終わったってのに。」

「そうですね。ここの毎日暑いと気が参ってしまいますね。」

と、俺たちは頭上からガンガンとおくられ続ける日光に対し愚痴をこぼす。もう夏休みも終わり季節は九月に入った。そして、校長の長つたらしい話を聞くだけの始業式が終わり早一週間が経とうとしていた。とわいえまだまだ残暑が厳しい、とういかこのまま俺を溶かすんじゃないかというぐらい気温は高い。

「レイルカゝ魔法使って学校連れてってくれ。」

「何を馬鹿なこといつてるんですか。無理ですよそんなこと。」

『まったく情けないですね、マスターは。これくらいでへばってしまっなんて。』

「こんなところでしゃべるなよエリス。」

『私だつてちゃんと周りは確認してます。マスターみたいに馬鹿じゃありません。』

相変わらずこいつはなんで俺を罵倒すんの？俺ってマスターじゃな

いの？

「お前ってさ暑さとか感じるのか？」

『まあそれなりには。なんで急にそんなことを？』

俺は待機モードのエリスを腕からはずして熱した鉄板のようなアスファルトに押し付けてみた。

『て何するんですか！？熱い！！下の辺りがめっちゃ熱いです！！』

「へえ〜本当に感じるんだな。」

『へえ〜じゃないですよ！！早くやめてくださいよ！！このままだと道端で遊んでる痛い人ですよ！！』

「大丈夫だ。俺だって周囲を確認してやってる。お前みたいに馬鹿じゃない。」

『さっきの仕返しですか！！』

「レインいつまでも遊んでないで行きますよ。」

『エリスもはしゃぎまわるな。』

「分かったよ。」

『私別にはしゃいでないでしょ！！』

レイルカとアルクに呼ばれたのでアスファルトに焼かれ熱くなった

エリスを広いあげて俺はまた日光の照りつけるなか学校に向かつて歩き出した。ちなみにアスファルトで焼かれたエリスは思いのほか熱かった。

俺は教室に着くなり自分の机に倒れ付した。日光の照りつけるなか登校するという苦行を乗り越えた俺の体力はほとんどなかった。

「おはようレイン。生きてるか？」

「・・・返事が無い。ただの屍のようだ。」

「それをいえるのは棺桶のなかの旅人だけだぜ。」

「・・・なんだ弾。」

朝は体力回復に努めたいのだが何もしなくてもちよっかいを出してきそうなので相手をすることにした。

「友達にあつたんだから挨拶するのは当然だろ。にしても何で毎朝お前はそんなに元気が無いんだ？」

「太陽が俺に嫌がらせしてくるからだ。」

「ああ、暑さでやられてんのか。もうちょいがんばれよ。」

「無理だな。」



「即答かよ。」

「何がむりなのだ？」

今度は女の声が出た。見てみると委員長と明日香とレイルカがいた。このメンバーは定番になったな。

「お、三人とも今日も綺麗だな。こんどデートでも行かない？」

「うっさい。」

弾は一秒でフラれた。ちなみにこのやり取りは一学期から続いている。

「それで何の話しだったんですか？」

「ザクがソーレイの砲撃からは耐えられないって話だ。」

「何それ？」

「いやいやただこいつが暑さでへばってるってことだよ。」

「何だそういうこと。相変わらず情けないわねえ。」

さっきエリスに言われたことを明日香にも言われた。同じことを短時間で二回も言われるとは。

「つらいなら保健室に連れて行くっか？」

「いやそこまでじゃない。」

「そうか。ならいいんだ。」

委員長は世話焼きなのかこういふところでは面倒見がいい。普段は何かと口うるさいが。

「何か失礼なこと考えているな。」

「そ、そんなことないぜ。」

なぜ心を読めるのだろうか？

「そんなことよりレイン今回は負けないからね。」

「何が？」

「テストよ。夏休み明けにあつたでしょ。」

「ああ、あれね。」

そういえばそんなのあつたな。

「私が勝ったら何でも一つ言つこと聞いてもらつわ。」

「じゃあ俺もなんか聞いてもらつから。」

「いいわよ。」

そういふと明日香は自分の席に戻っていった。レイルカと委員長も

戻っていった。

「おいおい、大丈夫かよあんなことって。」

「まあ何とかなるさ。」

と、そこでチャイムが鳴り出した。他のクラスメイトも自分の席に着き始めた。俺はいつものように窓の外を見上げ空を見る。これが俺の日常になっている。だがあるこの日ある変化が訪れた。

放課後、授業が終わりクラスメイトが散り散りに教室を出て行く。弾は例によってサッカーの部活にいった。そんな中一人俺の方に向かって歩いてきた。明日香だ。

「どうかしたのか？」

「朝の約束忘れたわけじゃないでしょうね。」

「朝？あゝはいはい分かってますよ〜」

「それじゃ私の点数を見なさい！」

バツと広げられた用紙を見る。数学のテストだ。得点の欄には95点と書かれていた。

「へえ〜すげえな。」

「どうよ。今回はがんばったんだから。」

「そんじゃ次は俺だな。」

俺は鞆から配られたテスト用紙を取り出し明日香に渡す。

「何、恥ずかしくて見せられない点数でもとったの？」

「実はそうなんだよ。あんま見せたくないんだけど。」

俺がそういうと明日香はなんだかとても嬉しそうな顔になった。そして折りたたまれた用紙の中を見る。すると今度は驚いたような顔になった。

「いや〜最後の答え書き忘れてさ〜100点取れなかったんだよね」

俺は嫌味たつぷりな言葉を言った。用紙には98点と書かれていた。

「全然恥ずかしくないじゃない!!!また負けた〜!!!」

明日香は落胆の声を上げた。その声を聞きつけてカレイルカと委員長が来た。

「どうしたんだ？」

「勝気なお嬢様に現実の厳しさを教えてやったところだ。」

「明日香はまた勝てなかったのか。」

委員長は今ので大体のことが分かったようだ。レイルカは明日香を慰めていた。

「さて明日香。約束おぼえてるよな。」

そっとうと明日香の体がビクンと反応する。

「それでは罰ゲームの・・・」

俺が罰ゲームを言いかけたとき頭に軽い頭痛がした。ひどいものではなかったが突然のことなので少しふらついた。何だ今のは？まさか歪みか？

「と、思ったけど今日は用事があったのを思い出したからまた明日にするわ。レイルカ行こうぜ。」

明日香はそれを聞いてほっとしたようだ。

「じゃあな。明日香、委員長。」

「待ってください！また明日。」

俺は教室を出て下駄箱ではなく屋上に向かった。ドアを開けると勢いよく風が流れてきた。

「レイルカ歪みがどこに現れたか分かるか？」

「え？現れたんですか？」

「気づいてなかったのか。」

「す、すみません。」

「まあいい。早く行くぞ。」

「はい。」

何だ？今回の歪みは何かが変だ。俺はそう思いながら目的地に向かった。

今回転移した場所はここかの廃れた建物だった。ちなみに夜だ。

「この中か。肝試しに来た気分だな。」

「怖いこと言わないでください。」

俺たちは建物の中に入っていく。入ると結構入り組んでるみたいだった。どこかの研究所みたいところだ。少し歩くと何かに切り裂かれた跡が壁にあった。

「こつこつこのを見るとバイオハザードを思い出すな。」

「い、嫌ですよゾンビになるなんて。」

レイルカはどうやら怖いものが苦手らしい。そんなことを考えていると奥の方から何か物音が聞こえてきた。俺たちは息を潜める。カタカタという短い足音のような音。こっちに近づいてきている。音が近づくにつれて何かの形が鮮明になってきた。

「ひっ！」

レイルカが短い悲鳴を上げる。そいつは腕は大きな鎌のようになっていて三メートルはある巨大な脚を細い四本の脚で支えている。後ろには蠍のような尻尾がついていて。顔には複眼がいくつも集まってきた大きな眼球がこちらを見ていた。同じみの漆黒の体をして。

「今回は蠍モドキか。いや蠍もどきか？」

「そんなのどつちでもいいです！！！」

「キエエエエエエ！！！」

蠍モドキはこちらに向かってものすごいスピードで腕を振るってきた。しかも壁をえぐりながらだ。

「レイルカ一度外に出るぞ。ここじゃこっちが不利だ。」

「分かりました。」

俺たちは外を目指した。通路を一直線に走るとすぐに出口は見えたとして外に出る。すると蠍モドキも出口を壊して出てきた。

「行くぞ。エリス。」

『了解。』

俺は無防備になった背中に向かって切りかかるが尻尾によって防がれた。防がれた尻尾によって押し返された。さらに尻尾から何か飛ばしてきたので慌てて魔力で壁を作る。当たった瞬間ジュウという溶ける音がした。

「魔法も解けるのかよ。」

続いてこちらに向かってこようとしたがレイルカの放った矢によって脚がとまる。隙ができたことによってレイルカはさらに矢を放った。だが螭螂モドキは動こうとせず、腕の鎌ですべてはじいてしまった。

「な!?!」

「え!?!」

今度はレイルカの方に行こうとしたので俺は器の力で細い脚を切り離そうとした。白いオーラを纏ったエリスをふうる。エリスが脚に食い込むが切り落とすまでには至らない。俺は命いっぱいの力で押し込んだ。すると切断することに成功した。

「レイルカ一旦離れるぞ!?!」

「はい!?!」

俺はバランスを崩した螭螂モドキから離れて近くの森に逃げ込んだ。森に逃げ込んで数分さきほどの建物から離れたところで俺たちは足



を止めた。

「ここまで来ればしばらくは大丈夫だろう。」

「そうですね。」

すぐそばにあった木を背もたれにして座り込んだ。今回の歪みはどこがおかしい。まず、現れたときにレイル力が気がつかなかった。器の保持者じゃないにしても今まではちゃんと反応を確認できてたはずだ。次に今までのやつよりも強くなってることだ。単純に強くなったのではなく知能がついていたり表面の皮膚が堅くなっていたりより戦闘することに適した体になっている。

「どうなってんだろうな。レイル力何か心当たりとかないか？」

「・・・そうですね、もしかしたら歪みが大きくなってきたのかもしれません。」

「歪みが大きくなったからあいつらも強くなったのか？」

「推測ですが可能性としては大きいです。」

だからさつき器の力があんまり効かなかったのか？そうなるのもっと強い力じゃないと螻蛄モドキには効かないのか。

「はあ、こりやまた面倒なことになったな。」

「どうしますか？」

「レイル力あいつの注意少しだけひきつけてくれないか？」

「はい分かりましたが、レインはどうするんですか？」

「その間にあいつの動きを止める。そんでとどめつけて感じた。」

「大丈夫なんですか？先ほどのように器の力が効かなかつたら・・・」

「そつちの方も考えてある。次でちゃんと仕留める。」

それを聞くとレイルカはもう聞いてはこなかった。

「それじゃ行くぜ。」

蠍螂モドキは三本の脚で音を消しながら森に逃げた二人を探していた。その巨体は夜の森と同化して肉眼で捕らえるのは難しいだろう。見つかったら気づくことも出来ないでやられてしまいそうだ。まるで獲物を狙うハンターのようにだ。だがあくまでも比喻だ。今回は俺たちが仕留める側なのだから。

「フィアンマ・アロー。」

その言葉とともに蠍螂モドキに五つの矢が放たれた。それに気づいたやつはそれをはじめこうとする。だがその矢に触れた瞬間、矢は炎となり蠍螂モドキを燃やした。レイルカの魔力変換資質によつ

て矢に炎を付与させたのだ。蠍螂モドキは炎を消そうと腕を振りまわしてもがいている。俺が近づくには十分な隙だった。

「エリス！！カートリッジロード！！」

『了解！！』

カシュツという音とともにマガジンの部分が回る。そして魔力が一気に跳ね上がった。俺はそのまま今出来る最大の技を放った。

「氷凰一閃！！」

炎に注意がいつていた蠍螂モドキは俺の攻撃をまともにくらった。斬りつけられたところから一気に凍りだした。その氷はどんどん広がりがり地面と体を固定して完全に蠍螂モドキの動きを止めた。だが全身が凍りついてもまだ終わってはいない。器の力でしか歪みは倒せないからだ。

もつと、もつと強くイメージするんだ。こいつを倒せるだけの力を引き出すんだ。すると左手が白く光りだした。その光はだんだんと形を成していき一つの剣になった。全ての無駄を取り除いたような細い剣。傍から見ると折れてしまいうような印象があるがとても力強い感じがする。

「これならいけそうだな。」

「キエエエエエエエ！！」

その咆哮とともに氷に埋もれていた蠍螂モドキが動き出した。だがまだ体の半分は氷の中だ。出てこられると厄介なのでそうそうに決

着をつけることにした。

俺は一気に駆け出し螻蛄モドキに近づく。それに気づいたやつは俺に腕を振り下ろしてくる。俺はそれに向かって剣を振るった。その剣はまるで豆腐でも切るみたいに腕の鎌の部分を切り落とした。それによってひるんだ螻蛄モドキに俺は思いつき剣を振るって胴体を真っ二つにしてやった。

「よし、退治完了だ。はあく疲れた」

戦闘が終わると白い剣も消えた。俺も緊張を解いた。ふと黒い灰のようになって消えていく歪みの残骸を見る。消えていく残骸の中何か鈍く光る物を見つけた。

「なんだ？」

「どうかしたんですか？」

俺は近づいてきたレイル力を無視してそれを広げあげた。それは黒い石だった。小石程度の大きさのものだった。なんだか分からなかったが歪みの一部なのだろう。自然に消えないようなので器の力で消すことにした。俺はその石を握り器の力を発動した。するとその石はいきなり霧のように霧散して俺の体の中に入った。

「ぐっ!?!なんだ!!」

「レイン!?!」

霧のようなものはどんどん俺の中に入ってくる。振りほどくことは出来なかった。そして全ての霧が入ってくると俺はとてつもない疲

労感に襲われた。

「ハア、ハア、ハア……どうなってんだ？」

「大丈夫ですか、レイン！！」

「ああ、とくに体には問題ないようだ。」

レイルカは心配そうにこちらを見てくる。疲労感以外には変わったところは見られなかった。

「にしても今回は梃子摺ったな。」

「そう、ですね。」

これからはこんな戦闘が続くだろう。もしかしたらまだ歪みは強くなるかもしれない。このままじゃ駄目だな。

「また鍛えなおすか。レイルカ手伝ってくんね？」

「もちろん構いませんよ。」

レイルカは快く了承してくれた。これからやること山済みだな。あく面倒だな。

「とりあえず今日はもう帰ろうぜ。」

「はい、分かりました。」

翌日・・・

あれから一夜が明けた。あのあと家に帰った俺は今回のことやこれからのことを考えようとしたのがだ予想以上に疲労していたのかすぐに寝てしまった。なので昨日のことはなにも分かっていない。それにこれからのことも。どうしようか。

「めんどいな〜もう。」

「何がめんどいんだ？」

急に話かけられた。なんだ弾か。

「いや何でも。そうだ明日香呼んできてくれ。」

「なんだよ気になるじゃねえか。ま、いいや。」

弾は立ち上がり明日香のもとに向かった。そしてすぐに明日香を連れて戻ってきた。明日香と話していたレイルカと委員長も一緒に来たようだ。

「なんか用でもあるの？レイン？」

「ああ、そろそろ罰ゲームを発表しようと思ってな。」

「・・・覚えてたのね。」

「当たり前だろ。こんな面白いこと忘れることなんて出来ねえよ。」

「あんたって性格悪いわね。」

「失敬な。人が悪いだけだ。」

「もっと性質悪いじゃない。」

「それじゃ、言っぜ。今回の罰ゲームは……」

その言葉に明日香は息を呑む。弾は興味津々のようだ。レイルカは止めたほうがいいのか迷っておろおろしている。委員長もそれで迷っているようだ。もうそろそろいいか。

「今日一日お嬢様言葉で過ごしてもらいます。」

「え？どういこと？」

「だからあのお嬢様言葉だよ。」「ですわ。」「とか」でしてよ。」「とかそれを授業中、休み時間、放課後とやってもらう。」「

「嫌よそんなのー!！」

「罰ゲームだろ。ちゃんとしろよ。ほら語尾つけて。」

「うっ、分かった、ですよ。」

観念したのか明日香は口調を改めた。それを聞いていた四人は

「なんだそれ。似合わねえ！。ハハハ。」

「流石にこれは。フフ。」

「すみません。私も耐えられません。フフ。」

「ハハハハハ。腹いてー。」

大爆笑した。

「もう何なんですの！！！」

怒りながらも罰ゲームを続けるのでさらに笑いは広がった。

「ハハハ。それじゃ今日一日がんばれよ。」

「もう嫌ですわ！！！」

その日二組には忍び笑いが耐えなかった。



## レアスキル

「はくしょん!!」

「風邪ですか？」

「いや大丈夫だ。流石にこの季節は寒いな。」

「そうですね。」

レイルカは腕を摩りながら答える。今俺たちはとある神社の敷地内にいる。敷地内といっても手入れもされていないところで草が大量に茂っていた。もう十二月になった。この神社は山の麓の近くであり標高が高い。そのせいかより寒く感じてしまう。

なぜそんなところにいるかというのを鍛えるためだ。三ヶ月ほど前に歪みと戦ったときのことだ。あのときの歪みは進化して強くなっていた。戦闘は苦戦をしいられた。なんとか倒せたのだが相手が少し強くなっただけであれほど苦戦するとは思わなかった。このままでは今後支障が出るだろうと思いついた。また鍛えることにしたのだ。

ここを選んだのは滅多に人が来ないからだ。それに大きな音が出てもし神社からは離れた茂みの中なので気づかれることはない。

それとこの三ヶ月で分かったことがある。歪みの中から出てきた黒い石のことだ。あれはいわば歪みの核のようなものだった。あの核を持つているものは少しだけはあるが意思を持って行動することができるようだ。他にも知能を持ったり、攻撃方法が多様になったりと戦闘能力も向上する。

そして歪みの出現回数も増えていた。前は三ヶ月に一回くらいだったが、今は一ヶ月に一回のペースだ。これも歪みが大きくなっている証拠だろう。

レイルカがあのととき歪みを感知できなかったのもこれが原因だった。本来歪みには直接見ない限りはその存在を感知することができない。レーダーやセンサーといった類にも映らないレイルカはある程度感知する能力があったようだが歪みが大きくなったことで存在を隠す力も大きくなったようだ。

レイルカが歪みを感知できなくなってしまったので必然的に俺が歪みを探すことになった。俺は器の力で歪みを見つけることができるのだが今まで探索をレイルカにまかせきりだったせいが見つけるのに結構苦労した。

と、まあ分かったことってのはこんな感じだ。ちなみに今は休憩中だ。俺は木にもたれて座っている。その隣にはレイルカもいる。肩が触れ合うほどの距離だ。俺はもうちょっと距離をとろうとしたのだが離れるとレイルカもついてくるので諦めた。レイルカ曰くこの方が暖かいそうだ。

「にしてもどうしたもんかねえ。」

「どうかしたんですか？」

レイルカがこちらに向いて聞いてくる。すると必然的に顔が少し近くなる。至近距離で見られるのはあまり好きじゃないんだが・・・まあいいか。九月から様々な事柄が解決してきたのだが、ここでまた新たにある問題が浮上してきたのだ。

「いや、なんつーかさ。よく分からないことが起きて。」

「よく分からないこと、ですか。どういったものなんですか？」

悩んでも仕方が無いので相談してみることにした。

「えっとだな。最近、鍛錬のとき、主に魔法を使ってるときなんだが。その魔法になんか変なものが見えるようになって。」

「変な、もの？」

「ああ、こうなんか文字みたいのが魔法の横あたりに浮かんでるんだよ。なんか分かるか？」

「いえ何も。魔法に文字ですか。何でしょうね。」

「やっぱり分かんねえか。」

「はい、すいません。力になれなくて。」

「いや気にすんな。もともと分け分かんないものだしな。」

そういつて申し訳なさそうにしていたレイル力を慰めた。しかしレイル力が分からないとすると器とか歪みは関係してないってことだな。そう考えると手がかりはゼロか。何なんだろうか。なんかの病気にでも罹ったか。

『マスターの見間違いではないですか？』

「それはねえ。結構な回数見てるからな。」

『だったらマスターの頭がおかしくなったのでは？』

「んなわけ無いだろ。」

『いや分かりませんよ。人間ぼけると自覚することが難しいですからね。』

「レイルカ家にフードプロセッサーってあったけ。最近物忘れが激しくてしょうがない。」

『何でそんなもの探すんですか！？』

「いやお前もイメチェンしてやろうかと。主にギザギザな感じで。」

『どういう意味ですか！！ていうかやりませんよイメチェンなんて！！』

「そついえばアルクはなんか知らないか？」

『お願いですから無視はやめてください。』

エリスとの会話が面倒になってきたので話題を強制的に切り替えた。

『すまないが私にも心当たりは無いな。』

「そうかありがと。」

結局何も分からずじまいか。あくなんか考えるのだるくなってきた

な。このまま考えても仕方ないし色々試してみつか。

「では始めますよ。」

「ああ頼む。」

休憩を終えた俺たちは今正面に向かい合って立っている。別に今から模擬戦をするわけではない。俺が見ることのできる文字みたいなものの謎を解明するためだ。レイルカにはその協力をしてもらっている。

レイルカはスフィアを二つ出す。現れたスフィアのそばに文字が浮かんでいる。近くで見るとどこことなく数字にも似ていた。俺はまず左のスフィアの文字に触ってみた。すると触れた感触があった。ガラスに触れているような感触だ。今度はその文字を上動かしてみた。そしたらその文字はパラメーターが変動するように動いた。その変動につれてスフィアの方も形が一回りくらい大きくなった。

「レイン何をしたんですか？」

レイルカもこのことには驚いているようだ。まあレイルカからしたら何もしていないのに突然スフィアが大きくなったのだから驚くのは無理も無いか。

俺はレイルカの質問には答えずに右のスフィアの文字に触れた。そ

して今度は文字を下に動かした。また文字がパラメーターのように変動した。スフィアは左のとは逆に小さくなってしまった。

「レイルカこのスフィアをあの木に向かって撃ってくれないか。」

「え？あ、はい分かりました。」

レイルカはまず大きいほうのスフィアを撃った。木に当たったスフィアは幹を少し剥がして消えた。次に小さくなったほうのスフィアが撃たれた。すると木にめり込んで2cmくらいの穴ができた。

「レイルカ撃ったときに違和感とかあったか？」

「そうですね。二発目のときに少しコントローラーしづらかったよ  
うな気がします。」

「……」

「レインどうでしたか？」

「……」

「あの、レイン？」

「……ん？ああ、悪い。ちょっと考え込んだ。」

「それはいいですけど何か分かったんですか？」

「まあ、まだ仮説だけ。」

「聞かせてください。」

レイルカに催促されたので俺の仮説を教えることにした。

「じゃあ言うぞ。俺の予想では魔法の横にくっついてる文字は魔法の構成を表したものだと思う。」

「魔法の構成ですか。」

「ああ、俺はさっき左のスフィアの文字を上にはずらした。そんで右のスフィアの文字は下に動かした。そしたらどうなった？」

「左が大きくなって、右は小さくなりましたね。」

「そう。多分その文字はスフィアの大きさを変えるためのものだったんだろう。次にスフィアが木に当たったとき大きいほうは幹を剥がすだけだったが、小さいほうは木にめり込んだ。これは一つの数値を上げたり下げたりしたことによって他の数値にも変動があったんだと思う。大きいほうは的に当てやすくなったが威力が落ちた。小さいほうは当てにくくなったが威力が上がったって感じか。」

「でもなんで他の数値まで変動したんですか？」

「それは多分調整したんじゃないのか。」

「調整？」

「お前が出したのはスフィア一発ずつだ。スフィアの魔力は限られている。その限られた魔力で魔法は発動する。だが数値を変動させることによってその動作に必要な魔力が足りなくなったり余ったり

したんだろ。だから他からもらってきたりどこかに足したりしたから他の数値の変動も起こったと思う。」

「そうですか。それにしてもすごいですね。たった一回でそれだけのことが分かるなんて。」

レイルカは関心した様子で褒めてきた。

「いやまだ仮説を立てただけだ。これから他の魔法にも試してみても俺の仮説が正しいか調べる。」

「分かりました。次は何をすればいいですか？」

「次は防御魔法を展開してくれ。」

「はい。」

その後二時間ほど謎の能力の研究は続いた。

「レインそろそろ休憩にしませんか？」

「そうだな。よしじゃ休憩だ。」

そういうと俺はまた木にもたれて座り込む。レイルカも俺の横に座った。二時間ぶっ続けで頭を使うのは疲れるな。



さっきの研究で謎の能力のことは大体分かった。俺の仮説どおり魔法の構成を変えるものだった。そしてこの能力は構成を変えるだけでなく壊したりすることもできるようだ。例えば防御魔法を展開されたときその魔法に触って構成を壊すことで魔法を無効化することも可能だ。攻撃魔法も無効化できないことはないがそれによって生み出された衝撃とかは無効化できないのでダメージを負う可能性がある。さっきそれでひどい目にあっただしな。

さらに魔法の構成をいじることですら新しい魔法も作れることがわかった。とは言ってもそれをするためには魔力量、方向、速度、威力、形状、継続時間、効果、動作パターン、起動式などといった様々な設定を決めなければならぬ。それにバランスの取れていないと魔法が発に終わったりする。なのであまり実戦では使えない。即席で作ったりもできるが効果はあまり期待できないだろう。

「あのレイン。」

「どうしたレイルカ？」

「レインの能力についてなんです。」

「何か気づいたことでもあったのか。」

「はい。レインの能力はレアスキルといわれるものです。」

「レアスキル？」

「この世界にはときどき魔法以外の特殊な力を持って生まれてくる人がいます。」

「それがレアスキルと。でも俺、神様にそんなの頼んでないぜ？」

「多分アウレオルス様は関わっていないかと。あなたがレアスキルを持ったのはただの偶然だと思います。」

「偶然ね。随分ラッキーな偶然もあったもんだな。まあいいや。使える力は多くてもあまり困らないからな。」

けど戦闘向きじゃないけどなと口には出さずに呟く。けど贅沢はいってられない。この力も戦闘向きではないけど結構いろんなことができるみたいだしないよりはあったほうがいいって感じたな。

「レイルカ俺って強くなってる？」

俺はふと頭に浮かんだ疑問を言った。歪みを倒すために魔法を覚えた。けれどこの前はそれで負けそうになった。もちろん鍛錬を怠ったせいもあるだろう。それでまた鍛錬を始めて、レアスキルも手に入れた。けれど次に絶対に勝てるという保障はなかった。そう考えると強くなってるのか分からなくなってしまった。

「ええ、あなたは強いです。」

「え？」

レイルカは自信満々に答えた。あまりにあっさりと答えられたので思わず聞き返してしまった。

「大丈夫です。あなたは強いです。それでいつも私を守ってくれていますから。」

「・・・そうか。」

その答えは俺の疑問を取り払うのに十分すぎる答えだった。

「でもどうして急にそんなことを？」

「なんでもねえよ。ただ・・・」

「ただ？」

「約束を守れてるか確認しただけだ。」

レイルカは首をかしげて分からないという表情をしている。

「誰との約束なんですか？」

「さあ、誰だろうな。」

「教えてくださいよ。」

「いいじゃねえか。それよりも帰ろうぜ。今日は疲れた。」

「む、まあいいです。それでは帰りましょうか。」

「ああ。」

俺たちは赤く染まった空の下、ゆっくりと帰るべき場所へと向かった。

## レアスキル（後書き）

ここから段々主人公が強くなっていきます。  
次回は新キャラ登場です。

## もう一つの器

近づくなこの化け物が!!

(違う。私は化け物じゃない。)

どっかいきなさいこの悪魔!!

(違う。悪魔でもない。)

うわ!?化け物がきたぞ。逃げろ。

(何でみんな離れていくの?)

お前はもう家の娘じゃない!!出て行け!!  
もう家に来ないで!!

(お父さん・・・お母さん・・・何で私を一人にするの。)

(私は化け物なの?)

（私は悪魔なの？）

（私は人間じゃないの？）

（分からない。私は何なの？）

（誰か教えてよ。私は何なの？）

（一人は嫌。）

（一人ぼっちは嫌！！）

（誰かそばにいてよ。）

（私を一人にしないでよ。）

「はっ！？ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

俺は目が覚めるとすぐに布団から体を起こした。体は汗をびっしょりとかいていた。

「・・・何だっただんだあれは？」

あれとは先ほど見ていた夢のことだ。というかさっきの悪夢のことだ。夢にしては妙に臨場感があった。それに夢の中の少女の感情がずっとこちらに流れ込んできているような気がした。

黒い髪の少女が村の住人や親に嫌悪され畏怖され蔑まれていた。その中で少女は泣いていた。そして自分は何なのかと答えを求めた。その質問は俺に問いかけられているようで酷く胸が痛くなった。夢を見ているとき答えようとした。けれど声は出せなかった。まるで誰かに口がふさがれていたように。まるで答えるなと言っているように。

「・・・胸糞悪い夢だな。」

すると汗が布団に落ちた。結構な汗をかいていたらしい。けれどそれは汗ではなかった。

「え？何でだ？」

俺は泣いていた。俺はすぐに涙を拭った。けれどまた涙が出てきた。拭っても拭っても涙が出てきた。悲しいわけじゃないのに、辛いわけじゃないのに。ただ涙だけが出てきた。

「本当にどういことだ？」

顔を横に向け窓の外を見る。今は午前三時。真夜中だ。夜空には三日月が浮かんでいた。ひとまず落ち着こうと思ったのだ。夜空を眺めて十分くらいたったら涙はとまった。

「あの夢のせいなのか？」

だが考えても涙が出た理由は分からなかった。

「はあ、もう寝よ。」

仕方が無いので布団に入って目を閉じる。だが一向に眠れなかった。いつもだったらずくに夢の世界へ落ちていけるのだが全然寝れなかった。

「本当にどうしたんだろうな。俺。」

結局、俺はその後一睡もせず朝日を拝むことになった。本当に胸糞悪い夢だな。

キーンコーンカーンコーンというチャイムで午前の授業が終わった。だが俺は学校にきてからずっと窓の外を眺めるだけだった。二月に入りさらに寒くなったような気がする。俺はずっと夢のことを考えていた。だが考えても考えても分からなくなるばかりだった。



「おいレイン。どうしたんだよ。朝からずっとぼーっとして。さっき先生めっちゃ怒ってたぜ。」

「ん？なんか言ったか弾？」

「おいおい、マジでどうしちまったんだよ。風邪でも引いてんじゃないのか。」

「いや今の所は健康優良児だ。」

「そうかい。で、なんで馬鹿みたいにぼーっとしてたんだ。」

「ああ、ちょっと考えごとじてただけだよ。」

「いや朝から何時間考え込んでんだよ！！もうそれちょっとじゃないだろ。」

でも事実だからしょうがない。俺はあの少女のことを考えていた。夢を見てから頭から離れなくなってしまったのだ。正確に言えば少女から伝わってきた感情が忘れられなかったのだ。

俺は一人が寂しいということが分からなかった。友達はいて困らないがいなくても困らない。前世では一人でいることが当たり前だった。だから少女の感情が理解できなかった。

「なあ、弾。」

「なんだよ。」

「嫌われて一人になるって嫌か。」

「当たり前だろ。そんなの誰だって嫌に決まってんじゃない。」

「・・・当たり前、か。」

「レイン本当に大丈夫か？やっぱ風邪じゃないのか？」

「・・・そうかもな。保健室にいつてくる。」

「付いてってやるのか？」

「いやそこまでしなくてもいい。」

俺は弾の気遣いを断り教室を出た。レインがいなくなったあと弾のところにはいつものメンバーが集まった。

「レインのやつどうしたのよ？」

「さあ、なんだか調子悪いみたいだぜ。」

「大丈夫なのか？」

「本人は大丈夫って言ってたけど、なんか悩んでるみたいだっただぜ。」

「レイン、どうしたんでしょうか。朝からずっとあんな感じでしたし。」

「レイルカは何も聞いてないのか？」

「はい。聞いても何でも無いと答えるだけだったので。」

四人は原因を考えてみたが何も思い浮かばなかった。そこでふと明日香呟いた。

「もしかして恋煩いとか？」

「「「え？」「」」

「だって授業もままならないくらいに悩んでいたらそれくらいしか思い浮かばないじゃない。」

「明日香それは流石に・・・」

レイルカが反論しようとする横から弾が割り込んできた。

「そうか。だからなんなに元気がなかったのか。レインは色恋沙汰には興味ないと思っていたが安心したぜ。」

「なんだレインには好きな人ができたのか？」

委員長はあまり状況を飲み込めてはいなかった。結局この三人は180度間違つて納得してしまった。レイルカもここまでくると反論できなくなってしまった。次の日からレインは生暖かい視線を送られることになったが本人はなぜこんなことになったのかとさらに悩みが増えてしまった。

あの夢を見てから三日がたった。普通、夢というのは日が経つごとに記憶が薄れていくものなのだがあの夢はむしろ気になって忘れられなくなっている。どうしてここまで気になるのだろうか？

「考えたって分かんねえんだよな。」

俺は寝転がっていた体を起こした。すると頭にちくりと針を刺されたように頭痛が起こった。歪みが現れたのだ。

「休みだつてのに向こうはお構いなしだよ。」

そう言いながら俺はレイルカに念話をした。

（レイルカ歪みが現れた。）

（そうですか。では、すぐに向かいましょう。）

（分かってる。こっちは探索するから準備できたら言ってくれ。）

（はい。あのレイン。）

（何だよ。）

（大丈夫なんですか？ここのところ何だか元気がないようでしたから。）

レイルカという言葉聞いた俺は自分に呆れた。まさか夢のことで悩んでいた自分がそんな風に見たれていたのかと。後で誤解を解いておかないとな。

（悪い。そのことは別に心配するようなことじゃないから。迷惑掛けたな。）

（いえ。それでしたら構わないのですが、何かあるのでしたら相談くらいはしてくださいね。）

（分かったよ。探索もそろそろ終わる。終わりしだい出発するからな。）

（はい。分かりました。）

探索を終えた俺はすぐに目的地に向かった。着いたところは山の中だった。今回はまだ昼だった。いつもだったら夜に出てくるのだが珍しいこともあるもんだ。

「敵さんはどこにいるんだろうかな。」

俺は器の力で歪みの位置を探した。集中して反応を探る。だが反応はなかった。どういうことだ？俺はもう一度試してみる。だが結果は同じで反応はなかった。

「どっかしましたか？」

「器に歪みが反応しない。」

「え？そんなはずはないです。この世界にいるのなら間違いなく反応するはずですよ。」

「そうなんだが、なんか邪魔されてるような気が……ん？あんなところに人がいる。この近くに村でもあんのか？」

山の麓辺りになにやら動くものを見つけたので目を凝らしてみると人が畑を耕していた。

「本当ですね。行って聞き込みでもしてみますか？」

「歪みを探すのに聞き込みって……まあいいか。何か見た人がいるかもしれないしな。」

目的地が決まった俺たちはさっそく山を降りることにした。そして歩き始めて三十分くらいすると平坦な道に出た。さらにその道をさつき人がいた方向に歩いていくこと二十分。何軒かの建物が見えてきた。

「やっと着いたか。じゃ、聞き込み開始だ。一時間くらいしたらまたここに集合ってことで。」

「はい。分かりました。」

村の入り口のようなところを集合場所にして俺たちは分かれた。さて適当に聞いていこうかな。すると丁度いいところに村人らしき人

がとつりかかったので声を掛けた。

「なあ、そのあんたちよつと聞きたいことがあんだけど。」

声を掛けると掛けられた男は振り返ってこちらを見た。なんというかいかにも村人です、という風な感じだ。

「ん？君はこの村の人間じゃないね。旅人か何かかい？」

「まあ、そんなところだ。それでさっきも言ったが聞きたいことがあるんだが。」

「ああいいよ。答えられることなら教えてあげるよ。」

「じゃあ聞くけど、あんたこの辺りで黒い怪物を見たことある？」

その質問をするとその村人は一瞬青ざめた表情になった。だがすぐに取り繕って返答してきた。

「し、知らないな。そんなの。」

「・・・そうか。ありがとう。」

そういうと村人は逃げるようにして俺から離れていった。

おかしい。さっきの男の反応は何か心当たりがあるって感じだった。それにこの村どこかで見たことあるような。他にも聞いてみるか。

俺はその後村を散策して何人かと同じ質問を繰り返した。すると質問をされた村人は皆、最初の男と同じ反応をした。そして一時間が

経ったので俺は集合場所に向かうことにした。

村の入り口に戻ってみるとレイルカはもう先に来ていた。

「悪い。待たせちまったみたいだな。」

「いえ、そんなには待っていませんから。」

レイルカもついさつき来たらしい。俺はすぐに聞き込みの成果を聞くことにした。

「村の人に聞いたところによると、歪みらしきものは見ていないそうです。ですが皆さん質問すると急に慌てだして何か隠している様子でした。」

「やっぱりか。」

「やっぱり、ということとはレインの方も。」

「ああ。俺の方も同じ反応だった。あからさまに動揺してたしな。気づかないほうがおかしい。」

「それと歪みかどうか分からないんですけど向こうの山の小屋に化け物が住んでると村の子供たちが言っていました。」



「化け物が住んでる？この辺りに出る猛獣なんかか？」

「いえ、違うと思います。子供たちの中には悪魔と言っていた子もいましたし、動物ではないと思います。」

悪魔ねえ。気になるのは子供が知っているようなことをなぜ村人は隠そうとしているのかということだ。全部の話から推測すると村人たちが隠そうとしたのは多分山に住んでる化け物のことだ。何か見られちゃいけないようなもんでもあんのか？

「レインどうしますか？」

「・・・とりあえずその化け物とやらがいる山に行って確かめてみよう。万が一歪みという可能性もあるしな。」

「分かりました。」

確認のため俺たちはその山に向かうことにした。この入り口から対角線上に山はあるので結構かかりそうだ。俺は少しペースを速めて山に向かった。

一時間後・・・

山の中に入りその化け物が住んでいるという小屋を探した。だが場所が分からないので一向に見つからない。おまけにほとんど獣道みたいなところだから体力も削られていた。

「あゝもう、この草鬱陶しいな。ん？あれは。」

俺は愚痴りながらも草を掻き分け進んでいた。するとぼろい小屋を

見つけた。

「ここが例の小屋なのか？」

「多分そうなんじゃないですか。他にあるとは思えませんし。」

「そうだな。じゃ入ってみるか。」

俺は小屋のドアノブに手を掛け扉を開いた。昼間だというのに中はとても薄暗かった。見てみると一通り生活するための道具や家具があった。どれも古い物ばかりだ。前に誰か住んでいたのだろうか。ふと小屋の端にあった壺が目に入った。中を覗いてみると水が溜めてあった。結構新しい水だ。

どういうことだ？水があるってことはまだここには誰か住んでいるのか？

俺はさらに小屋を調べた。すると床に食べかすが落ちていたり、ベットのシーツの皺が伸ばされていたりと多くの生活痕が見つかった。

「やっぱりここには誰かが住んでる。」

「レインそれは本当なんですか？」

俺がレイルカの質問に答えようとしたとき後ろでドサツという音がした。振り返ってみるとそこには一人の少女が立っていた。

「!?!?!お前は!?!」

俺はその少女に見覚えがあった。夢で見た少女と同じだったのだ。

黒く腰辺りまで伸ばされた髪に漆黒を思わせる黒い瞳。歳は十歳くらいでとても可愛らしい姿をしている。その少女も俺たちを見て驚いているようだ。

「どづして・・・ここに。」

そう言って一歩近づくと少女は一瞬にして怯えた表情になって逃げ出してしまった。

「あ！おい、待ってくれ！！」

「あ、レイン！？」

俺もすぐに追いかけた。足が速いのかもう結構距離がひらいている。だが追いつけないほどではなかった。俺と少女の距離はぐんぐん縮まった。すると少女は木の根元に足を引っ掛け転んでしまった。

「大丈夫か！」

「嫌！！」

転んだ少女を起こしてあげようとすると暴れだして振りほどかれてしまった。そしてまた怯えた表情でこちらを見た。転んだせいで服は汚れて怪我もしていた。俺を見た後は手を耳に当てて蹲る形になった。

「どづしたんだ？」

「違つ。」

「え？」

「私は化け物なんかじゃない。」

やはりこの少女は夢で見た少女と同一人物のようだ。こちらの話は聞いていない。かなり錯乱しているみたいだ。そこへレイルカも来た。

「大丈夫ですか！」

「待てレイルカ。」

怪我を治そうとしたレイルカを止める。今近づいてもまともに治療はさせてくれないだろう。

「ちょっとだけ待ってくれ。」

そついうと俺は少女に近づいた。少女はいまだに蹲って先ほどの言葉を呟いている。俺は膝をついて少女を抱きしめた。抱きしめられたことに抵抗したがそれでも放さないようにした。そして頭を撫でながら優しく言葉を掛けた。

「お前は化け物なんかじゃない。」

すると暴れていた少女の動きがとまって震えもとまった。

「俺はお前を化け物なんて呼ばないからそんなに怯えないでくれ。」

「うっ……うっ……」

「大丈夫だ。我慢しないでいいから。」

「う、うわああああん!!!」

最後の言葉を聞いた少女は思いつきり泣いた。俺の服を力強く掴んで泣き続けた。俺はその間ずっと少女の頭を撫でていた。

少女は十分くらいしたら泣き止んだ。泣き止んだところでレイルカに怪我を治療してもらってとりあえず先ほどの小屋もとい少女の家に戻った。もう外は暗くなり始めている。結構長い時間この世界にいたらしい。

「あ、そうだ。名前教えてくれないか。俺はレイン・オルハルトだ。」

「私はレイルカ・シーリンです。」

俺は座りながら聞いた。ここには椅子とかが無いので直接床に座ることになる。掃除はされていたので汚れる心配はなかった。

「えと、その、せ、セルティア・クローウエル・・・です。」

セルティアはまだ人と話すことは慣れていないようだ。だが表情は怯えではなく恥ずかしさを表していた。緊張してるみたいだ。

「セルティアか。別に敬語じゃなくてもいいからな。あと俺たちのことは好きに呼んでいいから。」

「分かった。」

セルティアが了承したのを確認したら少し間をおいて本題に入ることにした。

「セルティア。お前に何があつたのか聞かせてほしいんだが。」

するとセルティアの表情はみるみるうちに暗くなってしまった。自分のトラウマを話すのだから無理はないか。

「無理なら話さなくてもいいから。」

セルティアは俯きながら考え込んでいる。少ししたら考えがまとまつたのか顔を上げた。

「・・・話す。」

「こつちから言っておいてなんだが、いいのか？」

「・・・いい。」

「分かった。じゃあ聞かせてくれ。」

セルティアはぎこちないしゃべり方で話始めた。セルティアは一年くらい前まではあの村で住んでいたようだ。家は村の診療所で不自由なく暮らしていたそうだ。だがある日村に黒い化け物が現れたら

しい。多分歪みのことだろう。その歪みはセルティアを見つけるとまるでセルティアを探していたかのように襲ってきたらしい。襲われたセルティアがそのとき必死に助けると願ったらセルティアからも黒い力がでたようだ。その力は歪みを吹き飛ばして消してしまったらしい。それでセルティアは助かったようだ。だが村のやつらは異常な力を持つセルティアを歪みと同じ化け物と呼ぶようになった。そして村人から迫害され村を追い出されたからここに住んでいるとのことだった。

「・・・酷い。」

「ああ、胸糞悪い話だ。」

話を聞いた俺たちから出てきた感情は村人に対する怒りだった。こんな幼い少女に自分たちのいきどおりを押し付けてなんになるっていうんだ。まあここで俺が怒ってもしょうがないんだが。

「にしても黒い力が。セルティアはなんか心当たりあるか？」

セルティアは首を横に振った。一応聞いてみたが予想どおりの返事だった。

「それについては私が話します。」

「知ってるか？」

「はい。その前にレインに聞きたいことがあります。」

「何だよ。」

「レインはどこでセルティアのことを知りましたか？さっきのセルティアを慰めるときレインは事情を知っているようでした。どうしてですか？」

「・・・夢だよ。」

「夢、ですか。」

俺はとりあえず白状した。何も言わなかったらセルティアに疑われるかもしれないからな。かといってこの話あまり信じてもらえないようなもんじゃないけど。

「ああ、夢でセルティアが村のやつらに迫害されてるところを見た。そんときにセルティアの感情とかも流れ込んできて覚えてたんだ。ここ最近もそのことが頭から離れなかつたくらいだ。」

「そうですね。」

セルティアの顔がまた暗くなる。自分が迫害されてたときの話題なんて出されたくなくなつたのだろう。レイルカはそれを聞いて何か納得したようだ。

「で、セルティアの力は何なんだ？」

「多分、もう一つの器だと思います。」

「もう一つって器は一つしかなかったんじゃないのか？」

俺はすぐレイルカに異を唱えた。そうでないとい前レイルカから聞いた話が矛盾するからだ。



「確かに正浄の器は一だけです。ですがセルティアの中にある器は別の器です。」

「別の器？」

「その器の名前は負極の器。あなたの器と対となる器です。」

若干頭が混乱してきた。いきなり新しい情報を出されたので処理が追いつかない。セルティアはもう何が何だか分かっていないように置いてけぼりにされている。

「え〜と、じゃあ歪みを消したのはその力で浄化したのか？」

「正確には吸収したということになります。」

「吸収？」

「負極の器は歪みに酷似した力なんです。自分の生命力を強大な力に変えます。それだけでなく歪みを取り込んでそれを力に変換するところできます。ですが浄化するわけではないので歪みを力に変換するまで歪みは消えません。」

「それって歪みを退治できるってことじゃないのか？」

「見方によれば、ですが歪みを取り込むということは負のエネルギーを体に取り込むということです。正浄の器を持っているレインならまだしも人がそのようなことをするのは危険すぎるんです。」

「そうか。俺が見た夢にもそれが関係してるのか？」

「それは器同士の共鳴だと思います。多分セルティアの強い感情が器を通してレインに伝わったみたいですね。」

「なるほどな。」

全部の問題が解決したところで外から何か音が聞こえた。

「何だ？」

「動物か何かでは？」

するとまた聞こえた。こっちに近づいているようだ。今度は草を踏みしめる音だと分かった。その音は動物の足音とは違うものだった。

「少し見てくる。」

立ち上がって外に出た。そこには麓の村人がいた。

「こんなところで何をしてるんだ？」

「……」

「おい、聞いてるのか？」

「……ヴオオオオオオ！！」

「な！？」

その男はいきなり人とは思えない声を出しながら襲い掛かってきた。

それだけでなく健康骨辺りからもう二本黒い腕は生えて首を絞めてきた。回避ができたかったのでそのまま木に押さえつけられた。

「ガハッ!」

「レインどうしまし・・・な!」

「ひっ!」

出てきたレイルカとセルティアは短い悲鳴を上げる。傍から見ると分とスプラッタな絵図らだろ。そろそろやばいので俺は男の腹を蹴って力が緩んだ腕から逃れた。そして顔を思いつき殴った。男は五メートルほど吹っ飛んだ。

「歪みか。」

どうやら今回の歪みはこいつらしい。そしてこいつは人間に取り憑いているようだ。今まで反応が無かったのはこのせいか。となるとどうすりゃいいんだ?下手に攻撃すると殺しかねないぞ。

「レイン大丈夫です。器の力なら歪みだけを攻撃できます!!」

攻撃を躊躇していた俺を見てレイルカがアドバイスをしてくれた。そういうことなら。俺はエリスを展開させ器の力を宿した。まず動きを止めることにした。黒い腕に向かって一閃する。

「ヴオオオ!」

片方の腕が切り落とされた。両方切り落とそうとしたがかわされてしまった。歪みは俺から距離をとった。腕を失ったことで速度がぐ

んと落ちた。そして不利と悟ったのか逃げてしまった。そしてその方向は村がある方向だった。

「な！？待て！！」

そう言ったときにはもう歪みは見えなくなっていた。

「くそ！！俺は先に行くから。レイルカ、セルティアのこと頼んだぜ。」

俺はある魔法を発動した。レアスキルによって作った魔法だ。その魔法は動きを極限まで速くすることができる。ただ速くするだけなので魔力の消費も少なく持続時間も長い。

「ウインド・ギア」

すると俺の体は爆発的に加速した。常人には見えない速さだ。俺は村に向かって全速力で走った。

村に行くと大パニックになっていた。あの歪みが暴れ回っているようだ。

「全く厄介なことしてくれるぜ。」

俺はすぐに歪みを見つけた。村の広場のようなところにいた。俺は駆け出して村人に襲い掛かろうとしている歪みのところに割って入った。

「とつとと逃げる！！」

襲われていた村人は助かったことに気づいて慌てて逃げていった。周りに人がいなくなったの確認してエリスで受け止めている腕を思いつき押し返した。歪みはそのまま後ろに飛んでまた俺から距離をとった。さつき腕を切り落としたことで相当警戒されている。

「そう簡単にはいかないか。」

だがそんなに余裕があるわけでもなかった。早く倒さないと取り憑かれていたやつがどうなるか分からない。

「スファイア・ボム」

これもレアスキルで作った魔法だ。三つの魔光弾が出てきた。その魔光弾には獣の目のような模様があった。

「あいつの動きを止める。」

すると魔光弾は縦や横に不規則に移動しながら歪みに向かっていった。歪みは近づいてきた魔法弾を叩き落とそうと腕を振り下ろした。だが魔光弾はこれを回避した。

この魔法は一つの命令のみに従う。なので命令を遂行するために邪魔な障害にも対処することができる。それに命令している間は自立行動をしているので自分でコントロールする必要が無い。中々使い

勝手がいい魔法である。

魔光弾は攻撃を回避すると二つが足に当たった。当たると小さい爆発が起こり足を凍らせた。もう一つは黒い腕に当たって後ろにあった民家の壁に腕を固定した。歪みは身動きをとろうと暴れている。俺は器の力で白い剣を出した。そして駆け出して歪みの胸に突き刺した。すると歪みの動きが糸の切れた人形のように止まった。男の体から黒い霧が出てきてやがてそれが集まって黒い石になった。

「やっと終わったぜ。疲れた〜」

石を掴みながら言う。掴んだら器の力を発動した。石はまた霧になって俺の中に入ってきた。全部が入ってくるとどつと疲労感に襲われた。

「何度やってもなれないな。」

「レイン、大丈夫ですか？」

「ああ、こっちはもう片付いたぜ。」

レイルカとセルティアが来たようだ。するとどこかに避難していた村人も出てきた。そこで歪みに取り憑かれていた男が起きた。

「ん・・・ここは？」

「おいあんた大丈夫か。」

「あ、ああ。ところで何があったんだ？」

どうやら取り憑かれているときの記憶はないらしい。体も元に戻っていた。だが次の瞬間男の顔が青くなっていた。

「ば、化け物だ!？」

そしてセルティアを見てそういった。その言葉に反応して他の村人も一斉にセルティアを見た。村人はセルティアに辛辣な言葉を投げかけた。

「この化け物が! !また村に災いを持ってきたな! !」

「村に近づくなと言っただろう! !」

「早く出て行け! !化け物! !」

「ち、違う。」

セルティアは否定しようとしたが村人の声にかき消されて届かなかった。そして村人から投げかけられる言葉に耐え切れなくなってしまったのかセルティアは俯いて泣き出してしまった。だがそれでも村人は罵倒を続けた。俺はそれにとつてもない怒りが湧いた。

「いい加減にしゃがれ! !」

その言葉に村人は静まり返った。

「よってたかつて子供をいじめて何が楽しいんだ?」

俺は怒気を孕んだ静かな声で言った。

「そいつは化け物なんだぞ！！なんで庇うんだ！！」

一人の村人が反論してきた。それを皮切りに他の村人もあおってきた

「こいつのどこが化け物なんだよ。どっからどう見てもただの女の子じゃねえか。」

「お前はそいつがどんな力を持つてるか知らないからそんなことがいえるんだ！！」

「だったらその力であんたたちになんかしたのかよ。セルティアが。」

「！？ツ、それは・・・」

村人はすぐに言葉に詰まった。あおっていたやつらも静まり返った。

「セルティアがあの時力を使ったのはほとんど無意識だったんだぜ。セルティアもあんたたちと同じように助けたいと思っただけだ。それに結果的に言えばセルティアが力を使ったおかげであんたたちは助かったんだぜ。なのになんで拒絶するんだ。」

村人は全員黙り込んでしまった。

「自分たちに都合の悪いことを言われたらだんまりか。最低だなあんたたちは。」

もう反論する気はないらしい。

「行くぞレイルカ、セルティア。」



「え？」

「これ以上ここにいっても腹が立つだけだ。」

「・・・分かりました。」

俺たちは村を出てあの山小屋に向かった。

「どうして・・・庇ったの？みんな、私のこと嫌いなのに。」

山に入ってからしばらくしてセルティアが口を開いた。

「嫌だったのか？」

セルティアは首を横に振った。

「じゃあ、何でそんなこと聞くんだよ。」

「だって・・・私、たち会ったばかり、なのに。」

セルティアはぎこちないしゃべり方で質問を続けてきた。俺は素直に答えた。

「別に理由なんてない。当たり前なことしただけだ。」

それを聞くとセルティアは何も聞いてこなかった。山小屋に着くまで全員無言だった。そして約三十分くらいしたら山小屋に着いた。そこでセルティアが口を開いた。

「帰っちゃうの?」

「・・・ああ。」

「・・・そう。」

それを聞くとセルティアは酷く悲しそうな顔になった。無理もないだろう。またここで一人で暮らすことになるのだから。

でも俺はそれでいいのか?ここでセルティアを置いていったらまた寂しい思いをするだろう。それが分かかって置き去りにするのなら村のやつらと同じじゃないのか?

そう考えて俺はある答えを出した。

「一緒に、来るか?」

「え?」

「だから俺たちと一緒に来るかって聞いてんだ。」

「・・・いいの?」

「いいも何もお前が決めることだ。」

「行く！！レインともつといたいから！！」

セルティアは勢いよく俺に抱きついてきた。俺はバランスを崩しそうになったので慌てて足に力を入れる。

「レイン、いいんですか？」

「まあいいだろ。それにここにセルティアを残してったらなんか色々と駄目だろ。」

「それもそうですね。それでは帰りましょうか。」

「ああ、帰ろうか。」

この日俺たちに新しい家族ができた。

## もう一つの器（後書き）

次回は委員長とのお話です。

## 深澄の悩み

朝日が差し込んで顔に眩しい光が当たった。窓が開けられたらしい。俺はその光から逃れるため布団に包まった。布団の中は暖かくすぐにも眠りにつけそうなくらい心地よかった。そして俺が二度ねしようとしたとき体が揺らされた。

「レイン、起きて。」

俺はその声を無視して眠ろうとする。さらに強く体が揺らされた。

「レイン、もう朝だよ。」

と、言われたが俺はそれも無視して布団に包まった。すると今度は揺らされずに諦めたのか部屋から立ち去っていった。これでたま睡眠が楽しめる。が、また部屋に誰か入ってきた。そして背中に強い衝撃が走った。

「いつてえ~~~~!!」

俺はあまりの衝撃に布団から飛び起きた。そこには箒を持ったセルティが立っていた。

「レイン、やっと起きた。」

「誰だつてこんなことされたら起きるわ!!朝っぱらから何すんだよー!!」

「レインを起こしにきた。」

「だからなんで起こしにきたのに箒で叩くんだよ!!」

「桜にさっき聞いたら「そんなもん叩き起こせばいいのよ。」って。」

「意味が違う!!いや、合ってるみたいだけど。とにかく箒で人を叩いたら駄目だ!!」

「そうなの?」

「そうだ。」

「分かった。」

セルティは抑揚のない声で頷いた。今日は休日だから存分に寝られると思ったのに。とんだ災難だ。

「桜が早く朝ごはん食べてだって。」

「分かったよ。すぐ行く。」

そういうとセルティは部屋を出て行った。とりあえず俺は布団をかぶつけることにした。

セルティがここに来て四ヶ月ほどが経過した。桜さんとかに説明するときにはレイルカのとくと同じように記憶喪失の女の子を拾ったということにした。流石に無理があるかなと思ったが案外すんなりと受け入れられた。俺はこのときやっぱ母さんと姉妹なんだなと思った。

セルティの方も大分慣れてきたようだ。初めは俺以外のやつとは全然しゃべらなかつたが桜さんの頑張りあってか今では普通に会話している。最近は爺さんとも仲がいいようだ。爺さんも新しい孫ができたみたいで嬉しいようだ。ちなみにセルティというのは桜さんがセルティと仲良くなるために作った愛称だ。俺も便乗して使わせてもらっている。

だが慣れてきたといってもまだ問題はあつた。セルティは元々重度の人間恐怖症みたいなものだつた。けれどそれはこつちで暮らすようになって改善はされた。そして人間恐怖症は治つたが今度は極度の人見知りになつてしまつた。俺や桜さんたちと会話するのは問題無いが見ず知らずの他人などに話しかけられるとすぐに黙り込んでしまふ。せめてある程度の会話が成立するくらいにはしないと今後が不安だ。

それと歪みの方にも変化があつた。最近の歪みはどうやらセルティの器を狙っているようだ。理由は分からない。ただレイルカの話によると負極の器の力は歪みに酷似しているから歪みには何か引かれるものがあるそうだ。セルティをあそこに置いていかなくなかつたのはいい判断だつた。

「ふあゝ眠い。」

布団を片付け終わった俺は大きなあくびをした。また眠気がぶり返してきたらしい。そのまま寝てしまおうかと思つたがすぐにやめた。また幕で叩かれたくはないからな。俺は着替えて部屋を出た。

「なんか中学に入ってから悩み事増えたな。」

そんな虚しいこといったらため息が出た。そして俺は朝食を食べるために居間に向かった。

朝食を食べた後家でやることも無かったので気分転換がてら散歩に出た。時刻はまだ昼前の十一時。時間はまだ十分にある。のんびりで行こう。ちなみに今日は鍛錬も休みだ。

『いい天気ですね。』

「そうだな。」

『とわいえ休日に町を散歩だなんて随分爺くさい中学生ですね、マスターは。』

「爺くさくて悪かったな。」

しばらく歩いているとある人物が目についた。

「あ、委員長だ。」

委員長は少し人通りの少ない路地にいた。スーパーの袋を持っているところを見ると買い物帰りなのだろう。

『他にも誰かいるみたいですよ。』



だがそこには委員長以外のやつもいた。そいつらはいかにも自分はチンピラですよ、というような格好をしていた。一人は髪を金髪にして耳にピアスをつけている。もう一人はグラサンにパンチパーマだ。なんというか今時珍しいコンビだ。

『マスター。助けたほうがいいのでは？』

「分かってるよ。」

委員長はどうやらその二人に絡まれているようだ。見ず知らずの他人なら放って立ち去るのだが知り合いなので助けることにした。俺は後ろからパンチパーマの尻を蹴った。

「うわっ!!」

「兄貴!!」

パンチパーマは蹴られて体勢を崩してしまい近くの電柱に突っ込んでいった。金髪はすぐにパンチパーマの方に向かった。

「よう、委員長。」

「レ、レイン?どうしてここに?」

「たまたま通りかかった道で委員長がいたからとりあえず話しかけてみた。」

「そ、そうか。」

「てめえ兄貴に何しやがる!!」

パンチパーマと金髪がこっちにきた。パンチパーマは鼻を押さえている。頭からいったからしばらくはしゃべれなさそうだ。

「今は委員長と話してんだから邪魔すんなよ。」

「うるせえ!そんなの関係なねえんだよ!」

「自己中丸出しだな。俺はあんたたちとしゃべることなんてないんだけど。」

「こっちにはあんだよ!なんで兄貴にいきなり蹴りいれたんだよ!」

「いやちょっと邪魔だったから少しどいてもらおうと思ったただけなんだが。」

「それで蹴りいれたのか!?そっちの方が自己中じゃねえか!!」

お、なんかツツコミ入れてくれた。ちょっと面白いかも。

「ていうかあんたたち何なんだよ。まさかナンパか?言わせてもらうがナンパするならもっと現代人に合わせた格好で来たほうがいいぜ。まあそれで来たとしても誰も相手してくれないと思うけど。」

「なんだとてめえ!!」

とうとう男は怒り出して俺に殴りかかってきた。まっすぐ俺に向かって拳を突き出してきた。俺はそれをよけて金髪の腹を殴った。す

ると金髪は腹を押さえて後ろに下がった。

「そんなもん当たらないぜ。つつか相手すんのも飽きてきたからもうどっか行つてくんない？」

「な！？てめえ・・・何ですか兄貴？」

パンチパーマが金髪に何か話しかけている。少しすると話がまとまったようだ。

「今日はこれで引いてやる。今度あつたら覚えとけよ。」

三流特撮番組の悪役のような言葉を残して二人は帰っていった。あんな言葉使つやついたんだな。

「で、委員長は大丈夫だったか？」

「え？あ、ああ。なんとも無い。」

「買い物帰りに絡まれるなんて委員長も大変だな。」

「そう、だな。」

「ん？」

委員長は歯切れの悪い口調で答えた。

「私はもう帰るよ。助けに来てくれてありがとう。」

「気にすんな。またこういうことがあつたら力貸すから。」

「分かった。また明日学校で会おう。」

「じゃあな。」

委員長は小走りで帰っていった。その背中はどこと無く元気が無いように思えた。

「どうしたんだろうな？」

『何がですか？』

「委員長だよ。なんか元気無かっただろう。」

『まあ、あんな輩に絡まれたんですから仕方ないと思いますよ。』

「そんなもんか。」

エリスに言われて納得した。時間を見てみると十二時を回りそうだった。なので俺も家に帰ることにした。

次の日・・・

二年になったことで教室が二階になったため毎朝階段を上ることに

なった。荷物を持って階段を上るのは何だか妙に疲れる。

階段を上り終えた俺は新しいクラスである三組の教室に入った。他のメンバ―もクラスが変わった。弾は俺と同じ三組。レイルカと委員長と明日香は四組となった。

教室に入った俺は机に身を預けた。まだ弾は来ていない。話す相手もないのでこのままHRまで寝ようかと思っていたら肩を誰かに叩かれた。

「ん？何だ明日香か。」

そこにいたのは明日香だった。クラスが変わってから明日香たちとはあまり行動をともしなくなった。と、言っても昼飯と一緒に食ったり一緒に下校したりと全然無くなったというわけではない。けど朝から尋ねてくるのははじめてだった。

「ちょっと来なさい。」

「え？用があるならここでも・・・」

「いいから来なさい！」

明日香は俺の服の襟を掴んで強引に引っ張っていった。そして連れて行かれたところは彼女のクラスの四組だった。扉の前に着いたところで俺は解放された。

「何なんだよいきなり。」

「ちょっとあれを見て。」

明日香は扉に隠れるようにして教室の中を指差す。その先には委員長が座っていた。

「委員長がどうかしたのか？」

「あんなあれを見てどう思う？」

俺の質問には答えずに逆に質問してきた。仕方ないのもう一度委員長を見た。委員長は自分の席に座って本を読んでいる。図書館辺りで借りてきた本だろう。至って普通のように見える。だが昨日も思ったかなんとなく元気がないようにも見える。本を読んでいる最中にため息も出ていた。

「なんか元気ないな。」

「やっぱりあんたもそう思うのね。」

「で、何のためにこんなことしたんだ。そろそろ教えてくれよ。」

「分かってるわよ。最近、深澄の様子が変なのよ。」

「変？例えば？」

「一人でいるときは何だかぼーっとしてときどきため息ついたり、私やレイルカが話掛けても聞いてなかったり何だかいつもの深澄じゃないみたいなの。」

「原因は？」

「分からないわ。心配で聞いてみたんだけど何でもないって教えてくれなかったの。」

「いつからあんな風になったんだ？」

「先週ぐらいからかな。」

先週からか。委員長の悩み、全然思い浮かばないな。

「ねえ、あなたはなんか知らない？」

「・・・悪い。俺は知らないな。」

「そう。じゃああなたも調べるの手伝て。」

「え？何を？」

「深澄のことよ。」

「何で俺がそんなことしなきゃいけないんだよ。」

「あんだねえ、深澄のこと心配じゃないの？」

「それは・・・気にはなるけど。」

「それじゃよろしくね。何か分かったら報告してね。」

「え？あ！おい！」

そこで朝の予鈴がなった。明日香もそれを聞いて教室に入った。調

べるったて何すればいいんだ？あゝもうまた面倒事が増えた。

放課後・・・

「というわけで今から委員長を尾行する。」

「レイン本当にやるんですか？」

『マスターがついに変態に目覚めましたか。』

『今の台詞は危ないと思うぞ。』

なんか全員否定的なことしか言っただけだった。アルクに初めて突っ込まれた気がする。エリスに至ってはただの罵倒だし。これはいつもどおりか。

レイルカに朝のことを話して協力してもらったことにした。レイルカ自身も委員長のことは気になっていたようだ。

「仕方ないだろう。やらないと明日香に何されるか分からないからな。」

「わざわざ尾行しなくてもいいじゃないですか。」

「本人が教えてくれないんだからこっちで調べるしかないだろ。あ、委員長が来たぞ。見つからないようにしろ。」

そうこうしているうちに委員長が来た。とりあえず近くにあった木の後ろに隠れることにした。委員長を見てみると俯き加減でとぼとぼと歩いていた。時折ため息もしていた。



「やっぱり元気ないですね。どうしたんでしょうか？」

「それを調べるんだ。」

委員長が学校から出たので俺たちもそれを追いかけた。俺たちは委員長から近すぎず遠すぎずの距離で付いていった。

『何だか刑事みたいですな。』

『そうだな。中々しない体験ではあるな。』

デバイスたちはなんだかんだで乗り気だった。委員長が道を曲がったので見失わないように小走りで角に向かった。

「ちょっとストップ。」

「え？どうしたんですか？」

「あいつらは・・・」

見てみると委員長と昨日のチンピラがいた。どういうことだ？昨日の今日で同じ人間に絡まれるなんて。あのチンピラは委員長を狙って絡んでくるのか？となると今回の原因はあいつらで何か。

「レイン知っているんですか？」

「ああ、昨日も委員長に絡んでたやつらだ。」

『とりあえずまた助けるべきではないですか？』

「そうだな。ちょっと行ってくる。」

俺は荷物をレイルカに預けて委員長の下に向かった。

「またあつたな時代遅れのお二人さん。」

「レイン!?!」

「げっ!?!お前は……ていつか時代遅れっていうな!?!」

「どっからみても時代遅れだろうその格好。またナンパか。成功しないからやめとけて。」

「うるせえ!?!余計なお世話だ!?!」

「おい坊主。あんま大人をなめたら痛い目みるぞ。こっちは仕事で来てるんだ。邪魔するな。」

パンチパーマが威嚇するかのようになってきた。しゃべれたんだなこいつ。

「へえ、仕事ねえ。中学生に脅しまがいのことするのが仕事かよ。」

「お前には関係ない。俺はそっちのガキに話があるんだ。」

「こっちにも事情があつてな。助けないわけにはいかないんだよ。」

「いいからどけよ。どかないと今度は容赦しなねえぞ。」

「だったらこっち返り討ちにしてやるよ。骨何本かは覚悟してもらうぜ。」

少し殺気を出しながら言った。それに怯んだのかチンピラ二人は少し後ろに下がった。

「今日はその坊主に免じて帰ることにしよう。行くぞ。」

パンチパーマは自分たちが不利だと分かったのがあっさり帰っていった。金髪もそれに付いていった。

「行ったか。大丈夫か委員長。」

「ああ、大丈夫だ。」

「じゃあ聞くけど、あいつらってなんなんだ？」

「そ、それは・・・」

「明日香とか心配してたぜ。悩み事があるんだったら誰かに相談するのでもいいんじゃないか？まあ言いたくないならいいけど。」

「・・・」

委員長は何も答えなかった。やっぱり人に話したくない内容らしい。

「そんじゃ、俺は帰るとしようか。」

「ま、待ってくれないかレイン。」

「どうした？」

「付いてきてくれ。」

「分かった。」

委員長は何かを決心したようだ。とりあえず俺は素直についていくことにした。あ、レイルカとも合流しないと。

レイルカと合流したあと連れてこられたところは一軒のアパートだった。酷く古ぼけているわけではないが綺麗で真新しいというわけでもない至って普通のアパートだ。階段を上って二階の一番端の部屋で止まった。委員長は鍵を取り出して扉を開けた。

「入ってくれ。」

「ここは委員長の家か？」

「そうだ。」

「へえ。一人暮らしなのか？」

「いや親も一緒だ。それに中学から一人暮らしをする人間はあまりいないと思うぞ。」

「そうか。とりあえずお邪魔します、と。」

「お邪魔します。」

「こつちだ。」

家に入るとすぐ隣にあった部屋に案内された。その部屋はとうやら委員長の部屋らしい。勉強机や本棚やぬいぐるみなどがあつたが少し質素な感じがした。

「好きなところに座ってくれ。」

委員長に言われたのでとりあえず床に座つた。委員長は俺たちの前に座つた。

「早速聞くが俺たちを読んだのはさっきのこの相談でいいか？」

「……うん。」

「じゃああいつらの言つてた仕事つてなんだ？」

「借金の返済を受け取ることだ。」

「あいつら借金取りだったのか。何であんなやつらに借りたんだ？」

「お父さんがある日倒れたんだ。それで病院で検査してもらつたんだけど原因が分からなくて。いい腕の医者がいるところにも行つたんだけどそれでも分からなかつた。お父さんも倒れてから寝たきりの生活をしてる。」

「それで借金をしたのか。」

「いやそのときのお金は何とかできたんだ。家とかも売ってこつちに越してきたんだ。けど私が入学する際にお金が足りなかつ見たいでお母さんが借金をしたらしいんだ。その借りたところがまずかつたみたいなんだ。」

「そんなに大金を借りたのか？」

「借金は五十万位だつて言ってた。それにお母さんはもう借りた分は返したらしい。なのに向こうは利子だとか言つてしつこく付きまといてくるんだ。それに利息が高かつたから返済額が百万になつていてとてもすぐには返せなくなつてしまった。」

「警察とかに相談は？」

「それも駄目だつた。前に行ったけどお母さんが向こうの契約書にサインしててその所為で警察も手が出せなくなつた。」

これは結構やばい感じだな。法律事務所とかも無理みたいだし。契約書とやらがなくなつたらいいんだが。

「そつといえはお前の親父さんつていつ倒れたんだ？」

「えつと今から六年くらい前だ。」

「体のどこが悪いんだ？」

「それが体には異常は無かつたんだ。それどころか健康体に近いら

しい。」

体に異常は無い？どういうことだ？あ、そつだ確か六年前って闇の書事件てのがあったな。

「それつてもしかして倒れる前に誰かに襲われたりしてる？」

「え？ああ。お父さんは倒れる前に剣を持ったやつを見たらしい。何で分かったんだ？」

となると委員長の親父さんが倒れたのは蒐集された所為だろう。リ  
ンカーコアが故障しているからいつまで経っても動けないのか。

「レインどうしたんだ？」

「委員長、親父さんのところに案内してくれ。」

「え？いきなり何を・・・」

「もしかしたら親父さんを治せるかもしれない。」

「ほ、本当か！？」

「ああ、ちょっと面倒だけど多分いけると思つ。」

「わ、分かった。案内する。」

委員長は立ち上がり部屋を出た。そのまま廊下を右に曲がってリビングを抜けて奥の扉の前に止まった。

「お父さん。ちょっといいかな。入るよ。」

委員長は返事を待たずに扉を開けた。中には三十代後半あたりの男性がパジャマを着てベットで寝ていた。目は開いているので起きてはいるようだ。

「深澄か。どうかしたのかい？そちらは？」

「私の友達だ。」

「どうも。レイン・オルハルトだ。」

「初めまして。レイルカ・シーリンです。」

「どうも。私は深澄の父の霧島信一だ。寝ながらですまないね。」  
体を起こした親父さんを見てみると若干痩せていて元気が無かった。八年間寝たきりなのだからしかたないか。

「それでどうしたんだい？わざわざ私のところに来て？」

「お父さんの病気が治るんだ。」

「ど、どういことだ。」

「レインが治す方法を知ってるらしい。」

親父さんと委員長が俺を見てきた。親父さんの方は少し不信に思っているようだ。そして俺が話し始めようとしたときレイルカが念話をしてきた。



( レインいいんですか？ )

( 別に話しちゃいけないってわけじゃないだろう。 )

( それはそうですが。 )

( それに期待させておいてやっぱり治せませんでしたとか嫌だろ。 )

( 分かりました。 )

「 どうしたレイン？ 」

委員長が黙り込んでる俺に話しかけてきた。表情は少し不安の色が見えた。

「 いや何でもなし。とりあえず治す前に話すことがある。いいか？ 」

それを聞いて委員長は頷いた。

「 よし。まず委員長の親父さんは病気で倒れたんじゃない。 」

「 え？ 」

「 親父さんが倒れたのはリンカーコアが故障した所為だ。 」

「 そのリンカーコアっていうのはなんなんだい？ 」

「 人の体にある力の源。その力は魔法だ。 」

それを聞くと委員長と親父さんは固まってしまった。いきなり突拍子のないことを言われて混乱しているのだろう。少しすると委員長はいきなり俺に怒鳴ってきた。

「レインふざけるな！！治せるんじゃないのか！！」

「治せるさ。そのためにはこの話を信じてもらう必要がある。」

「そんなの信じられるわけないだろう！！」

「はあ、やっぱり見てもらうほうが早いな。」

俺は一步下がってから一つのスフィアを出した。それを見るとまた委員長の動きが止まった。スフィアを円を描くように回転させて委員長の前に止めた。

「これは・・・」

「魔法の一つだ。信じてもらえたか？」

「・・・」

黙ったままだったが肯定と受け取っていいだろう。スフィアを消して話を進めた。

「この力で今からリンカーコアを修復する。」

「私はどうすればいいんだ？」

「そのままでもいい。手術とかするわけじゃないから痛みも無いと思

う。レイルカ頼んだぜ。」

「はい。では始めます。」

レイルカは親父さんの近くに行つて胸に手を当てた。手を当てたところから魔法が発動して光りだした。それを十分くらいしたらレイルカは手を離れた。

「な、治つたのか？」

「いえ、まだ完全に治つたわけはありません。この治療を何日か続ける必要があります。」

「そうか。」

「調子はどうだ。」

「何だか体が軽くなったような気がするよ。全然つらくない。」

「立てるか？」

そう促すと親父さんはベットから足を出して立ち上がった。まだ若干ふらついているようだが大分開封したようだ。

「お父さん、良かった・・・」

委員長は泣きながら親父さんに抱きついた。よほど嬉しかったのだろつ。

「さて、俺たちは帰りますか。」

「そうですね。」

「あ、レイン。その、さっきはすまなかった。怒鳴ったりして。」

「気にしてないぜ。元々信じろってというのが無理な話だしな。」

「それとありがとう。お父さんを治してくれて。」

「どういたしまして。明日ちゃんと明日香たちに説明しとけよ。あ、そうそう魔法のことは内緒にしといてくれ。」

「分かった。」

「それじゃまた明日な。」

「お邪魔しました。」

あれから一週間がたった。

委員長は翌日に明日香たちに今回のことを打ち明けた。明日香は事情を話してくれなかったことに怒ったがそれ以上に打ち明けてくれたことが嬉しかったようだ。弾の方も明日香に調査を頼まれていた

ようだ。

親父さんの方も治療を続けもうほとんど完治した。今は仕事を探しているらしい。

借金取り対策はとりあえず放課後に俺が委員長の護衛代わりとして一緒に帰ることになった。治療の方もあつたので都合が良かったからだ。そうすると向こうはぱったりと来なくなった。

「あとは契約書さえなくなったらいいんだけどな。」

それさえなくなれば利子で増えた借金はなくなるんだが、やっぱり殴りこみに行くぐらいしか思う浮かばない。それってすげえ面倒だし時計をしてみる八時半だった。そこで考えるのはやめて寝ようと思つたのだが突然誰かに呼ばれた。

「レイン!!」

「うわっ！何だよ弾。」

呼んだのは弾だった。少し息を切らして表情はどこか余裕がなかった。

「ちょっと来い!!」

俺そのまま廊下に連れ出され人の少ない階段に連れてこられた。

「どうしたんだよ。いきなり。」

「委員長が誘拐された。」

「な!?!? どういうことだ!」

「朝、今日は早く目が覚めたから早く家を出たんだ。そんで歩いてると委員長を見つけたから声掛けようと思って近づこうとしたら突然白い車が委員長を連れていったんだ。」

「それからどれくらい経った!」

「十分くらいだ。」

多分攫ったのは借金取りのやつらだろう。場所はそいつらことを調べるときに出てきたので分かっている。今から行けば間に合う。

俺はすぐに駆け出した。すると弾も付いてきた。

「何でお前も来るんだ。」

「助けにいくんだろ。だったら一人でも多いほうがいいだろ。」

「分かった。場所は分かっているから付いて来い。」

「おう。」

俺たちは学校を出てから町の都心の方に向かった。そして二十分くらい走ったところで三階建ての小さいビルについた。

「ここなのか?」

「ああ、ここの二階に攫ったやつこの事務所があるはずだ。」

「じゃあ行くうぜ。」

「弾、最優先は委員長の奪還だ。それ以外は無理するなよ。」

「分かった。」

少しの打ち合わせをして階段を上った。そしてあまり音を立てないように奥にあった扉に近づく。そこにはプレートで海鳴金融と書かれていた。普通の金融機関と間違えそうな名前だ。

「嫌だ!! やめろ!!」

「レイン!!」

「分かってる!!」

中から委員長の悲鳴が聞こえたのですぐに突入することにした。中にはこの前のチンピラに加え七人いた。一人は委員長の服に手を掛けていた。残りはそれを見ていたようだった。

「誰だ!! っってお前は!!」

「委員長は返してもらうぜ。」

そういうと俺は一番近くにいたやつに回し蹴りを放った

「てめえら委員長を放せ。」

弾は委員長を掴んでいたやつを殴って引き離れた。そしたら弾の方に何人がいったのでそれらを殴って止めた。

「弾、委員長を連れて逃げる。」

「何言ってるんだ！お前はどうすんだよ！」

「少しひきつけるだけだすぐに俺も行く。」

「・・・分かった。」

「危険だレイン！！わっ。」

弾は委員長をお姫様抱っこして事務所を出た。俺はそのドアを閉めた。

「ガキが逃げた追え！！」

後ろ辺りで豪華な椅子に座ってたやつが言った。

「行かせねえよ。こっからは俺が相手だ。」

そついうとチンピラどもは笑い出した。

「ガキ一人で何ができんだよ。お前らやっちまえ。」

すると一人が俺に向かって殴りかかってきた。俺はそれをかわして顔を思いつき殴った。壁の方にとんだチンピラは気絶したよう  
で起き上がらなかった。



「言っただろ。次は鼻だけじゃすまないって。エリス。」

『了解。』

「何だよそれ・・・!?!」

チンピラは大層驚いているだろう。何もないところからデカイ刀がでてきたんだからな。

「今回は手加減無用だ。ぶっ潰してやる。」

「ひっ!?!」

俺はチンピラ共を完膚無きまでにつぶした。

あれからさらに一週間がたった。

あの後警察が事務所に来た。俺は来る前に脱出した。おそらく弾が呼んだのだろう。騒ぎになるとまずいので俺たちはあの場にいなかったことにした。もちろん委員長もだ。

そのときに契約書も俺が破棄したのもう借金に悩まされることはないだろう。借金取りの方も警察が入った事によって色々不正が発覚し逮捕となった。

事の顛末を知ってるのは当事者である俺たちとレイルカと明日香だ。明日香はこのことを聞くとむちゃくちゃ委員長のことを心配していた。俺はレイルカからお説教をもらった。

その後は教師たちに無断欠席の理由を考えたりそれぞれの保護者に言い訳を考えたりとハードは一週間だった。

全部の問題が解決してやっと気の休めるときが来た。今は昼休み。俺は久しぶりに屋上に来て寝ている。場所は前に上ったところだ。

すると誰か屋上にきた。そしてこっちに上ってきた。

「ここにいたのかレイン。」

「んあ？委員長か。どうした。」

「少しな。隣いいか？」

「自由だ。」

委員長は俺の隣に座った。俺は寝たまま空を見上げている。しばらく沈黙が続いた。そして口を開いたのは委員長だった。

「レイン、今回はありがとう。」

「別に気にすんな。俺は相談に乗って手助けしただけ。俺だけじゃなくて明日香たちにも言ったほうがいいんじゃないかねえの？」

「明日香たちにはもう言った。それに今回はお前に一番助けられている。」

「そりゃどういたしまして。」

「その何かお礼をさせてくれないか？」

「いって見返りがほしくてやったんじゃないから。」

「でもそれじゃ私の気が納まらない。」

「・・・じゃあ、俺は困ったときは助けてくれ。」

「それでいいのか？」

「ああ。」

「分かった。」

またしばらく沈黙が続いた。話が終わると委員長は何だかモジモジとし始めた。何かいいたそうな感じた。

「どうした委員長？」

「・・・深澄。」

「え？」

「これからは深澄と呼べ。他人行儀なのは嫌いだ。」

「わ、分かった。委員・・・深澄。」

「よろしい。」

深澄は見惚れてしまいそんな笑顔で言った。

「ところで深澄。」

「何だ？」

「顔が赤いようだけど熱でもあるのか？」

「え！？いや、これはな、何でもない。」

「本当か？」

「本当だ。」

「なら良かった。」

その後少し談笑をした。そのときの深澄は笑顔でとても楽しそうだった。深澄の悩みは解決した。

知らなくていいこと

「え、海？」

『ああ、今度みんなで行って遊ぼうぜ。』

委員長誘拐事件から三ヶ月あまりが経った。今は八月となり一般中  
学生は夏休みを満喫している時期だ。

だが、俺は長期休暇を満喫しているとはいえなかった。とにかくや  
ることがないのだ。宿題なんか面倒なので初めの一週間で終わら  
した。その後は爺さんと将棋や花札で勝負したり、セルティの世話  
もとい遊び相手になったりとそんな日常が続いていた。レイルカは  
クラスの女子とかと遊びに行ってそれなりに満喫しているようだっ  
た。

今日はそんな予定すらなく家で情性を貪っていたときに弾から着信  
が来て遊びに誘われているということだ。

「海って少し行ったところにある海岸か？」

『違うよ。あそこ行っても楽しくないだろ。少し遠出しするんだよ。』

「どこに行くんだ？」

『まだ決まってるじゃない。今はとりあえず来るか聞いているだけだ。で、  
どうだ？』

「俺はオーケーだ。」

『何だ？今日はえらく素直だな。いつもだったら面倒とかいいそうなのに。』

「正直いうとやること無くて暇なだけだったからな。」

『面倒くさがりも暇には勝てなかったか。』

「で、誰が来るんだ？」

『一応いつものメンバーを誘おうと思ってる。あ、レイルカはお前から行つといてくれ。』

「分かった。そういえばお前も深澄も部活あるんじゃないのか？」

弾は一年からサッカー部に入っているし、深澄も事件の後から雑刀部に入った。なぜ深澄が部活に入ったかというところ習っていたそう。

『それは大丈夫だ。行くのはお盆休みだからな。部活も休みになる。』

「そうか。」

『じゃ、詳しいことが決まったらまた連絡する。またな。』

「またな。」

話が終わったので電話を切る。俺は立ち上がってレイルカの部屋に

向かった。レイルカは今夏休みの宿題を消化中だ。

「レイルカ入るぞ。」

返事を待たずに襖を開けた。部屋にはレイルカだけでなくセルティもいた。

「あ、レイン。どうしたんですか？」

「さつき弾から海に行かないかって誘われてな。お前も行くかどうか聞きにきたんだ。」

「海ですか。いいですね。私も行きます。」

「レイン。海って何？」

セルティが首をかしげて聞いてきた。どうやらセルティは海を知らないようだった。まあそうか。前にいた村は山とかに囲まれてたし、こっちに来てもまともに一人で外も歩いたことないしな。

「え〜と、そうだな。海って言うのはでっかい水溜りみたいなもんだ。」

「水溜り？」

「レイン、それじゃ分かりませんよ。」

「でもなんて言えばいいか分かんねえから。」

「でしたらセルティも一緒に連れて行って見せてあげればいいじゃ

ないですか。」

「そうだけど、大丈夫なのか？」

セルティは重度の人見知りだ。海には当然俺たち以外の人間もいる。なので大勢の人前に出られるかどうか分からない。下手したらずつとどこかに隠れてしまいそうだ。

「私とレインがいますし、駄目なら人の少ないところに行けばいいと思います。」

「うーん、まあいいか。家に置いていくのも可哀想だな。」

「それでいつ行くんですか？」

「それはまだ決まってない。とりあえず準備してたらいいだろ。」

「分かりました。セルティ、明日水着を買いに行きましょう。」

「何で？」

「レインたちと海に行くことになったのでセルティも一緒に連れて行くことになりました。」

「レインが行くなら私も行く。」

セルティがそう言ったのを聞くと少し複雑な気持ちになる。好かれるのはいいんだが少し依存に近いレベルだ。そのうち何とかしないと。



「それじゃ、日時が分かったらいいに来る。」

「はい。」

「分かった。」

そう言っつて部屋から出る。

「あ、そういえば俺って水着持ってたっけ？」

後日俺はレイルカに荷物もちとして連れられることとなった。

「お、やっと来たか。眠そうだな。」

「眠そうじゃなくて眠いんだ。」

時刻は午前七時。俺は柄にもなく早起きをして（レイルカとセルテ  
イに起こされた）駅に来ていた。

「レインか。久しぶりだな。」

「相変わらずだらしないわね。」

「深澄に明日香か。久しぶり。」

二人に挨拶（明日香は罵倒）されたので適当に返した。

「レイルカも久しぶりだな。」

「元気にしてた？」

「二人ともお久しぶりです。」

「て俺にはなしかよ。まあいいや。ところでその子は？」

弾は後ろを指さして聞いてくる。指をさされたセルティ視線が集まる。一気に視線が集まったのでセルティは俺の背中に隠れてしまった。

「あゝ今うちで預かってる親戚の子だな。セルティとりあえず自己紹介だ。」

本当のことは言えないので即席で作ったうそでごまかす。俺に言われたセルティはもじもじとした感じで一歩前に出た。

「セ、セルティア・クローウエルです。よろしく。」

頭を下げて挨拶をした。自己紹介が終わるとまた俺の背中に隠れる。そして少し顔を傾け弾たちを見ている。

「こんな感じで人見知りするけど仲良くしてやってくれ。」

「何だか小動物を思わせる子だな。俺は望月弾だ。よろしくセルティア。」

「私は霧島深澄だ。よろしく。」

「私は九曜明日香よ。よろしくね。」

「よ、よろしく。呼ぶときはセルティでいい。」

弾たちに挨拶されたのでまた頭を下げた。

「でいつの電車に乗るんだ？」

「三十分のやつだ。もう後十分くらいだ。」

「それにしても何でこんなに早く集まったんだ？泊まり込みで行くんだったらもう少しゆっくりしてもいいじゃねえか。」

俺たちは今日から一泊二日の泊まり込みで海に行く。弾はもう少し長くしたかったようだが中学生が保護者もなしに行く旅行などその程度だろう。

「泊まり込みだからだよ。遊んでたら時間なんてすぐになくなっちゃうぜ。」

「そうかい。」

海に行くことでテンションが上がっているのか妙に張り切った感じで返してくる。

「そろそろ電車が来る。ホームに行こう。」

「そんじゃ行くか。」

深澄に言えわれてホームに向かった。その後電車が来ので乗り込んだ。セルティは初めて見る電車にかなり驚いていた。

そして電車に乗って三時間ほどしたころようやく目的地の海へと着いた。

「青い空、青い海、白い砂浜、これぞ夏だ!!」

「騒ぐな。うるさい。」

目的地に着いた俺たちは弾が予約していた旅館に荷物を置いた。水着に着替えてから海へと向かった。女子たちはまだ着替えている。

俺はトランクスタイプのどこでもありそうな水着に半袖のパーカーを羽織って弾がどこからとも無く持ってきたパラソルのしたで寝転んでいた。

「お前は今青春を謳歌している感動がわからないのか!!」

「はいはい良かったな。」

なんか若干おかしくなってきたんじゃないのか? そんなことを考えていると後ろから声がした。

「遅れてすみません。」

そこには水着に着替えたレイルカたちがいた。

明日香はシンプルなビキニタイプの赤い水着を着ていた。深澄はピ  
ンクのビキニとホットパンツを合わせた水着で髪をポニーテールに  
していた。レイルカは水色のビキニで腰のところにパレオを巻いて  
いた。全員スタイルがいいのでかなり似合っていた。

「俺なんか今一番青春してる気がする。」

「アホか。ん？セルティはどうしたんだ？」

「いますよ。セルティ隠れてないで出てきてください。」

レイルカがそういって後ろに隠れていたセルティを出す。セルティ  
は白いワンピースの水着だった。髪もツインテールにしてこちらも  
似合っていた。セルティはこういう服装に慣れていないのか顔を赤  
くしている。

「ほら、レインに感想を聞いてみてください。」

「え？・・・レインどうかな？」

上目遣いで聞いてくる。なんだか誤解されそうな構図だ。

「十分似合ってると思うぜ。」

「ほ、本当？」

「ああ、本当だ。」

「だから大丈夫と言ったでしょう。セルティは可愛いんですから。」

「似合っているのはセルティだけなのか？」

深澄が急に割り込んできた。どことなくムスツとした表情で言ってきた。

「え？あ、ああ三人も似合ってると思うぞ。美人は何着ても似合うんだな。」

「そ、そうか。似合っているか。ならいいぞ。」

深澄は少し顔を赤くして答えた。何がいいのかは分からないが機嫌が直ったならいいだろう。

「全員そろったことだし、遊ぼうぜ。」

「そうね。行きましょう。」

「あ、そうでした。セルティ日焼け止め塗ってませんよね。」

弾と明日香が海に行こうとしたときレイルカが思い出したように咳く。

「日焼け止め？」

「はい。ですので先に行ってください。」

「なんなら俺が塗ろうグハツ！！」

「何言ってるのよ。この変態！！」

「冗談だよ・・・冗談。」

「では先に行ってるぞ。」

「はい。セルティここに寝てください。」

俺たちはそのまま海に行った。数分するとレイルカたちも来た。その後はセルティが海を見て驚いたり弾が明日香にビーチボールを当てられ溺れかけたり深澄がなぜかタコを取っていたりして一時間くらいたった。

「そろそろ昼飯食べないか。」

一時間遊んで疲れてきたのと時刻が一時くらいになったので一度休憩することを提案した。

「そうだな。海の家があったしそこで食べるか。」

「でも財布が旅館に置いたままだが。」

「じゃあお前らは戻って財布取ってこい。俺が場所取りするから。」

「そうか。じゃあ頼んだぜ。」

そういつて弾たちと別れた。俺は疲れた体を動かして海の家に向かった。

「あ。」

「あ。」

しばらく浜辺を歩いて海の家に着くと見知った顔に会った。

「あんたは!」

「はあ。」

「何で私を見てため息つくのよ!」

「いや、別に。何だか気温が高くなったような気がして。」

「どういう意味よ!」

「まあまあ落ち着きいアリサちゃん。」

「そつだよ落ち着きなよアリサ。」

「いらいらはカルシウム不足だぜ。バーニング先輩。」

「バーニングスよ!」

相変わらず元気な人だな。学校ではときどき会ったのは半年ぶりくらいか。

「随分久しぶりやな。どないしたん?」

「海に遊びにきたただけだ。えっと・・・狸神だったけ?」

「ちやうわ!その名前無理やりすぎやろ!」



「こっちも相変わらず関西人だな。ツッコミに切れがある。」

「そっちはえっとフェリシアだったけ？」

「なんか混ざってるよそれ!!」

「主、知り合いですか？」

後ろにいたピンクの髪の女性が八神に話しかける。ていうか主ってメイドかなんかか？

「え？まあそんな感じじゃ。」

するとその女性は俺を見てくる。初対面の人間に睨まれるなんて変な気分だ。

「何だ？」

「いや、何でもない。私はシグナムだ。」

「え〜とレイン・オルハルトだ。」

なんか自己紹介されたのでこっちもつい返してしまった。

「そっちも旅行か。」

「そんなところや。」

「へえ。そんじゃな。」

「相変わらず無愛想やな。」

「別に話す話題とかないし。」

「そやけどこんな美少女が話しかけてんで男やったら嬉しいやろ。」

「自分で言うかそれ。」

「はやて、それはちょっと。」

「……すいません。言ったときうちも恥ずかしかった。」

「そうかい。俺早くいって場所取りしないといけないんだけど。」

「そうなん？引き止めて悪かったな。」

「じゃあな。」

俺はそういって海の家に入った。まさか先輩方に会うとわな。ここで歪みが現れたら面倒なことになりそうだ。

俺は近くにあったテーブル席に座った。ここなら六人くらい座れるだろう。その後十分くらいしたら弾たちが来た。ちなみに弾たちにはさっきのことは話さなかった。いろいろ面倒だと思ったからだ。主に弾とか。

昼飯を食い終わった後三十分くらい休憩をとってまたもとの場所に戻ってきた。今度はスイカ割りをするそうだ。どっから持ってきたんだ？

「じゃあ誰からやる？」

「私からでいいか。」

立候補したのは深澄だった。異論は無かったのでそれでいくことになった。深澄は目隠しをして木の棒を構える。

「行け。よーい、スタート。」

その合図とともに深澄はゆっくり歩き出した。

「右だ。」

「まっすぐよ。」

「左です。」

「上だ。」

「ちょっと待て！最後のおかしいぞ！」

普通のスイカ割りじゃつまらないので少し邪魔をした。深澄は好き勝手の誘導を聞きながら進んでいく。ある程度進んだら止まって木の棒を振り下ろした。

結果は

「ハズレか。」

はずしたので少し残念そうだ。

「じゃあ次はレインどうだ？」

「いや、ここはセルティに任せる。」

「え？私？」

「ああ、こづいづのやったこと無いだろ。」

「うん。じゃあやってみる。」

セルティは目隠しをして木の棒を持つ。なんといつかふらふらして少し危ない。

「よいい、スタート。」

セルティはやはりふらふらした足取りで進んでいった

「がんばれそのままだ。」

「がんばって少し右よ。」

「そこは少し右だ。気をつけてな。」

「がんばってください。セルティ。」

深澄のときとは違いなぜか盛大に応援されている。まああの姿みたら惑わそうとは思わないか。セルティはゆっくり進んでいく。そして木の棒を振り下ろした。

「当たった。」

木の棒は見事スイカを二つに割った。当たったセルティはとても嬉しそうだ。割れたスイカはおいしく頂ました。

「今度はビーチバレーやりましょう。」

スイカを食べた後明日香が提案した。チームわけは男子対女子となつて2対4と数的にこちらが少し不利になつた。

「試合開始。」

まずはこちらからのサーブだ。俺はアンダーサーブで相手コートに入れた。するとそれを深澄が取って、レイルカがトスを上げ、明日香がスパイクを打った。そのボールはまっすぐ弾の顔面に吸い込まれるように当たった。

「ぶへらっ!」

何だかよく分からない悲鳴を上げて弾は倒れた。

「明日香!顔面狙うのは反則だろ!」

「別にそんなルールないわよ。日ごろ恨みよ。」

「おい弾起きろ。次来るぞ。」

レイルカがアンダーサーブを打っていた。それは俺が拾って弾がトスでつなげた。そのままスパイクを打ったが明日香と深澄のブロックに阻まれて相手コートには入らなかった。

「お前らチームワーク良すぎだろ。」

その後三十分ほどで決着はついた。結果は俺たちの惨敗。弾は体のところどころにビーチボールの当たった痕がある。俺は当たりこそしなかったが当たりそうになると避けてしまつて全然点が取れなかった。

そんな感じで午後も遊んでいたら日が暮れ始め時刻は六時となったので今日はもう旅館で休むことにした。ちなみにセルティはビーチバレーのとき完全に蚊帳の外だった。

今俺は旅館の露天風呂に入っている。正直かなり気まずい状況だ。なぜかという俺の隣には例の転生者がいるからだ。

旅館に帰った後俺たちは風呂に入ることになった。そして風呂に入るところで高町たちにあったのだ。どうやら同じ旅館に泊まっていたようだ。それで今肩を並べて風呂に入っているということだ。

幸い俺のことはばれていないようなのでよかった。なるべく関わらないようにしたかったんだが。

「なあ、レイン。」

「何だ。」

弾は少し上を見上げて話かけてくる。何か考えているようだ。

「今俺たちは風呂に入っているよな。」

「そうだな。」

「そして壁の向こうは女湯でしかも女子が入っている。」

「……ああ。」

「ならやることは一つ!」

「警察に通報か?」

「違うわ! 覗きだよ! っていうか何気にさらっと犯罪者扱いするな!」

「覗きするって言うてる時点で犯罪者でいいと思うが。」

何を言い出すかと思えば、予想はしていたがここまでストレートに言うてくるとはしかも大声で。

「考えてみる。今頃向こうでは女子たちがくんずほぐれつしているかもしてないんだぞ。ここで覗かなかつたら男じゃねえ!!」

「確かにそれはそうかもしれない。いやここで覗かなかつたなむしる彼女たちに失礼だ!!」

その声に反応したのは俺ではなく黒い髪した転生者だった。名前は長瀬和輝とかいっただけ。

「分かってくれるか、先輩!!」

「おう、同士よ!!」

弾と長瀬は立ち上がって手を握った。なんでだろう馬鹿が見える。

「レインお前も来い。」

「行くか馬鹿。」

「なぜだ!? 向こうにはレイルカたちだけでなくあの高町先輩たちもいるんだぞ!!」

「俺はまだ社会的に死にたくないからな。」

「このリア充め!! 行きましよう先輩!!」

「ああ、行こう。」

「「いざ、アガルタ理想郷へ!!」」



そういうと二人の馬鹿は壁に向かいよじ登り始めた。そこまでして覗きたいのか？登っている姿はなんとも滑稽だった。そして一番上に手を掛け顔を出したとき二人の顔面に桶が飛んできた。桶が当たった二人はそのまま露天風呂にでかい水柱を上げて落ちた。

「あんたたちの会話まるぎこえなのよ！」

「乙女の裸はそない安ないで！」

どうやら桶を投げたのは彼女らのようだ。そりゃ結構声出してもんな。聞こえるだろう。

「「はあ。」」

俺と転生者の波多野椋だった。ため息が重なったので俺は波多野を見る。こちらの視線に気づくと愛想笑いを浮かべた。とりあえず俺は立ち上がって馬鹿を回収することにした。

「君も大変だね。」

突然話しかけられた。俺の行動を見てか波多野も馬鹿を回収するようだ。

「別にたいしたことじゃない。」

「なのはたちから聞いたとうりの人だな君は。」

「どんな人だ？」

「歳を誤魔化している中学生だって。」

「俺は正真正銘十四歳だ。」

「あんまり説得力ないよ。それ。」

「そうかい。別にどうでもいいけど。じゃあな。」

俺は一足先に風呂を出ることにした。

「仁。手伝ってくれ。」

そう呼ばれてもう一人の転生者の一条仁は動いた。全然しゃべらなかつたなあいつ。

そういつて俺は馬鹿を引きずって脱衣所に向かった。

風呂から出たあと俺たちは明日香たちに呼び出された。理由は説教だ。覗こうとしたのは弾だけだったのだがなぜか俺にも流れ弾が飛んできた。そこで三十分くらい正座させられたあと晩飯を食った。そして今日は疲れたからそれぞれの部屋で休むことになった。部屋に入って一時間くらいしたら十時になったので寝ることにしたのだが

「はあ。」

俺は今崖の上にいる。時刻は午前一時。なぜそんなところにいるかというところ夜中寝ているときに歪みの反応があったからだ。しかもこの近くに。

「何でこんなタイミング悪く出てくるかな。」

『知りませんよ、そんなこと。それより良かったんですか？』

「何が？」

『レイル力様をつれてこなくて。』

「別にいいだろ。寝てるのにわざわざ起こすのは気が引けるしな。」

今回は俺一人だ。場所も近かったし問題ないと思ったからだ。

「とつとと終わらせるか。」

とりあえず歪みの反応を追って進む。十分くらいしたら歪みを見つけた。歪みは巨大化したカラスだった。木の上からこちらを見下ろしている。

「ん？こいつは。」

その歪みをよく見てみると体が炎のように揺らめいていた。どうやらこいつは核を持っていないようだ。核を持っているやつは形がはつきりしているからだ。

「今回は早く済みそうだ。」

そう言いながら俺はエリスを展開して刀を出す。すると向こうもこちらに突っ込んできた。俺はそれを横に避けてかわす。歪みはそのまま上昇して黒い羽を放ってきた。俺は足場を作り上に跳ぶ。そしてそのまま切りかかった。だが避けられた。

「結構速いな。」

空中じゃ上手くとらえられない。やっぱり動きとめない。歪みは俺に体当たりをしてきた。ぎりぎりまで引き付けて空中の足場から飛び降りた。

「アイシクル・チェイン」

飛び降りたときに魔法の鎖を発動させ歪みに巻きつかせた。鎖は巻きついたところから凍りだし体の自由を奪った。俺は鎖を思いっきり引っ張って歪みを地面に叩き付けた。

エリスに器の力を付与させ、落下する力を利用してそのまま歪みにエリスを突き刺した。突き刺された歪みは黒い霧となって消えた。

「お仕事終了〜じゃとっとと帰って寝よ。」

『マスター誰かがこちらに近づいてきます。』

「え？マジか？」

『はい。それも二つです。』

そういえば旅館には波多野たちがいたな。その中の誰かがこの戦鬪に気づいたのか。

「どれくらいで着きそうだ。」

『もう後十秒ほどで。』

「早っ！！とりあえず隠れよう。」

俺は近くの茂みに隠れた。そして間もなくして二人の魔導師が来た。

「ここか、シグナム。魔力の反応があつたのは？」

「ああそうだ。」

現れたのは昼間にあつたピンクの髪的女性と赤い髪をした少女だつた。昼間八神を主つて呼んでたから多分あいつらは闇の書のプロگرام。八神の守護騎士だろう。

「にしても本当に反応なんてあつたのか？」

「かすかにだがレヴァンティンが確認したのだ。放置するわけにもいかんだろう。」

「はいはい。でどうすんだ？」

「少しこの辺りを探索してみよう。」

てそんなことしたらばれるじゃねえか。動揺したことによって体が少し動き茂みが揺れて音を出してしまった。

「誰だ！！」

音に反応した二人は武器を構えた。

「そこにいるのは誰だ。出て来い。」

「……」

「私たちは管理局員だ。出てきてここで何をやっていたか答えてもらおう。」

「……」

「答えないか。ならば実力行使にうつらせてもらおう!!」

「おいおいいくらなんでもそれはないんじゃないか?」

俺が応答したことによって二人の動きが止まる。襲い掛かれそうだったのでとりあえず問答に答えることにした。姿は隠したままだ。

「もう一度聞く。ここで何をしていた?」

「別になにも。」

「なら貴様は何者だ?」

「さあ?何者でしょう。」

「てめえふざけてんのか!!」

痺れを切らしらのか少女が怒鳴ってきた。

「別にそんなつもりはないけど。」

「じゃあ質問に答えろ!」

「わざわざ俺があんたちの質問に答える義理もないだろう。」

そういうと少女は押し黙った。

「だがこちらはそういうわけにもいかないんだ。どうしても言わないというなら貴様を拘束する。」

「やれやれ物騒なものいいだな。じゃあ一つ教えてやる。」

「なんだ?」

「ここで起きたことはお前たちにとって知る必要の無いことで知っても意味の無いことだ。」

「どういうことだ?」

「さあな。自分で考えな!」

俺は二人に向かってスフィアを放つ。スフィアは俺と二人の間をくらくらにいくと眩く光りだした。もしものときのために作っておいた魔法だ。

「な!」

「くっ!」

光が目くらましになっていて間俺はウィンド・ギアで加速し全速力で逃げた。

「はぁ、疲れた。」

俺は今浜辺に座り込んでいる。ウィンド・ギアは体を強制的に速くしているので使ったあと必ず筋肉痛になる。

「少し休むか。」

旅館に戻る前に一休みすることにした。俺は寝転んで空を見上げた。雲ひとつ無い綺麗な空だ。多くの星がありどこまでも広がっている。

「おい。」

「んあ？」

空を見上げていると誰かに声をかけられた。起き上がって確認してみるとさっきの魔導師がいた。

「お前こんなところで何やってんだ？」

「何って言われてもなあ。寝転んでただけなんだ。」



「何でこんな時間に？」

「それがさああんま寝つけなくてね。ちょっと体動かそうと思ったから散歩してたんだよ。」

「そうか。」

「あなたたちは何してたんだ？」

「あ、あたしたちか？」

少女は急に慌てだした。まあ変な魔法使い追ってましたなんて言えないよな。

「私たちも散歩だ。」

「へえ、でも女性があんまり夜に出歩くもんじゃないぜ。」

「なぜだ？」

「危ないからだ。特にあなたみたいな美人さんとかはな。」

「なっ！？いきなり何を！！」

シグナムは少し頬を赤く染めて言うてくる。どうやらこのてのことは言われなれていないようだ。

「別に本当のことだろ。じゃあ俺は戻るからあなたたちもなるべく早く戻るんだぞ。」

立ち上がって旅館へと向かった。とりあえずばれてはいなかったよ  
うだ。これからはもう少し気をつけるか。そんなことを考えながら  
俺は旅館へと戻った

## 願い星

昔、昔あるところで一つの星が生まれました。

星はそれはそれは綺麗な姿をしていました。

星には願いを叶える力がありました。

そして星はある者から願いを叶えてほしいと頼られました。

その者はうそつきでした。

うそつきは願いを叶えるための代償として自分の体を差し出しました。

けれど星はそれを拒みました。

その願いを叶えようとうそつきはいなくなってしまうからです。

星はそれが嫌だったのです。

なぜらなうそつきは星を生み出した人だから。

うそつきは自分と一緒にいてくれた人だから。

うそつきは自分の好きな人だから。

それでもうそつきは願いを叶えてくれと頼みました。

そうしないと大切なものがすべて壊れてしまうから。

星は聞きました。なぜそこまでするのか。

うそつきは答えました。僕にはこんなことしかできないから。これで大切なものが守れるならそれでいいんだ。

星はその願いを叶えました。

酷く悲しい顔で、涙を流しながら祈るように。

体を失ったうそつきは大切なものを守るために眠りにつきました。

それはとても長く、孤独で、死ねない永久の眠りでした。

そして星もうそつきの眠った場所にいつづけました。

もう二度と帰らないうそつきに向けて祈るように、願うように。

ずっと、ずっといつづけました。

いつしか星はこう呼ばれるようになりました。

孤独で綺麗な願い星と。

「それでは新生徒会長からの挨拶です。」

司会にそういわれると黒髪の生徒が壇上上がった。上がったといった生徒はよく見覚えのあるやつだった。その生徒は深澄だった。深澄は毅然とした態度でマイクの前に立った。深澄はこういった行事に慣れているらしく全然緊張していなかった。

「私は新しく生徒会長に就任した霧島深澄だ。」

深澄は一息置いてから演説を開始した。

「それにしてもすげえな。」

「そうだな。」

「学級委員の次は生徒会長になるとは。」

「俺たちには到底真似出来ないな。」

それに加えて深澄は薙刀部の部長もやっているらしい。このままいくと最終的には総理大臣とか目指しそうな勢いだ。よくもまあがんばれるものだ。

「そういえばセルティとかどうしてる?」

「え?どうしたいきなり?」

「いやなんか気になってさ。」

「元気でやってるぜ。またみんなで遊びたいとかも言ってたしな。」  
「そうか。」

確かにセルティはあのような態度をとっているから心配されるのは頷ける。けどこんなこと聞いてくるなんて珍しいなと思った。まあただの興味本位だろうと思って深くは追求しなかった。

「はあ。」

「どうしたんだよ。急にため息ついて。」

「いやちよつとな。深澄が生徒会長になったから面倒なことが増えそうだって。」

「生徒会長になったからって流石にそれは……」

「こらその白髪とサッカー部人の話をちゃんと聞け!!」  
いきなり壇上から大声で注意された。その所為で俺たちの周りにいるやつらから多くの視線が向けられた。

「無くはなかったな。」

「だろ。これからこんな毎回やられたらたまないぜ。」

「「はあ。」」

俺と弾は二人揃って大きなため息をついた。

「では諸君らはあの者たちのようなことはないように私の話は以上だ。」

追い討ちをかけるように深澄が言ってくる。そして演説は終わった。俺と弾は学校の不名誉な有名人となってしまうた。

転移魔法で来た場所は荒野だった。ところどころに岩があって地平線まで見渡せるほど何も無い荒野だった。

「殺風景なところだな。」

「そうですね。」

また歪みが現れたので俺たちはそれを退治しにやってきた。

「それにしても大変でしたね。今日は。」

「え、何が？」

「朝のことですよ。」

「ああ、あれね。別にきにしてないから。」

「そうですか。」

レイルカはなぜだか分からないが少し落ち込んだような顔をした。だがその顔はすぐにいつもの柔らかい表情になった。どうやら思い過ごしのようなようだ。

『マスター何かしたんですか？』

「何もしてねえよ。」

『つまりらないですね。』

「ん？」

ふと地面に何か刺さっているのを見つけた。近寄ってそれを引き抜いた。

「レイン、それは何ですか？」

『剣、みたいですね。』

それは長さ七十センチくらいの剣だった。剣は刺さってから相当時間が経っているのか錆きっていてぼろぼろだった。

「どうして剣なんか刺さっていたんでしょう。」

「誰かの置き忘れってことはないよな。ここ無人世界だろ。」

「はい。そうです。」



少し周りを見渡してみる。夜なので目を凝らして見てみた。すると今度は少し影のようなものを見つけた。それに近づいていった。

「今度は何を見つげんですか？」

「頭蓋骨だ。」

『これまた珍しい。』

「え！？きゃあー！！」

『大丈夫か主よ！！』

俺は落ちていたものを拾ってレイルカに見せた。それを見たらレイルカは慌てて後ろに下がって尻餅をついた。まあ白骨化した人の頭見せられたら誰だってそうなるだろう。

「なんでそんなものがあるんですか！！」

「さあな。考えられることとしては誰かかここで戦って負けた。そして死体が白骨化してここに残った。剣の錆具合からみると何十年も前だと思っぜ。」

拾った頭蓋骨を真正面から見ながら言った。でもこんな何もなかったところで戦ったとは思えない。何年前には何かあったのか、それともともと何もなかったか。後者の場合だとすると広い場所を必要とする戦いがあったということになる。その戦いの所為でここは人がいなくなつた。

「となると戦争か。」

戦争が起こったとすると他にも遺体とか転がってそうだな。

「え、何ですか？」

「いや何でもない。」

頭蓋骨を元の場所に戻して立ち上がった。今更俺がそんなことを解き明かしたって意味は無い。

「あのレインは平気なんですか？」

「何が？」

「その人の遺体を見ても全然驚いていないようでしたから。」

「取って食われるわけじゃないんだから驚く必要もないだろ。」

「そういう問題じゃないと思います。」

『マスターは頭のネジが抜けてますからねえ。』

「設計ミスのお前には言われたくない。」

『どつという意味ですか！』

「そのままの意味だ。……どつやら向こうから来てくれたみたいだぜ。」

俺は視線を現れたものに向ける。そこには漆黒の巨大な蜘蛛がいた。

体長は四メートルはあるだろう。

「レイル力が苦手そうなやつだな。」

「い、言わなくていいです。」

「キシヤアア!!!」

歪みはこちらに向かって黒い糸を放ってきた。糸といっても太さは十センチほどある。俺たちは左右に分かれて回避する。黒い糸は地面を抉った。

「当たったらひとたまりもねえな。」

俺はすぐさま歪みに近づいて切りかかった、だが歪みはその巨体では考えられないほど大きく跳躍して回避した。

「あれで飛べるのかよ。」

歪みは地面を振動させて着地した。するとそこに炎の矢が飛んできて歪みの体を焼いた。空でレイル力が撃った矢だ。炎を振り払おうと暴れる歪みにすぐさま駆け出して器の力を付与したエリスで切りつけた。脚を一本切り取った。

「キシヤ!?!」

脚を切られた歪みは俺たちから距離をとった。迂闊に近づくのはまづいと思っただのか威嚇してこちらを見てくる。すると歪みは腹を高く上げ体勢を低くした。

「何する気だ？」

歪みの腹が蠢きだし次の瞬間には腹の中から小さい蜘蛛がうじゃうじゃと出てきた。十センチくらいの蜘蛛が百匹はいるだろう。

「きゃあああああ！！」

叫び声をあげたのはレイルカだ。蜘蛛の産卵を見て耐えられなくなったのだろう。

そうこうしているうちに蜘蛛の大群が俺に向かってきた。レイルカほどではないがこれを見ると気持ち悪く思ってしまう。

「くそうつとしい！！！」

俺は飛びかかってきた蜘蛛を切る。だが切っても切っても蜘蛛の数は減らずにまた襲い掛かってくる。これじゃ拉致が空かない。

「レイルカ！気持ち悪がってないでこいつら一掃するのを手伝ってくれ！」

「は、はい。」

レイルカは弓を空に向けて矢を放った。その矢はある程度進むと球体となつてとどまった。

「フィアンマ・ダストアロー！」

その球体から無数の矢が蜘蛛に向かって放たれた。数は蜘蛛同様に百発くらいある。放たれた矢は次々と蜘蛛に刺さって動きを止めて

いく。全ての矢が放たれたときには全ての蜘蛛に矢が刺さっていた。

「エリス、カートリッジロード！」

『了解！』

その言葉とともに刀身についているマガジンが回る。そして一気に魔力があふれ出す。

「氷凰一閃！！」

俺はエリスを地面に向けて思いっきり叩きつけた。叩きつけた場所からみるみる凍っていき十メートルほどの白い氷柱を作り出した。その中には地面に貼り付けられていた蜘蛛が全て巻き込まれていた。氷柱は重力に引かれて崩れた。器の力も付与していたので蜘蛛も一緒に消えた。

「後はあいつだけか。」

本体である歪みに視線を向ける。歪みは腹が無くなったので随分小さくなった。顔と胴体は元から小さかったので今は全長一メートルくらいだ。なぜかむちゃくちゃ弱く見える。

「キシヤ！」

「あ、待て！」

このまま戦っても勝ち目が無いと思ったのか歪みは大きく後ろに向かって跳躍して逃走した。ここまで来て逃げられるわけには行かないので俺も追いかける。だが体が小さくなった分跳躍する距離が増

えて普通に走つてら全然追いつけない。

「面倒だな、全く。ウィンド・ギア」

俺の体が爆発的に加速する。そして歪みの着地するところに先回りしてエリスを構える。降りてきたと同時に止めを刺そうと思ったのだ。

そして歪みが着地し、切りかかろうとしたときいきなり地面が陥没した。

「うわっ!!何だ!!」

どうやら先ほど俺が立っていた場所は下が空洞になっていてそれが歪みの重さと落ちてきた衝撃に耐えられず崩れたらしい。

「レイン!!」

空を飛んでいたレイルカの姿がどんどん遠ざかっていく。俺はすぐに着地の態勢を取ろうとしたがスレより先に背中に衝撃が走った。

「かはっ!」

中はそれほど深くはなかったようだ。すぐに起き上がろうとしたが落ちたときに頭も打ったようでまともに体が動かせなかった。

一方歪みは七本ある脚で見事に着地してすぐに奥のほうに消えていった。

「くそ、早く追わねえと。」

無理やり体に言うことを聞かせて起き上がる。だが立ち上がったら頭がくらくらしらして体が倒れそうになる。が倒れそうになると誰かが体を支えてくれた。

「大丈夫ですか。レイン。」

「レイルカか。何とか大丈夫だ。すぐに歪みを追っぞ。」

そういつて俺が歩きだそうとするとレイルカが強く腕を握って止めてきた。

「駄目です。まずはあなたの回復をします。」

「そんなことしてたら逃げられるだろ。」

「この状態でいつてもまともに戦えないでしょう。とりあえず座ってください。」

レイルカは肩を掴んで強引に俺を座らせた。レイルカの言い分もごもつともだったので素直に従うことにした。にしてもさっきの物言い若干必死そうにしていたのは気のせいか？レイルカは黙って俺に回復魔法をかけていた。

レイルカの治療は十分ほどで終わった。もともと酷い怪我ではなかったので早く終わったのだらう。まだ少しフラつくが問題はない。

「さて、そろそろ探しますか。」

俺は器の力を使って歪みを探した。すると結構近くに反応があった。

「てっきり逃げたかと思っただぜ。」

「見つけたんですか？」

「ああ、すぐ近くにいた。」

歪みの反応を確かめながら進んでいく。さきほどから思っていたことだがここはどうやら遺跡のようだ。ところどころに柱があったし、壁に模様のようなものも刻まれていた。その中には魔方陣に似たものもあったので何か儀式でも行う場所だったのかもしれない。

「にしてもでかいな。」

「そうですね。」

「この世界にいたやつは何がしたかったんだらうな。」

「これだけの遺跡を作ったんですからただ事ではないでしょうね。」

「確かに・・・お、ここだ。」

奥に進んでいう通路が終わった突き当たりのところに壊された扉があった。多分歪みが入るときにできたのだらう。扉は十メートル



ルはあった。

「エリス。」

俺はエリスを展開して中に入った。中に入るとそこは先ほどの通路の天井より高い広間となっていた。天井までは三十メートルくらいはあるだろう。奥行きもかなりある。そして部屋の中には祭壇があった。

「何だここは？」

階段を登ってその場所に行ってみるとそこには黒い石となった歪みがあった。

「歪みが石になってる。どういうことだ？」

「え！？そんなはずありません。レインはとどめを刺していないのでしょうか？」

「ああ、力尽きたのか。」

「弱っていたとはいえ歪みが力尽きることはありません。」

少なくとも俺がここに落ちてきたときはまだ倒せていなかった。歪みはここに逃げてきたとき何か別の原因で倒された。となるとここには歪みを倒せる何かがあるってことになる。

「この模様……」

俺は下にあった模様を見てみた。その模様は魔方陣だった。幾重に

も描かれた魔方陣。魔方陣の中心部分には扉のようなものもあった。

「ここから器にた力を感じる。」

「それってどういう!？」

レイルカの言葉は突然きた攻撃によって遮られる。鎖の先に刃がついた武器が無数に飛んできた。俺はレイルカを掴んで距離をとった。武器は地面に刺さったがすぐに奥へと引き込まれた。

「今日は随分と招いていない客が来るな。」

鎖が引き抜かれた方向から女の声がした。明かりがついていない所為で姿は見えない。

「誰だ。」

「不法侵入者に答えると思うか。」

「まるでここはお前の家見たいな言い方だな。」

「そのようなものさ。お前たちこそなんだ。遺跡荒らしか？」

「黒い化け物追っかけてたらここに来たんだ。化け物はあるがやっつたのか？」

「そうだ、マナーのなっていない客だったのな。早々に出てつてもらったよ。」

こつこつという足音が聞こえ声の主が姿を現した。銀色の髪をして

いて目つきは鋭く赤い瞳をしている。すらりとした黒いドレスを着ていて良く似合っている美女だった。

「お前は!？」

女は俺を見てなぜか驚いた。だがほんの一瞬だけですぐに無表情になった。

「あんたは何者なんだ?なぜ歪みを倒せる?」

「そうか。やはりお前は・・・」

「聞いているのか!？」

次の瞬間女は俺の目の前に移動していた。そして先ほどの武器が虚空から伸びてきて俺の体を拘束する。

「レイン!!きゃあ!!」

隣にいたレイルカは何かによって吹き飛ばされた。

「こつも似ているとはな。」

女はどこか寂しげな顔で言ってきた。

「似てるって何だよ。」

「こちらの話だ。それより私が何者なのか知りたいのだろう?」

女は俺の顔を両手で掴んで引き寄せた。

「何する!？」

俺の言葉は強引に遮られた。なぜなら女が俺にキスをしてきたからだ。そして俺の頭にある映像が流れた。

「お、目が覚めた？僕が誰だか分かる？」

「分からない。」

これはなんだ？どこかの部屋で男女が話していた。一方は俺に攻撃をしてきた女だった。そして男の顔はなぜか俺にそっくりだった。

「そりゃそうか。そうだねえ僕は君を生み出した人だよ。」

「生み出した？」

「そう、親みたいなものだよ。て、言っても分からないか。まあこれから色々覚えていくといいよ。」

男は先ほどから笑顔を崩さずに話している。何がそんなに嬉しいんだ？

「あ、名前も決めなくちゃね。家族になるんだから。」

「家族？」

「そうだよ。だからよろしくね。そうだな、君の名前は・・・エフィア。エフィアでどう？」

「・・・それでいい。」

「分かった。よろしくエフィア。」

そこで一度映像が途切れてノイズが入ったようになる。しばらくするとまた映像が映し出された。移された場所は先ほどの遺跡の祭壇だった。

「なぜお前はそこまでするんだ。」

エフィアの質問に男は力なく笑った。男は先ほどとは違って髪の色が黒になっていた。

「またそうやって誤魔化す。ちゃんと答える！！」

「ごめんねエフィア。でもそうしないといけないんだ。」

「なぜお前なんだ。」

「僕以外誰も気づかなかったからだよ。いや知ってしまったからかな。だから僕はやらなければいけないんだ。」

「どうしてお前だけが傷つくんだ！！そんなのおかしい！！」

とうとうエフィアは男にすぎるように泣き出した。

「僕にはこんなことしかできないから。これで大切なものが守れるならそれでいい。だから僕の願いを叶えてくれないか？エフィア。もう時間がないんだ。」

「・・・分かった。」

「ありがとう。辛い事を押し付けてごめんね。」

「お前の役に立てるならいい。」

「そう。僕は本当にいい家族を持ったよ。」

そういうと男は祭壇の中央にいった。そしてエフィアに最後の言葉を継げた。

「今までありがとう。エフィア。」

その言葉を聞くとエフィアはさらに泣き出した。その場に崩れそうになるが耐えて立った。そして男の願いを叶えた。

「すまない。」

アストール。」

そこで映像は完全に途切れた。

俺の意識が現実へと戻される。それと同時にエフィアも唇を離す。

「おい今のは!?!」

さきほどのことを聞こうとしたらエフィアの指で口を押さえられた。

「今は私の記憶の一部だ。」

「何でそんなもの見せた。」

「何者か知りたかったのだろう? 教えてやったんだ感謝しろ。」

「いやむしろ余計分からなくなったんだが。」

「なぜだ? とつ」

すると右側から一つの閃光が飛んできた。

「レ、レインからは、離れなさい!?!」

撃つたのはレイルカで若干顔が赤く呂律も回っていないかった。

「何だ男を取られて嫉妬したか?」

「ち、違います!?!」

「説得力が無いぞ。まあいい今回はここまでしておこう。」

そうとうとエフィア転移魔法を発動させた。俺たちに。

「ちょっと待て。まだ聞きたいことが。」

「世界の終焉が始まるときまたここにきなさい。お前に全てを教え  
てやる。このエフィア・プリフィオニスがな。」

「どづいづことだ!」

「ではな。ここにこないことを祈っている。」

俺たちの体は光に包まれてエフィアの姿は見えなくなった。

「おわ!?!」

「きゃ!?!」

転移させられたのはどこかの森の中だった。

「レイルカ早くどいてくれ。」

「す、すみません!?!」

地面より高い位置に転移したのでレイルカは俺の上に落ちてきた。

「ここはどことだ?」



『どつやら地球みたいですよ。』

「マジか。ていうか何であいつ俺たちが地球から来たって知ってんだ？しかもご丁寧に歪みも一緒に送ってるし。」

少し離れた場所には黒い石となった歪みがあった。とりあえず浄化することにした。

「レイルカちよつと聞きたいんだが。」

「何ですか？」

「俺の中にある器はお前たちが創ったものじゃないのか？」

「・・・はい。そのとおりです。」

「誰が創ったんだ？」

「それは分かりません。私はただ創られたということと使い方を知っているだけですから。」

となると手がかりを知っているのはやっぱりあいつとあの男か。

「器が創られたのってどれくらい前だ？」

「そうですねえ、百年くらい前でしょうか。」

「な！百年！？」

「は、はい。」

じゃあ、あいつの記憶は百年前のもの。となるとあいつは人間じゃないのか？それに世界の終焉が始まるときって……

「あゝもう。わけ分かんねえ。」

「どうしたんですか？」

「よし。今日はもう帰って寝る。」

「ええ!?!」

もう考えるのが面倒になったので今日は休むことにした。今日一日で謎が増えすぎだ全く。

「あ、あのレイン!」

レイルカが珍しく声を張って話しかけてきた。

「どうした。」

「えっと、その。」

「何だよ。」

レイルカは顔をなぜか赤くしてモジモジとしている。何か言いたそうな感じで目をきよるきよるとしている。

「レ、レインはそのキ、キスされたとき嬉しかったですか？」

「え？」

キス？キスってさっきのあれか。

「いやどうって言われても何も思わなかったけど。」

実際それどころではなかったしな。

「レインはあついうことされても何も思わないんですか？」

「まあ好きでもないやつにさても嬉しくはないな。」

「好きな人にされると嬉しいんですか？」

「そう・・・なんじゃねえの。」

「そうですか。」

本当にどうしたんだ。さっきからおかしいぞ。

「もういいだろ。とっとと帰ろっぜ。」

「はい。」

レイルカは嬉しそうに頷いた。質問の意味は分からないままだった。

おまけ

「レインちよつといい。」

「何だセルティ？」

「私とキスして。」

「な、何を言ってるんだ？」

「レイルカから聞いた。レインは女の人とキスしたって。だから私ともして。」

「セルティ。どうしてそういうふうになるのか分からないんだが。」

「キスは好きな人とするって言うてから。」

「間違ってるけど、なんか間違ってるお前。」

「だからして。」

「もう何この状況。」

願い星（後書き）

今回は謎が多い話になりました。

この謎はおいおい解き明かしていきます。

## すれ違いのバレンタイン

「寒いな。」

「もう二月ですからね。」

俺は腕を擦りながら学校への通学路を歩く。コートにマフラー、手袋という防寒装備をしてもあまり効果がないように思える。

横目にレイルカを見る。レイルカも俺同様の防寒対策をしている。ときどき思うのだが女子は冬にスカートをはいていて寒くはないのだろうか？男子の視点から見るととても寒そうに思える。

「なあレイルカ。お前って……」

「スカートだからといって寒いわけではありませんよ。」

「……なんで分かったの？」

「結構長い付き合いなんですからそれくらい分かりますよ。それと去年も言っていましたよ。」

「そうだったけ？」

「そうです。」

よく覚えてるな。レイルカの記憶力に感心する。

そんな他愛もない話をしながら登校するのが二年前からの定番とな

っている。そしてもう一つここ最近で定番となりつつあるものがあった。

それはレイルカが登校して下駄箱を開けたときに現れた。

パカッ、カサ

「……」

「お、今日も入ってるな。」

中に入っていたものは一般的学生がある特定の異性に対し自らの気持ちを伝えるために用いるもの。現代ではあまり用いられる回数は少ないがもらうと嬉しいものだ。そう、ラブレターだ。

「今日は……五通か。にしても毎朝毎朝すごいもんだな。」

「からかわないください。お返事するの大変なんですよ。」

レイルカは面倒くさそうにため息をついた。レイルカがラブレターを貰ったのはこれが初めてではない。一年のころからときどき貰ってはいたが二年になってからは顔が広がったのかさらに貰うようになった。

「最初から断るつもりなんだから返事なんてしなくていいじゃねえか。」

「そうはいきませんよ。気持ちを込めて書いてくれたんですからちやんとお返事しないと。」

「律儀だな。」

流石もと天使というところか。

「でも断るんだろ？」

「それは・・・そうですが。」

「面と向かってフラれたら結構傷つくもんだぜ。」

「うっ！」

「まあいいけど。」

「なんでこんなに届くのでしょうか？」

周囲の人間が聞いたなら嫌味にしか聞こえない台詞を言っている。本人は自分の容姿がいいとは思っていないようだ。

「バレンタインが近いからだろうな。」

「バレンタイン、ですか。」

レイルカは言った意味があまり分かっていないようだ。

「ようするにバレンタインの日に可愛い彼女からチョコ貰ってイチヤイチャして過ごしたいってのが男子の心境だ。だから今男子どもは毎日お前に撃墜されてるってことだ。」

「そ、そういうこと言わないでください。」



レイルカは気まずげな顔をした。一応断る側にも罪悪感あるのか。

「レイン何かいい方法はないですか？」

「相手を傷つけない断り方か。」

「そつちじゃないです!」

レイルカは自分が持っているラブレターを指さす。どうやらこれを減らす方法を考えると言いたいようだ。

「そうだな、その手紙を全部校内放送で読んでから断りの返事を言つて相手にとつともない喪失感を与える。」

「嫌です!!確かに減りそうですけど相手が可哀想です!!」

「じゃあ、本人の目の前でその手紙を破り捨てる。」

「さつきより酷くなってるじゃないですか!!」

俺の出した案をことごとく拒否するレイルカ。何がいけないんだ？

「だったらいつそのこと彼氏作つたらいいじゃねえか。そしたら全部解決だ。」

「え!?!か、彼氏ですか・・・」

レイルカはさつきと打って変わって激しくうろたえ始めた。突然まともな意見を言われて驚いているのだろう。

「でも私たちは歪みを退治しなければならぬじゃないですか。」

「別にいいんじゃないの。彼氏作ってたって。」

「え？」

レイルカは今度はどうしてかという視線を送ってくる。

「俺も少しは強くなってるし、一人で対処できないってわけじゃない。だったらわざわざ二人で出向く必要もないだろ。」

「……」

「だからお前が……ってどうしたレイルカ？」

レイルカは急に俯いて黙り込んでいた。気のせいか若干肩が震えている。

「……バカ……」

「え？」

「レイルのバカ!!」

「うわっ!!」

突然怒鳴られた。鼓膜が破れるかと思った。レイルカは走って階段を登っていった。どうやら俺はレイルカを怒らせてしまったようだ。けど何で怒ったんだあいつ？俺はレイルカが怒った理由が全く分かん

らなかった。

数日後・・・

「レインちよつと来なさい。」

「明日香それに深澄もどうかしたか？」

「いいから。」

俺は強引に席を立たされ教室の外に連れ出された。そのまま階段付近まで行くと明日香が止まった。ついでに先ほどまで話していた弾も一緒についてきた。何を聞かれるのかは予想つくけど。

「あんたレイルカに何したの？」

やっぱりか。

「俺もそれ気になってた。」

「どっちなの？」

明日香は若干怒ったような雰囲気聞いてくる。何か勘違いしてるような気もする。

「したって言えばしなのかな。」

「あんたねえ！」

「どづいつことだ？」

俺の解答を不思議に思ったのか深澄が割り込んできた。

「いや俺にもさっぱりなんだ。」

「詳しく聞かせてくれないか。」

とりあえず数日前の朝のことを話した。歪みのところは伏せてだが。

「なるほど。だから言ったじゃないか明日香。レインがそんなことするはずないと。」

「だってレイルカがあんな風に落ち込むなんてレインに何かされたんじゃないかって。」

「お前らは何を想像してたんだ？」

やはり俺は二人にあらぬ誤解をされていたようだった。

「で、レイルカが怒ってる理由なんだと思う？」

「やはり彼氏を作れと言ったのがいけないんじゃないか？」

「何でだよ。」

「「「はあ」「」」

「何で全員ため息をつくんだ？」

「何でってレインだしな。」

「レインだしね。」

「レインだからな。」

なんだこのものすごく馬鹿にされている感じは。

「とりあえず原因はどうでもいいんだよ。仲直りとかしたのか？」

「いやまだだ。」

「謝ってもないの？」

「ああ。」

「呆れた。悪いのは分かっているのに謝ろうともしないで。」

「いや俺も謝ろうとしたんだけど何に謝ったらいいか分からないし、それにレイルカが避けるから話を聞いてもらえないんだよ。」

そうここ数日レイルカは俺とほとんど別行動を取っている。学校に行くときは俺より早く出て、着いても全く関わろうしない。帰るときも先に帰ってしまう。家にいるときも顔を会わせるくらいはするが向こうは無視を決め込んでいる。そんなこんなで俺はレイルカと

話す機会がほとんどなかったのだ。

「レイルカも徹底してるはね。」

「ああ、おとなしいやつほど怒ると大変なのは本当だったんだな。」

そんなことを話していると予鈴がなった。結構話し込んでいたようだ。

「もう時間か。」

「戻りましょ深澄。レインとりあえずあんたはレイルカに謝りなさい。」

「何を？」

「何でもよ！いい、分かった？」

「わ、分かった。」

別に怒鳴りながら言わなくてもいいだろう。

「俺たちも戻ろうぜ。」

「そつだな。」

結局なんの進展も無いままだった。それと昼休みが潰れた所為で昼飯を食い損ねた。

「はあ。」

俺は自分の部屋の布団に寝転びながらため息をついた。めっちゃくちゃ疲れた。

話が終わった後俺は明日香に言われたとおりレイルカに謝ろうとした。放課後一緒に帰ろうとしても一人で先に帰ってしまったし、家においても目をあわせると睨んでくる。睨んでくる自体は怖くないのだが無言で話すことはないという雰囲気を出されてしまっているのでもういえなくなった。

「俺本当に何したんだろ？」

正直レイルカがここまで起こっているとは思わなかった。二、三日したら機嫌は直るとおもっていたのだがその気配はない。

「レイン入っていい？」

突然部屋の外から声がした。レイルカはありえないのでセルティだろ。

「いいぜ。」

そう言うと襖が開けられた。案の定そこにいたのはセルティだった。

「どうした？」

「ちょっとレインに聞きたいことがあったから。」

「なんだ？」

「レインはレイルカと喧嘩してるの？」

セルティの質問は予想どおりのものだった。

「いや喧嘩はしてねえよ。」

「じゃあどうしてレイルカはレインと話さないの？」

「俺がレイルカを怒らせちまったみたいなんだよ。」

「レインはレイルカに酷いことはしてないの？」

「それはしてないぜ。そもそもそんなことするわけないだろ。」

どうやらセルティは俺がレイルカに何かしたのではないかと思っ  
ていたらしい。あの村で迫害されていたからそういうことに不安があ  
るのだろう。

「そう。だったらいい。」

「いや、いいてわけじゃないけど。」

「レインは怒ってない？」



「ああ、怒ってない。悪いのは俺だからな。」

「早く仲直りしたほうがいい。」

「・・・ああ、分かってる。心配かけてごめんな。」

俺は立ち上がってセルティの頭を撫でながらいう。頭を撫でられたセルティはくすぐったそうに目を細めた。

「早く何とかするから。」

「分かった。お休み。」

「お休み。」

そういつてセルティは自分の部屋であるレイルカの部屋に戻っていた。俺も今日は寝るとしよう。とりあえず明日は話聞いてもらわないとな。

そう思いながら俺は布団にもぐった。

「なあレイルカそろそろ話し聞いてくれてもいいんじゃないか?」

「・・・」

「頼むからなんか言ってくれよ。」

「……」

レイルカはお構いなしに歩いていく。今日は一人先に行くレイルカに何とか追いついて一緒に登校している。だがレイルカの機嫌は直っておらず、無言のままだ。この状況、傍から見れば美女に付きまといっているしつこい男という風にも見えなくはないので辛い。

俺は尚も話かけたがレイルカは全て無視した。そうこうしているうちに学校についてしまった。

そしてレイルカが下駄箱を開けるとまたもラブレターが出てきた。

「今日は四通か。相変わらずモテるな。」

とそこで俺は異変に気づく。レイルカが下駄箱を開けたまま固まっていたからだ。目を大きく開いて一つの手紙を見ている。顔は少し青い。

「おい。レイルカ大丈夫か？」

「……え。」

肩を揺すって話しかけるとレイルカは俺に気づいた。

「どうしたいいきなりそんな顔して。」

「あう……レ、レインには関係ないです……!」

そういつとレイルかはまたも走って教室に向かっていった。

放課後・・・

レイルカは人気の無い体育倉庫の裏に来ていた。まだ夕方だというのにそこは薄暗くて気味が悪かった。なぜこんな場所に来ているかというところから呼び出されたからだ。

「はあ。」

私ははため息をついた。その理由はレインのことだ。レイルカ自身数日前のことについてはそれほど怒ってはいないのだがレインを前にするとどうしてもあの台詞が思い起こされてきつくあたってしまうようになっていた。

「一人で対処できる、ですか。」

もう私はレインには必要ないのでしょうか？そう思うとレイルカは酷く寂しい気持ちになった。そしてまた一人であったときのことを思い出す。この世界に来たときの五年間を。震える体を抱きしめていた。

「私は邪魔ものなんでしょうか？」

もちろんレインがそんな風に思うことはないだろう。けれどあの先の言葉は“もうこなくていい”そう言おうとしたのではないだろうか？必要とされなくなると思うとまた辛くなる。泣きたいほどに。

と、そこで私は思考することをやめた。

「やあ、レイルカさん。来てくれたんだね。」

「よくいいますね。無理やりこさせるようにしたのはあなたでしょう。竹内さんでしたっけ。」

私はその男を睨みながらいう。男は中肉中背で眼鏡をかけているどこにでもいる普通の中学生だった。

「そんなに怒らないでよ。気に入らなかった？僕のコレクション。」

そういうと竹内はポケットから一枚の写真を出す。それには着替え中のレイルカが写っていた。それは明らかに盗撮されたものだった。この男は私をストーカーしていたのだ。

「不愉快です。」

「連れないな。でもそんな君もいいね。」

そう言われると怖気を感じた。

「用件はなんですか？」

「用件？ああ、そうだったね。君を僕のものにしたいんだよ。」

竹内はまた気持ち悪い台詞を言う。

「お断りです。」

私は即答した。こんな男と付き合うのは絶対に嫌だった。

「いいの？じゃあ、この写真学校中にばら撒いちゃっよ？」

「な！？」

「これ以外にもまだ色々あるけどそれも一緒にね。」

「・・・最低です。」

「で、どうする？」

竹内はニタニタと勝ち誇ったような笑みを浮かべて聞いてくる。それに酷く腹が立った。

「・・・嫌です。あなた見たいな人と付き合うなんて絶対嫌です！」

私は大声で断った。写真をばら撒かれるよりもこんなやつに屈するのが嫌だった。

「何でだよ。」

「え？」

「何で僕のものにならなんだよ！！」

竹内は尚も断られたことによって激しく怒りはじめた。そしてそのままレイルカに迫ってきた。

「僕よりあのオルハルトの方がいいのかよ！！あいつは君に迷惑か

けてるだけじゃないか！！僕は君をこんなにも愛してるのに！！あんなやつよりずっと、ずっと！！」

「いたつ。」

竹内はレイルカの片腕を掴んで倉庫の壁に押しつける。そして私に向かって怒鳴ってくる。

「僕のものになれよ！！」

「い、嫌。レイン……」

レインの名前を読んだことによつて竹内の怒りはさらに増し拳を振り上げた。私は目を閉じた。だが殴られる衝撃は来なかった。目を開けて見てみると竹内の腕は後ろから別の腕で押さえられていた。

「な！？誰だ！！」

「黙れ変態が。」

「ぶっ！」

竹内は振り向き様に顔面を殴られた。私は殴った人物を見て驚いた。

「……レイン？」

「よう。大丈夫だったか？」

「何でここに？」

「ああ、お前の教室いったらこれが落ちててな。」

俺は教室で拾ったレイルカの盗撮写真を見せた。

「なんか面倒なことになってたみたいだからお前のこと探してたんだよ。おかげで学校中走りまわったけどな。」

するとさきほど殴った男子生徒が立ち上がった。

「いきなり何すんだよ！！」

「別に不埒な輩を退治しただけだが。」

俺はレイルカを守るように前に出た。

「僕は彼女を愛してるんだ！！邪魔するなよ！！」

「そついつのつて押し付けて言うんだぜ。」

「お前はレイルカさんに相応しくないんだよ！！」

「だからなんだ？俺がレイルカに相応しくなくてもお前が相応しいとは限らない。それにレイルカはお前みたいな変態にはやらん。」

「え!？」

「くそおお!!！」

男子生徒は俺に向かって殴りかかってきた。俺はその拳を手で受け止めた。

「これ以上レイルカに手を出すんだったらもう容赦しねえ。とつとどっか行きやがれ。」

「ひっ!」

怒気を孕んだ声色で脅した。男子生徒はそのまま全速力で逃げた。

「ふう〜疲れた。帰ろうぜ。」

「え?あ、あの・・・」

「ほら行くぞ。」

「あ。」

俺はレイルカの手を引いて学校を出た。



「すまなかった！」

学校を出てから五分ほどのところにある公園で俺はレイルカにふかぶかと頭を下げた。

「え！？どうしてレインが謝るんですか。」

「いや、ここ最近お前が怒ってたからとりあえず謝らないと思って。」

「そう、でしたか。」

レイルカは申し訳なさそうな顔をする。

「その件に関しては私も謝らなければなりません。すいませんでした。」

そういつてレイルカも頭を下げた。二人が二人して謝っているというのは変な状況だ。

「何で怒ってたんだ。」

俺は顔を上げて気になっていたことを聞く。

「それは・・・」

「話難いことか？」

「いえ話します。」

そういうとレイルカは怒っていた理由を話し始めた。そして一通り聞き終えた俺は感想を述べた。

「つまり、レイルカは一人になるのが寂しいから構ってもらおうとして怒ってたのか。」

「違う・・・わないですけどはつきり言わないでください！！それに構ってほしとはいつてません！！」

顔を真っ赤にして反論してくる。なんとというかどこかの子供みtainな理由だった。レイルカにもこんな一面があっただんな。

「馬鹿だなく邪魔者扱いなんてするわけないだろう。」

「だってもうお前は来なくていいって。」

「え、俺そんなこと言ってないぜ？」

「言おうとしたじゃないですか！」

「ああ、あれね。違うよ。あれは危険なまねすること無いって言うおとうとしたんだ。」

「え？」

レイルカはキョトンとした顔になって頭に疑問符を浮かべている。

「ほら子供ころ言っただろ。お前を守ってやるって。それなのにわ

わざわざ危険なところに連れて行くのもどうかと思ってな。」

「そうだったんですか。」

「そうだよ。まさかこんなことになるとは思わなかったけど。」

「す、すいません。」

レイルカはまた申し訳なさそうに謝る。

「悪かったのは俺だ。だから謝るな。」

「・・・分かりました。」

「それと今回俺に相談できなかったのは分かるがせめて明日香とか深澄とかに言っとけよ。何かあってからじゃ遅いんだぞ。」

「は、はい。気をつけます。」

「じゃあ今日は帰るうぜ。」

「あ、あのちよつといいですか?」

「ん、なんだ?」

レイルカは何だか顔を赤くしながら聞いてくる。夕日の所為か?

「さっき言った・・・わ、私をその・・・あの人にや、やらんというのはどういふことでしょうか?」

「そのままだけど。家族を変態にはやらんてことだ。」

「……家族ですか。」

「ああ、どうした？」

「なんでもないです。」

「あ、おい。待ってくれよ。」

なぜだか分からないがレイルカはそっぽを向いて歩いていった。また怒らせるところしたかな俺。

### 数日後

レイルカの一件は無事解決した。あの後ストーカーも何もしてこなかったので一応諦めたということでもいいだろう。上手い具合に脅しが効いたか。レイルカとの仲も元どおりになったので一件落着きというわけだ。

そして今俺は教室にいる。教室の中は妙に殺気だっていた。なぜなら今日はバレンタインだからだ。教室の中には落ち込んでいる者、まだチャンスはあると希望を抱いている者、興味無いしと発言しつつも気にしている者などいろいろいる。

と、教室に弾が入ってきた。

「ようレイン。」

「おう、って早速貰ったのか。」

弾の手には誰から貰ったチョコが握られていた。若干忘れがちだがこの男は顔も性格もいいので結構モテるのだ。

「下級生の子からな。うらやましいか？」

「別に。」

「お前は本当に興味ないからな。マジで男か？」

「列記とした男だよ。」

「けどいいよなお前は何もしなくてもレイルカから貰えるんだからな。」

「それは違つぞ。そもそもアメリカにバレンタインの日にチョコを上げる習慣は無いからな。」

「そうなのか!？」

知らなかったのか。ちなみにレイルカがその習慣を知ったのは去年の二月の終わりごろなのでチョコは貰っていない。すると今度はレイルカが教室に入ってきた。明日香と深澄も一緒だ。

「どうしたんだレイルカ？」

「ちょっと渡したいものがありました。」

「何だ？」

「はい、バレンタインのチョコレートです。」

「は？」

俺は一瞬フリーズした。まさかレイルカがチョコをくれるとは思ってなかったからだ。そして俺はまずい事に気づく。今日はバレンタインだ。クラスは殺気だっている。そこで俺がレイルカからチョコを貰う。あとは言わなくても分かるよな。

「……これより異端審問会を開始する！！」「」

「くそっ！！もうやられることは無いと思っていたのに！！」

俺は久しぶりに異端審問会にかけられそうになった。

後々レイルカになんで教室で渡したのかと聞いたら「見せ付けてやったんです。」と言われた。何をだよ。ちなみに明日香と深澄からも貰ったので今度は弾と一緒に追いかけられた。

## すれ違いのバレンタイン（後書き）

久しぶりに異端審問会を出してみました。  
次回は原作メンバーが出てきます。

## 再開と戦闘と逃走

「にしても早いもんだな。」

「んあ、何がだ？」

「時間が経つのがだよ。気づけば俺たちもう三年なんだなって。」

季節は五月となって俺たちはいま暖かい太陽光が降り注ぐ屋上で昼飯を食べていた。たまにはこういうのも悪くない。今までここを使っていたであろう先輩方はもう卒業しているので仕事やら高校の勉強やらに勤しんでいるだろう。

「確かにそう感じますね。」

「一年のころが大昔に感じられるぜ。いや、歳はとりたくないもんだな。」

「何を爺くさいことを言ってるんだ。まだ十五だろう？」

精神年齢的にいったらお前らの倍は生きてるんだけどな。と口には出さずに深澄に突っ込む。でも一度死んでるしな。生きてるって言うのか？

「レインは一年のころから全然変わってないわね。」

「失敬な。俺だって変わったところぐらいあるぞ。」

「どこが変わったのよ？」



「もつと人が悪くなった。」

「変わらなくてもいいわよ！ー！そんなところ！ー！」

いつもどおりに明日香を弄る。明日香もツッコミが板についてきたな。

「にしても一年のころはいろいろあったな。」

「そうだな。」

弾に言われて思い出してみる。入学初日に異端審問会に追いかけれ、高町たちと知り合いなのがばれて異端審問会に追いかけれ、クリスマスにリア充爆死しろと異端審問会に追いかかれて・・・

「はあ。」

「どうした？」

「いや、一年のころは異端審問会に追いかけられた記憶しか無くてな。」

「そ、それは大変だったな。」

深澄が慰めの声をかけてくる。

「そつえば部活の方はどうですか？」

レイルカが急に話題を変えた。

「そうだな。新入生も入ってきているから賑やかになったな。」

「こっちは監督のスパルタにがんばって耐えてるよ。」

「新入生か。レイルカファンがどれだけ増えるか楽しみだ。」

「楽しみにしないでくださいよ。恥ずかしいだけです。」

この二年でレイルカの評判は学校中に広まっている。なのでファンクラブなんかもできていたりする。ちなみにこの前のストーカーも会員だった。

「よし、じゃあ会員にファンクラブは解散しろと命令でもしてやれ。」

「そうしたらやめてもらえるんですか？」

「称号が女王様になってファンクラブが新衛隊になるぞ。」

「いいませんよ!?!」

レイルカの方もツッコミが上手くなったな。

「どのみち何したってなくならないんだから諦めるよ。」

「そんなあ〜」

弾の一言によってレイルカは頭を垂れて落ちこんだ。

「レイン」

「そういえば異端審問会って誰が創ったんだ？」

「はう！？」

助けを求めたレイルカを華麗にスルーした。レイルカはさらに落ち込んだ。

「私は知らないぞ。」

「私も。」

「俺知ってるぜ。」

「本当か。」

「でも知ってどうするんだ？まさか報復しにいたりするのかわ？」

「んなことしねえよ。興味本位だ。」

「そうか。実はあれ俺が小等部のときに悪ふざけで創ったんだよ。」

「そこになおって歯食いしばれ。」

「え？ちょ、ちょっと待て何もしないって、うわあああ！！」

昼休み一人の男の悲鳴が木霊した。

コツコツという足音が通路に響く。ここはすでに閉鎖された違法研究所。薄暗い通路は夜の所為か余計不気味に感じられる。

「バルディツシュ、何か反応は？」

『ありません。』

フエイト・テスタロッサ・ハラウンは任務でここに来ていた。閉鎖されたこの研究所が稼動しているという連絡を受けたのでその調査だ。

ハラウンというのは彼女を引き取った家の苗字だ。彼女の母親はP・T事件で虚数空間に落ちて死んでしまった。その事件は姉を生き返らせるために母親自身が起こした事件だった。そのときに彼女自身も深い傷を負ったが今は前向きに生きているだろう。

彼女の姉が今も生きているのは彼女の友人のおかげだ。どうやったのか説明は聞いたがフエイトにはよく分からなかった。

『マスター。』

「どっしたの？」

『センサーに反応が。』

「どう？」

『通路を抜けて右に行った部屋です。』

「分かった。」

そういつてフェイトは走り出した。そしてバルディッシュに言われたとりに進んでいくと大きく壁が壊されていた部屋があった。バルディッシュを構え警戒しながら入っていくとどうやらここは研究所のコントロールルームのようだった。だが中のものはほとんどが壊れていた。すると近くに白衣を着た男が倒れていたのでフェイトは駆け寄った。

「大丈夫ですか！」

声をかけても返事は無かった。おそらく気絶しているのだろう。

「バルディッシュ、アースラに連絡して。」

『了解。』

部屋の壁を見てみると入り口同様に壊されていた。瓦礫の一部に足跡のようなものもあった。何かが通過したようだった。

「……」

フェイトはもう一度バルディッシュを構えなおして穴の開いた壁に向かっていった。そしてしばらく進んでいくと黒く巨大な何かがあった。

「何これ!？」

それは二つの頭を持った犬だった。この場合は魔犬といったほうがいいだろうか。その魔犬には翼も生えていた。体長は四メートルほどある。明らかに自然界の生き物ではなかった。

「グオオオオ!!」

魔犬が咆哮をあげた。フェイトは思わず耳をふさいでしまった。魔犬は咆哮が終わったあとフェイトに突進してきた。フェイトはそれを転がりながらかわした。魔犬はそのまま壁に激突したがあまりダメージが無いようだ。また壁を突き抜けて突進してくる。

「このままじゃやられる!」

この狭い部屋では飛んで戦うこともできない。そしてこのまま建物を破壊され続けたら天井が崩れて生き埋めになる可能性もある。フェイトはとりあえず先ほど倒れていた男性を抱えて出口に向かうことにした。

「プラズマランサー!」

フェイトの周りに黄色のスフィアが現れた。

「ファイア!!」

スフィアはまっすぐ魔犬に飛んでいき体に突き刺さった。だがこれもあまり効いているようには見えなかった。フェイトは出口に向かって急ぐ。このままでは追いつかれてしまうからだ。

「あの巨体でなんて速さだ！」

狭い通路の壁に当たってもまるでスピードが落ちない。

「プラズマランサー！」

もう一度スフィアを出現させる。今度の狙いは目だ。生物の形をしているなら少し位は効果があるだろう。

「ファイアー！」

スフィアは魔犬の目に向かって一直線に飛んでいく。そして真紅の目に突き刺さった。すると魔犬はバランスを崩して転倒した。フェイトはこの隙に全速力で出口を目指した。出口はすぐに見えた。フェイトは外に出るとまず抱えていた男性を戦闘に巻き込まれないようなところにおろした。

「ここで待つててください。」

聞こえていないと思つて声をかける。そして空に飛び立った。それと同時に魔犬も地下から出てきたようだ。魔犬はフェイトの方に向く。それを見てフェイトは驚愕した。

「傷が治つてる・・・!?」

先ほど目に向かって攻撃したのだがその傷はもう無く両目とも見開かれていた。これを一人で相手をするとなると相当なくろっだろう。しかも勝てないかもしれないのだ。

魔犬は身を屈めてこちらを狙っている。そしてこちらに飛び掛つて

きた。だがその攻撃は現れた第三者によって防がれた。

「サンライトクラッシャー!!!」

魔犬の横っ腹に山吹色の閃光が突き刺さった。魔犬はビルに吹き飛んでいった。

「大丈夫、フェイト。」

「和輝!」

そこには銀色の槍を持った長瀬和輝がいた。

「どうしてここに?」

「アースラに連絡が入って苦戦してるみたいだったから助けに来たんだ。なのはたちも来てるよ。」

「フェイトちゃん!」

フェイトがその声に振り向くと高町なのは、八神はやて、波多野凜、一条仁それと彼のユニゾンデバイスであるリインフォースがこちらに向かってきていた。

ちなみにリインフォースも彼らに助けられた一人だ。だが闇の書から切り離された彼女は上手くはやてと適合せず今は仁のユニゾンデバイスとなっている。

なのはたちが来たと同時に魔犬の方もビルの中から這い出してきた。翼を大きく広げて飛んでいる。



なのはたちはデバイスを構えて臨戦態勢に入る。

「気をつけて。速いし弱い攻撃を受けても全然効かないんだ。それに再生能力もあるみたいだ。」

「僕の攻撃も聞いてないみたいだね。」

先ほどの攻撃はかなり強力なものだったのだが魔犬はダメージは負っていないようだった。

「だったら強い一撃で決めるしかないな。」

「それなら私に任せて。フェイトちゃん、はやてちゃんも手伝って。」

すると魔犬がこちらに体当たりを仕掛けてきた。だがそれは掠たちのバインドによって止められる。魔犬はバインドを振りほどこうともがいている。

「行くで!!! 彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン!」

ベルカ式の魔方陣が展開されそれを中心に一本の光の槍が現れさらに槍の周りから円を描くように六本の光の槍が出てきた。七本の光の槍は魔犬へと飛んでいき刺さった。そして刺さったところから魔犬の体が石化していった。石化とバインドによって体の自由を完全に失った魔犬は地面に落ちた。

「いくよ!!! フェイトちゃん!!!」

「分かった!!」

「デイバインバスター!!!」

「サンダースマッシュャー!!!」

声と同時に桃色の閃光と黄色の閃光が魔犬に向かって放たれる。魔犬は身動きが取れないのでその砲撃をまともにくらった。衝撃波が起こりビルなどが揺れて砂煙が巻き起こる。

「やったの?」

「さすがにあれには耐えられないだろう。」

砂煙で姿は見えないが魔犬を仕留めただろうとこの場にいる全員が思った。だが突然煙の中から二匹の魔犬が飛び出してきた。魔犬は体長が半分ほどになり翼も片翼になっていた。

「避ける!!」

いち早く気づいた掠が叫ぶ。だがそれに反応できなかったリンフォースは二匹の魔犬に噛み付かれた。

「ぐ!!」

「リン!!」

仁が自らのデバイスであるグローヴィルを構えて魔犬に攻撃する。だが魔犬の体が崩れていきリンフォースを包んでいき黒い球体とな

った。仁は攻撃を止めた。リインフォースも巻き込んでしまつかも知れないからだ。

すると黒い球体は割れていき中からリインフォースが出てきた。

「無事だったか!!」

仁はリインフォースに駆け寄る。だがリインフォースは俯き加減のまままで返事は返さなかった。

「リイン・・・?」

「仁離れる!!」

掠の声と同時に黒い砲撃が仁に放たれた。ガードが間に合わずまともにくらった仁はビルに墜落した。

「何してるんだよ!!リイン!!」

和輝が怒鳴りつけるがリインフォースは答えない。そしてリインフォースの髪が黒く染まり肌は死人のように白くなった。背中からは先ほどの魔犬と同じ翼が生えた。表情はまるで人形のように無表情だった。

「どうなってるの?」

「分からない。さっきの化け物の所為だと思うけど・・・」

「リインは大丈夫なんか?」

「・・・分からない。けどこのままじゃ危険だと思う。」

「そんな!?!」

「とにかく今はリインを止めることが先だ。助けるためにもね。」

「・・・分かった。」

「それじゃ行くぞ!!」

掠たちはそれぞれデバイスを構えてリインフォースに向かっていった。

「ん?」

「どうかしましたかレイン?」

急に足を止めた俺にレイル力が話しかけてくる。

「今一瞬歪みの反応が途絶えたんだ。」

「それって・・・」

「また誰かに取憑いたのかもしれない。急ぐぞ。」

俺は魔力を使って足場をつくりそれを跳躍して進んでいった。レイルカは一对の羽をだして俺に続いた。しばらくすると瓦礫の景色が変わって廃墟ビルが立ち並んでいるところが見えた。どうやらそこにいるらしい。

『マスター 魔力反応を六つ確認しました。誰かが戦闘をしているようです。』

「ここですか？となると管理局か。」

面倒だな。まあいい。歪みを倒したあとすぐに逃げればいいしな。

俺は廃墟ビルの屋上に着地して下の戦闘の様子を伺った。

「あいつらは!?!」

そこにはバリアジャケットに身を包んだ高町達と転生者がいた。歪みの方を見てみると黒い髪で羽を生やした女がいた。取憑かれたのはあいつらの仲間か。それに一人やられてるみたいだな。

「やっぱりマスクかなんか持ってきたほうがよかったかな。」

「無いものをねだっても仕方ありませんよ。」

「はあ。レイルカは歪みの攻撃を受けたやつの治療をしてくれ。俺はいつもどおり歪みをやる。」

「分かりました。気をつけてくださいね。」

歪みにやられた傷は普通に治療しては治りが遅い。放っておくと体に流れ込んだ負のエネルギーが体を蝕むからだ。だからまず負のエネルギーを取り出してから治療をしなければならぬ。俺の器の力を使えばすぐに治るが今回はそれができないのでレイルカに任せることにした。

「ああ。じゃあ行くか。」

俺は廃墟ビルを飛び降りて歪みに向かってエリスを振り下ろした。それに気づいた歪みは回避した。

「誰だ!!!つて君は!?!」

「話は後だ。今はそこでおとなしくしてろ。」

俺はそういつて歪みに向かって駆け出す。歪みは俺に向かって黒い砲撃を放ってくる。俺はそれをかわして切りかかる。歪みはそれを跳躍して回避した。そして今度は黒いナイフのようなものを六本発生させ放ってきた。エリスに器の力を付与させてそれを切る。するとナイフは消えた。

「スフィア・ボム」

俺はスフィアを五つ発生させる。

「打ち落とせ。」

五つのスフィアはそれを聞いて歪みに向かっていく。すると歪みから黒いオーラが出てきてだんだん犬の形になってきた。そして黒い犬はスフィアに回避させないスピードですべて打ち落とした。そし

て黒い犬は俺に向かってきた。

「く!?!?」

エリスで受け止めるが強い衝撃が腕に走った。衝撃に耐え切れず仰け反ってしまう。すると歪みがこちらに向けてまたも砲撃を放ってきた。

「やば!?!?」

かわすことは無理なので俺は白い剣を出現させ受け止めた。剣と砲撃がぶつかったことよって閃光が撒き散らされる。俺は腕にめいっばいの力を込めて剣を振りぬく。砲撃がかき消され歪みに隙ができた。俺はすぐさま駆け出して歪みを白い剣で切り裂いた。すると歪みに取り付かれていた女の体が倒れた。

「よし終わった。」

「貴様あ!?!?」

「うわ!?!?」

突如俺に向かって赤黒い大剣が振り下ろされる。俺は大きく後ろに飛んでかわす。こいつさっきまで怪我してたやつじゃねえか。

「何しやがる。」

「それはこっちの台詞だ!?!?どうしてリインを!?!?」

「仕方ないだろ。そうするしかなかったんだよ。」

「なんだと!!」

尚も俺に向かつて切りかかってくるので俺は上に飛んだ。まだ核を回収していないので離れるわけいもいかないし。

「サンライトクラッシャー!!」

「な!?!」

今度はしたから槍で突撃してきた。不意打ちだったのでぎりぎりかわした。変な体制でかわしたので着地が失敗して地面に転がった。

「くそ。なんだってんだ!?!」

起き上がると同時に黒い剣が襲い掛かってきた。今度はエリスで受け止める。

「てめえらさつきからなんなんだよ!!」

「そっちこそなんでリインを切ったんだ!!」

「別にいいだろ!!死んでるわけじゃないし、外傷もねえんだから!!」

「何を言ってる……!?!」

切りかかってきた波多野はリインと呼んでいた女の方に目を向けた。するとその女から黒い何かがあふれ出ていた。黒い何かはだんだんと犬の形になっていった。体長は二メートルほどだ。



「まだそんな力が残ってたのか。」

「ぐー！」

俺は波多野を蹴り飛ばして歪みと向き合う。だが歪みは俺とは戦わず逃走した。

「待て！！逃がすか！！！」

俺はすぐに追いかける。

「レイルカ！！あいつの動きを止める！！！」

「分かりました！！！」

レイルカは走っている歪みに向かって矢を放った。放たれた矢は四本。その四本は見事に歪みの四肢に刺さった。俺はそれによってスプードが落ちた歪みの距離を詰めて白い剣で切り裂いた。切り裂かれた歪みは黒い霧となって消えていった。そして核だけが残された。

「ん？」

核をよく見てみるとなんだかいつもより小さいような気がした。あれだけの力があつたのに核が小さいのはおかしい。どういうことだ。

「おい！！！」

「はあ。」

「聞いてるのか!！」

「聞こえてるよ。何だよ。」

「さっきの化け物はなんだ?どうして君は倒せたんだ?それに君の力は……」

「残念だが俺は質問に答える気はない。レイルル力帰るぞ。」

「あ、はい。」

「な!?!ちよつと待て。」

「じゃあな。」

俺は波多野にスフィアを放つ。そのスフィアは閃光を放った。

波多野達が目をくらませている間に俺たちは転移魔法を使って逃げた。

これから面倒になりそうだな。はあ。

## 管理局

「あ、あの豚ひき肉ください。」

「何グラムだい？」

「えっと、500グラムです。」

「はいよ。セルティアちゃん今日はお使いか。えらいねえ。」

店の主人に褒められて少し恥ずかしそうに頬を赤らめるセルティ。セルティはもう十二歳なのでお使いという歳じゃないのだが歳不相応の子供らしい雰囲気とまだ発育していない身長を見ると主人の言うことは分からなくはない。

俺は度々セルティを連れてから彼女の重度の人見知りをましにするためこのようなことをしている。もう何度もこのやり取りをしているので顔も覚えられた。今では普通の会話が成立するようになった。最初のころは俺の後ろに隠れてだんまりだったからな。いや〜がんばったな、俺。

「さてと、これで全部買ったな。よし帰るか。」

「うん。」

「はい。」

「あ、そうそう今日はなんで一緒に来たんだ？」

今日は珍しく俺とセルティとレイルカの三人で買い物に来た。普段ではそんなに人数は要らないからセルティと二人だったのだ。

「来てはいけませんでしたか？」

するとレイルカは少し残念そうにする。

「いや別にそういうわけじゃないけどさあ、何でかなって。」

「たまには三人で出かけるのもいいと思ひまして。それに・・・」

「それに？」

「あなたの怪我のことも気になりますしね。」

レイルカは俺の右腕を見て言う。俺はこの前の戦闘で怪我をした。あの犬が突進してきたときにどうやら骨に罫が入っていたらしい。それに気づかず戦闘していたのでなんだか結構でかい怪我になってしまった。

「たいしたことないって。今だってちゃんと動かせるし。治療もしただろ。」

「何がたいしたことないですか！もう少しで折れるかもしれなかったんですよ！」

「分かった、分かったからあんまり大声出すなって。」

レイルカは俺に諭され少し周りを見る。声を荒げたことによって注目されていることに気づく。状況を理解したのか一度深呼吸をして

落ち着いた。

「すみませんでした。ですが治療をしたとわいってもまだ完全に治ったわけではないんですからあまり無理はしないでくださいね。」

「はいはい。そんなに心配しなくてもいいって。」

「こうでも言わないとレインは学習しませんからね。怪我だって隠そうとしましたし。」

「レインは怪我してるの?」

会話を聞いたセルティが心配そうにこちらを見てきた。

「してるけど酷い怪我じゃないから大丈夫だ。」

「痛くない?」

「ああ。」

「本当?」

「本当だ。はいこの話は終了。とっとと帰ろうぜ。腹減ってきた。」

このままでは延々と問答が続きそうだったのでそうそうに終わらせた。

「ちょっといいか?少し聞きたいことがあるんだが。」

そして公園の前辺りに差し掛かったところで黒いコートを着た男に

話しかけられた。歳は大学生くらいだ。夏も近づいてきているというのに珍しい格好をした男だった。

「なんだ？」

「先日、無人世界に現れたのは君か？」

「!?!?!?!?! 管理局ですか。」

レイルカは管理局が来たことに驚いて身構える。セルティは怖いのが俺の後ろに隠れて服を掴んでいる。

「レイルカそう身構えるな。もっと普通の対応してやれ。」

そういつて俺はポケットの中から携帯を取り出して三つのボタンを押す。そしてプルルルルというコールの後にガチャと電話に出る音がした。

「あ、もしかもし?公園前に不審者が出ました。」

「な!?!?!?!?! ちよつと待て何をしている!?!?!?!?!」

流石にこの男もこれには驚いたようだ。

「不審者が襲い掛かってきます。」

俺は少し大げさに今の状況を電話の話相手に伝える。

「その電話を切れ!?!?!?!?!」

男は俺の携帯を取り上げると耳に当てる。弁解でもするのであろう。だがそこから流れてきたのは

『ただいまの時刻四時三十八分をお伝えします。』  
時報だった。

「騙したな!!」

「別に俺は騙してないぜ。俺はただ不審者が現れたことを口にしただけであんたが勝手に勘違いしただけだろうが。」

「僕のどこが不審者なんだ!!」

「全身黒ずくめの服装でそんなこといわれても説得力ないぜ。」

「な!?!」

男は言い返そうとしたが自分の服装を見てからやめた。他人から見ただ今の自分を理解したのだろう。

「さてと、悪ふざけはここまでにしてと。用件を聞こうじゃねえか。管理局さん。」

「・・・場所を移すから付いてきてくれ。」

「じゃあレイルカ先に帰ってる。」

「え、どうしてですか?」

「こちらとしては君たち二人に来てくれと頼んだのだが？」

レイルカは首をかしげて聞いてくる。

「別に話するのに二人もいらないだろ。あとセルティを一人にするわけにもいかないし、俺たち二人が帰らなかつたら桜さんが心配するだろうしな。そんなわけでよろしく。」

「はあ、分かりました。なるべく遅くならないようにしてくださいね。行きましよう、セルティ。」

「え？でもレインが。」

「レインは今から大事な用ができたので一緒には帰れません。なので先に帰って待つことにしましょう。」

レイルカは心配そうにしているセルティを諭すように話しかける。レイルカの言葉を聞いてなにやら迷ったようだがここは帰ることにしたようだ。

「レイン早く帰ってきてね。」

「分かった。気をつけてな。」

そういつて俺はレイルカとセルティを見送った。

「じゃあとつとと連れてってくれ。」

「分かった。では行くぞ。」



男は転移魔法を発動させた。

転移させられた場所は薄暗い廊下のようなところだった。壁や床は鉄でできていて大型倉庫のようにも見える。どこかの施設かなにかのようだ。

「ここは次元巡航艦アースラ。次元の海を渡るための船と想像してくれ。」

「丁寧にも。」

「では行くぞ。こっちだ。」

そういつて男は歩き出す。壁の方についてスライド式の扉が開いた。その先は通路になっていているようだ。さっきのところとは違ってちゃんと明かりがある。男はさくさくとあるっていった。

話をする前に俺の方の用件を済ましとくか。

「なあ、ここって医務室とかある？」

「ああ、あるがいきなりなんだ？」

「少し確認したいことがあってな。案内してくれないか。」

「・・・分かった。」

少しは渋られると思ったが案外すんなりと受け入れられた。

しばらく男の後をついていくとある扉の前に立ち止まった。ここが医務室らしい。

「失礼する。」

男は断って入ったが俺は無言で入った。中に入ると八神と海で出会った赤髪の少女と歪みに取憑かれた女がいた。

「どないしたん、クロノくん？つてあんたは！？」

「あ、てめえ海の時の！！！」

「彼がここに用があるそうさ。なるべく早くしてくれよ。」

どうやらこの男はクロノというそうさ。名前にまで黒が入っているとはそんなに黒が好きなのか？これはどうでもいいや。

俺は歪みに取憑かれた女に近寄っていく。

「なんだ？」

「ちよいと失礼。」

そして俺は女の心臓辺りに手を当てて目を閉じる。すると歪みの反

応があつた。やはりこの女の中に隠れていたようだ。この前の核が小さかつたのもこの所為か。まさか核が分離しているとは思わなかつた。とそこで俺の頭部に強い衝撃が走つた。

「いた！？」

「あんた何してんねん！！いきなり初対面の女の子の胸触るってどないな神経しとんじゃ！！」

八神がどこからともなくハリセンを出してきて叩いてきたようだ。

「何すんだよ！！いきなり！！」

「それはこつちの台詞や！！」

「こつちは確認してただけだ！！」

「なんの確認や！！胸の大きさの確認か！！」

「だあくもう面倒だ！！」

このまま言い争つても誤解は解けそうに無かつたので俺はまず先に歪みを取り出すことにした。器の力で白い短剣を作り出し、それを女に投げた。

「な！？」

「おい！？」

突然の行動に八神も赤髪の少女も反応できなかつた。そしてナイフ

は女の胸に刺さったと思われたがそのまま体を通過して壁に当たって消えた。そのあと女の体から黒い霧が出てきてやがてそれは黒い石となった。

「あなたなにしたんや？」

「見て分からないか？これ取り出したんだよ。この前も見ただろ。」

「取り出すってもうちょっとやり方あるやろ。」

「俺は穩便に済まそうとしたんだがあんたが変に取り乱したからってとり早く済む方法を取ったまでだ。」

「うっ。」

八神は自分の非を指摘されて言葉に詰まった。

「さてとこっちの用件は済んだし案内よろしく。」

「分かった。はやて騒がせてすまなかつたな。」

「お大事に。」

俺はそういって医務室を後にした。

機械的な音を鳴らしながらドアがスライドする。その部屋の中は洋式と和式を無理やりくっつけたような場所だった。壁や床は通と同じように鉄でできているが赤い敷物が敷かれていて茶をたてる道具が置かれていてそこには緑の髪をした女性が座っていた。そしてその後ろには高町たちもいた。ちゃっかり医務室にいた八神もいた。

「艦長、彼を連れてきました。」

「ご苦労様クロノ。どうぞ座ってください。」

艦長と呼ばれた女性に進められて座った。その横にクロノも座った。するとその女性はおもむろに茶をたてはじめた。慣れているのか手つきがいい。そしてたて終わると何かの容器を出して茶の中に入れる。ラベルを見てみると砂糖と書かれていた。するとその女性は砂糖を入れた茶を俺の方に寄せてきた。これは飲めということなのか？

「なあ、クロノ。」

「いきなり呼び捨てか。僕は年上だぞ。」

「じゃあ真つ黒黒助君。」

「呼び方変わっているぞ!!」

「だって俺あんたの名前知らないし。」

「僕の名前はクロノ・ハラオウンだ。」

「ハラオウン、一つ聞いていいか？」

「・・・なんだ。」

「この艦長は俺を食中毒にでもしたいのか？」

「本人はそのつもりはない。気にするな。」

気にするなってなんだよ。後ろを見てみると高町たちが苦笑いをしている。飲んだことあるのか？

「おほん！そろそろ話をしてもいいかしら。」

「どござ。」

女性はわざとらしい咳払いをしてから話しかけてきた。

「私はアースラの艦長を勤めています、リンディ・ハラオウンです。」

「

「レイン・オルハルトだ。」

ハラオウンって多いな。全員家族か？

「単刀直入に聞きます。あなたは何者ですか？」

いきなりストレートな質問だな。

「ただの一般人だ。」

「ではなぜあなたは魔法を使えるのですか？」

「たまたまだ。」

「あなたはどこかの組織に所属しているのですか？」

「組織に入っている人間ならわざわざこんなところにはこないだろ。」

しばらく沈黙が続いた。今はお互いの腹の探り合いをしている。この艦長はかなりのやり手だな。何考えてんのかさっぱり分からん。「ていうかそっちは俺のことある程度は調べてあるはずだ。だってこの質問意味無いだろ。」

「そうですね。」

「分かってるなら最初からすんなよ。」

「食えないな。こういうやつは苦手だ。」

「で、そっちは何が目的なんだ？」

俺は手っ取り早く話を終わらせるために用件を求めた。

「用件は先日、管理外世界に現れた黒い生物についてです。管理局では今までにあのような生物は見たことがありません。なので重要参考人であるあなたに情報を聞こうとおもいここに来てもらいました。話していただけますか？」

「嫌だ。」

「は？」

「だから嫌だって言うてんだよ。」

俺の回答に全員が唾然としている。この回答は流石に予想していなかったのだろうか。

「・・・一応、理由を聞いてもいいかしら。」

「理由は簡単だ。俺はお前たち管理局に協力する義務も義理も無い。それに協力したところで俺にメリットも無いしな。ていうか協力したくない。」

「協力したくないというのはどういことだ。」

横にいるハラオウンが疑問に思ったのか聞いてくる。

「俺はこの前の戦闘でそこにいる局員に剣で切られそうになったり、槍で突進されたんだぜ。それに謝罪もなしだ。そのうえ情報よこせとかいいやがるし。そんな組織に協力なんてする気はないね。」

「「「うっ」「」」

後ろにいる三人の転生者が同時にうめく。

「そのことについては私から謝罪します。」

そういつてリンディは頭を下げた。別に建前の謝罪なんていらん



のと思ったがあえて口に出さなかった。

「話は戻しますけどあなたにメリットが無いわけではありません。あなたが私たちに情報を提供してくれるなら私たちはあの生物に対処できます。そうすればあなたの負担を減らすことができますし、場合によっては戦わなくてすむかもしれませんよ。」

「残念だがそれは間違いだ。」

「どづいつことでしょう?」

不満があるのか少し目を細めて聞いてくる。

「ちょっと紙とペン貸してくれ。」

「分かりました。」

するとA4サイズ用の紙と油性ペンを渡してきた。俺はその紙にまずパソコンと書く。次にそれを丸で囲み線を引いてその先にOSと書いた。そしてまたパソコンから線を引きセキュリティと書いた。

「よしできた。」

「これはなんだ?」

「少し前の世界の縮図だ。」

「これがか?どう見ても落書きにしかみえないのだが。」

「もっと頭使って考えろ。この焼け石頭。」

「どつという意味だ!!」

俺の書いた図を見て嫌味を言ってくるハラオウンだがそれは不発に終わった。そして俺は図を片手に持って説明を始める。

「まずこのパソコンを一つの世界だと過程する。するとこのパソコンを正しく機能させるためのOSは世界を荒廃させないために働く人間、つまり世界の住人となる。そしてセキュリティは文字どおり世界を守るために活動するお前たち管理局のような組織になる。」

俺は説明したことを書き込んで見せる。

「さっき言った少し前というのは?」

「それも今から説明する。ある日突然このパソコンに問題が発生した。」

「それが先日の未確認生物ね。」

「そうだ。ここではそれをウイルスと過程する。そしてパソコンのセキュリティではこのウイルスは退治できなかった。そんなときテストロッサお前はどつする?」

「え!? 私!! えっと私だったらウイルスを退治できるプログラムを用意する、かな。」

「まあ正解だ。そのウイルスを退治するためのプログラム、ウイルスバスターが俺だ。」

また新たにウイルスとウイルスバスターと書き込む。ウイルスはパソコンに向かって線を引き、ウイルスバスターはウイルスに向かって線引く。そうするとまた新しい図ができた。

「そしてこれが今の世界だ。」

俺はその紙をリンディに渡す。リンディはその紙を見つめてどこか腑に落ちないという顔をしている。

「これを見る限りあの生物はあなたしか倒せないということですか？」

「そうだ。」

「ですがあなたからあの生物を倒す方法を教えてもらえば私たちもたおせるのではないですか？」

「俺は倒す方法を知ってるんじゃないかって倒せるんだ。そういう風にできてるんだよ。」

「できてる？まさか君は人造魔導師か？」

ハラオウンは的外れのことを聞いてきた。その言葉を聞くとテストロツサの体がかすかに動いた。

「それもハズレ。ていうか俺のこと調べてあるんだから分かるだろ。俺の生まれは普通だ。」

またテストロツサの反応する。どうやら彼女の生まれは特殊らしい。まあそんなことはどうでもいいか。

「俺ができてるっていったのは世界のことだ。」

「世界だと?」

「ああ、そうだ。お前たちがどれだけがんばってもあいつらを倒せないように、そうできてる。」

「そんなことどうしてわかるの!」

すると高町が立ち上がり声を荒げて聞いてくる。少し怒っているようにも見える。だが

「分かるさ。俺の力は後天的には手に入らない。これだけは絶対不変の事柄だ。」

俺はそれを何気なくあっさりと返した。俺がきっぱりと言いつつたことで高町は返す言葉がなくなったのかまた座った。場の空気が一気に重くなった。口を開いたのはリンディだった。

「あなたの言い分は分かりました。ですか・・・」

「引き下がるわけにはいかない、か?」

「・・・そうです。」

リンディはゆっくりと肯定した。随分と食い下がってくるな。管理局側にもメリットなんてないだろうに。

「じゃあ俺と戦って勝ったらお前たちの知りたいこと全部教えてや

るよ。」

「本当ですか？」

「本当だ。」

「ただし俺が勝ったら俺はこれ以上の質問には答えない。」

リンディは驚きながらも冷静に聞いてくる。俺はすぐにそれを肯定する。これもかなり予想外のことだったのだろう。

「ではその申し出を受けさせてもらいます。」

十分後、俺はまた別の部屋に移動した。部屋は高さ十メートル、奥行き二十メートルぐらいの箱のような形をしたところだ。訓練しつかなにかなのだろう。そんなことを考えていると高町が入ってきた。

「お前が相手か。」

「そつだよ。」

さきほどのことで怒っているのか返事は素っ気無かった。

「ねえ、さっき言ったことって本当？」

「本当だ。」

「でもなんでそんなこと知ってるの？」

「それは知ってるとしかいいいようがないな。」

高町はこれ以上の質問は無意味だと思ったのかこのあとは聞いてこなかった。俺も準備しますか。

「エリス。セットアップ。」

その言葉で俺は光に包まれバリアジャケットを纏う。今回はマントはつけていない。なので少し動きやすくなっている。

『よかったですか？』

「何が？」

『このことばれたらレイルカ様に怒られますよ。』

「ばれなきゃいいんだよ。」

一方、この訓練場を見渡せるモニター室ではレインとなのはを除いたメンバーがいた。

「クロノ。なのはは大丈夫かな。」

フェイトは親友であるなのはが心配なのか自分の義兄であるクロノに聞いた。

「彼の実力がどうかは分からないが資料を見る限り近接戦闘を主体に戦うようだ。魔力量もそれほど多くない。遠距離型のなのはなら近づけさせなければ十分勝てると思う。」

「本当！」

義兄の見解にフェイトは大いに喜んだ。その説明を聞いてここにいる全員はなのはの勝利を確信しただろう。だが全員このさき起こることを知る由もなかった。

「さて、そろそろ始めようぜ。」

「だったら早くデバイスを出しなよ。」

「ちゃんとあるじゃねえか。」

左手の籠手を高町に見せる。

「この前は大きい剣を持ってたじゃない。」

「右腕は怪我してて上手く振れないんだ。それとあれは刀だからな。」

「そんなので戦えるの？」

「別に言い訳とかに使うつもりはないから安心しろ。」

『準備はいいかしら。』

モニター室からのアナウンスが入ってくる。高町はデバイスを構え、俺は動きやすくするために少し体そほぐした。

『もう一度ルールを確認します。制限時間は九十分。その間にどちらかが降参するか戦闘不能になればその片方の勝利とします。攻撃は全て非殺傷設定で行うこと。体術を使っても構いません。もし危険行為をした場合失格とします。尚、勝敗の判断は艦長である私が勤めます。よろしいでしょうか?』

「分かりました。」

「いいぜ。」

『では、始め!』

一呼吸置いてから開始の合図が出た。

「アクセルシユーター!」

高町は合図とともに無数のスフィアを展開した。その数約三十。

「!?!」

だがそれは発射されることはなかった。開始の合図とともに動いたのは俺も同じだった。俺は一瞬で高町の目の前まで行き蹴りを放つ。高町はとっさにデバイスを盾にしてそれを受けた。だがそれでは抑えられず後ろに飛ばされた。三十もあつたスフィアも霧散した。俺はさらに追い討ちをかける。

「レイジングハート!」



『プロテクション。』

すると高町の前に桃色の障壁が張られた。だが俺にはそんなものは無意味だった。俺は左手でその障壁を殴った。そしてその障壁に振れた瞬間レアスキルの能力を使い破壊した。すると障壁はガラスのように砕け散った。その状況に高町は目を大きく見開いて驚愕していた。俺はそのまま左手で高町の胸倉を掴み背負い投げをした。

「かは!!」

受身が取れなかった高町は肺の中の空気を吐き出した。俺は氷の剣を作りだし倒れている高町の首に突きつけた。

「チェックメイトだ。」

『勝者、レイン・オルハルト。』

重々しい声でアナウンスが入ってくる。俺はそれを聞くと剣を消して転移魔法を発動した。

「待つて!!」

「何だまだ何かあるのか。」

「そこまでしてどうして話そうとしないの?」

「その理由はさっき話しただろ。」

その言葉に高町は一瞬気おされたが尚も続けた。

「いくら義務やメリットが無いからっておかしいよ。なんでそんなに隠そうとするの。」

質問には答えないといったはずなんだがな。まあいいか。

「それはお前たちを信用してないからだよ。」

「なんで！」

「じゃあお前は昨日今日現れた自分たちを正義の組織と名乗るやつらを信用できるのか？」

「え？」

「できるのか？」

「……」

高町は俺の質問には答えなかった。まあ分かってはいたけど。

「それに俺があいつらと戦い出したのは五年も前からだ。その間お前たち管理局はなにも気づかなかった。それなのに今更協力だと？都合が良いすぎるんだよ。自分たちに危害が加わらないと動かない組織なんて俺は頼らない。」

「でも……」

「でも、なんだよ。」

「.....」

再び高町は口を閉ざした。

「お前らと俺とじゃ住んでる世界が違うんだよ。」

俺はそう言い残し転移した。

「疲れた。」

俺は部屋に寝転がりながら呟いた。あの後家に帰ったのは九時前で桜さんに酷く怒られた。さらに飯抜きだ。だがもともと食欲はほとんどなかったので説教の方がきつかった。時刻は十時。一時間くらい受けていたことになる。

『調子に乗って戦ったりするからいけないんですよ。』

「でもあれが一番手っ取り早かったぜ？」

『それはそうですが、にしても面倒事が嫌いなマスターが自ら戦うとは思いませんでした。』

自分でも珍しいと思う。いつもならそこで面倒だと思っただが今日

はそれが出てこなかった。

「レインちよっといいですか。」

考え込んでいると部屋の外から声がかかった。多分レイルカだろう。

「いいぜ。」

「失礼します。」

レイルカは風呂上りなのかパジャマ姿で紙が濡れていた。頬も少し赤い。

「その、どうでした？」

「特には問題は無かった。こっちの情報はほとんどやってないし、これ以上の詮索も無いと思う。」

「そうですか。」

そういうとレイルカはほっと息をついた。

「レインは大丈夫でしたか？」

「あ、ああんとも無い。」

俺は一瞬驚いたが難なく続けた。だがそれでは終わらなかった。

『何を言ってるんですか。自分から勝負しろって言ってたくせに。』

「な！？エリス、てめえ！！」

「本当ですかレイン？」

レイルカは先ほどとは違う低い声で聞いてくる。顔は笑っているが目は笑っていないかった。

「えと、その、はい本当です。」

「あれほど無理するなといったのになんでそういつことするんですか！！」

「無理って訳じゃ・・・」

「言い訳しない！！」

「・・・はい。」

「はあ、もう腕を見せてください。」

「え？」

「腕を見せてくださいといってるんです。早くしてください。」

「あ、ああ。」

俺は素直に腕を出した。もっと説教がくると思ったのだが。そしてレイルカは俺に治癒魔法をかける。それを十分くらいすると治療が終了した。

「怪我の悪化はしていませんでしたけどこのようなことは二度としないでくださいね。治りが遅くなるかもしてないんですから。」

「分かった。それにしても心配しすぎだって。」

「心配したっていいじゃないですか。私はこのようなことでしかあなたを助けられないんですから。」

レイルカは酷く申し訳なさそうに呟いた。

「悪い。」

俺はすぐに謝った。

「いいんです。それでは私は戻りますね。ゆっくり休んでください。」

レイルカはそういつて部屋を出ようとした。

「レイルカ。」

「何でしょう?」

「その、ありがとな。心配してくれて。これからはこんなことも少なくなるから。」

「はい。ではお休みなさい。」

レイルカは微笑みを浮かべてそういった。少しは機嫌が直ったようだ。

「ああ、お休み。」

さてと俺も寝るとしようか。今日はなんかむちゃくちゃ疲れたし。そう思い俺はあくびをしながら電気を消した。

## 文化祭

「バンドを組もう。」

「そうかがんばれよ。」

九月。中学生生活最後の夏休みも終わりすでに一週間が経過した。まだ残暑の日差しが照りつける窓辺の席で俺は暑さにやられたのか意味不明なことを言い出した哀れな友人にとりあえず声援を送っていた。

「なんだよその反応。人がせつかく張り切ってるのに。」

「お前こそいきなりどうしたんだよ。頭のネジでも外れたか？だったらドライバー持って来い。アルファベットが分かるくらいまでなら直してやる。」

「ひどっ！！アルファベット分かるくらいって俺今どんだけアホなんだよ！！」

「ちげえよ。お前はアホじゃなくてバカだろ。」

「同じだろ！！一瞬期待しちゃったじゃねえか！！」

「何言ってるんだ。アホは治るけどバカは治らない。ちゃんと違いがあるだろう。あ、お前バカだったんだな。悪い、俺には治せなかった。」

「そんな誠意のこもってない謝罪なんていらねえよ！！そういうの





話始めた。

「いやさあ、俺たちもう二年だろ。」

「そうだな。」

「それで部活も夏で引退しちゃったしここんとこやることなくてさ。」

「それでなんでバンドを組むって結論になるんだ？」

「ほら、今年は十月に文化祭があるだろ。そんときに有志の出し物でやるうかなって思って。ほら卒業までのいい思い出作りになるだろ。」

「そういえばそんなことも言ってたな。この中学は三年に一度しか文化祭をしないからすっかり忘れていた。小中高と一斉に開かれるの結構大規模なものになるらしい。」

「つまりお前は今までの冷め切った青春を忘れて残りの学校生活を華やかにするために文化祭で燃えたいということか。」

「いや、別に冷め切った青春なんて送ってねえよ！むしろ充実してたよ！！」

「冗談だ。いいんじゃないの、別に。やりたいんだったらやればいい。」

俺は弾の意見を肯定する。何かやる事は個人の自由だしな。

「お、そうか。お前もそう思うか。じゃあバンド名決めよう。」

すると弾はなんだかテンションが上がっていた。そんなに嬉しいことなのだろうか？ってなんで俺がバンド名を一緒に考えるんだ？

「おい、バンドって俺もやるのか？」

「何言ってるんだ。当たり前じゃねえか。何のために話したと思ってるんだ。」

どうやら元から俺はメンバーに入っていたようだ。

「素人だぞ。」

「そんなの俺もだよ。」

お前もやったことないのかよ。

「いくらなんでも計画性無さ過ぎじゃね。」

「このグダグダ感がいいんじゃないか。がんばろって気になるだろ。」

いや普通の人間だったらそうは思わんだろう。逆に諦めるほうが多いと思う。

「とりあえずよろしく頼むぜ。レイン。」

俺は弾にそう言われて少し考え込んだ。バンドかと頭の中で思考した。そして俺はため息をついてから考えを発表した。

「よろしく。」

そういつて俺たちは拳を合わせた。

その日の放課後俺と弾は教室でレイルカたちと待ち合わせをしていた。待ち合わせといっても同じクラスなのだがなにやら用事があるらしくそれを優先させた。昼休みバンドのことで話していたときにどうせならレイルカたちも誘おうということになって今に至る。

教室の中には俺と弾しかいない。中学三年のこの時期は皆特にやることが無いのだろう。授業が終わるなりすぐに帰ってしまった。ここはエスカレーター式になってるから受験とかもないしな。今頃暇をもてあましているのではと思ってしまう。そう考えると俺は青春を謳歌していると言えるのではないか。と俺はどうでもいいことを考えながら待っていた。

「来たわよ。話って何よ？」

目的の人物たちはすぐにきた。明日香を先頭に深澄、レイルカと入ってきた。

「まあ、適当に座ってくれ。」

弾はまるでここが自分の家のように席を勧めた。彼女たちはそれぞれ俺たちに近い席に座った。

「今日ここに集まってもらったのはみんなに折り入って話したいことがあったからだ。」

「勿体ぶつてないで早く言いなさいよ。」

「すぐ言うよ。実は俺たちは文化祭のときにバンドを組んでしようと思う。それで明日香たちも一緒にバンドを組まないか？」

弾がそういうと三人はそれぞれ違った反応を見せた。明日香はこういうことは好きなほうなので結構乗り気なようで深澄は俺と同じで少し考えているようだ。レイルカはバンドの意味を知らず俺に聞いてきた。

「で、どうする？」

「私はいいわよ。面白そうだし。」

「私もやるう。時間を持て余すよりはいいからな。」

「よく分かりませんが皆さんがやるなら私もやります。」

三人とも考えたのは一瞬だけだったようで（レイルカは考えてないが）すぐに答えがでた。

「よし、決まりだな。それじゃ早速バンド名を決めよう。」

そういつて弾は紙を出した。

「なんか案だしてくれ。」

「へビメタバンドゴージャスASUKAでどうだ？」

「ちょっとなんで私の名前が入ってんのよ!!！」

「いいだろ。華やかな名前になったんだから。」

「なつてないし、むしろ劣化して売れない芸人みたいになつてるじゃない!!！」

おいおいそれは芸人にたいして失礼だろ。

「じゃあ他には？」

「私はこういうのはよく分からないので。」

「私も遠慮させてもらう。」

レイルカと深澄はそういつてやんわりと断つた。レイルカにいたつてはバンドが何かが分かつてないからな。

「弾はなんかあるか？」

「ああ、あるぜ。俺が考えたのはJUMPだ。」

「なんで？」

「いやこう明日に向かって飛びたてみたいな。」

小学校の学級目標みたいな意味だな。思考回路が単純な所為か。

「明日香はなんかある？」

「別にないわよ。急にそんなの浮かぶわけないでしょ。」

「人の意見は否定したくせに。」

「う、うるさいわね！！あんたが悪いんですよ。」

痛いところを指摘されて明日香は少し焦り気味にツツコミをした。何がいけなかつたんだろうか？ゴージャス付けた所為か？

「レインはなんかあるか？」

「さっき言っただろ。」

「いや流石にあれは俺も嫌だ。他になんかないのか？」

「ほかにか。」

俺は少し考える。そしてふと頭に浮かんだことを口にした。

「SSSSでどうだ。」

「なんだそれ？どっかで聞いたことあるぞ。」

「意味は三年最後の生産的活動だ。」

「なんかすげえ現実味のある名前だな。」

「実際そうたる。」

「じゃあ多数決採るぞ。ヘビメタバンドゴージャスASSUKAかJUMPかSSSのどれか一つ選んでくれ。」

弾は紙に書いたバンド名を見せながら投票するように促した。

「ちよつとなんでそれが入ってるのよ!!！」

「仕方ないだろ書いちゃったんだから。」

「だったら入れなきゃいいじゃない!!！」

明日香はまだ不満があるのか。人がせつかく考えたのにそこまで邪険にされると凹むぜ。まあ実際は凹んだりしないけど。

そうこしているうちに投票が始まった。投票といっても気に入った名前に挙手するだけなんだが。そして結果はゴージャスASSUKAが一票、JUMPが一票、SSSが二票でバンド名はSSSになった。

そしてその日は解散となった。



次の日

俺たちは学校が終わった後弾に連れられ街に向かっていた。何でも弾の親父さんの知り合いにライブハウスを経営している人がいるらしい。その人がそのライブハウスでバイトをする条件で楽器や練習する場所を貸してくれるみたいだ。

「お、ここだ。」

どうやら着いたようだ。弾が扉を開けて入ったので残りもそれに続いていった。中は小さな明かりと夕方の所為か少々薄暗かった。西洋風の机や椅子が何個か置かれていて右にはカウンター席があった。そして奥には小さなステージがあった。カーペットは紺色で壁もそれに合わせて青っぽい色にしてあった。それらがかみ合ってそれらしい雰囲気を出していた。ライブハウスというよりはバーという感じだ。

「おじさん、こんにちわ。」

「久しぶりだね、弾君。」

弾はカウンターの向こう側にいた初老の男性に声をかけた。この人がこの店の店主のようだ。Yシャツに黒いベストを重ねていて執事の給仕服のような服装だ。

「君たちが弾君の友達かい。僕は二宮圭吾だ。よろしく。」

「九曜明日香です。」

「霧島深澄です。」

「レイルカ・シーリンです。」

「レイン・オルハルトだ。」

相手に自己紹介をされたのでこちらも順番に返した。

「おじさん、早速だけど練習していいかな？」

「ああ、いいよ。けど約束どおり手伝いはしてもらおうよ。」

「分かってるって。行こうぜみんな。」

そういつて弾は奥にある階段を登り始めた。俺たちは店主に一礼してから弾に続いた。二階は控え室になっていた。そしてそこにはドラムやキーボードやギターが並べてあった。おそらく店主が用意してくれたのだろう。

「さてとどの楽器にする？」

「とりあえず思い思いに自分のやりたいやつを手にとって見たらどうだ。」

「そうだな。」

そういつとそれぞれが自分のやりたい楽器のところに向かっていった。弾はギター、明日香がドラム、深澄はキーボードにいった。俺とレイルカは特にやりたいとかは無かったので余ったギターにした。

「よしそれじゃまずはまともに弾けるようになるために練習だ。」

「何を練習すればいいのよ？」

「まず楽譜を読めるようにならないとな。文化祭でやる曲の楽譜と教科書用意してあるからそれで練習しててくれ。」

「教科書？」

すると弾は鞆の中から一冊の本を取り出した。その本には“はじめのバンド”と書かれていた。

「それじゃがんばれよ。」

「あんたはどこ行くの？」

「俺は今から下でおじさんの手伝いをするんだよ。そういう条件だしな。あとこれは交代制だからお前らもやるんだぞ。」

そういつて弾は来た階段を下りて一階に向かった。取り残された俺たちは渡された楽譜と教科書を見る。一日でここまで用意するのは弾のやつががんばったな。とりあえず座って教科書を見ることにした。

### 三週間後

練習場に軽やかなギターの音が響く。音はしばらく続いたあと止まった。

「よし、じゃあ休憩だ。」

弾の声でそれぞれの楽器を立てかけ休憩に入った。

あれから俺たちは毎日バンドの練習に励んだ。毎日練習しているので腕前結構上達した。

明日香は初めは素人だったが才能があつたのか努力が実を結んだのかはたまたその両方なのかほとんど上手くなっていった。練習を始めて三日目にはもう楽譜を覚えて十分にドラムを叩けるようになっていた。

深澄は昔ピアノを習っていたらしく鍵盤系の楽器は得意だったようだ。なので明日香どうように上手くなっていた。

一方弾と俺はそうは行かなかつた。弾と俺は真正銘の素人で楽器などリコーダーくらいしか扱ったことが無かつた。なので弾はコードや楽譜を覚えるのに時間がかかっていた。その所為で明日香にかかわれていた。

俺は楽譜などはすぐに覚えられたが指の動きがそれについていけずにリズムが外れたりテンポが遅れたりという失敗を繰り返した。今はそれほどでもないがまだ改善中である。

そして特に問題があったのがレイルカだったのだ。レイルカは俺と同じギター担当で一緒に練習していたのだが一言で言うとなめだめだった。レイルカはわざわざ指の動きを確認しながら弦を弾いていた。コードや楽譜を覚えている時点では気に留めなかったがいざ曲の練習をしようとしたときもそれだった。本人はそれじゃないと弾けないと言いつ出したのでやらせてみたが演奏にはならなかった。なのでレイルカはボーカルとなった。

そのレイルカは今下で店でバイトをしている。バイトといっても店を開ける前なので掃除や納入品の確認など雑用ばかりだ。それを約一時間くらいする。

「やっと終わりました。」

するとレイルカがバイトを終えて戻ってきた。こっちもそろそろ休憩が終わるところだろう。

「お、帰ってきたか。よしそれじゃこっちも練習再開だ。」

弾がそういうと向こうで休んでいた二人も立ち上がり楽器の元へ向かった。俺も立ち上がりギターを手に取った。

「みんな今日は一度合わせてみよう。」

「どうしたの急に？」

疑問に思ったのか深澄が問いかけた。

「文化祭までもう一週間だぞ。そろそろ合わせないとまずいだろ。」

文化祭は十月の初めの週の日曜日を使って行われる。今は九月の最終日。弾の考えは正しいといえる。

「分かったわ。足引っ張らないでよ。」

「言ってる。先週までの俺とは違っぜ。」

「そういう台詞はかませ犬が言うことだぞ。」

「とにかくまず楽器並べるぞ。レイルカもマイクの準備してくれ。」

「はい。分かりました。」

そういつてそれぞれの楽器を壁際に並べていった。こういつぶつに並べられた楽器を見ると何となくバンドとしての実感が湧いてくる。

「並べたか。じゃあスタンバイだ。」

各々自分の楽器を取り構えた。

「行くぞ。1、2、1、2、3、4」

その掛け声とともに演奏が始まった。こうして俺たちは今日も練習に励むのであった。

時刻は十二時。人々は腹を満たすために昼食をとっている時間、俺たちのクラス三年三組ではそれぞれの性別に合った給仕服を着たクラスメイトが教室を駆け回っていた。

俺たちのクラスの出し物はメイド喫茶だ。文化祭の定番といえるが、ありきたりともいえる。他のクラスとかぶってたりもする。ちなみに出す料理は焼きそばとオムライスと水だ。にも関わらず大盛況だ。教室の外には行列ができています。

理由は分かっている。レイルカだ。レイルカは学年問わずすごく人気がある。その人気はファンクラブができるほどだ。そのレイルカがメイド姿で働いているところを一目見ようと全学年の男子が寄ってきているのだ。さらにうちのクラスには明日香や深澄などの可愛い女子がいるのでそれ目当てで来ているやつもいる。

「焼きそば二人前!!」

「はいはい。」

そんな俺は焼きそばを朝から作っていた。同じ工程を延々と繰り返すので若干ノイローゼになりそうだ。それに腕もだるいし。ちなみに弾は執事服を着て接客をしている。ああ見えてもあいつはイケメンだし女子に人気がある。楽な仕事やりやがって。

「おいレイン!! 時間だ!!」

するとホールの方から誰かが俺を呼んできた。そしてすぐ後に弾が入ってきた。

「どうしたんだよ？」

「だからもうすぐ時間だって。」

弾は時計を指しながら言う。時計は十二時三十分を指していた。俺はそれを見て朝の約束を思い出す。ライブが始まる前にみんなで練習をしようって言ってたな。ライブが始まるのは今から一時間後だ。準備とかもあるから三十分くらい練習できるな。

「もうみんな行ってるぞ。」

「分かったすぐ行く。」

俺はエプロンを脱いで楽器が置いてある空き教室に向かった。楽器は朝早く店長が持ってきてくれたのだ。いたわりつくせりだな。

「悪い遅れた。」

「遅いわよ。早く準備しなさいよ。」

弾は軽く謝りながら教室に入った。他の三人はもう準備ができているようだ。俺たちも楽器を手に取りすぐに準備をした。

「よしじゃあやるぞ。」

そして三十分練習すると俺たちは体育館に楽器を運び込んだ。体育館では他の有志による参加者の出し物が行われていた。どうやら漫才をやっているようだ。



「いよいよか。」

「緊張してんのか？」

独り言だったのだが弾が冗談交じりで聞いてきた。

「そんなふうに見えるのか？」

「いや。お前が緊張するところなんて見たことねえし。」

「俺は鋼の心臓を持ってるからな。」

「だったら俺にも分けてくれよ。今結構緊張してるんだ。」

弾が話しかけてきたのはどうやら緊張を紛らわすためだったようだ。

「じゃあ今からお互いに心臓を抉り取って交換しよう。」

「怖いわ！！つつかグロい！！」

「じゃお前のだけでいい。」

「よくない！！死ぬだろうが！！心臓とってどうすんだよ！！」

「生贄？」

「俺に聞くな！！」

「まあそんだけ元気合ったら大丈夫だろ。」

そついうと弾はきよとんとした顔になってから落ち着きを取り戻した。

「ありがとよ。おかげで少し楽になった。」

「そりゃどつとも。」

「俺さ、こついうのすげえ憧れてたんだよ。」

弾はいきなり自分の思いを語りだした。俺はそれを黙って聞いた。

「誰かと一緒に何かをやり遂げる。そついうのめっちゃかっこいいじゃん。だから俺は今日のライブ絶対成功させたい。」

「当たり前だ。そんなこと最初から分かってるよ。」

「そつか。」

俺が無愛想にそついうと弾は少し嬉しそうに笑った。

「ほらもうすぐ始まるぜ。」

「おう行くか。」

先ほどの漫才が終わり今俺たちはステージに立っている。ステージの幕は閉まっているがもうすぐライブが始まる。

「みんな聞いてくれ。」

弾の声を聞き視線があつまる。

「ここまできてごちゃごちゃ言つのもなんだから一言だけ言つ。」

そついうと弾は一拍間を空けた。

「今日のライブ絶対成功させよう。」

「当然よ。」

「分かっている。」

「がんばりましょう。」

それぞれが笑顔で答えた。俺はさっき言ったので黙ってそれを見ていた。すると丁度そこでブザーが鳴った。始まりの合図だ。

『続きまして。有志参加者、SSSによるバンド演奏です。』

紹介アナウンスが終わるとステージの幕が上がった。ステージの下を見ると体育館の後ろの方まで満員だった。俺は一度深呼吸をして楽器を構える。

「1、2、1、2、3、4」

弾のカウントダウンとともに演奏が始まる。弾のギターからメロディが流れはじめ俺も続くそしてレイルカが歌いだす。

明日香のドラムが入り、深澄のキーボードも混ざる。

曲が進むにつれて観客も盛り上がってくる。

観客の歓声は段々と大きくなってきた。次でサビだ。

曲の一番目が終わりしばらく間奏に入る。歓声はまだ衰えない。

二番目の歌詞に入ると歓声は少し収まった。

だがそれはすぐにサビに入ってまた歓声がでかくなる。

曲が終盤に近づくとつれて俺は激しくギターを弾き鳴らした。

そして歌が終わる。ギターの音が鳴り響きそして止まる。それと同時に体育館が静まった。すぐ後にドツとまた歓声が吹き上がった。

「アンコール！！アンコール！！」

「言ってるけどどうする？」

俺はわざとらしく弾に問いかける。答えはもう分かっていた。

「もちろん、OKに決まってるんだろ。」

その言葉を聞くとそれぞれがまた楽器を構えた。

「それじゃ、行くぜ！！」

弾の掛け声とともに演奏が始まった。

こうしてライブは大成功に終わった。

## 前に進んだとき

「レイン魔法の使い方教えて。」

「は？」

十二月某日。俺は自室にてセルティからある相談を受けていた。

「えつと何でだ？」

とりあえず理由を聞いてみた。

「強くなりたいから。」

「この地球は平和だからそんな必要ないだろ。」

そついうとセルティは顔を横に振る。変な輩はいるが十分平和だと思つが。

「私は強くなつてレインの手伝いをしたい。」

セルティは真剣な顔言つた。俺は頭に手を当てて困つたことになつたと思つた。セルティがこついうことを言い出す可能性は無いわけではなかったがこつも早く来るとは。

「ダメだ。お前にはまだ早すぎる。」

俺はセルティの申し出をきつぱりと断つた。魔法を教えられないことも無いがそうするとセルティは戦闘に参加することになる。歪み

はセルティの器を狙って可能性もあるし危険すぎる。ましてやまだ十二歳のセルティをわざわざ戦場に連れて行くなどしたくない。

「どうして？レインたちは私と同じくらいのころには戦ってた。」

「何で知ってるんだ？」

「レイルカに聞いた。」

俺は心の中で舌打ちする。セルティにはあまりこちらに関わらないようにさせるために魔法関連の情報は与えないようにしていた。なのになんで簡単に話しているんだ。

「確かにそれはそうだがちゃんと訓練したかた戦ってたんだ。」

「だったら私にも教えて。」

「俺は教えるの得意じゃないんだ。」

「レインの意地悪。」

「そんなの知ってるだろ。」

「レインのケチ。」

「何とでもいえ。」

「レインのバカ。」

「弾より頭良かったら別にいい。」

「レインの……あう……」

セルティはむっとした顔で俺を罵倒したが俺はそれを大人気なく一言で流した。最後には罵倒の言葉が見つからなかったようだ。

「なんで急に魔法を習いたいって思ったんだ？」

一つ疑問に思っていたところを聞いてみた。セルティは今までそういうことに関しては興味を示さなかったのにどういった心境の変化のだろうか。

「……レインたちがどこかに言ってる間私は一人で寂しい。でも迷惑かけちゃいけないから我慢してた。けど最近レインたちは帰ってきてもと全然構ってくれない。だから私が手伝って助けようと思った。そしたら一緒にいられるし寂しくないと思ったから。」

セルティは少し目を潤ませて自分の思いを告白した。俺はそれを聞いてやってしまったと思った。最近文化祭や歪み退治でなかなかセルティに構ってやれていなかった。あの事件で心に負った傷もまだ癒えていないはずなのに。俺は自分の行動を恨めしく思う。

「ごめんな。なんか無理させてたみたいで。けどそれでもお前に魔法は教えられない。」

だからといって俺はセルティに戦ってほしくはなかった。

「俺はお前に普通の生活を送ってほしいと思ってる。戦えばあの村で経験したこと以上の危険な目にあうかもしれないだぞ。わざわざそんなところに自分から行く必要はない。これからはなるべく一



緒にいてやるから。それじゃダメか？」

「でも……」

俺はセルティの肩を掴みながら優しく問いかける。だがセルティはまだ諦めきれないようだ。意外と頑固な性格だったんだな。どうしたら諦めてくれるだろうか。と、一つ思いついた。

「じゃあ、セルティが魔法のことをしっかり学んだら考えてやる。」

「教えてくれるの？」

「いや違うよ。魔法を教えてくれる学校に行くんだ。」

「学校？」

「そうだ。この家を離れて魔法を学んで戦えるようになったらな。」

「ここを離れて……」

するとセルティに迷いが生まれた。セルティが俺や桜さんたちに懐いていることは知っている。なのでここを離れるとなると諦めると思ったのだ。弱みに付け込むようで気が引けるがこの際仕方ないだろう。だが俺にとっては予想外の返事が返ってきた。

「分かった。学校に行く。」

「え？」

「魔法の勉強してくる。」

セルティはがんばるぞというようなポーズを小さくとりながら言った。

「ほ、本当に行くのか？」

「行く。」

「一人で行くんだぞ？」

「大丈夫。」

「何年も帰ってこれないかもしれないんだぞ？」

「……我慢、する。」

俺は慌てて引きとめようとすがどうやらもう決意が決まっているようだ。俺はまたやってしまったと思った。

「何をしているんですかー!!」

「いや、その、すまん。」

翌日、学校の屋上にて俺は昨日の出来事をレイルカに話した。まあ反応は予想どおりといつかなんといいか思い切り叱咤された。

「セルティはまだ十二歳なんですよ！戦い方を学ばせるってどういふことですか！」

「正直あそこまで頑固だとは思わなかったんだよ。それでももう行く気満々みたいだし今更無かったことにはできそうにないっていうか。」

「だからってもう少しまともな断り方もあったでしょう。」

「……面目ない。」

レイルカは大きなため息をついた。レイルカはセルティのことになると若干過保護になる。セルティの生い立ちの所為もあるが妹のようになっているのでこの反応は仕方ないだろう。

「それでどうするんですか？」

「……一応、セルティを訓練校に通わせてみようと思う。」

「本気ですか？」

レイルカは反対するという意を込めてこちらを睨んできた。

「ちゃんと理由はある。セルティや俺たちにプラスになることある。」

「プラスになることですか？」

「まず、途中で学校を辞める場合だ。そうなるといままでどうりの生活に戻ってもらうだけだ。次に学校を辞めなかった場合。そのときはセルティも少し戦闘ができるようになってはいるはずだ。もしも歪みに襲われたときに少しでも対抗できる。それに学校に行くことで同い年か歳の近い友達ができるかもしれないな。」

「卒業したら私たちに同行させるんですか？」

「それはそんなときの實力しだいだ。まあ極力同行させたくはないけど。」

「そうですね。メリットがあるという点では納得できましたけど。セルティが途中で辞めるといふのはないのでは？」

「そうなんだよな。妙に張り切ってるし。いつその事学校で彼氏でも作って、そっちにいつてくれたりしないかな。」

「それはもつと無理だと思いますよ。セルティはレインにべったりですから。」

俺はそこでため息をつく。そろそろ兄離れしないといけない時期だろう。セルティが多少自立できるようにという理由もある。

「それでお前にも話しておきたいことがある。」

「はいなんでしょう？」

俺はそこで話題を切り替えた。

「中学を卒業したらここを離れようと思う。」

「どういうことですか？」

レイルカは意味が分からないという顔で聞いてきた。

「実は少し前から考えてたことだったんだがいい加減歪み退治に専念したほうがいいと思ってな。器のことや歪みのこと他にも調べたいことが山ほどある。セルティの学費とかもあるしな。昨日の相談で踏ん切りがついたんだ。」

「桜さんや明日香たちにはどう言うんですか？」

「ありのままを伝える。桜さんには世話になつたし、弾たちも説明しないと納得しないと思うからな。」

「……」

レイルカは分かってくれたのかこれ以上は聞いてこなかった。

「レイルカ別に嫌なら……」

「付いていきますよ。」

レイルカは俺の言葉を遮るようにつてきた。

「レインの決めたことならば私はそれに従います。私はあなたをサポートするために来たんですから置いていっただら怒りますよ。」

「あ、ああ、悪かった。」

「分かってくれたなら結構です。まあレインのことですから分かってはいてもあまり聞き入れてくれなさそうですね。」

レイルカは少し笑みを零しながら嫌味を言う。

「それでいつ言うんですか？」

「決まってるけど、なるべく早く言うことにする。」

「そうですね。」

ガチャっという音を立てて屋上の扉が開く。そして三人の生徒が入ってきた。弾と明日香と深澄だ。ちなみにレイルカはこの場にいらない。

「早かったな。」

「まあやることもなかったし。で、話ってなんだよ。」

弾は早速話を聞いてきた。わざわざこんなところ呼び出されているから気になるのだろう。

「せつかちだな。まあいいけど。・・・俺、卒業したらここを離れようと思つんだ。」

「え？」

「は？」

「どついつことだ。」

明日香と深澄が驚いているなか弾は理由を聞いてきた。

「色々と事情があつてな。前々から考えていて最近踏ん切りがついたんだ。」

「ここを離れるって転校するのか？レイン。」

「いやそついつうんじゃない。俺がここから離れるんだ。あ、レイルカもだけど。」

「意味が分からないわ。もったいぶってないでいいなさいよ。」

曖昧な言い方をしていたら明日香が痺れを切らして問いかけてきた。

「そつだな。じゃあ手っ取り早く言う。俺実は魔法使いなんだ。」

「「は？」」

今度は明日香と弾が疑問符を浮かべた。

「おいレインまさかそんなことを言うためにこんなところに呼び出

したんじゃないだろうな？」

「これを言うために呼び出したんだが。」

「アホらし。時間の無駄だったわ。行きましょ深澄。」

「エリス。」

明日香が呆れて帰ろうとしたとき俺はエリスを展開した。すると俺の手に青い刀が現れた。それを見て三人の顔は驚きに染まった。

「どこから・・・出したのよ。それ。」

明日香は驚きながらも搾り出すような声で言った。

「これは魔法の一種だと思ってくれていい。信じてもらえたか？」

「・・・ああ。」

弾がかすかに答える。だがその声はまだ納得できていないというよ  
うな声だった。無理も無いだろう。いきなり物語みたいな話そされ  
ているんだから。

「納得できないのは分かるが今は理解してくれ。」

「違う。俺が納得できないのはそんなのじゃない。俺が納得できな  
いのはどうしてお前がここから離れなきゃいけないっていうことだ  
！！それにこんな話するんだったらそうそう会えなくなるんじゃない  
えのか！！」



「・・・そうだな。当分会えなくなることは確かだな。」

「本当なのか？」

俺は弾の問いを肯定する。すると深澄が目を潤ませながら聞いてくる。彼女からしたら友人との別れはつらいものがあるんだろう。

「とりあえず話したいことは以上だ。時間をとらせて悪かった。今日はもう帰っていいぞ。」

そういうと三人はもうなにも言えなくなったのかその場に少しとどまってから屋上を去った。俺はしばらく誰もいなくなった屋上で空を眺めていた。

「もう会えないか・・・」

確かにいつ現れるか分からない歪みに対処するためには地球に戻ってきてる暇なんて無いかもしいないな。そんなことを考えているとまた屋上の扉が開く音がした。見てみるとそこには息を切らした弾が経っていた。

「どうしたんだよ？」

「俺にも魔法を教えてください!!」

弾の口から飛び出したのは数日前にセルティから聞いた言葉と同じだった。

「何でだ。」

「俺は・・・俺はこのままお前との関係を終わらせたくない。俺はこれからもお前やレイルカや明日香や深澄と高校に通って笑いあって人生送れると思ってた。けどさっきのお前の話を聞いたら急にお前が遠い感じたんだ。もう追いつけないくらいに。でも俺はそんなのは嫌だ！！だから頼む！！」

弾は深く頭を下げた。俺は大きなため息をついた。ついでに弾は意外と熱血君だったんだなとも思った。

「顔上げる。」

そういうと弾はゆっくりと頭を上げた。

「じゃあ行くぞ。」

「行くつてどこに？」

「お前の家だよ。今から事情を説明しに行く。」

「それじゃあいいのか！！」

「条件つきだけどな。お前にはいろいろとやってもらうことになる。」

「そういつて俺たちは屋上を後にした。」

弾の家を出てやっと今家の玄関に着いた。弾はセルティと一緒に訓練校に通ってもらうことにした。とりあえず弾の両親には事情だけを説明して説得は弾に任せることにした。予定外のことだったので時間をとってしまい今は七時を回っている。十二月なのでもう真っ暗だ。

そして俺は玄関を開けた。そこには桜さんが少し怒ったような感じで立っていた。帰りが遅いからというわけではないだろう。

「ただいま。」

「お帰りなさい。早速だけど居間に来てくれない？話したいことがあるの。」

「分かりました。」

俺は黙って従うことにした。無言で付いていき居間についた。桜さんが座ったので俺もその反対側に座る。そしてしばらく無言だったが桜さんが話し始めた。

「……レイルカから聞いたわ。魔法のこと、セルティのこと、あんたたちがこれからすること。正直未だに信じられないわ。魔法が存在するなんて。」

「本来だつたら知ることなんてないですからね。」

「今はいいわ。考えを改めることはしないの？」

桜さんは俺を真剣な目で見つめながら問いかけてきた。

「ありません。もう決めたことですから。」

「なんで？わざわざここを離れなくても活動することはできるでしょ？セルティのことだって・・・それにレインも友達を分かれたくないでしょ？」

「確かにそうですがもう決めたことです。弾たちにはもう説明を済ませましたし、セルティが訓練校に通うのは自分の意思です。俺はそれを尊重したいと思います。」

俺は考えを変えないことをはっきりと伝えた。しばらく桜さんとにらみ合いをしていると桜さんが大きなため息をつきこちらに何か差し出してきた。

「通帳、ですか？」

「ここにセルティの学費が入っています。本当はあんたたちの学費だったんだけどもう使わないみたいだから。」

「いいんですか？」

「私にあんたたちを止める権利なんて無いわよ。それに使わないともったいなでしょ。」

俺は少し驚いていた。もう少し反対されると思ってたんだが。

「レイン、ちょっとこっちに来なさい。」

呼ばれた意味は分からなかったが素直に従った。俺は桜さんの前に座った。すると急に桜さんに抱きしめられた。

「意外としつかりした体してるのね。だらけてばかりだったから気づかなかったわ。」

「き、鍛えてるからな。」

「でも、まだ私の人生の半分くらいしか生きてない。それなのにレインはいろんなものを背負ってるのね。私より大きなものを。」

桜さんはどこか悲しそうな声音で言った。

「なのに私は何もしてあげられない。親失格ね。雪乃に怒られちゃうわ。」

そういつて桜さんは乾いた声で笑った。酷く自虐的な笑みだ。

「違う。」

「え?」

「俺は桜さんにいろんなことをしてもらった。今さっき敬語が使えたのも桜さんのおかげで、レイル力だって料理とか教えてもらってセルティだって優しくされて嬉しかったと思うよ。本当に母さんみたいだった。だから親失格なんてありえないよ。」

桜さんは俺の言葉を聞くと涙を流した。そしてより強く抱きしめてきた。俺は桜さんの背中を優しく撫でた。

「……ありがとう。」

すると桜さんは静かに感謝の言葉を俺に言ってきた。

それから時間は早く流れていった。セルティと弾の勉強に付き合ったり、俺たちの旅の準備をしているとあっという間に三ヶ月の月日が流れた。

今日は俺たちの卒業式だ。そして俺たちが旅立つ日でもある。今は学校の屋上にいる。ここで弾たちを待っているのだ。下を見ると卒業した同級生や多くの生徒が校庭に集まっていた。すると扉が開く音がした。弾かと思い見てみるとそこには深澄が立っていた。

「どうしたんだ？」

「お、お前がここにいと聞いてな。」

「見送りが。」

「そんなところだ。」

深澄の様子が少しおかしい。顔は少し赤いし熱でもあるのか？俺が聞こうとしたとき深澄が話し出した。

「本当にいくのか？」

「・・・ああ。」

「そう、か。」

深澄はまた悲しそうな顔になった。そして次は何かを決心したような顔になった。

「あの！・・・その・・・私はお、お前のことが好きだ！！」

「マジで？」

「マジだ！！冗談でこんなこと言わない！！」

深澄は顔を真っ赤にしていつてくる。正直こっちも驚いている。自慢ではないが告白をされたのは生まれて初めてなのだ。

「そうか、そうだよな。でも俺は・・・」

「分かっている。今はまだ答えなくていい。話せるときがきたらきかせてほしい。」

俺の言葉を遮りながら言ってきた。だがその表情は浮かない感じだ。

「えっと、今は無理だけど俺の方の用事もなるべく早く終わらせる。それで用事が終わったらちゃんと答えを言うよ。いつまでも俺が何も言わなかったら忘れてくれて構わない。」

「分かった。・・・それじゃ。」

「ああ。」

「レイン、また会えるよね？」

「会えるよ。その時はみんなでまた遊びに行こう。」

「うん!!」

深澄は笑顔で頷いた。そして屋上を去った。それに入れ替わるようにして弾たちが入ってきた。

「遅かったじゃねえか。」

「いろいろ挨拶してたら遅くなった。」

「そうか。じゃあ早速行くが問題ないか？」

「ああ無いぜ。」

「大丈夫。」

「問題ありません。」

俺は一人一人の顔を確認しながら言った。

「よし、じゃあ行くぞ!!」

そうして俺たちの新しい物語が始まった。



前に進んだとき（後書き）

とりあえず第一部が完結しました。  
次からは第二部に入ります。

## キャラ紹介

レイン・オルハルト

この物語の主人公。十八歳。白髪で紫の瞳をした長身瘦躯の青年。とても頭がいい。基本的に何事に対しても面倒くさがりで自覚なしのお人好し。誰に対してもタメ口だが桜には敬語を使う。トラックに引かれそうになっている少年を助けて死亡した。アウレオルスに歪み退治を頼まれて転生した。だが転生者ではなく平たくいうと「前世の記憶を持った人間」となっている。歪みを倒すことのできる力である正浄の器の保持者。魔法に関しては全くの素人だったがレイルカに教えてもらって今では自分で魔法を作れるほどの知識を持っている。デバイスの知識も独学で学びオリジナルデバイスを作ったりもできる。戦闘スタイルは主にデバイスを使った近接戦闘を主体としている。対人戦闘を得意として体術、格闘のスキルが異様に高い。幼いことから鍛えている所為か今では魔法を使わずに鉄を両断することができる。魔法は肉体強化や近接戦闘向きの魔法が多い。広域殲滅魔法や砲撃魔法もあるが魔力量はAランク+なので多様はしない。魔力変換資質は凍結。レアスキル「リメイク創換」を持っている。魔法の構成を変えることかできる。構成を壊すことで魔法の無力化も可能。さらにベースとなる魔法を改造して新しく魔法を作ることもできる。魔法を使う時には六亡星の魔方陣が展開されるクロス式（管理局命名）を使う。魔力光は白。現在、管理局にて奉仕活動中。

レイルカ・シーリン

金髪碧眼で陶器のような白い肌を持つ美女。十八歳。誰に対しても

敬語で礼儀正しい。何事に対しても前向きなしせいで取り組む頑張り屋。機会音痴で虫が苦手。中学時代にはその容姿の所為でラブレターを大量に貰ったりファンクラブができたりととても人気があった。だが本人はあまり嬉しく思っただけでなかった。転生者三人を殺してしまった部下の責任をとるために歪み退治をしている。元々は天使だったが世界を渡るときに人間になった。アウレオルスとは祖父と孫のような関係だった。歪みや器に対してある程度の知識を持っているが全ては知らない。お笑いが大好きでよくテレビで見ている。暗いところに一人していると心細くなって誰かに甘えたがることもある。戦闘スタイルはデバイスでの後方支援で遠距離射撃や補助魔法が得意。近接戦闘は苦手。魔法はどんなものでもほぼ全般使うことができる。魔力量はSSランクもある。魔力変換資質は炎熱。レアスキル「動物変化<sup>メタモルフォーゼ</sup>」を持っている。天使の時の力がレアスキルとなったもの。変化するときには体だけで服は変換されない。なのでこの能力が役立つことはあまり無い。本人も多様したことは無い。魔法を使うときは六亡星の魔方陣が展開されるクロス式を使う。魔力光は赤。レインには特別な感情を抱いているがあることを気にしてその感情を自分で抑制している。現在、管理局にて奉仕活動中。

## セルティア・クローウエル

黒目黒髪の美少女。十五歳。愛称はセルティ。口数が少なくあまり感情を顔に出さないクールな少女。だが実際は結構甘えん坊で寂しがりや。少し一般常識に疎いところがあり他人に苦勞をかけることもしばしば。レインのことが大好きで成長したことによって積極的なアプローチをするようになった。魔法を学ぶためにミッドチルダの訓練校に通ったときにティアナ・ランスターとスバル・ナカジマと同室となり以後行動をともしているうちに友達になる。容姿の

所為か告白もされたことがあるが本人はそれを告白と認識しておらず無意識で断っている。口数は少ないが物言いはストレートで他人の心をえぐることもある。負極の器の保持者。過去に住んでいた村が歪みに襲われたことよって器の力を無意識で使ってしまった村で化物扱いをされた。それよって人間不信になるがレインのがんばりもあつて克服した。魔法はスファイアによる射撃や砲撃魔法が得意。それ以外の魔法も器用貧乏にこなせる万能型。魔力光は黒。ミッド式を使う。現在、起動六課にスカウトされライトニング分隊に所属。ポジションは「フロントガード」

## 波多野 棕

くせ毛の茶髪で笑顔のにあう好青年。十九歳。明るく真面目な性格。子供が好きで対応にも慣れていいる。仲間思いでときどき無茶をすることもある。なのはとは幼馴染で今ではお互い意識しあう仲。神の手違いで殺された転生者の一人。旅行中運転をあやまり崖から落ちて死亡。そしてアウレオルスに力を貰い転生。転生したことよつて歪みが発生したがこのことは知らない。原作の知識があり不幸な登場人物を救おうとしている。戦闘では射撃、格闘、防御どんなことでもできる万能型。まさに才能の塊のような人物。ミッド式を使う。レアスキル「現実投影<sup>リアルプロット</sup>」を持っている。アウレオルスから貰った能力で頭に思い浮かべたものを現実に投影できる力。だが生命を作り出すことやそれに関するものは作れない。投影するときにはかなりの集中力が伴う。魔力量はSSランク。魔力光は青。現在は伝説の三提督直属の部隊「シークレット」に所属している（転生者三人で構成されている）。そして起動六課に出向中。

長瀬 和輝

どこにでもいそうな青年。十九歳。歳の割には若干子供っぽい言動と背が女性より少し高い程度なので高校生に間違われることがある。頭で考えるよりまず体出してしまう性分。頭が悪い。フェイトに一目ぼれしている。神の手違いで殺された転生者の一人。旅行中崖から落ちて死亡。アウレオルスに力を貰い転生。原作の知識は持ってない。戦闘ではデバイスを使ったの接戦闘を行う。魔法を使った射撃は苦手。だが突撃などの破壊力と貫通力はとてつもないもの。近代ベルカ式を使う。レアスキル「フォルムチェンジ形態変化」を持っている。アウレオルスに貰った能力で使用すると蛍日の髪、赤銅色の肌になり相手からエネルギーを吸い取り自分の力に還元することができる。吸い取る行為は任意で解除できる。ただし放たれた魔法などは還元できない。魔力量はA A Aランク。魔力光は山吹色。現在は伝説の三提督直属の部隊「シークレット」に所属している。そして起動六課に向中。

一条 仁

少し灰色っぽい髪の青年。十九歳。無口でどこか威厳のある顔をしている。表すなら日本男児という言葉がしっくりくるような容姿をしている。一見、厳しそうな面持ちであるが穏やかで優しい性格。はやてとは遠い親戚にあたり幼いことから面倒を見ていた。神に殺された転生者の一人。旅行中に崖から落ちて死亡。アウレオルスから力を貰い転生。原作の知識は持っていない。戦闘では近接戦闘と魔法を合わせて相手に協力的な攻撃を与えるパワーアタッカー。誘導弾の射撃が得意。古代ベルカ式を使う。レアスキル「サイキック超能力」を持

っている。アウレオルスに貰った能力で発火能力やベクトル操作などができる。長時間の使用はできず一瞬で効果が失われるものもある。魔力量はSランク+。魔力光は緑。現在は伝説の三提督直属の部隊「シークレット」に所属している。そして起動六課に出向中。

## 望月 弾

濃紺の髪をした青年。十八歳。活発で明るく誰とでも分け隔てなく接することができる気さくな性格。顔が広くかなりの人数の友人がいる。イケメンでモテることはあるが付き合ったことはない。頭が悪い。現在ひそかに思いを寄せている人がいる。中学時代にレインと出会い以後ともに行動しているうちに親友と呼べる仲間となった。卒業後はレインに頼み込み魔法を学ぶためにミッドチルダの訓練校に通う。そこでセルティをの面倒を見るようにレインに頼まれていた。セルティの友人であるティアナ・ランスターとスバル・ナカジマとも行動をとみにしていた。戦闘では近接、射撃と両方を使いこなすオールラウンダー。訓練校では射撃を中心に使って訓練していたが卒業後レインからデバイスを貰い近接戦闘も使うことが多くなった。近代ベルカ式を使う。魔力変換資質は重力と特異な能力を持っている。魔力光は紫。現在は起動六課にスカウトされ勤務している。スター分隊に所属。ポジションは「アタックウイング」

## 九曜 明日香

淡い橙色の髪をした綺麗な女性。十八歳。勝気な口調に少し尊大な態度で負けず嫌いな性格。口調はともかく普通に優しい。ツンデレ。

レインとは中学時代にレインと出会いともに行動していくうちに仲良くなった。よくレインにからかわれていた。弾と深澄は小等部からの友人。卒業後は高校に進学したがとある理由により管理局に就職した。管理局では執務官となり数年で多くの事件を解決した。本局では人気がありその人気は雑誌で取り上げられるほど。魔法の才能がずば抜けて高い。魔力量はA A Aランク。魔力光は紅色。エースオブエースに継ぐ逸材だといわれている。ミッド式を使う。執務官の仕事だけでなく新人の育成にも協力して訓練校を訪れて教導することもある。弾とはこのときに再開を果たしている。現在は本局に勤務中。階級は二佐。

## 霧島 深澄

黒目黒髪の大和撫子を思わせる女性。十八歳。男口調でクールな性格。生徒会長を務めるカリスマ性があるとても生真面目な人間。家事全般をこなすことができ世話を焼くことも好きで家庭的な一面もある。可愛いものも大好きだが本人は指摘されることを嫌っている。中学時代にレインと出会い以後ともに行動しているうちに仲良くなる。父親が床に伏していて借金のかたに売られようとしていたところをレインと弾に助けられる。それによりレインに恋愛感情を持つようになる。父親が床に伏していたのは蒐集によりリンカーコアが損傷していたため。卒業後は高校に進学し普通の高校生活を送る。卒業式の日レインに告白するが返事は貰っていない。現在は大学に通っている。

## エフィア・プリフィオニス

銀髪紅眼の美女。年齢不明。無人世界の遺跡の中で出会った女性。歪みを倒す力を持つている模様。歪みや器について何かしらの知識を持つている。「願い星」と呼ばれている。

## アストール

エフィアの記憶の中に出てきた水色の髪青年。それ以外は分かっていない。現在一番謎めいている人物。

## 佐伯 桜

雪乃の姉でレインの叔母。三十七歳。セミロングの黒髪に十人が十人振り返るような綺麗な女性。レインの両親が死んだ後自分の家へと引き取った。レインが唯一敬語を使う相手。三十五の時に結婚している。

## 泉 源一郎

レインの祖父。いつも縁側で煙草をふかしてのんびりと生活している老人。何をやっていたかは分からないが莫大な財産がある。



佐伯 葉

桜の夫。二年前に結婚。会社に勤めるサラリーマン。桜に一目ぼれして以後一年交際し結婚に至った。レインのことや魔法のことは知らない。三十五歳。

ユキノ・オルハルト

レインの母親。長い黒髪に十人が十人振り返るような綺麗な女性。十九で結婚して二十歳でレインを生む。そのころから癌にかかり闘病する。レインが十歳のときに交通事故で死亡。享年二十九歳。

レオン・オルハルト

レインの父親。金髪でがっちりとした体格の男性。大雑把な性格で基本的に細かいことは気にしない性格。家族のことをとても愛している。レインが十歳の時に交通事故で死亡。享年三十歳。

デバイス

エリス

レインのデバイス。官制人格は女性。ことある事にレインのことを罵倒している主人を敬わないデバイス。だがそのたびレインにスク

ラップにされそうになったりしている。デバイスにしてはよくしゃべるほう。レイン以外に対しては礼儀正しく接している。レインがデバイスの知識を覚えたことよって改良されパワーアップした。二振りの刀になるショートモードと二メートルほどの太刀になるロングモードに切り替えられるようになった。籠手の甲は魔力が噴射できるようになった。バリアジャケットは青い半袖のシャツに黒いジーンズ。マントと指無しグローブと小型ポーチがついている。最近レインがデバイスの知識を覚えたので変に改造されないか警戒している。待機状態はバングル。

アルク

レイルカのデバイス。官制人格は男性。武士のような口調で忠誠心の高いデバイス。誰かの名前を呼ぶときは最後に殿をつける。落ちていて口数は少ない。レインによって改良されパワーアップした。超長距離射撃型の太弓になるバリスモードと盾と片手剣になるヴァルキリーモードになることができる。だがレイルカは近接戦闘が苦手なので普段ではあまり使わない。バリアジャケットは赤を基調としたスーツのような上着に白いロングスカート。頭に薔薇を模した髪飾りをつけていて腰にポーチがついている。待機状態はネックレス。

エクスシア

セルティのデバイス。官制人格は女性。元気潑刺な子供っぽいデバイス。セルティが訓練校を卒業した後レインから卒業祝いとして貰った。レインのオリジナルデバイスでもある。魔法処理能力が高く

発動がスムーズになっている。武装形態は紫色の錫杖。錫杖の先端に紫色の宝石のがついている。その周りにはリングついており、リングには長細いひし形の水晶が六つついている。バリアジャケットは白い軍服にミニスカート。黒いニーソックスをはいている。待機状態はイアリング。

## ヴァング

弾のデバイス。官制人格は男性。気さくに話しかけてくるおしゃべりなデバイス。弾が訓練校を卒業した後レインから卒業祝いとして貰った。レインのオリジナルデバイスでもある。魔法処理能力が高く魔法の発動がスムーズになっている。武装形態はガンブレード。銀色の刃に銃口がありそこからスフィアを打ち出すことができる。柄の部分は少し斜めに曲がっていてトリガーがついている。バリアジャケットは白い長袖のジャケットに黒いジーンズ。待機状態はフアッシュンリング。

## デュアルスライサー

明日香のデバイス。官制人格はなし。本局で作られた凡庸型デバイスの試作品。データ収集のモニターに明日香が選ばれた。様々の状況に適応できることを目的として作られた。武装形態はスライサー。少しだがスライサーの大きさを変えることができる。数も最大十個まで増やすことができる。バリアジャケットは黒いコートに黒いジーンズ。待機状態はブレスレット。

## セフィロス

棕のデバイス。官制人格は男性。主人を慕うある意味普通なデバイス。十年以上もの間愛用してきている。武装形態は黒い剣。バリアジャケットは白いコートに白いズボン。待機状態はカード。

## サンライト・ハート

和輝のデバイス。官制人格は男性。チンピラ口調で態度のでかいデバイス。十年以上もの間愛用してきている。武装形態は銀色の槍。バリアジャケットは銀色のロングコートにズボン。待機状態はカード

## グロウイル

仁のデバイス。官制人格は女性。クールな口調の静かなデバイス。十年以上もの間愛用してきている。武装形態は赤黒い大剣。バリアジャケットは金色の騎士甲冑。待機状態はカード。

## キャラ紹介（後書き）

次回からのキャラ設定です。

## 動き出す物語

ミッドチルダ 臨海第八空港近隣 廃棄都市街

廃墟となったビルの上に四人の人影があった。四人はデバイスをいじっていたり準備体操をしていたりしていた。今日はここで魔導師試験が行われるのだ。

「スバル、あんまり暴れてると試験中にそのオンボロローラーがいつっちゃうわよ。」

「もう、ティアく嫌なこと言わないでよ。」

シャドウボクシングをしていた少女は嫌そうな顔をして振り向く。少女の名前はスバル・ナカジマ。ボーイッシュで活発な印象がある。先ほどから自らのデバイスから目を離さない少女はティアナ・ランスター。彼女はスバルの言葉を無視して時計を確認している。

「ねえ。弾からもなんかいつてよ。」

「ん？ティアナはツンデレなんだから仕方ないだろ。」

「そっか。」

「誰がよ！！」

ティアナにつっこまれた青年は望月弾。濃紺の髪にどこか軽薄そうな笑みを浮かべている。

「もうそろそろで始まる。」

三人の後ろから話しかけてきた黒い髪の少女。彼女はセルティア・クローウェル。物静かな声で試験が始まることを伝えてきた。すると頭上にモニターが開かれた。

「おはようございます。魔導師試験の受験者さん、四名そろってますか？」

「はい。」

モニターには茶色の制服を着た小さな子供が映し出された。

「確認しますね。時空管理局陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士と望月弾二等陸士とセルティア・クローウェル二等陸士。」

名前が呼ばれるとそれぞれが返事をする。

「所有してる魔導師ランクはCランク。本日受験するのはBランクへの昇格試験でよろしいですか？」

「はい。間違いありません。」

「本日の試験管を勤めるのは私リインフォース？空曹長です。よろしくですよ。」

「よろしくお願いします。」

四人は敬礼しながら挨拶をした。その上空には一機のヘリが飛んで

いた。その中から茶髪の女性が顔をのぞかせていた。

「お、やっとなるな。ラインもちゃんと試験管してるし。」

「はやてドア閉めなよ。モニターでも見られるんだし。」

「そやな。」

茶髪の女性はボタンを押して扉を閉める。女性の名前は八神はやて隣にいる金髪の女性はフェイト・Ｔ・ハラウン。どちらもＳランクを超える魔導師で管理局で知らないものはいないだろう。

「この子達のはやての気になってる子達？」

「うん。四人ともなかなか伸びしろがありそうない素材や。」

「今日の試験の結果を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「最終的な判断はなのはちゃんに任せるけど。」

するとそこでフェイトの携帯から着信音が鳴り始めた。

「はい。こちらフェイト・Ｔ・ハラウン執務官です。はい・・分かりました。すぐに向かいます。」

会話が終わると携帯をしまいフェイトは席を立った。

「どしたん？」

「ここから十キロ先のところで魔力反応が確認されたらしいんだ。」



今からその調査に行つて来る。」

「そうか。気をつけてな。」

「うん。バルディッシュ。」

『セットアップ。』

フェイトの体が光に包まれバリアジャケットが展開された。そしてドアを開いてフェイトは飛び出した。そのまま飛行魔法で現場に向かつていた。

「行つてらっしゃい。お、こつちも始まるようやな。お手並み拝見や。」

はやては再びモニターに目を戻した。

同刻 ミッドチルダ郊外

先ほどの試験会場から十キロ離れたところ。この辺りにも廃棄都市が広がっていた。そしてその廃れた都市を歩く二人の人影があった。

「ふああゝ眠いゝ」

白い髪の男は口に手を当てて大きな欠伸をした。男は長身痩躯で肌は男とは思えないほど白かった。

「また寝不足ですか？」

男に話かけた人物は異常なまでに整った容姿をしていた。金髪碧眼

で陶器のように白い肌。誰が見ても美人だというだろう。

「ああ。そうだ。」

「もうちゃんと睡眠くらいとってくださいよ。」

「ちゃんと四時間は取ったぞ。」

「少なすぎです。何してたんですか？」

「あいつらの最終調整だ。思った以上に時間かかっちゃって。」

場所が違えば仕事の話と間違えそうだ。だが二人がここにいるのは仕事などではなく個人的な用事があったからだ。

「そういえばもう三年も経つんですね。」

「早いな。時間が経つのは。」

二人はどこか懐かしむように言う。

「そういえばこの後はセルティたちに会いに行くんですか？」

「あゝまあ、一応行くかな。」

「どうするんですか？」

「連れてはいけないな。三年間訓練したっていつてもまだまだ俺たちについて来れないと思うし、実戦経験とかも足りないと思うしな。」

「でもセルテイが諦めてくれるでしょうか？あなたについて行くためにがんばっていた訳ですし。」

「そうなんだよな。どう言い訳すればいいかまだ決まってるよ。昨日も考えてたんだが全然思いつかないんだよ。」

「レインはそういうの得意でしょう。今からがんばって考えればいじゃないですか。」

すると突然廃墟ビルから爆音と煙とともに何かが飛び出してきた。そこには黒い毛並みの九尾の狐がいた。

「今からがんばって考えると俺は相当がんばらないといけないみたいだな。レイルカ。」

「そうみたいですな。」

レイルカは少し目を逸らして答える。

「はあ、それじゃさっさと終わらせて言い訳考えるとするか。」

「そのときは手伝いますよ。」

「「セットアップ!!」「」」

二人はそれぞれのデバイスとバリアジャケットを展開して黒い九尾に向かっていった。

試験開始から三十分が経過した。四人は見事なチームワークで次々とターゲットを破壊していった。

「よし、全部クリア。」

ティアナがターゲットの破壊を確認した。すぐに弾丸の入れ替えをする。

「次はどっからだ？」

「上よ。けど上がったらすぐに集中砲火がくるわよ。」

「どっするんだ？」

「私とスバルがクロスレンジで一気にスフィアを瞬殺するからセルティと弾は困ね。」

「はいよ。」

「分かった。」

「了解。」

しばらくして下の橋につながっている穴からワイヤーが伸びてきた。ターゲットはそちらに集中する。そして上がってきたのはティアナ

のアンカーガンだった。それと同時に橋の横のビルにワイヤーが伸びる。それにはセルティと弾がつかまっていた。

「こっちだぜ。」

「スプレットシュート。」

弾とセルティは狙いをつけずにスフィアを放つ。それに当たって何体かのターゲットが破壊される。ターゲットは狙いを変えてセルティたちに向かう。だが見えない何かによって一番遠くにあったターゲットが破壊された。

「リボルバーシュート!!」

「クロスファイアシュート!!」

魔法が解け姿を現したティアナとスバルが一気にターゲットを破壊した。

「ごくらうさん。」

「おつかれ。」

「ナイス、ティア。一発で決まったね。」

「ま、あんだけ時間があればね。」

スバルは作戦が決まったのが嬉しくて少し浮かれている。アンカーガンを回収したティアナがスバルの方を見るとまだ破壊できていなかったターゲットがスバルを狙っていた。

「スバル！！避けなさい！！」

「わぁ！！」

ティアナはスバルを突き飛ばすようにしてターゲットの攻撃を回避させた。そのとき足を捻ってしまった。

「撃ちもらしか！」

弾はすばやくターゲットを破壊した。

「ティア！！大丈夫！！」

「大丈夫よ。これくらいっ！！」

無理に立ち上がろうとしたが足が痛くてまたすぐに蹲ってしまった。

「おい無理すんな。セルティ治療してくれ。」

「分かった。」

そういつてセルティはティアナの足を見ようとするとティアナはそれを拒んだ。

「今ここで治療なんてしてる暇なんてないわよ。あんたたちはとつとと行きなさい。」

「行きなさいって、ティアはどうするの！ー！」

「私はもう無理よ。走れないんじゃない。ゴールにたどり着けない。足手まといになんかなりたくないしね。」

「ダメ！」

突然大きな声が出たのでその声の方に視線が集中した。声の主はセルティだった。

「そんなのダメ。みんなでゴールするって言った。」

「そうだよ。諦めちゃダメだよ。」

「だったらどうするのよ。わずかな時間で走れない抱えながらどうやってゴールするのよー！」

「バカ。何のためにチーム組んでると思ってんだよ。こつこつとき助け合うためだろ。違うか？」

「そう、だけど。」

「俺にいい考えがある。まあつっても賭けみたいなものだけどな。やるか？」

「やる。」

「私も。」

そして三人はティアナの見る。するとティアナはどこか諦めたような表情になった。

「好きにきなさい。」

「よし、全員OKだな。じゃあ作戦を説明する。」

なにもない廃れた橋の上。そこは妙に静まりかえっていた。

（全員配置についたか？）

（うん。）

（準備OKだよ。）

（それじゃ作戦開始！！）

その声とともにティアナを背負った弾が橋の上を走り出した。するとそれを感知した大型スフィアが攻撃をしてきた。その攻撃は弾たちに当たる。それに当たると弾たちは消えてまたティアナをおぶった弾が出てくる。何人も。ティアナの幻術魔法だ。

「頼むぜ。スバル、セルティ。よし俺たちもそろそろ行くぞ。」

「分かったわ。」

そういうと弾はティアナを背負った。今回の作戦は弾たち二人が囷になっている間にスバルとセルティが大型スフィアを破壊するといふものだ。大型スフィアは二機ありスバルとセルティがそれぞれ一機ずつ倒さなければならぬ。どちらかが破壊できなければその時点で全員不合格となる。しかも受験者の大半がこの大型スフィアによって脱落している。弾たちには分の悪い賭けだ。



「走るぞ。ちゃんと制御してるよ。」

「分かってるわよ。」

弾たちは幻術魔法に混じって走り出した。二機のスフィアによって次々と狙撃されていくが弾はそれを器用に避けていた。そして二機から同時に狙撃された。

「くそっ！！グラビティ・フィールド！！」

すると弾の周りに紫色の丸い障壁が現れた。スフィアからの狙撃がその障壁に当たるとその障壁に沿うように攻撃が曲がった。弾は魔力を重力に変換できる特異な能力の持ち主だ。今のは重力で狙撃の軌道を強制的に捻じ曲げたのだ。

一方そのころスバルはビルの一角で突撃の準備をしていた。

「ウイング・ロード！！」

魔力で一本の道ができた。

「絶対成功させる！！」

そういつて決意を決めたスバルはクラウチングスタートの構えを取った。

「いけええええええ！！」

スバルの体が思いつきり加速した。ウイング・ロードの上を猛スピードで滑っていく。そのまま壁をぶち破った。その勢いを保ったま

まスバルは大型スフィアを殴る。魔法障壁に当たるがめいっばいの力を込めて殴った。そして障壁を引きちぎるようにして破った。スフィアが攻撃してきたので距離をとる。

「一撃必倒！！」

スバルの足元にベルカ式の魔方陣が現れ前には魔力が溜められていた。

「デインバスター！！！」

その言葉とともにスバルは思いつきり拳を前に突き出した。水色の砲撃が大型スフィアに向かって放たれた。それに当たると大型スフィアは粉々に爆散した。

「やった〜！！できた〜！！」

スバルは作戦を遂行できたことに大いに喜んだ。

スバルがビルに突撃するころセルティは大型スフィアがあるビルのすぐ隣のビルに来ていた。そこでセルティは大きく深呼吸をする。そして目の前にある壁に向かって杖を構えた。セルティの足元にミッド式の魔方陣が現れる。そして三つのスフィアが形成される。

「貫いて、トリニティブレイカー！！」

スフィアからレーザーのような砲撃が放たれる。砲撃は壁を貫き大型スフィアに向かっていった。そして障壁に当たる。この砲撃は通常の砲撃魔法と比べて威力が弱い。だがそのかわり三つの砲撃による貫通力が高い。三つの砲撃は全て同じところに当たっておりだん

だん障壁が罅割れてきた。そして障壁は砕け大型スフィアを貫いた。

「作戦成功。」

大型スフィアを破壊した四人は今猛スピードでゴールを目指している。ティアナは弾に変わりスバルが背負っている。その左右に弾とセルティが並走している。ゴールに近づいていると最後のターゲットが見えた。

「お願い!!！」

「任せなさい!!！」

最後のターゲットはすぐに破壊できた。

「それじゃあ行くよ!!！魔力全開!!！」

スバルは弾とセルティの腕を掴み猛スピードでゴールに向かっていった。そのため弾とセルティは下半身が浮く状態となった。

「あと二十秒!!！」

「これなら間に合う!!！」

とそこでセルティがあることに気づいてしまった。

「どっやっつて止まるの?」

その瞬間二人の表情が固まった。

「弾どっすればいいの!」?

「え!?!もう気合でなんとかしろ!」

「あんた止まるときのことを考えておきなさいよ!」

「仕方ねえだろ!?!こんなにスピード出るとは思ってたんだから。」

「う〜〜!」

そうこうしているうちにゴールは目の前に迫っていた。

「くくく、うわああ!」

ゴールを通過しそのまま後ろの壁に激突しようとしたとき足元から眩く光だし緩衝材のようなものと桃色のネットが出てきて四人はそれによって壁との激突を免れた。

「いつてて。」

「はあ。」

「う〜〜」

「死ぬかと思った。」

スバルはネットに絡まって逆さになって、ティアナは緩衝材のようなものにゆられていて、弾は足が絡まって宙吊り状態、セルティはネットの上でへたり込んでいた。

「もう四人とも危険行為で減点です！！がんばるのはいいですけど怪我をしては基も子もないのですよ！！そんなことでは魔導師としては失格です！！」

空から降りてきた空曹長を四人は物珍しそうに見ていた。なぜなら彼女は人形のように小さかったからだ。空曹長というよりリカちゃん人形の友達というほうが信じられるだろう。

「まったく。」

「まあまあ、ちょっとびっくりしたけど無事でよかった。とりあえず試験は終了だね。お疲れ様。」

そういいながら空から白いバリアジャケットをまとった女性が降りてきた。そして女性が手を少し動かすと四人の体が浮き魔法が解除される。四人はゆっくりと地面に下ろされた。

「リンもお疲れ様。ちゃんと試験管できてたよ。」

「わぁ〜い。ありがとうございますなのはさん。」

「それとランスター二等陸士。怪我してるのは足だね。治療するかブーツ脱いで。」

「それなら私がやります。」

そういうとリインはティアナに近づいて足の治療をし始めた。

「なのはさん。」

「うん？」

「あ！？えと……高町教導官……一等空尉。」

「なのはでいいよ。みんなそう呼ぶし。四年ぶりかな、背伸びたねスバル。」

「あの……えつと……うっ……」

スバルは憧れであるなのはに再開したことによって感極まったらしく泣き出してしまった。なのははスバルの頭に手を置いて優しく撫でた。そして試験は終了した。

ざくつという音とともに黒い九尾に白い剣が刺さった。白い剣が刺さった九尾は霧のように霧散していった。黒い核を残して。

「よし終わった。」

「なんだか最近また歪みが強くなったような気がします。」

「そうか？まあそれだったらそれだけ世界が歪んでるってことだな。」

『主よ、こちらに近づいてきているものがある。』

俺はアルクがしゃべったので核を取ろうとした手を止めた。

「もしかして管理局でしょうか？」

「そういえばここミッドチルダだったな。」

「どうします？」

「逃げるに決まってるんだろ。」

『それは無理みたいですよ。』

今度はエリスが言ってきた。

「なんでだ？」

『もう視認されている距離ですから。』

俺は空を見る。するとこちらからも人が飛んでくるのが見えた。それはだんだん近づいてとうとう目の前に来てしまった。

「こちら時空管理局のフェイト・T・ハラOWN執務官です。ここで何をしていたのか答えてください。」

フェイトってテストロッサか。随分と懐かしいやつに会うな。

「いやはや、世界は案外狭いのもしれねえな。」

「どういうことですか？」

「えっと、じゃあ覚えてるかどうかわかんねえけど、久しぶりでいいのか？」

「ん？その顔・・・もしかして！」

このとき物語が動き出した。



動き出す物語（後書き）

新章開始です。

人生思いどおりには行かないもんだ

「へえ、覚えてたんだな。」

「レイン・オルハルトだったよね。」

「正解。」

会った回数は手で数えるほどなのによく覚えていたもんだ。

「あなたたちはここで何をしていたの？」

「三年前に俺が何をやっているかは教えたはずだけど。」

そういうとテストロッサは俺が何をしていたかが分かったようだ。

「それでそっちは何しに来たんだ？」

今度は俺がテストロッサに問いかけた。

「ここで魔力反応が見られたからその調査に来たんだ。」

なるほどそれで俺たちを見つけたのか。結界は張っておくべきだったかな。

「それで俺たちをどうするつもりなんだ？」

「ミッドチルダで無断で魔法行使することは法律で禁じられている。だから一度私と管理局に来てもらおう。」

「面倒な法律だな。別に如何わしいこととしてたわけじゃないんだから見逃してくれてもいいだろ？」

「何と戦ってるかも明かさないのは十分如何わしいと思うよ。」

俺の願いはばっさり切り捨てられた。三年前のことでも根に持つてるのか？さて、どうしたものか。このままついていけば明らかに面倒なことになるしな。

「よし、逃げよう。」

「え！？」

「レイル力行くぞ。」

「あ、はい。」

「ちよつと待って！！！」

俺はテストロッサに背を向けて逃げようとしたがすぐにに回り込まれてしまった。

「なんだよ。この後色々やる事があるんだ。悪いがまた今度にしてくれ。」

「そつちの都合で考えないでよ！！局員を前にしてなんで逃げようって発想になるの！？」

「いや確実に面倒なことになることが目に見えてるし。」

「あゝもう逃げるんだつたら力尽くで連れて行くからね!!」

テストロッサはデバイスを構えて言ってきた。するとそこでレイル力が念話で話しかけてきた。

(どうした?)

(あのこの際一度管理局に行ってみてはどうですか?)

(なんで?)

(この状況で彼女から逃げるのはできないことはないでしょうがかなり時間がかかると思います。それに増援を呼ばれるかもしれませんし。ここは素直に従ったほうが早く済むのでは?)

確かにレイルカの考えにも一理あるな。さっきの戦闘で少し疲れたし、ここで管理局と追いかけてこもしないしな。

「分かった。それじゃとつと連れてつてくれ。」

「え?うん。ちょっと待つてね。へり呼ぶから。」

そうとうとテストロッサは何か端末のようなものを出しどこかに連絡しているようだ。そして連絡し終わるとテストロッサはバリヤジャケットを解除した。テストロッサがバリヤジャケットを解除したので俺たちも解除した。一瞬今逃げればいいんじゃないかと思っただがやめた。するとテストロッサが近づいてきた。

「十分くらいしたらへりが来るからそれまで待つてね。」

そういつと少し離れたところで空を見つめていた。ヘリが来る方向でも眺めているのだろう。それから約十分。テストロツサのいうとおりヘリがきた。ヘリが下りてくると砂煙が舞い俺は目に入らないように少し目を細めた。

「こついつのを見ると俺は今別の世界にいるんだなって実感するよ。」

「そうですね。」

レイルカと呑気な会話をしているとヘリは着陸して側面にあるドアが開き中から茶髪の女性が出てきた。

「お待ちせ、フェイトちゃん。それに久しぶりやなあレインくん。」

「久しぶりだな。たぬ……八神。」

八神は柔らかな笑みを浮かべてこちらに話しかけてきた。とりあえず普通に返した。

「今、狸って言おうとせんかった？」

「気のせいだろ。」

「ほんまかいな。まあええわ。そっちはレイルカさんやったっけな。」

「あ、はい。お久しぶりです八神先輩。」

俺は八神がレイルカのことを知っていたことに驚く。レイルカとは

あまり接点はないように思えたが。そういえば海水浴のとき一緒に風呂に入ってたっけ。

「おい、八神連れて行くんだったら早くしてくれ。」

「分かった。ほな乗りや。」

そういうと八神とテストロッサはへりの中に入ってく。俺とレイルカもそれに続いてへりの中に入っていく。それにしても今日は顔見知りによく会うな。世界が狭いというのは満更でもないかもしれないな。

「あれ、お前ひょっとしてレインか？何でお前がここにいるんだ？」

本当に満更でもないかもしれない。

「えっと小野だったか？」

「誰だそれは？」

「お前の斜め前にいたかもしれないやつだ。」

「いたかもしれないやつってなんだよ。ていうかお前って言うてる時点でもう別人だろ。」

弾の向かい側の席に座りながら答える。久しぶりにあったのでとりあえず弄ってみることにした。

「それもそうか。久しぶりだな。」

「お、やっと分かったか。」

「おう。お前みたいな馬鹿面そうそついねえからな。」

「それが久しぶりにあった親友に対して言う言葉か!！」

「は?」

「なにその目!? やめろよ! ! なんか自分だけ親友だと思い込んでた悲しいやつみたいになってんじゃん! !」

やっぱりいいね。こういふ相手がいると。うん。

「ハハハ。」

「笑うな! !」

一通りツッコミをし終えた弾は息が荒くなり肩を上下させていた。そしてどこか諦めたような感じで席についた。

「それで何でここにいるんだ?」

「えらく急な話題の変え方だな。」

「うるせえ。で、何で何だよ。」

「そうだな。しいて言えばテストロッサに誤認逮捕されたからかな。」

「ちょ、ちょっと人聞きの悪いこと言わないでよ。」

前の席からテストロッサが言ってきた。

「というのは冗談でちょっとした野暮用だ。」

「だからその用を聞いてんじゃねえか。」

「ま、それは後で話すよ。お前にも関係あるからな。」

「え？妙に気になる言い回しだな。」

ミッドチルダに來たのは歪みを倒すためだけではなく弾たちに会うのも含まれていた。

「逆に聞くがお前は何でいるんだ？」

そういつて俺はヘリの中を見渡す。弾の横には二人の少女が座っていた。一人はオレンジ色の髪で優等生という雰囲気を漂わせている。もう一人は青色の髪でボーイッシュな感じだ。どちらにも疲労の色が見えオレンジ色の髪の少女は足を怪我していた。それで今乗っているのは管理局のヘリだ。そして俺はひとつの結論にたどり着いた。



「ああ、痴漢か？」

「さも当たり前のように人を犯罪者扱いするな！！二人もなんでもんな目で見るとんだ！？さつきまで一緒にいただろお前ら！！」

「それは・・・」

「そうだけど・・・」

二人は弾から目を背けながらいった。一応、冗談で言ったんだが二人には思い当たる節があるようだ。

「この反応を見るとお前がなにやってたかは想像つくが今は置いとこう。それで何でいるんだ？」

「・・・さつきまで魔導師試験を受けてたんだよ。今はその帰りだ。」

だからこのでかいへりに乗ってたのか。

「さつきから気になってたんだが何で俺の腕にくっついてんだ。セルティ？」

セルティは俺の腕に抱きついて嬉しそうに微笑んでいた。弾を弄っていたときに抱きついてきたのは気づいていたがいつまでも離れてくれないので聞いてみた。

「男の人はこうすると喜ぶって聞いた。」

「世間一般ではそうだよ。」

「レインは嬉しくない？」

「俺はバカップルの真似事はしたくないからな。」

「????？」

セルティは言葉の意味がいまいち理解できていないようだ。

「とりあえず離れてくれ。」

「嫌。」

「嫌じゃなくて。」

「嫌です。」

「こづいづことは時と場を考えてだな。」

「嫌……ですの。」

「ですのってなんだ？できないんだったらやるなよ。」

俺の要望はセルティの三段活用？によってことわららた。どこで覚えただろうか。使えてなかったけど。俺では無理そうなのでレイルカに助けを求めた。

（レイルカお前からもなんとか言ってくれよ。）

（ご自分でなんとかしてください。）

なぜかレイルカにも俺の要望は断られた。

（何怒ってんだよ。）

（別に怒ってなどいません。それにレインが言って駄目なら私が言  
つたって無理ですよ。）

いやどちらかというレイルカの方が言うこと聞きそうなんだけど。  
思ったが口にはしなかった。そして俺は大きなため息をつきなが  
らセルティのことはそのままにしておくことにした。

「にしてもあんたらえらい仲ええな。」

すると前の座席がクルリと周り八神が話かけてきた。

「まあ中学からの付き合いだからな。」

「それやったら私らの後輩やん。」

「え？弾が後輩ってどういうことですか？」

すると青色の髪の少女が食いついていた。

「あれ言っ  
てなかったっけ俺八神先輩と同じ学校に通ってたんだぜ。」

「うそ……」

「初耳だよ。」

この事実は二人とも驚いているようだ。まあ何を驚いているかは分からないが。

「それより八神。なんでレイルカは知ってるのに弾は知らなかったんだ？会ったことはあるはずだが。」

「そやったっけ？いつあったん？」

「えっとそれは海水浴のときに・・・」

「旅館であんたらの連れと一緒に女風呂を覗こうとしてあんたに桶をぶつけられた哀れな犯罪者だ。」

「な！？レイン！？」

俺は弾の言葉を途中で遮り説明してやった。すると八神は思い出したようだ。そして向かい側の少女二人は弾に軽蔑の視線を向けていた。

「俺に恨みでもあるのか！！」

「恨み？失敬な。俺にあるのは純粋な遊び心だ。」

「人を貶めてる時点で純粋とはいわねえよ！！」

あれだけツッコんだのにまだそんなに元気があったのか。

「はやてそろそろ。」

「分かった。みんな、そろそろ目的地につくからな。」

そういうと八神は座席を回転させて前を向いた。それを聞くと弾はぐったりとした様子で席に着いた。あ、そういえば言い訳考えてなかったな。

「ほな、私たちはこの子達と話があるから別の部屋で待つといてな。ライン。」

「はいです〜それではついて来てください。」

八神に呼ばれて出てきたのは人形ほどの大きさを管理局の制服をきた少女？だった。

「このちっさいのはなんだ？」

「ちっさいのとは失礼ですね。ラインにはラインフォース？という名前があるんです。」

これがラインフォース？

「俺の知ってるやつはもっとでかかったはずだが、縮んだのか？」

「それはアインお姉さまのことです。」

「アイン？」

「アインです！！それじゃあお馬鹿な殿様のギャグですよ！！」

「はいはい事情は大体分かったからとりあえず案内してくれ。」

「ほんとに分かってるですか？」

そろそろ弄るのも飽きてきたので案内を頼んだ。弾たちとは別の方向へと進み通路の突き当たりにある部屋に案内された。部屋を見渡すと中央にソファが向かい合うように置かれていた。外装から見るに応接室のようだ。

「それではソファに座って待っててくださいです。」

そついうとちっさいリインフォースは部屋を出た。俺たちはとりあえずソファに腰を下ろした。

「にしてもこんな場所につれてこられるとはな。俺はてつきり取調室に連行かと思っただが。」

「なんでですか？」

「この世界では俺たちは極端な言い方をすれば犯罪者だからな。」

「ああ、そうでしたね。ではなぜこの部屋に？」

「向こうは何か聞きたいことでもあるんだろ。取調室じゃないのは

「こちらに警戒させないためだろう。」

まあ向こうが聞きたいことは分かっている。話す気はないが。そこで会話が途切れ無言の時間が続く。そして三十分ほどしたとき後ろのドアが開いた。

「待たせてごめんな。」

そういいながら八神入り後からテストロッサと高町が入ってきた。三人は向かい側のソファに腰を下ろした。

「とりあえず自己紹介と行こか。私は八神はやて二等陸佐です。」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

「高町なのは一等空尉です。」

八神から順番に名前と階級を言ってくる。一応、知っているが仕事上やっておかなければならないのだろう。

「レイン・オルハルトだ。」

「レイルカ・シーリンです。」

「よろしゅうな。フェイトちゃん。」

八神がそういうとテストロッサは何かの端末を出し操作する。操作が終わるとその端末をテーブルの上に置いた。そして端末から電子的な光がでてモニターになった。それにはある人物が移っていた。

「お、これは見事な石頭。」

「いきなりご挨拶だな。」

モニターに移っていた人物は三年前にあった執務官だった。いきなり俺が皮肉を言ったのでご機嫌は斜めのようだ。

「はあ、まあいい。早速本題に入る。これを見てくれ。」

そして映し出されたのは何かの画像のようだ。ぼやけていてよく見えないが人らしきものが移っていた。そして次の画像に変わる。今度はもつとはつきりとした画像だった。さきほどの人物の後ろ姿が映っている。その人物は俺だった。だがそのことを口にはしなかった。また次の画像に変わる。今度は黒い大きな生物が移っていた。それは間違いなく歪みだった。

「ここ数年、ミッドチルダ郊外や管理世界で二人のアンノウンとネクロの目撃が増えている。」

「ネクロ？」

「その生物の名称だ。アンノウンとネクロの戦闘で近隣の集落や市街地などに被害が出ている。」

「へえ。」

「そしてその被害の修繕費などは全て管理局が負担している。」

「そりゃ大変だな。」



「人事みたいと言っな！！君たちがやったんだろ！！」

執務官殿もとうとう我慢できなくなったのかきれた。

「まあまあそう怒るなよ。えっと名前なんってっただけ？」

「クロノ・ハラオウンだ！！」

「そうそうクロ助君。」

「違う！！」

「はいはい。それで俺にどうしてほしいんだ？言っとくが修繕費全額払えっっていうのは無理だからな。」

「そんなこと分かっている。本来なら建造物破壊と魔法の無断使用で逮捕するところだが今回は特別措置をとることにした。」

「なんだそれ？」

「君たちには更正措置として新設される部隊機動六課で働いてもらう。」

その言葉には八神たちも驚いたようだ。このことは知らなかったらしい。

「えゝ面倒だな。」

「ちなみに断った場合君たちは逮捕だ。」

「それって脅迫？」

「まあそうだな。」

「認めちゃうんだ。正義の組織なのに。」

「どうするんだ？」

「少し考える時間をくれないか。」

「駄目だ。君たちの立場は犯罪者なんだ。ここで決めてもらう。」

「拒否権なんてないんだからいいじゃねえか。心の整理つけるぐらい。」

「……分かった。返事は今日中まで待つ。外には出ないでくれ。」

「はいよ。それじゃな。」

そういつて俺たちはその部屋を後にした。

「にしても管理局で仕事ですか。」

「ん？何言ってるんだ？」

「ですからこれから管理局で仕事するんだなと。」

「誰がそんなことするかよ。」

「ええ！？」

レイルカは俺の回答は予想していなかったようだ。

「ですが先ほど心の整理をするから時間をくれと言っていたじゃないですか。」

「あれはあの場を抜け出すための口実だ。それに俺がわざわざそんなことすると思ってるのか？」

「……するわけないですね。」

「だろ。今からセルティたちのところに言ったら逃げる。」

「なんだか本当に犯罪者になった気分です。」

そっぴいなながらレイルカは大きなため息をついた。実際はもう犯罪者だけだな。そしてしばらく建物を探索していると中庭らしきところでセルティたちを見つけた。

「ここにいたか。」

「あ、レイン。どうしたの？」

「お前たちにも用があるっていったらさ。」

「なんだ話はもう終わったのか？」

「ああ、終わった。セルティちょっとこっちに来てくれ。」

そういうとセルティはなんだろうという表情でこちらに近づいてきた。そして俺はセルティの耳に紫色の宝石がついたイヤリングをつけた。

「卒業おめでとう記念のプレゼントだ。」

「え？これはイヤリング？」

「ただのイヤリングじゃないよ。私はデバイスなんだよ。」

セルティのイヤリングから子供っぽい声が発せられた。

「あなたが私のマスターね。マスター私に名前をつけて。」

「え！？なまえ、えっと、えと、どうしよう。」

セルティはいきなりのこととかなり戸惑っているようだ。不測の事態に弱いからな。

「まあ思いつかないんだったらすぐにじゃなくてもいいぞ。」

『でもなるべく早く考えてね。』

「分かった。」

「おいおい俺には無いのかよ。」

セルティにプレゼントをあげたら後ろから弾が少し不満げに言ってきた。

「いや、ちゃんと用意してるぜ。ほら花屋のバイトの履歴書かいてきてやったぞ。」

「お前は俺を弄らないと話できないのか!！」

「冗談だ。ほら。」

俺は弾に向かって銀色のファッションリングを投げる。弾はそれを右手でキャッチした。

『もうちょい丁寧に扱ってくださいよレインの旦那。あんちゃんが俺のマスターですかい?』

「あ、ああ。」

『そいじゃ俺に名前をつけてください。』

「名前? そうだな。お前の名前は・・・ファンクだ。」

「なんでだ?」

「かつこいいだろ。」

相変わらずネーミングセンスは若干中二が入っているようだ。

『いいつすねえその名前。よろしくお願いしやす。大将。』

「おう、こつちもよろしくな。」

二人には何か通じるものがあつたようだ。

「あの、セルティのお兄さんですか？」

またも後ろから声をかけられた。声をかけてきたのは青色の髪の子女だった。

「ああ、まあそんなもんだ。あんたはさつきへりにいたな。」

「私、スバル・ナカジマって言います。こつちは親友のティアです。」

「スバルそれじゃ紹介になってないわよ。私はティアナ・ランスタ―です。」

「俺はレイン・オルハルトだ。こつちはレイルカ・シーリン。セルティと弾が世話になつたな。」

自己紹介をするとレイルカはそれに応じて頭を下げた。

「おい、セルティは分かるが何で俺も含まれてるんだ？」

「書類上ではお前の保護者は俺だからな。」

「お前みたいな親なんてごめんだな。」

「俺も子供には九九を覚えられるようにするんだ。」

「止めるなレイルカ!!こいつ一発ぶん殴ってやるんだ!!」

「抑えてください。」

後ろが騒がしいが気にしないでおう。

「レインもう行っちゃうの?」

「ああ、用も済んだしそろそろ行くこうと思う。」

「じゃあ私も……」

なんだか様子がおかしい。俺と後ろの二人の顔を交互に見ている。

「さつき機動六課に入らないかって誘われた。」

なるほどそういうことか。俺の約束守りたいけどまだ友達と離れたくない。二者一択で迷ってるのか。そういえば言い訳考えてなかったな。これは使えるんじゃないか?

「俺の約束なら別にいいから好きにきなさい。」

「でも、それじゃレインが……」

「いいから本当に。」

「でも……」

はあセルティも結構律儀になったもんだ。仕方ないこの際はつきり言うしかないか。

「セルティ、機動六課に入れ。」

「え？なんで？」

「約束の内容はお前が強くなったら連れて行くだったな。けどお前の実力じゃまだ無理だ。だから連れて行けない。それに機動六課に入れば鍛えてくれるらしいから。」

そういうとセルティはまた考え込んでしまった。これ以上何かあるのだろうか？

「せつかく・・・せつかくレインに会えたのにまた離れるなんて嫌

」

「それは仕方のないことで・・・」

「一緒にいるの。」

セルティは駄々っ子のように甘えてきた。なんとというか全然兄離れができていなかった。するとレイルカが念話をしてきた。

（レイン、もう腹を括ったほうがいいのでは？）

（何を？）

（もう分かっているでしょう？）



俺はそれを聞いて大きなため息をついた。実際のところこの問題は俺が我慢すれば解決するのだ。セルティは腕にくっついて上目遣いで訴えてくる。そして俺はまた大きなため息をついた。

「セルティの考えてるようなことにはならないから安心しろ。」

「え？」

その一瞬セルティの腕の力が緩んだのですぐに拘束から逃れた。

「急用ができたからまた後でな。レイル力行くぞ。」

「はい。」

そういつて俺はまた建物の中に戻った。そしてレイル力の顔を見る。レイル力は嬉しそうに微笑んでいる。

「なんだよ？」

「いえ、ただやはりレインだなと思ひまして。」

「意味分からねえよ。」

そういうとレイル力はまたクスツと笑う。

「はあ、また面倒になりそうだな。」

「がんばってください。ちゃんとサポートしますから。」

そして俺は先ほどの応接室に足を進めるのだった。

## 機動六課

機動六課隊舎 ロビー

「やっぱりこういつ固苦しいのは苦手だ。」

俺は着ている制服のネクタイをはずしシャツのボタンを二つはずす。そして不慣れな服装から開放された俺は大きく息を吐いた。

「もうせつかくつけたのにはずさないでくださいよ。」

レイルカは少し怒ったような表情で言ってきた。レイルカも同じように茶色の制服を着ている。この制服は機動六課のものだ。俺たちは機動六課に入ったのだ。

「にしても長いな。」

俺はロビーを見渡しながら言った。ロビーには機動六課に配属された管理局員が並んでいた。そしてそこにはセルティたちの姿もあった。現在は六課に参加する局員の名前を読み上げている。これだけで三十分は使ってるぞ。ちなみ俺たちは壇上の横にある廊下の影にいる。

「あのレイン。」

「なんだ？」

「今更なんですがなぜ管理局は私たちを逮捕しなかったのでしょうか？」

「ああ、それはしなかったんじゃない、できなかったんだ。」

「どうしてですか？」

レイルカは首を傾げながら聞いてきた。

「理由は三つだ。まず管理局はネクロ、つまり歪みを倒すべがない。だが俺は歪みを倒せる。歪みを倒せる俺が逮捕されたら誰も対処できなくなってしまう。逮捕して歪みが現れるたびに牢からだすわけにもいかないからな。」

「そうですね。」

「次に管理局の体裁のためだ。」

「管理局の体裁？」

「今まで俺たちの立場は犯罪者だったわけだ。その犯罪者が歪みを退治していたと市民に知れたらどうなる。」

「管理局に対して不満や悪評がでると思います。」

「そつだ。市民を守るはずの管理局は何もできず、犯罪者が市民を守っているということになれば管理局の信用はがた落ちだろう。だが俺が局長ならなにも問題はない。」

「三つ目は？」

「それは多分俺たちを監視することで歪みや歪みを倒す力につい

て何か情報を得られるとおもったんだろう。」

それを聞くとレイルカ納得したようだ。

「なんだがそれを聞くと利用されっぱなしですね。」

「けどこっちも何もしないわけじゃない。」

それを聞くとレイルカはえ？というような表情でこちらを見てくる。まるで俺が何も考えずに六課に入ったとも思ってたのか？

「何だその顔は？」

「い、いえ私はてつきりセルティのために入ったのかと。」

「まあそれも間違っではない。俺がここに入ったのはセルティの護衛のためだ。」

「護衛？どうしてですか？」

「ここ最近ミッドチルダや近隣の世界での歪みの目撃数が増えってるっていうのは知ってるよな。」

「はい。それってもしかして。」

「多分セルティの器を狙ってるはずだ。ここだったらすぐに対処できる。そんで管理局に入ったら許可が必要だろうが無限書庫にも出入りできる。」

「無限書庫ですか。確かにあそこなら調べものには最適ですね。」

「と、まあこんな感じだ。」

俺が説明をし終わると隊舎の扉が開き三人の人物が入ってきた。

「あいつらは……」

その三人は壇上へと上がっていった。八神がうろたえているところを見るとこの三人が来ることは知らなかったようだ。

「シークレット所属、波多野椋三等空佐。ただいま機動六課に出向しました。」

「同じく、長瀬和輝執務官。機動六課に出向しました。」

「同じく、一条仁一等空尉。機動六課に出向しました。」

三人は八神に向かって敬礼をした。三人の名前を聞くと整列している局員がざわざわと騒ぎ出した。小言でしゃべっているものや黄色い声を上げているものもいた。どうやらこの三人は有名人のようだ。

「面倒なことになりそうだ。」

「そうですね。」

局員のざわつきは次第に収まっていきまた新部隊設立の挨拶が再開した。その後は滞りなく挨拶が進み今は八神が壇上上がり決意表明みたいなのを言っている。そしてそれも終わった。

「それでは最後に民間協力者の方を紹介したいと思います。」

「やっとか。」

少し愚痴を零しながら俺は壇上に向かって歩き出した。レイルカもそれに続いて上ってくる。俺たちが壇上に上がるとまた少し局員たちがざわついた。セルティたちの方を見ると若干驚いているようだった。

「それでは自己紹介をお願いします。」

八神はいつもとは違う標準語でマイクをレイルカに渡した。

「えっと、民間協力者のレイルカ・シーリンです。不慣れなこともあると思いますがこれからよろしくお願いします。」

レイルカはそういって頭を下げた。毎度毎度礼儀正しいやつだな。今度は俺にマイクが回ってきた。

「同じく民間協力者のレイン・オルハルトだ。とりあえずよろしく頼む。」

俺もいつもどおり愛想のない自己紹介をした。そしてマイクを八神に回した。

「え、それでは機動六課設立挨拶を終わります。解散。」

八神を一言で整列していた局員たちは早速自分の持ち場に向かっていった。俺たちもいつまでも壇上にいるつもりはなかったので降りることにした。するとセルティたちが近寄ってきた。

「レインどうしてここにいるの？」

「なんで言わなかったんだよ。」

近寄ってくるなり俺が機動六課にいる理由を聞いてきた。予想通りだけど。

「それについては時間が掛かるからまた今度話してやる。そういえばデバイスの名前は決まったか？セルテイ？」

「え？あ、うん。決まった。」

『私の名前はエクシアだよ。いいでしょ。』

セルテイがつけているイヤリングから子供っぽい声で高らかに宣言してきた。

「そうかい。それはよかったな。それよりお前たち行かなくていいのか？」

「何が？」

「もう俺たち以外誰もいないぜ。」

そこで弾たちは周りを見渡す。ようやく誰もいないことに気づいたようだ。早く持ち場に行かなくて大丈夫なのだろうか？

「セルテイ早く行かないとやばいぞー！」

「う、うん。レインまた今度。」



「ああ、いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい。」

弾とセルティは走って自分の持ち場に行った。さて俺たちも行かないとな。

「俺たちはどこに行けばいいんだっけ。」

「えっとまずは外にある訓練場に集まるそうです。」

「それじゃ行きますか。」

「はい。」

「ここが訓練場か?」

「はい。そのようですが・・・」

「何にもないな。」

俺はレイルカの案内に従い訓練場に来たがそこには何も無いメガフ

ルートがあるだけだった。

「でもアルクの案内ではここがそうだそうです。」

『地図ではここがそうだと示してしるぞ。』

見方によっては訓練場に見えないこともない。アルクがエリスみたいに間違うこともないだろうし。ほかのやつが来るまで待つか。

『マスター、今何か私に対して失礼なことを考えましたね。』

「いや、気のせいだろ。」

そしてしばらくすると新人六人と高町と女性局員が来た。

「何だ？レインたちも訓練するのか？」

「さあな。とりあえずここに呼ばただけで何をするかは聞いてない。」

「でもこんな何もないところでどうやって訓練するんだ？」

「それはね、こうするのよ。」

すると女性局員はどこか楽しそうな口調で何かを操作し始める。空中にパネルのようなものが出てきて何か入力しているようだ。するとメガフロートに建物のホログラムが現れて実際の建物のように変化した。

「もうなんか何でもありだな。」

「俺もここまでとは思わなかった。」

これだったら管理局はドラ○もんでも作れるんじゃないか？

「それじゃレイン君とレイルカさんは向こうに行って準備してきて。」

すると高町が俺たちに指示を出してきた。

「何で？」

「民間協力者がいる場合はいろいろと手続きが必要な。本部に渡す資料に魔導師ランクも書かなきゃいけないけど君たちはランクとかもってないでしょ？だからここで簡易試験をしてそれを君たちのランクにするから。」

「そついつの適当に書いとけばいいじゃん。」

「いや、駄目だろそれ。」

魔導師ランクね。そもそも管理局側から仕事するように言ってきたのにそついつのは用意してくれないのだろうか？

「まあいいや。じゃ行くうぜ。」

「あ、はい。」

反論しても仕方がないので俺は素直に従うことにした。メガフロートに現れた建物の外観はこの前の廃棄都市に似ていた。

「エリス。」

「アルク。」

『『セットアップ。』』

メガフロートの上に来た俺たちは早速バリアジャケットを展開した。そして少し準備運動をしていると空中にモニターが現れた。そこに映っていたのは先ほどの女性局員だった。

「はいでは今から試験の内容を説明します。説明するのはシャリオ・フィニーノです。よろしくね。試験は決められたルートを進みながらターゲットを全て破壊すれば合格です。ターゲットにはダメージもありますから気をつけてくださいね。それと制限時間も設けてありますからそちらの方にも注意してください。それではがんばってください。」

「決められたルートってどこに行けばいいんだ？」

「今アルクに地図が送られてきました。」

送られた地図を見ると進むルートとターゲットがどの辺りにいるかが大まかに記されていた。

「結構多いんだな。」

地図を見終わるとタイミングを計ったようにカウントダウンが始まった。そして赤い光が三つたまると一気に緑となり試験が始まった。

俺たちは開始と同時に走り出した。

「まずはそのビルからだ。レイルカは外にいるやつを頼む。」

「分かりました。」

レイルカた一对の羽を展開して空を飛んだ。俺はビルの中に入り階段を上った。廊下には三つのターゲットがいた。

「エリス。ショートモードで展開。」

俺の手に二振りの刀が現れる。ターゲットはこちらに対して攻撃してくるが俺はそれをかわしながら近づきすれ違いざまに切り裂いた。足を止めずに残りのターゲットも破壊した。俺はまた階段を上る。ターゲットは各階の廊下にいるようだ。俺はそのターゲットを破壊しつつ上になっていった。そして最後に屋上に辿り着くとそこには十機ほどのターゲットがいた。俺が現れると一斉に攻撃してきた。

「うわぁ！危ないだろ！」

俺は攻撃をかわしながら反撃しようと構えたがターゲットは次々に爆発した。上を見上げるとレイルカがいた。

「助かったぜ。次は？」

「このさきにある橋に向かってください。」

「分かった。」

俺は短く返事をする走り出した。レイルカもそれについてくる。

ビルを渡っていくとターゲットがいるであろう橋が見えた。橋とビルにはかなりの距離があったが俺は構わず跳躍した。

「アクセル・リング」

俺の前に六望星の魔方陣が現れ俺がそれを突き抜けると一気に加速した。その勢いで何とか橋に届いた。だが着地と同時にターゲットが攻撃してきた。俺は近くの瓦礫に身を隠した。

「どんだけいるんだよ。」

レイルカでもこの数を一気に狙撃するのは無理か。半分はこっちでやらねえとな。一度大きく息を吐くと俺は瓦礫から飛び出した。

「スファイア・ブレード マニュアルモード」

すると俺の周りに氷でできた剣が現れた。スファイア・ボムの改良版だ。この魔法は自分で操作するマニュアルモードと命令によって自立行動するオートモードに切り替えることができる。オートではダメージゲットまで破壊しそうなので自分で操作することにした。

「行け。」

六本の剣はそれぞれ攻撃を回避しながらターゲットを破壊していった。そして一分ほどたったらターゲットはなくなっていた。もちろんダメージは残してある。

「片付いたか。」

「さすがに試験だけあって大変ですね。」

「けどこれ簡易試験で言っただけ？」

「でしたら本当の試験はもっと大変なんじゃないですか？」

「ま、いいや。次どつちだっけ？」

「今日は随分と積極的ですね。」

「たまにはそういう日もあるさ。」

『本音は?』

「なんか面倒だからとっとと終わらせようと思った。」

そういうとレイルカはやっぱりかというような顔をした。

「で、どつちだ？」

『この橋をまっすぐいったところにゴールがあるぞ。』

「だそうですね。」

「じゃ、行くか。」

俺は言われた方向に進み始めた。途中何度かターゲットが現れたが難なく進めた。そしてゴールまで五百メートルといったところで立ち止まった。

「何だあれ？」

そこには人の体より大きな球体が進行方向に鎮座していた。

「えっと、あれもターゲットのようですね。あとビルの上にも二つあるようです。」

「最後の最後に面倒なのが出てきたな。」

「どうします?」

「よし、無視しよう。」

『へたれですね。』

「いやもう明らかになんか仕掛けてありますよ見たいな雰囲気だしてるじゃん。」

「でもあれを倒さないと不合格ですよ。そしたらまた受ける羽目になりますよ。」

「どっちも面倒だな。・・・仕方ない。レイルカは周りにいる小さい方をやってくれ俺はでかぶつをやる。」

「分かりました。気をつけてくださいね。」

そついうとレイルカはターゲットに向かっていった。

「エリス、通常モードに変更。」

二振りの刀は一つになり百五十センチほどの大きな刀になった。俺



はそれを握ると走り出した。すると向こうは俺を感知して攻撃をしてきた。撃ってきたのはホーミング弾のようだ。俺はそれをぎりぎりまで引き付けて最小限の動きでかわした。ターゲットの前まで行くと思いつきり剣を振るった。だがそれはターゲットには届かなかった。

「バリアか！」

攻撃してきたので大きく後ろにさがった。俺は再度大型ターゲットに近づいた。今度は剣を振るうのではなく左手でバリアを殴った。もしれレアスキルを発動する。するとバリアはガラスのように砕け散った。無防備になったターゲットを横に切り裂いた。切り裂かれたターゲットは真つ二つになり爆発した。

「次はあそこか。」

魔力で足場を作り空中にでた。もしれビルの屋上の高さまで行くと新たなターゲットに向かった。弾幕を掻い潜り近づいていく。かわせないものはエリスで弾いた。

「ストライク・カノン！！」

左手に魔力が集まっていきソフトボールくらいの球体になった。ターゲットの目の前まで近づくとそれを放った。腕の衝撃を和らげるため籠手の甲から魔力が噴出する。高密度の魔力の塊は直撃しバリアごとターゲットを氷漬けにした。

「これで二機目。」

魔力で足場を作り今度は反対側のビルを目指す。ビルの壁が壊れそ

の中から攻撃してきた。先ほどと同じようにかわしながら近づいていく。ビルの中に入り柱の影に隠れる。

「カートリッジロード」

カートリッジが回ると同時に柱から飛び出した。そして足元に六望星の白い魔方阵が現れる。

「氷凰一閃！！」

刀身がバリアにぶつかり光が撒き散らされる。刀身が触れているところからバリアが凍っていき砕けた。そのまま本体を切り裂いた。切り口からだんだんと凍っていきターゲットは再起不能となった。

「これで終わったか。」

すると外がいきなり光りだした。見てみると無数の炎の矢が降り注いでいた。レイルカのフィアンマ・レインか。炎の矢が降り終わるとターゲットは一掃されていた。ところどころ地面が燃えている。

「終わったかレイルカ？」

「はい。終わりましたよ。少し手間取ってしまいましたが。」

「十分だろ。さっさとゴール行こうぜ。だんだん眠くなってきた。」

「では行きましょうか。」

全てのターゲットを破壊した俺たちは見事試験に合格した。

## ファースト・アラート

「ふあゝ」

寝起きの俺は大きな欠伸をする。時刻は九時過ぎ。いつも大体この時間に起床する。本当はもっと寝ていたいのだがそうするといろいろとつるさく言うやつがいる。ちなみに同室である弾はもういない。早朝訓練にいったのだろう。俺はとりあえず制服に着替えて食堂に向かった。そこには訓練を終えたのであろうFW陣がいた。

「レイン、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

「相変わらず遅い出勤だな。」

俺を見つけたセルティが真っ先に声をかけてきた。続いて弾が挨拶代わりに不満を言ってきた。

「俺の仕事内容に訓練は入ってないからな。」

軽く返しておきながら俺はカウンターに向かいコーヒーをサンドウィッチを頼んでテーブルに戻った。

「おはようレイン。」

「おはよう。」

「「おはようございます。」」

山盛りの朝食を食べながらスバルが挨拶してくる。続いてティアナ、エリオ、キャロと挨拶をしてきた。俺はそれに短く返事をした。F陣とはよく朝食をとにもするので話す機会も多くなった。話しているうちにだんだん向こうが砕けて話すようになってきた。

「そういえば二人ともデバイスの調子はどうだ？」

「特に問題はない。」

「こつちも大丈夫だ。」

「そうかそれはよかった。」

二人にあげたデバイスはちゃんと機能しているようだ。

「そういえば前から気になってたんだがお前ってなにしてんだ？」

ふと弾が疑問に思ったのかそんなことを聞いてきた。

「あ、それ私も気になる。」

便乗してスバルも聞いてきた。他の四人も口には出さないが気になっていたのかこちらに視線を向けてきた。

「主に書類整理とかの事務仕事だ。」

説明するのが面倒だったので一言で終わらせた。

「それだけ？」

「それだけ。」

「なんだよめちやくちや簡単そうじゃねえかよ。こっちは厳しい訓練してんのに。」

「確かに簡単そうだね。」

俺の仕事を聞いてきた二人がつまらなそうに呟いた。

「お前ら二人が一番できなさそうなんだが。」

「それくらい誰でもできるって。」

「そうだよ。」

「そうかい。後で泣きついてもしらねえからな。」

「ねえレイン。」

するとセルティがトントンと肩をつついてきたので振り向いて見るとそこにはサンドウィッチ（俺の朝食）を持ったセルティがいた。そしてセルティはそれを俺の顔に近づけてきた。

「あーん。」

「……」

「あーん。」

「はあ。」

俺はため息をつきながらそれを取り上げ自分で食べた。静かだと思っただらこれをやるかどうか考えていたのか。サンドウィッチを取り上げられたセルティは頬を少し膨らませてこちらを睨んで抗議してくる。睨んでも怖くわない。

「そういえば気になってたんですがレインさんの魔法ってどこの術式なんですか？」

「さあ。」

「え、知らないんですか？」

「ああ。」

エリオが呆気にとられたようにこちらを見てくる。術式にはミッド式とベルカ式がある。だが俺とレイルカの術式はどちらにも該当しない。俺はどこにでもあるもんだと思っただがそうでもなかったらしい。今のところ使っているのは俺とレイルカしかない。

「確か名前は・・・クロス式だったけ。」

「知ってるじゃない。」

「名前だけな。管理局が決めたらしいけど。」

ここで仕事をする際に書いた書類にそんなのが書いていたような気がする。とそこで時計を見てみると時刻は九時三十分をさしていた。俺は立ち上がりトレイを片付けることにした。

「どうしたんだ？」

「もうすぐ仕事の時間だな。遅刻すると小さい上司に怒られるんだ。」

「小さい上司？ああ、空曹長か。」

「そつだ。じゃあな。」

「言いつて俺は食堂を後にした。」

「レインここを教えてください。」

レイルカに催促されたので俺は席を立ちレイルカの隣にいつて分からないところのやり方を指示する。指示するとレイルカはゆっくりとタイピングしていく。それをし終わると俺はまた席に戻り自分の作業を再開した。

今いる部屋にはレイルカと俺と小さい上司だけだ。俺に聞かずに曹長に聞けばいいのに教えるのは俺の役目になっていた。その上司はミニチュアの椅子に座って優雅にティータイムを楽しんでいる。仕事しろよ。

「レイン。」

レイルカの声聞き席を立つ。仕事を始めて二週間ほど経つがレイルカはまだ慣れないらしい。機械音痴でパソコンの扱いにも苦戦しているようだ。そしてレイルカの隣にいったとき耳障りなサイレンの音が鳴り響いた。それを聞くとレイルカはきよるきよると周りを見回した。曹長の方はなんだか突然のことで慌てているようだ。

「レイルカ手が止まってるぞ。」

「え、あ、はい。」

「でここは・・・」

「何呑気に仕事してるんですか!!」

俺はは気にせず仕事を進めようとしたら曹長が割り込んできた。

「いやだつてとつと仕事終わらせたいし。」

「そうですけど緊急事態なんですよ!!」

「これは新人たちに抜き打ち火災訓練でもしてるんだろ。」

「抜き打ちって何ですか!!そんな訓練やりませんよ!!とにかく早く出勤しないといけないんです!!」

「なんで?」

「緊急事態だからです!!」



「はいはい分かったから。レイル力行こうぜ。」

「はい、分かりました。」

そういつて俺たちは小走りで集合場所であるへりポートまで向かった。そこには高町とFW陣がすでにそろっていた。

「遅いよ。」

「すみません、なのはさん。」

「呑気に茶なんか啜ってるからそうなるんだ。」

「あなたの所為でしょ!!」

曹長は顔を真っ赤にして怒っている。だが体の大きさが小さいので全然怖くない。

「じゃあ全員集まったからへりに乗ってくれるかな。」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

FW陣はそれを聞いてへりに乗り込んでいく。

「そういえば波多野たちは?」

「掠君たちは本部のほうからもう向かってるよ。」

「そうかい。」

俺は短く返事をしてへりに乗り込んだ。そして機動六課のメンバーを乗せたへりはリニアレールに向かって飛び立った。

四十分後・・・

もうすぐ目的地である山岳部を走っているリニアレールにつくころだろう。ガジェット・ドローンという変な機械も出てきているらしい。ロストログリア乗せてるなら護衛でもつけたらいいものを。

ふとそこで軽い頭痛がした。俺は一旦窓の外を見て席を立ち上がった。

「レインどうしたの？」

「お前らシートベルトちゃんとしとけよ。」

俺が席を立ったことを不思議に思ったセルティが聞いてくる。他のメンバーも俺の言ったことの意味が分かっていない様子だ。が、その問いには答えずに俺は運転席に向かった。そこには二十代の男がいた。名前は覚えていない。

「運転手。」

「なんだ？」

「ちょっと借りるぞ。」

俺は徐に運転手が持っている操縦桿を握り引つ張った。操縦桿を引つ張ったことよってへりは上昇する。急激な上昇によりへりが少

し揺れた。

「ちょ、おま！？何やってんだ！！」

「なんかに掴まっつといた方がいいぞ。」

するとそこでへりが大きく揺れる。へりの下を何かが通過したようだ。

「な、なんだ！？」

後ろからも少し悲鳴が聞こえた。突然のことに驚いたのだろう。すぐに揺れは治まった。

「操縦後は任せたぞ。」

「お、おい！！」

運転手の声は無視して俺は俺は運転席から離れた。そしてへりのドアへと向かいボタンを押して開いた。開いたことよって強い風が入ってくる。外にいたのは黒い龍だった。全長は四メートルほどで胴体は長細い。全身が鱗に覆われていて鬣のようなものもある。見方を変えれば蛇にも見える。

「今度は架空の生き物かよ。」

「もしかしたらどこかの世界にいるかもしれませんよ？」

「確かにいそうだな。」

いつのまにかレイルカが横にいたが気にせずには話を続けた。

「どうしたの！」

事態を確認しようと高町がこちらに聞いてきた。

「ネクロって言ったら分かるか？」

「！？、そう。分かった。それじゃ手筈どつりに対応してください。」

「了解。行くぞレイルカ。」

「はい。」

俺とレイルカはヘリから飛び出した。そしてバリアジャケットを展開して俺は足場を作って着地し、レイルカは羽を出して飛んでいる。俺たちは歪みが現れたときだけ自由に行動できる権利がある。それは機動六課に入る前に俺がああ提督に対して提示した条件だ。

「なんつうか現れるたびに姿形が禍々しくなってるような気がする。」

「確かにより強い生物の姿を模しているようですね。」

「ついには空想上の生き物だな。」

「そうですね。」

「それじゃ仕事を始めるとするか。」

俺は刀を出して黒い龍に向かっていった。

「スパイラルシューター!!!」

「サンライトスラッシャー!!!」

「グランドザンバー!!!」

レインたちが歪みと戦闘しているころリニアレール付近ではすでに  
掠たちが本部から駆け付けガジエットの迎撃にあたっていた。

「アクセルシューター!!!」

「ハーケンセイバー!!!」

そこになのはとフェイトも加わり空中のガジエットが殲滅されるの  
も時間の問題だった。一方、そのころFW陣も車両に降り立ってレ  
リックの回収に向かっていった。車両の前方に降りたスターズはガジ  
エットを破壊しながら順調に重要貨物室に向かっていった。だが、後  
方に下りたライトニングは厄介なものに捉まっていた。ガジエット・  
ドローン?型。このガジエットは人より少し大きい巨体でAMFも  
強力だった。それによりライトニングは魔法が使えなくなってしまう

ったのだ。

「くっ……！」

エリオはストラダーで攻撃をするが相手の装甲が硬いためまったく刃がとおらなかった。

「はっ……！」

セルティはエクシアを近接モードにして攻撃している。近接モードは六つのひし形の水晶の先端が一つに集まり小さな槍のようになっている。だがそれでもガジェットを傷つけることはできなかった。ガジェットは長いアームを出して二人を攻撃した。二人ともうまく回避する。

そんな光景をキャラロは車両の上から見てのことしかできなかった。キャラロの魔法はほとんどが見方をサポートするための魔法だ。魔法を封じられてしまった今は何もできない。竜召喚というレアスキルがあるのだがそれはうまく制御できないので使うことはできなかった。

「ぐわっ……！」

エリオがアームに突き飛ばされて壁に飛ばされた。その所為なのかエリオはくったりと気絶していた。ガジェットは気絶したエリオを掴み天井をこじ開けた。セルティはエリオを助けようとアームに向かつて何度も何度も切りつけた。だが効果はなかったようだ。ガジェットはこじ開けた天井からエリオを放り投げた。

「!?？」

エリオが車両から落とされたときキャラ口は無意識のうちに自分も飛び出していた。落ちていくなかキャラ口は必死にエリオを掴もうとした。優しい人を守りたい、大切な人を守りたいと思って掴もうとした。そしてエリオを掴むと彼女のデバイスが光りだした。ガジエツトのAMFの範囲から離れたことによつて魔法が使えるようになったのだ。

「フリード、不自由な思いをさせてごめんね。私ちゃんと制御するから。」

「竜魂召喚!!」

するとフリード光出した。その光はだんだんと大きくなっていきやがて竜の形になっていた。そしてキャラ口とエリオを乗せたフリードは羽ばたいた。暴走もせず制御できているようだ。フリードは舞い上がっていきリニアールに向かった。そしてリニアールに戻るとセルティが一人でガジエツトと公選していた。

「セルティさん離れてください!!フリード、ブラストフレア!!」

その言葉を聞きセルティはすぐに離れる。その直後フリードの口から灼熱の業火が放たれた。だがその攻撃もAMFによつて防がれてしまった。

「やっぱり硬い。」

「キャラ口ここは僕が・・・?」

エリオそこで言葉をとめて空を見上げた。そしてこちらに向かつて

くるものが見えた。かなり速い速度だ。

「キヤ口避けて!!」

「フリード!!」

主の言葉に従いフリードはその場から離れた。そして車両に黒い龍が突っ込んだ。その所為で車両は分断されてしまい速度を緩めながらとまった。

「くそやってくれたな。」

もう少しでペしゃんこになるところだった。歪みが俺に噛み付こうとしたとき咄嗟に刀で防いだのだがそのままの状態ですみは突進してきた。歪みは突進をやめずなお噛み付こうとしてきた。そして歪みがリニアレールにぶつかる寸前に回避した。だがペしゃんこは避けられたが瓦礫やらなにやらであちこち傷だらけだった。

「けほっ、けほっ。」

「誰かいるのか？」

「レイン？」



「その声セルティか？」

俺は声のするほうに行ってみるとそこにはセルティがいた。どうやらここで戦闘していたので巻き込まれたらしい。よく見ると足を怪我している。

「大丈夫か。」

「大丈夫っ!？」

立ち上がるうとしたが痛みですぐに座り込んでしまった。俺は仕方がないのでセルティを抱えあげた。

「え!? レイン?」

「今ここにいるのはまずい。来るぞ!！」

すると俺たちのほうに鞭のようなものが向かってきた。俺はそれを跳躍して回避する。そのまま車両を出て線路に降りる。

「レインさん!！」

「エリオとキャラカ。悪いがセルティを頼む。足を怪我してみたいだ。」

「レインさんはどうするんですか?」

「俺はまだやる事があるからな。」

そういつて俺はセルティをエリオに渡す。エリオはセルティをひっ

ぱりあげ竜の背中に乗せた。俺はセルティを手放すと車両の方を見る。そこには歪みに取り憑かれたガジェットがいた。ガジェットのアームの部分が龍の顔になっていて装甲も黒くなっている。なんともシユールな絵だな。すると歪みから何か発せられる。

「AMFか。」

ガジェットに取り憑いたことよって魔法も使えるようになったのか。それにかなり強力なものだ。これではまともに魔法は使えないだろう。

「また面倒なことしゃがって。」

「レインさん一旦退きましよう。魔法が使えないんじゃ戦えないですよ。」

「え？ああ、大丈夫。俺は戦えるから。」

「え？」

そういつて俺は器の力で作った剣を出す。全ての無駄を取り払ったような長い剣。俺はそれを握り締め駆け出した。歪みは俺に向かって無数のケーブルやレーザーを放ってきた。俺は向かってくる攻撃を剣で切り裂いた。俺は向かってくる攻撃を全て切り裂いて歪みの目の前まで来た。すると二つの龍の顔が俺に噛み付いてきた。

「邪魔だ。」

俺はそれを横から切り裂いた。そしてガジェットの体も真つ二つに両断した。ガジェットの体は爆発して歪みは霧のように消えていっ

た。そしてガジェットがいた場所には禍々しい光を放つ黒い石があった。俺はそれを掴んで器の力を発動させる。黒い石は霧散し、霧散したものが俺の体に入ってきた。そのときとてつもない疲労感が襲ってきて俺はその場にへたり込んだ。

「はあ、疲れた。」

「レイン大丈夫！」

「ああ、別になんともないからとりあえず任務完了だ。もう寝ようかな。」

「え？ここですか？」

「そうだけど。へりがきたら起こしてくれ。お休み。」

目を閉じるとすぐに意識は闇の中へと落ちていった。こごして機動六課の初任務は終わった。

「これは！...」

「どうかしたんですか？ドクター？」

どこかの研究所のようなところで白衣を着た男はモニターをみて驚いていた。

「すまない、急に大声をだして。これを見てくれないか。」

「これは以前からドクターが探していたアンノウンですか？」

「そうだよ。どうやら彼は今管理局にいるようだ。」

男はとても嬉しそうな顔で言葉を語る。今にもはしゃぎだしそうだ。

「捕らえますか？」

「いや、今はいい。ウーノ、ドゥーエに彼のことを調べるように命じてくれ。」

「分かりました。」

そういうと女性の映っていたモニターは消えた。男はモニターに映っている画像を見た。

「私は運がいいようだ。彼女らのデータだけでなく彼を見つけることができるなんて。」

男はニヤリと笑う。

「貴重なデータが取れそうだ。」

研究所には男に笑い声が響いた。

## 世界と人

機動六課に入ってから一ヶ月ほどしたある日俺たち前線メンバーと体長陣は機動六課のロビーに集まっていた。だがその服装はいつもの制服ではなくそれぞれの私服だった。

「それじゃこれからいくところの説明するで。今回は聖王教会からの依頼で私やなのはちゃん、椋くんたちそれにレインくんたちの故郷である第97管理外世界「地球」の海鳴市にいくんや。」

「はい。どういった任務なんでしょうか？」

スバルが手を上げて質問してくる。

「それは地球にロストロギアの反応があつてな。それを調査して発見しだい封印するってところや。あと現地の協力者もおるからついたら紹介するな。まあ任務っていつても楽なもんやし観光やおもて楽しんだらええで。ほな、転送ポートに行こか。」

八神の説明は終わり機動六課のメンバーはそれぞれの荷物を持ってヘリポートにいった。そしてヘリに乗り込み転送ポートに向かった。

「世界文化レベルB。」

「魔法文化無し・・・次元移動手段無し・・・って魔法文化ないの！？」

「なんだ知らなかったのか？」

「うちのお父さんも魔力ゼロだし。」

「どうやらティアナたちは地球について調べているらしい。ここで育ったやつらには魔法がないことがそんなに珍しいのだから。その割にスバルはさほど驚いていない。そういうえばあいつの先祖は地球人だっただけ。」

「なんでそんな世界からなのはさんたちみたいな魔導師が？」

「それあいつらの先祖が球体カプセルで地球に飛来した宇宙人だからだ。」

「そうなんですか!？」

「そしてあいつらはその血を濃く受け継いだ地球育ちの戦闘民族なんだ。」

「本当に!？」

「一応冗談で言ったんだがえらく簡単に信じたな。」

「戦闘民族って僕らそんなに好戦的じゃないよ？」

すると会話を聞きつけたのか波多野が割り込んできた。

「そうか?躊躇なく相手に砲撃ぶちかますやつとか、騎士道とかいって強いやつに勝負申し込むやつとか十分好戦的だといえるが?」

それをいうと向こうのほうでギクツという擬音が聞こえたような気がする。

「それに切なる願いをかなえるためになんか集めて戦ってたんだろ？もうそれって戦闘民族でいいじゃん。」

「いや微妙に違うから。そもそも地球に宇宙人なんて飛来してないからね。」

「あの。」

「何だ？」

エリオが控えめな声で聞いてきた。

「前々から思ってたんですけどレインさんと棕さんってどういった関係なんですか？」

「問答無用で切りかかってきた加害者と被害者の関係だ。」

「それ本当なんですか!？」

「ちょっと待ってこれじゃ僕が悪者みたいじゃないか!！」

「実際そうだろ。証人もいる。」

そういつて俺はレイルカの方を指さす。

「な、なぜ私に視線が集まっているのでしょうか？」

「棕さんがレインさんに問答無用で切りかかったのは本当なんですか？」

「あなたたち地球のこと調べてたんじゃないんですか？」

そんな話をしているうちにへりは転送ポートに到着した。そして機動六課のメンバーは地球へと向かった。

転移した場所は広い公園だった。正確にはその公園の木々に囲まれたところだが。

「それじゃここからは各分隊に分かれて行動や。スターズは中距離探査、ライトニングは町にサーチャーとセンサーの設置、ロングア―チは広域探査や。そんで一通り終わったらそれぞれ報告すること。」

俺とレイルカは何の分隊になるのだろうか？コールサインとかもないし。それを聞こうとしたがやめた。分隊が決まっていなければこのまま仕事がないかもしれない。なので俺は下手に質問せず話が終わるのを待った。

「あ、レインくんはライトニングの手伝いでレイルカちゃんは探査魔法とか得意やからうちの手伝いや。」

まあ、ワーカーホリックの集まりなんだから見逃すわけないか。そ



の後それぞれの分隊に別れ任務に取り掛かった。シークレットの三人も分かれて手伝うようだ。ちなみにこちらには長瀬が来た。ライトニングは現地協力者に借りた車で町を移動しサーチャーとセンサーを設置した。そして任務は滞りなく進み一旦翠屋に集まることになった。

「なあ、ちよつといいか？」

俺は運転席に座っているテストアロッサに話かけた。

「何？」

「この後は特に任務とかはなんだよな？」

「そうだけど。」

「じゃあもう少し行ったところでおろしてくれ。」

「え？何で？」

「実家があるんだ。挨拶しにいくだけだ。」

「それだったら私が送っていくよ。」

「え？あゝじゃあ頼む。」

車は俺の道案内に従い進んでいった。五分ほどで目的地に着いた。家は三年前と変わらない姿で建っていた。まあでかい家だし改築する必要もないからな。

「ここだ。止めてくれ。」

「ここって……」

「家というより……」

「屋敷じゃないでしょうか？」

「レインってどっかの御曹司だったりする？」

俺とセルティ以外の四人はそれぞれ家をみた感想を述べている。

「小一時間したらそっちに合流する。」

そういつて俺は車を送り出した。そして車とすれ違うようにレイルカがこちらに歩いてくるのが見えた。先ほど念話で連絡しておいた。

「ここに戻ってくるのも久しぶりだな。」

「三年ぶりですからね。」

「桜とお爺ちゃん元気かな。」

俺は古風な屋敷の造りに似合わないインターホンを押した。押した後しばらくすると懐かしい女性の声が聞こえた。

『どちら様ですか？』

「えっと、お久しぶりです。桜さん。レインです。」

『え！？レインなの？とりあえず中に入って。』

俺たちは言われたとおり門を開けて中に入る。中に入って庭を見回すとしても懐かしく感じた。そして玄関から一人の女性が出てくる。三年前は肩より少し上ほどまでだった髪は背中の方まで伸びている。三年たった今でも容姿の美しさは衰えていなかった。

「もう、帰ってくるなら連絡位しなさいよ。」

「久しぶり桜さん。」

「それでどうして帰ってきたの？」

「それは仕事でたまたま来ることになったから顔を見せるくらいし  
ようかかって。」

「仕事？なんの？」

「管理局の手伝いみたいな感じですよ。」

俺はお茶を啜りながら質問に答える。家の中も特に変わった様子は  
なかった。

「あなたたちがやってることは終わったの？」

「それはまだだ。」

「そう。にしてもレインは随分背が伸びたわね。髪も伸びてる。レイルカとセルティも大人っぽくて綺麗になったわね。」

「三年経ったからな。」

「桜さんもお変わりなく綺麗ですよ。」

「うん。綺麗。」

「ありがとう。」

そこで会話が途切れる。俺はまたお茶を啜る。こうゆうときはなかなか会話が進まないものだ。ふと俺は桜さんの手の光るものが目に付いた。よく見るとそれはダイヤがはめ込まれた指輪だった。しかも左手薬指に。これはもしかして……

「桜さん。」

「何？」

「子供はいつ生まれるんですか？」

「「ぶっ!!!」「」

俺の突然の質問にお茶の啜っていた桜さんとレイルカはふきだした。げげほとつらそうに咳き込んでいる。セルティは二人が咳き込ん

だことに驚いている。

「いきなり何を・・・」

「結婚指輪はめてるからもしやと思って。」

「それだったらいつ結婚したか聞くのが普通じゃない？」

「じゃあいつ結婚したんですか？」

「じゃあってなによ。まあいいわ。結婚したのは一年前よ。」

「おめでとつございます。」

「桜。おめでとう。」

レイルカとセルティが賛辞の言葉を送った。それを聞くと桜さんはまたありがとと返した。

「どんな人？」

「名前は佐伯葉で会社勤めの人よ。私に一目惚れしたっていつて告白されたわ。って何で私がそんなことあんたたちに語らなきゃいけないのよ!」

「気になる。」

「私ももつと聞きたいです。」

俺は桜さんの反応が面白かったので聞いていただけなのだが二人は

こういった話に興味があるようだ。

「そつだ爺さんいる？」

長々と話している時間もないので先ほどの話は切り上げた。

「え、ええ。いるわよ。最近足が悪くて部屋で寝てると思うわ。」

「会いに行っても大丈夫なんですか？」

「構わないわよ。部屋は変わってないから。」

「分かった。」

そついと俺は立ち上がり爺さんの部屋を目指す。レイルカとセルテイも一緒についてくる。爺さんの部屋は廊下の突き当たりの部屋だ。そこにたどりつく俺は一言断りを入れて襖を開けた。そこには布団から体を起こして本を読んでいる爺さんがいた。その姿はどことなく元気がないようにも思えた。

「おお。レインか。レイルカとセルテイも久しぶりじゃな。中に入りなさい。」

俺たちは言われたとおりに部屋の中に入った。

「久しぶり爺さん。」

「お久しぶりです。お爺様。」

「お爺ちゃん元気だった？」

「それなりに元気じゃよ。三人とも大きくなったの。死ぬ前に孫たちの顔を見られるとは嬉しいの。」

「何言ってるんだよ。まだまだ元気なんだからあんまりそういうこと言つなよ。」

冗談には聞こえないからな。マジで。その後十分くらいたわいもない世間話をした。するとすぐに時間が来てしまい。集合場所に向かうことになった。

「もう行くのかの？」

「悪いな。もうちょっとゆっくりしていきたいんだが・・・」

「よい。またくればいいじゃろ。」

「今度、今度来たときは将棋でもやろうぜ。」

「ああ、いつでもきなさい。仕事がんばっての。」

「分かってる。それじゃまたな。」

そういつて俺は泉家を後にした。

泉家を後にした俺たちは集合場所である翠屋に向かった。だが思いのほか泉家で長居していたのか翠屋に着いたらすぐに現地協力者が用意したコテージに向かうことになった。これだけの人数を受け入れられるほどのコテージを持っているとはかなりの金持ちなんだろう。

「着いたよ。みんな。」

高町の声を聞いて機動六課のメンバーは車から降りていく。荷物を持ちながらメンバーはコテージの前まで歩いていった。そこには三人の女性が立っていた。

「三人は今回の現地協力者の人たちで私たちの幼馴染なんだよ。」

高町に言われて三人が自己紹介をしてきた。

「月村すずかです。みんなよろしくね。」

「アリシア・Ｔ・ハラオウンです。フェイトちゃんの双子のお姉さんです。」

「私はアリサ・「バーニング」よ。って今誰が言ったのよ!!あ、あんたは!!」

自己紹介の途中に横槍を入れたものを探すバーニング先輩。そして先輩は俺を見て驚いた。



「久しぶりだな。バーニング先輩。」

「バニングスよ!!! いい加減私の名前ちゃんと呼びなさいよ!!!」

「先輩だって俺の名前呼んだことないだろ。」

「なんでこんなやつと再会しなきゃならないのよ。」

先輩はがっくりと肩を落として落ち込んでいる。相変わらずツツコミのキレは衰えていないようだ。

「と、とりあえず紹介もすんだことだし荷物中に入れようか。」

月村がバーニング先輩の肩に手を置いて慰めていた。コテージの中に荷物を置いた後は一時間くらい自由に過ごしていた。そして午後五時くらいになると少し早いが夕食を食べることになった。夕食は外でバーベキューをすることになった。

「焼きそばできたでえ〜」

今料理を作っているのは八神だ。鉄板を持ち出して焼きそばやお好み焼きを作っている。

「こらスバルお前食いすぎだ!」

「いいじゃん別に。」

「あんたが食べると私たちの肉がなくなるのよ!」

別の場所では弾たちが肉を焼いていた。スバルから肉を奪取しよう

と奮闘している。あの大量の食料はいつたいスバルのどこに向かっているのだろうか？

俺はというと周りに民家があれば多大な迷惑をかけるであろう光景を少し離れたところで眺めていた。するとレイルカが焼けた肉を持って近寄ってきた。

「どうぞ。」

「お、サンキュ。」

レイルカが持ってきた肉を食べた。程よい焼き加減で調理されていて肉が柔らかくとてもおいしかった。

「向こうに行かないんですか？」

「向こうに行っても疲れるだけだつて。」

「そうですね。」

「こうして食べるのは六課に入る前以来か。」

「考えてみればそうですね。六課では食事の時間が一緒ですからね。」

「たまにはゆっくりと静かに食事するのも悪くないだろう？」

「そうですね。」

そこで会話が途切れるが嫌な沈黙ではなかった。

食事を終えた後メンバーは風呂を済ませておこうということになったのだが問題があった。このコテージには風呂がないのだ。そしてその問題を解決するためにある場所に向かった。

「ここがスーパー銭湯や!!」

「スーパー？」

連れてこられたのは市内にあるでかい銭湯。正直なにがスーパーなのかよく分からない。セルティもメンバーも首をかしげていた。銭湯に入ると案内役のような店員が現れた。その店員の話によるとこの銭湯はさまざまな種類の風呂やプールがあるらしい。これは銭湯というよりレジャー施設だ。そして会計を済まして風呂場の入り口まで来た。

「よかった。ちゃんと男女別だ。」

エリオがほっと胸を撫で下ろしてした。そういえば寮のほうでは女子のほうを使って生活してるんだっただな。十歳といえど何かと抵抗があるのだろう。

「エリオ君一緒に入らないの？」

「だって今回はアリサさんたちもいるし。」

「私たちは別に構わないわよ。ねえ。」

他の女性陣も同意見のようでエリオは困り果てていた。そしてエリオは弾に救援を求めた。

「エリオこれは仕方のないことだと思って諦める。」

「そんなあ。」

「そして後で俺たちに理想郷アガルタの様子を報告してくれ!!

くだらないことを力説している弾を女性陣はひどく白い目で見た。

「さあエリオ。男同士でゆっくり話し合おうぜ!!

その様子に気づいた弾はエリオを掴んで風呂場に逃げていった。

「レイン一緒に……」

「セルティそれ以上の発言は控えるんだ。そうしないと俺は社会的に死ぬことになる。」

「男の人は一緒に風呂に入ってあげると喜ぶって聞いた。」

「それは時と場所を選んでくれたら喜ぶだろうな。」

そして俺たちはちゃんと男女に分かれて風呂に入った。中に入るとかなり広がった。伊達にスーパーとは名乗ってないってことか。俺は一人で湯船に使っていた。すると隣に波多野が座った。

「何か用か？」

「ちょっと話をしようと思ってね。」

「ネクロのことも聞きにきたのか？」

「六課ではなかなか話す機会がなかったけね。ここならゆっくり話すことができる。」

「お前らに話すことなんて俺にはないんだが。」

「最近、目撃例が増えているネクロに対して管理局も無視できないんだ。」

「それはそつちの都合だ。退治はしているんだからいいだろ。」

「それじゃ事態の根本的な解決にはならないだろ。被害が出てからの対処じゃ駄目なんだ。」

「それは仕方のないだろ。退治することもできないお前らに解決なんてできない。」

「だから君にそれを教えてくれと頼んでいるんだ！！」

平行線上の問答に痺れを切らした波多野は声を張り上げて怒鳴ってきた。何人かの客がこちらに視線を向けてきた。そして波多野は落

ち着いたのかすまないと行って黙った。そしてしばらくするとまた口を開いた。

「どうしてそうまでして隠そうとするんだ？」

「何勘違いしてるんだよ。この情報を得るためのチャンスを潰したのはお前らだろ。」

「どつゆつことだ？」

「三年前、俺は管理局の船に連れて行かれたときも何も話さなかった。だが俺はお前らに一度だけチャンスをやっただろ。」

それを聞くと波多野はハツと思い出したようだ。俺はあのととき管理局側に対して俺に勝ったら何でも話してやるといった。それと一緒に負けたらこちらの情報は渡さないという条件も出した。

「その結果高町は負けた。お前たちは俺から情報を聞くことができなくなった。理解したか？」

「でもそれは！」

「でもそれは？なんだよ？たといくら年月が経とうと口約束だろ」と反故にはできない。」

それをいうと波多野は黙ってしまった。

「与えられるのを待っているだけじゃ何も変わらないんだ。」

「え？」

「それじゃな。」

俺はそういつと風呂から上がった。

風呂から帰ると例のロストロギアが見つかり急行した。だがそこでは新人たちFWメンバーだけで封印作業を行った。高町がFWメンバーの成長ぐあいを確かめるためにやらせたようだ。任務は無事に成功しロストロギアの回収も完了した。

深夜。俺はコテージを出て月を見ていた。今日は三日月だった。すると誰かの足音が聞こえて振り向いた。

「何だバーニング先輩か。」

「バニングスよ。とつと覚えなさい。」

「はいはい。先輩はこんなところで何してんだ？」

「水飲みにいったらあんたが出て行くのが見えたから確かめに来ただけよ。」

「そうかい。俺はただ月を見てただけだ。」

そうして俺はまた空を見上げる。俺が世界の中で唯一好きなものだ。空を見ているとなんだか落ち着く。

「なあ、先輩は世界についてどう思うっ？」

「いきなり何よ。」

「ただの質問だよ。」

「そもそも世界についてって何を答えればいいのよ？」

「分からないんだったらいいや。」

俺がそっけなくいうと先輩はムツとした顔になった。

「世界は傲慢で、残酷で、めちゃくちゃ意地が悪い。世界は人に対していつもひどい仕打ちをしてくる。人はいつもその仕打ちに耐えて生きてきた。」

「あんたの言ってること意味分からないんだけど。」

俺はそれを無視して話続ける。

「そんな世界もいざ自分が危険にさらされると人に対して助けを求め。けど人は世界の声に気づくことができないから世界を助けられない。そもそも助けようと思わないんだ。自らを傷つけたものを助けようと思わないからな。」

「あんたは何が言いたいの？」



「けどどちらとも自分たちの行いが自らを破滅に導くことになるとは気づかない。ゆっくり、ゆっくり滅んでいく。そんな世界についてあんたは満足か？」

俺の話を一通り聞くと先輩は大きくため息をついた。

「さんざん人のこと無視した挙句あんたは満足かって何よ。あんたの妄想を聞かされるとは思わなかった。」

どうやら先輩は今の話を俺の妄想の話だと思っっているようだ。実際そう思われても仕方ない内容だったかもしれない。

「別にちよつとした心理テストみたいなものだよ。答えたくないなら答えなくていいぜ。」

「はいはい。それじゃ私はもう寝るから。」

そついうと先輩はドアを開けて中に入っていた。

「俺は何を言ってるんだろつな。」

一人になった俺は先ほどの話を思い出しながら呟いた。俺もそろそろ寝ようと自分の割り振られた部屋に戻った。

## 合同訓練

「それはこの資料と同じようにして・・・」

「レインこつちも教えて。」

「えっとそれはだな・・・」

「レインさんこつちもお願いします。」

「あ、ちよつと待ってくれ。」

「あのレインこちらも教えてください。」

「え、ああ、分かった。」

「レインさん私のほうも・・・」

「分かったからそんな一編に言わないでくれ。」

ただいま俺はF W陣とデスクワークに勤しんでいるところだ。そのはずなのだが思った以上に困ったことになった。エリオとキャロとセルティはパソコンを扱うのはほぼ初めてらしい。レイルカは一ヶ月同じ仕事をしているはずなのにまだ慣れてないし。デスクワークを始めるにいたって多少の問題が起こることは予想できたがここまですとは思わなかった。

「レイン俺にも教えてくれ。」

「私も教えて。」

「お前らは黙って作業してろ。」

「酷!?!」

「お前らこの前事務仕事なんてたいしたことないって言ってたよな。」

「「うっ」

「楽な仕事なんだろう? だったら俺の助けは必要ないな。」

「待ってくれ!」

「こんなの無理だよ!」

そんな二人の叫びを無視しながら俺は自分の席のほうに戻ってきた。唯一デスクワークができるティアナは一人黙々と作業を続けていた。向こうにも聞けばいいのに何で俺だけなんだ?

「おいそこのちっさい上司。」

俺はミニチュアセットの机と椅子に座っているちっさい上司に話しかけた。

「ちっさいとは何ですか!」

「事実だろ。」

「私にはリインフォース？という名前があります！！それが無理なら階級で呼んでください！！」

「じゃあちっさい空曹長。」

「ちっさいはいりません！！」

たく言われたとおりに言ってるのに何が気に食わないんだ？

「とりあえずサボってないでこっちの新人たちに教えるの手伝ってくれ。」

「私はサボってなどいません。自分の仕事はもうすでに終わらせました。」

ちっさい空曹長は腕を腰に当てて胸を張りドヤ顔を決めていた。終わってんなら早く手伝えこの野郎。

「レイン助けてくれよ」

「仕方ねえな。ほら。」

情けない声を上げて助けを求める弾に俺はあるものを渡した。

これであたなもパソコンマスター！！

全1124ページ（厚さ約5cm）

税込み2498円

「これをどうしろって言うんだよ！！」

「それを読破したらお前は怖いものなしだ。」

「何日掛かると思ってたんだ!!!人を殺せるほどの厚さがあるぞ!!!」

「二、三日あればいけるだろ。七十二時間フル活用でな。」

「それじゃ意味ないだろ!!!俺は今何とかしたいんだ!!!」

「だったらそのリカちゃん人形に教えてもらえ。」

「それは私のことですか!!!その代名詞はとてつもなく腹が立ちます!!!あなた私のこと上司とおもってないでしょ!!!」

なんだか随分と騒がしくなっちゃった。若干カオスな空間になりつつある。ティアナはスバルのデスクワークを見ていた。あそこはどうやら安全地帯のようだ。こっちはだんだん收拾がなくなってきたっていうのに。とそこで事務室のドアが開いた。入ってきたのは高町だった。みなドアが開いたことに気づき視線を向けた。

「さっきまで騒がしかったみたいだけどどうしたの?」

「まあ、いろいろと大変だったんだよ。」

俺は騒ぎが収まったのでため息をつきながら自分の椅子に座った。

「で、どうしたんだ?」

「みんなを呼びに来たんだよ。」

「何で?」

「今日の午後クロノ君の部隊と合同訓練するんだよ。クロノ君の部隊がもう少しで来るって連絡が入ったから。」

「あ、そういえば言ってたなそんなこと。」

「それじゃみんな行くよ。」

高町の声聞きFW陣は立ち上がり部屋を出ようとする。

「がんばってこいよ。」

「何言ってるの？レイン君も行くんだよ？」

え？

「何でこんなことになってるんだろっつな。」

「何がですか？」

「いや・・・何でも。」

なぜ訓練に駆り出されてるのか、と聞いても答えは返ってこないと思っただからだ。俺とレイルカとFW達はヘリポートに並んでいる。高町はヘリから出てきた堅物提督と挨拶を交わしている。そしてヘリからまた誰か出てきた。その人物には見覚えがあった。淡い橙色の長い髪、本部の制服だろうが青い上着と白いスカートを履いている。

「レイルカ、俺は今寝ぼけているんだろうか？」

「それはないと思いますよ。もう起きてから三時間以上経過していますから。」

「今俺はとても懐かしい顔を見ているんだが。」

「奇遇ですね。私もとても懐かしい顔を見ました。」

「生霊とか？」

「レインそれはさすがに無理があるでしょう。」

挨拶が終わったのか高町が堅物提督と懐かしい顔をつれてこちらに来た。

「みんなに紹介するね。こちらはクロノ・ハラウン提督と九曜明日香二等空佐。クロノ提督と九曜二佐は今回の訓練の指導を担当してもらいます。」

「クロノ・ハラウンだ。今日は部下ともどもよろしく頼むよ。」

「私は教導を担当する九曜よ。厳しくってわけじゃないけど手加減

はしないからがんばってね。」

やっぱり明日香か。しかも二佐って八神と同じ階級じゃなかったけど。大出世してるし。

「一つ聞きたんだけど。なんであんたがここにいるの?」

明日香は俺の方に目を向けながら聞いてきた。そして他のメンバーの視線も俺に集まった。

「まあこっちにも色々あるんだよ。ていうか俺はお前が管理局にいることの方が驚いてんだけど?」

「私にも色々あるのよ。レイルカ久しぶりね。」

「お久しぶりです。」

「明らかに態度が違っぞ。」

「あんたにはさっきので十分よ。」

レイルカには笑顔で挨拶してるのに俺には何もなして酷いな。どうやらこの三年間でお嬢様は女王様に進化したようだ。

「なんか言った?」

「いや何も。」

「君達は知り合いだったのか?」



堅物提督が不思議気に聞いてきた。

「彼とは中学時代の友人なんです。」

「そうだったのか。」

「それじゃ私はミーティングがありますので失礼します。」

堅物提督に一礼して隊舎のほうに歩いていった。

「それじゃ僕も自分の部隊のほうに戻らせてもらおうよ。」

「私達もそろそろ戻ろうかな。」

俺達も隊舎の方に歩き出した。

「にしてもあんたあんな有名人と知り合いだったのね。」

「有名人？」

「九曜二佐のことよ。何も知らないの？」

「知らないな。」

俺はティアナの言葉に首をかしげる。管理局に入ってることも知らなかったのだから有名であることも知らないのは当然だ。ティアナの話によると明日香が入隊したのは三年前らしい。入隊してから解決した事件は八十を超えているそうだ。新人育成の指導もやっていてティアナたちのところにも一度来たようだ。となると弾とはもう再会してたのか。そして美人なだけに管理局内でも人気が高いようだ。

有名になったのもその所為だろう。

「へえ、それは知らなかった。」

俺はテイアナから聞いた話の中で一つ気になったところがあった。それは明日香が入隊した時期だ。三年前といえば俺達が町を離れたときだ。明日香には魔法のことは話したが弾のように関わってくることはなかったはずだ。その明日香がどうして管理局に入ったのか？魔法との接点が思いつかなかった。地球の人間が魔法に関わるのなら何か事件に巻き込まれたか、管理局が関係しているだろう。

「管理局か・・・」

俺は静かに呟いたが答えは出てこなかった。

合同訓練が始まるまでまだ一時間ほどあったのでメンバーは一時解散することになった。そしてなぜかその訓練にも俺とレイル力が組み込まれていた。人数合わせなら波多野たちに任せたらいいのではと抗議したらあいつらはまだ六課に来ていないらしい。それに波多野たちじゃ訓練にならないとのことだ。主に相手が。あいつら本部にいるほうが多くないか？一応訓練には参加するようだがこちらに出勤するのはまだ先だろう。そんなことを考えていると誰かに腕を引っ張られた。

「ん？セルティどうしたんだ？」

セルティはなぜだが俺の後ろに隠れるように腕を掴んでいる。

「知らない人が話しかけてくる。」

「え？どうゆうことだ？」

その疑問はすぐに解決された。

「セルティアさん待つてください！」

セルティの名前を大声で呼びながら近寄ってくる男がいた。その声を聞くとセルティはさらに腕を掴む力を強めた。

「やっと見つけました。ん？誰だお前は？」

「お前こそ誰だ。」

「この僕を知らないだと？」

「ああ、知らないな。」

「まあいいだったら名乗ってやる。僕はロウファ・エバンス。管理局本部に勤めているジェームス・エバンス少将の息子だ！！」

子供がおもちゃを自慢するように高らかと名乗りを上げた金髪の男。なぜだが勝ち誇ったような顔をしている。

「分かったならどいてもらおうか。僕はセルティアさんにお話があるんだ。」

「おいおい本人が嫌がってるのが分からないのか？」

「それは彼女の照れ隠しだ。」

「お前眼科行って来い。いや、この場合は頭がおかしいのか？だったら脳外科かな？」

どうやらこの男はちょっと精神的に疾患している恐れがあるので病院に行く事を進めた。

「な！？貴様一局員のくせに無礼な口の利き方だな！！言い方そこをどけ！！」

そこで男が強引に詰め寄ってきてセルティの腕を掴んだ。だがセルティもその腕を強引に振り解いた。

「私、あなたのこと嫌い。」

「え？何を言ってる・・・」

「あなたのこと嫌い。」

男はセルティにそう言われると何歩か後ずさりした後がっくりと肩を落としてどこかに行ってしまった。

「なんだっただんだあれは？」

「よく分からない。」

「分からないって・・・まあいいや。それじゃ手を離してくれ。あいつはもうどっかいったし。」

「もつとこうする。」

セルティは腕を離そうとしなかった。その表情は満足げに笑みを浮かべていた。この甘え癖もそろそろ直ってほしいんだけどな。

「何こんなところでイチャついてんのよ。」

「らぶらぶだね〜」

振り返るとそこにはティアナとスバルがいた。ティアナはジト目で睨んでいてスバルはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべていた。

「いや別にイチャついてるわけじゃないんだけど。」

俺は特に慌てることなく返した。そしてこの状況の説明も兼ねて先ほどのことを話した。

「あいつも来てたの？」

「知ってんのか？」

「訓練校のときに何かと理由をつけてはセルティに会いに来てたからね。何回も告白してきてたし。」

「断っても諦めてくれない。」

「おまけに自信家で実力もある程度はあるからつぎっいたらしくてしようがないのよ。」

スバルとティアナはやだやだというような感じのジエスチャーをしながら説明してきた。聞くところによると強引にデートに誘おうとして弾たちに撃退されたことも多いようだ。

「そういうことだからちゃんとセルティを守ってあげなさいよ。」

「えゝ面倒だな。こんな公の場で変なことはしないでらう?」

「そうだけでもしもの時のことよ。しっかりしなさいよ。」

「ちゃんと守ってね、レイン。」

嬉しそうに微笑むセルティの言葉に俺は頷くしかなかった。

程なくして合同訓練は始まった。はじめに準備運動などをして体力づくりのための筋トレをした。その後はペアを組みタイムアタック形式でどれだけ早くターゲットを破壊できるかを競い合った。タイムアタックにしたのはお互いのモチベーションの向上のためだ。その次はタイムアタックの様子を見ていた明日香や隊長陣の個別指導

といった感じで進んでいった。そして最後に模擬戦をやることになったのだが……

「なんで俺だけ一人なんだろうか？」

『マスターに人望がないだけですよ。』

この模擬戦はペアだったのだが少し問題があった。エリオとキャラのペアだ。彼らは局員といえどまだ十歳の子供だ。そしてキャラは完全なる後方支援型だ。そうなる現実戦うのはエリオ一人になってしまふ。それではさすがに可哀想なのでレイルカも入って三人で模擬戦をすることになった。そして俺はペアがいなくなってしまうた。

「相手は二人かよ面倒くさいな。こうゆうとき代役とかこないの？」

『知りませんよそんなこと。機動六課もマスターなんか割く人員なんてないんですよ。』

「相変わらずひでえなお前は。」

『ここ最近放置状態でしたからね。いつもの三割り増しで言うてますから。』

エリスはここ最近相手にされなかったためご立腹のようだ。こうゆうときのエリスはなかなか機嫌を直してくれない。ぐちぐちとねちっこく言ってくるのだ。面倒なことこの上ない。だが今それよりも面倒なことがある。

「なあエリス。あいつさつきからこっちをガン見してきてるんだけ

ど。」

『また何かやらかしたんじゃないですか？』

さきほどセルティに話しかけていた男が俺の方を睨んでいる。確かエバンスって言ったけ？なんだかとても怒っているようだ。

「おい、貴様に聞きたいことがある。」

「なんだよ。」

いつのまにかお前から貴様になってるな。

「貴様はセルティアさんと付き合っているのか？」

「いや、違うけど。」

「やはりそうか。貴様がセルティさんをたぶらかしているのだな！」

「なんか果てしなく明後日の方向に勘違いしてるんだけど。」

『あの方を見ているとなんだか殴りたくなりますね。』

「な！？主も失礼ならデバイスも同じだな。」

『他人に礼を尽くさない人に言われたくありません。』

今日はいつになくエリスが好戦的だった。俺以外に罵倒なんてしたことなかったのにな。



「僕を馬鹿にしているのか!！」

『そうですが何か?』

「お前戦わないのになんでそんなに強気なんだよ?」

『ああいう風なえらそうなやつを見ると腹が立つんです。』

「貴様もう許さんぞ!！」

「怒りの矛先が全部俺に向かってきたんだけど。」

『計算どつりです。』

俺に対する嫌がらせも忘れてなかったようだ。そろそろ本格的にA  
Iの調整でも考えてみようかな。

『準備はいい?』

するとモニターが現れてそれには明日香が映っていた。

「いいけど。そつだ堅物提督に部下の教育ぐらいちゃんとしろつて  
言つといてくれ。」

『何よそれ? まあいいわ。それじゃ始め!』

「お前は僕のサポートに回れ。邪魔はするなよ。」

合図とともに模擬戦が始まる。エバンスはペアに対して一歩的な命

令をした。ペアの方は表情がムツとなり不機嫌さまるだしである。指示には従う気はないらしい。そして二人はスフィアを展開した。エバンスの方は三十でペアの方は二十ほど展開している。

「食らえ!!」

「アクセルシューター!!」

二人は同時にスフィアを放ってきた。

「アクセルリング」

俺は目の前に現れた魔方阵を通過した。通過すると体は一気に加速し二人との距離を詰めていった。スフィアも加速した俺には追いつけなかった。俺は勢いを殺さずまずエバンスに突っ込んだ。突然のことにエバンスは反応できず俺を見失ったようだ。俺はゼロ距離まで近づき回し蹴りを食らわせる。エバンスはそのまま擬似ビルに吹っ飛んだ。かろうじて反応できたペアの方は俺に魔法を放とうとするがもう遅かった。エバンスを吹っ飛ばした俺はエリスを構えペアの首筋に突きつけていた。

「降参するか？」

「・・・参った。」

「よし、終わった」

相手が降参したので俺はエリスバングルに戻した。エバンスの方は伸びてるみたいだし面倒な訓練は終わったように思えた。

「ちょっと待ちなさい。」

その声に振り返ると明日香がいた。

「なんでここにいるんだ？」

「君はそこで気絶してるやつをつれて観戦場にいつてなさい。」

エバンスのペアだったやつはそう言われて気絶しているエバンスを担いで観戦場に向かった。ていうか無視すんなよ。

「それじゃ俺も戻るから。」

「あんたはまだ残ってもらっわ。」

「何で？」

「全然訓練になってなかったからよ。」

「俺的にはすごく訓練になったからいいよ。」

「じゃあ私の訓練に付き合っ。いや、付き合いなさい。」

「ジャイアニズム丸出しだな。」

はあくなんか三年間でさらに尊大になった気がする。

「あんたに気遣いなんていらないでしょ。」

『分かっていらっしやる。』

「もういいや。やるんだったらとっとと始めようぜ。」

「分かったわ。セットアップ!」

明日香のバリアジャケットは黒いコートに黒いジーンズ細部の装飾が違うが堅物提督のものに似ていた。両手にはリング状の武器が握られていた。持ち手の部分以外は鋭利な刃がついている。形からして持ったまま斬るといふより投擲して相手を攻撃するほうが適切な気がする。

「なんだか珍しい武器だな。」

「珍しいのは形だけじゃないわよ。それじゃ始め!」

合図とともに明日香は俺に向かって二つのスライサーを投げってくる。やはり投擲して使うものようだ。

「スファイア・ブレード」

魔方陣が展開あれて氷の剣が六つ現れた。オートモードにして迎撃に当たらせた。一つの剣がスライサーに向かってく。だが剣はスライサーに触れると綺麗に両断されてしまった。

「な!？」

また一つ剣が向かうが同じように両断された。俺は設定をオートからマニュアルに切り替えた。これで自爆しに行くことはなくなった。横に飛んで向かってきたスライサーをかわした。鉄の硬度を持つ氷をたやすく両断できるわけがない。何か仕掛けがあるようだ。俺は明日香に向かっていった。武器がなくなった事で明日香は無防備なはずだ。そしてエリスを横に振るう。だがそれは明日香に届くことはなかった。明日香はまた両手にスライサーを持ってエリスを受け止めていた。武器は二つだけじゃなかったのか。

「そこにいると危ないわよ。」

明日香の囁きを聞いて俺は後ろに振り返る。見ると先ほどのスライサーがこちらに返ってきていた。

俺は明日香から離れて上空に逃げた。そこで大きく息を吐いた。

「そのデバイス面倒な機能ついてるな。」

「言ったでしょ。珍しいのは形だけじゃないって!!！」

明日香はそういつてスライサーを構える。その手に持っている数は両手合わせて十個。あのデバイスは武器の数が増やせるようだ。明日香はカードを持つようにして掴んでいたスライサーを一気に投げってくる。俺は足場を作って回避に専念することにした。十個のスライサーは俺の後を追いかけるようにして追ってきた。いくつものブロックを作って妨害しようとしたがそのブロックもバタを切るように両断された。

「まさか魔法無効化か！」

「そのとおりよ。デュアルスライサーの高速回転している刃は魔力結合を切り裂いて破壊することができるのよ！」

それで魔力によって作り出された氷もやすやすと両断できたってわけか。

「逃げてるだけじゃ勝てないわよ！！ブレイク・シューター！！」

明日香はさらに三十ほどのスフィアを展開してこちらに放ってきた。

「行け！！スフィア・ブレード！！」

俺は残り四つの剣をオートにして明日香の放つてスフィアに向かわせた。向かわせると同時に俺もスライサーの迎撃にでた。まず一番先に来たスライサーに斬りかかる。刃同士が触れると火花が散ったが何とか弾いた。続いて二つ目も弾く。

「残り八。」

今度はさらに上空に上がる。四方から同時にスライサーが向かってきた。俺は柄の部分のトリガーを引いた。すると刀身の反りの部分から魔力が噴出する。噴出の勢いを利用して回転切りをした。向かってきた四個も弾き飛ばした。

「エリス、ロングモード！！」

『了解。』

ロングモードは刀身が二メートルほどの太刀になる。最後の四個がこちらにまっすぐ向かってきている。俺はまたトリガーを引く。カートリッジ一個分を使うのであまり使いたくないのだがそのことには構っていられなかった。

「はあ!！」

エリスを横に思いっきりなぎ払った。スライサーはビルの壁へとめり込んだ。

「休んでる暇なんてないわよ!！」

「な!？」

明日香の放ったスフィアがまだ残っていたようだ。数は五。だがそれはもう眼前に迫っていて回避はできなかった。

「がは!？」

スフィアをモロに食らった俺は地面に急降下した。

「くっ、アイシクル・チエイン!！」

手から伸びた鎖はビルの鉄柵に絡みつき地面との衝突は免れた。魔法を解除して地面に降りる。

「いってえくな。手加減くらいしろよ。」

「勝負なんだからそんなことするわけないでしょ。」

「そうだよな。お前そうゆうやつだもんな。でもお前もうデバイス持っていないじゃん。」

「それなら心配しなくてもいいわ。カムバック！」

すると散らばっていたスライサーが光だし明日香に集まっていた。光が収まると明日香の手にはスライサーが握られていた。

「どうする降参する？」

明日香は笑みを浮かべて問いかけてきた。

「それもいいんだけどさあ、そでだったら俺ただの怪我損だろ。」

「私にあんたに勝てて嬉しいけど。」

「だからちよつと本気でやることにする。」

「何よそれ？さっきの様子からして余裕なんてないと思ったんだけど。」

「まあいいから。それじゃ行くぜ。」

「ウインド・ギア」

俺の足元に魔方陣が現れる。これ使つと筋肉痛になるから嫌なんだよな。

「どんな魔法も返り討ちにしてあげるわ！！」



明日香は八個のスライサーを投げる。俺もそれと同時に走り出す。先ほどの何倍ものスピードで。

「!?!」

明日香の顔が驚愕に染まる。なにしろいきなり俺を見失ったからだ。スライサーも追いきれずに出鱈目な方向に飛んでいった

「遅いぞ。」

俺はエリスを振るう。かろつじて声に反応できた明日香は手に持っていたスライサーで防いだ。俺は無防備だったわき腹に蹴りを叩き込んだ。

「かは!?!」

明日香は擬似ビルの壁に背中をぶつけた。俺は明日香に向かって駆け出す。

「ラウンドシールド!?!」

エリスを振るおうとしたが現れたシールドによって阻まれた。俺の動きが止まった隙に明日香は体勢を立て直そうと俺か距離をとった。

「カムバック!?!」

「チェックメイトだ。」

散り散りになったデバイスが明日香のもとに戻る前に俺は明日香に峰打ちを叩き込んだ。

模擬戦が終わったので俺は機動六課の隊舎に戻ってきていた。明日香が負傷したのでとりあえず運んできたのだ。

「はあく疲れた。」

「また、勝てなかった。」

明日香はその後十分くらい気絶してついさっき目覚めたところだ。治療をしたのはレイルカだ。中学のころ勉強で一度も勝てなかったことを思い出して魔法で俺を叩きのめそうとしようとしたが目論見が失敗して悔しがっているようだ。

「あとちょっとだったのに。」

「勝負なんだし気にすんなよ。」

「あんたが言うな!!」

「明日香あまり声を出さないほうが・・・」

すると明日香は腹を押さえてうつむいてしまった。顔は苦悶の表情

を浮かべているだろう。

「次は絶対叩きのめしてやるわ。」

「怪我人が怖いこというなよ。それだけ元気なら大丈夫か。」

「なに心配してくれてたの？」

「それくらいはするさ。」

「そう、それはありがと。もうそろそろ戻るわ。」

「まだ休んでいた方がよろしいですよ。訓練の方はなのは隊長が見ていますし、隊長たちも模擬戦をするとか言っていました。」

「それって八神とテストロッサもか？」

「波多野さんたちも到着したようで三対三でするそうです。」

俺は一瞬波多野たちが模擬戦をしているところを思い浮かべる。

「荒れた荒野か、爆心地か？」

「あんたは何を想像してんのよ。」

「ですから明日香はそれが終わるまで休んでいてください。」

「・・・分かったわ。」

そういつて明日香はベットに横になった。そして合同訓練は程なく

して終わった。

## ホテル・アグスタ

キンツと金属がふれあう音が響く。場所は訓練場で今回は森林地帯の姿になっている。そこで俺は何をしているかというど地べたに寝転びながら弾の訓練をしている。

「くそっ、ちょこまかしやがって。」

「ほらほらがんばれよ。まだ一個も落としてないぞ。」

「分かってるよ!!!!ていうかお前は何寝転んでるんだよ!!!!」

「立ってる疲れるだろ。」

「いいご身分だな、うわぁ!!!!」

弾がやっていることはスファイア・ブレードを全て落とすこと。ちなみに数は六だ。弾は訓練校では銃型のデバイスを使っていたため剣の扱いに慣れていない。さらに間合いが遠距離から中距離になったので回避もある程度できるようにならなければならない。今回は主に近距離攻撃の強化をしているところだ。

「グラビティ・ザンバー!!!!」

弾のファンクから紫色の斬撃が放たれる。その斬撃はブレードに命中した。やっと一本目か。だがその隙に背後からブレードが襲い掛かってくる。弾はそれを横に飛んでかわす。だんだんとブレードの動きに慣れてきたようだ。今度は二本同時に来るが一本目はかわして二本目はファンクで弾き返した。弾は近接戦闘が苦手というわけ

ではなく、単に使っていなかっただけのようだ。

「一気に行くぞ!!!カートリッジロード!!!」

『はいよ!!!』

するとファングから空薬莖が排出されて魔力があふれ出す。

「グラビティ・サークル!!!」

弾の周りを囲むように黒に近い紫色の球体が現れた。なぜこのような色になるかという弾は魔力を重力に変換することができる特異な魔力変換資質を持っている。よって今浮かんでいるスフィアは重力の塊であってその重力の塊が光を歪めているからである。弾は持ち手のところについている。引き金を引いた。引き金を引くと周りのスフィアは小さな爆発を起こす。ブレードはその爆発に吸い込まれるようにして潰れていった。

「はあ、はあ、はあ、全部落としたぞ。」

「随分お疲れだな。」

「当たり前だろ。何もしていないお前と違って俺はずっと動きっぱなしだったんだぞ。」

弾はそうゆうが別に俺だって何もしていなかったわけじゃない。俺は俺でスフィア・ブレードの操作をしていたのだ。オートモードで弾に向かわせたら一本も落とせなかっただろう。オートモードは機械的に俺の命令をこなすだけなので細かい指示を行わないからだ。なので俺がマニュアル操作である程度手加減しながら訓練をしてい

ただ。

「お前は反応が遅すぎるんだよ。もっと速く、無駄なく体を動かせ。」

「もっと速くってどうすればいいんだよ?」

「それは日々の努力で何とかしろ。」

「もっと具体的に言えよ。ていうかいつまで寝転んでんだよ。」

「今休憩だろ。それになんで俺がお前の訓練につき合わされてんのかまだ疑問だし。」

最初はデスクワークだけだったのにこここのところ仕事が増えてるよ  
うな気がする。いや、もう確実に増えてる。

「このまま訓練が終わるまで休んでいようぜ?」

「学校の授業をサボるみたいになよ。それにそんなことしてると・・・。」

『おい、オルハルト!!真面目にやらんか!!』

「うるさっ!」

「シグナム副隊長に怒られるぞ。」

突如、シグナムの大声の叱咤がエリスから聞こえてきた。慌てて体を起こした。俺はエリスをつけている右手を耳元に添えていたので

その大声がよく響いた。

「そういうことは早く言え。くそ、シグナムのやつ自分は訓練を手伝わないくせに。」

「前々から思ってたけどお前って上官に対してなんでタメ口なんだ。」

「昔もそうだっただろ。それに俺のモットーは人類皆平等だ。」

「本当は？」

「単に面倒なだけ。」

「そういうところは昔から変わらないな。」

『望月も何を混ぜつつ雑談などしている！！さっさと訓練をせんか！！』

くだらない話をしてるとまたもシグナムから叱咤が飛んできた。これは後で説教でもくらいそうだな。主に弾とかが。

「そろそろ再開するぞ。」

「おう。あ、そうだ。レインお前動きを早くする魔法使ってたよな。」

「それがどうした？」

「それ俺にも使えないか？」



「術式を読み込んだら使えるんじゃないか。・・・でも本当にやるのか？」

「おう、あれだったら手っ取り早く動けるようになるだろ。」

「そうか。本当にいいんだな？」

「なんだよ。いいつて言ってるだろ。」

「分かった。」

俺は弾に最終確認をとってファングにウインド・ギアの術式を読み込ませた。そしてスファイア・ブレードを発動し準備オーケーとなった。今回はオートモードでやることにした。さっきよりは動けるし大丈夫だろ。

「それじゃ行くぞ。」

「ウインド・ギア」

「スタート。」

十五分後・・・

「よし、片付いたぜ。あそこまで速くなるとは思わなかったけど。」

弾は満足したというような顔で魔法の感想を述べている。

「弾言い忘れてたけど。」

「ん？なんだ？・・イタタタタタタ！なにこれ体の節々がすげー痛いんだけど！！」

「初めてそれ使つと筋肉痛が半端ないから。」

「先に言え！！バカ！！」

弾はその後まったく動けず訓練ができなかった。そしてその体でシグナムの説教も受けたそうだ。

時刻は午後二時。現在機動六課メンバーはヘリに乗って出勤中だ。行き先はホテル・アグスタという高級ホテルだ。今回はその中の会場を使つて行われるオークションの警備をするらしい。なぜオークションの警備を担当することになったかというところオークションに出品されるものの中にロストロギアが含まれるようだ。

「それだつたらオークションを中止してそのロストロギアを押収したらいんじゃないか？」

そもそもロストロギアってそんな公に取引していいものじゃないだ

る。警備なんて面倒くさい真似もしたくないし。

「それは主催者側から拒否されたんや。それにまだ確実にロストロギアって決まったわけやないから押収するわけにもいかん。そんで警備することになったんや。」

俺の意見はあっさりと却下された。

「それに今回はオークションの品を狙ってスカリエッティが来るかもしれないからな。」

珍しく一条がしゃべった。スカリエッティというのは先ほど説明された次元犯罪者のことだ。ガジェットとか作ってるやつで人体実験とか違法研究とかやってる狂科学者だマッドサイエンティストそうだ。

「ところでその荷物なんなんですか？」

ティアナが床に積み残されている箱を見ながら問いかけた。

「ああ、それは隊長達のお仕事着。」

シヤマルがどことなく嬉しそうな感じで言ったがあまりよく分からなかった。

「そろそろ着くでえ。」

俺は窓の外を見る。そこには五十階立てはありそうな建物があった。さすが高級ホテルというべきか。こんなでかい場所を警備するの面倒だな。そしてへりは屋上に着陸していった。

別館屋上

「ふあく眠い。」

俺は大きく口を開けて欠伸をする。こんなところに立っていつ来るかどうか分からない敵を待つだけなんて退屈すぎる。高町たちは豪華な服を来て中で警備か。まったくいいご身分だな。

「エリス。起きてるか？」

『起きてますよ。今仕事なんですから寝ませんよ。』

「えくお前そんなに真面目だったけ？」

『当たり前じゃないですか。怠け者のマスターを養うために私は汗水たらしてがんばっているんです。』

「嘘はいかんぞ。金属から汗は生成されないからな。」

『あれですよ。心の目とかで見てください。』

「そもそもお前どうやって働くんだよ。」

『ノリが悪いですね。せっかく話相手になってあげているのに。』

エリスは不機嫌そうな口調で言ってくる。どうでもいいがこいつは俺をバカにしないと話せないのだろうか？

「いやさあ、こつも暇だとなんか何もやる気でないじゃん。」

『マスターはいつもやる気なんてないじゃないですか。』

「そうなんだけどさあ。ほら、なんかやりたいけどいざやるうとすると途端にやる気がうせるってときあるだろ。そんな感じだよ。」

『確かにそういうときはありますよね。』

なぜこのデバイスは体がないのに人間味のある体験をしたことがあるようにいうのだろうと思ったが口にはしなかった。もう慣れたことだ。

「だからそういうときは寝転がってのんびりするのが一番だと思うわけよ。」

『そうですね。』

「お、分かってくれるか。それじゃ俺は寝るとする。」

俺は地面に寝転がって仰向けになった。硬いコンクリートだったが日差しが心地よく眠気を誘うには十分だった。だがあと少しで夢の世界へ到達できると思ったところで通信が入った。

『レイン君！ガジェットが現れたわ！って！？何で寝てるのよ！！通信の相手はシャマルだ確か本館の屋上あたりでいたような気がする。』

「はあ、もうちょっと早く寝とけばよかったかも。」

『寝ないでよ！！ガジェットが近づいてきているから警戒を怠らない』

で!!』

「何だここに来たわけじゃないのか。来たら起こしてくれ。」

『だから寝ないでって!!』

その後十分ほどのやり取りを続けていたらガジェットの方に動きがあったようだ。

『何これ!? ガジェットが急にくるなんて、まさか・・・』

「どうしたんだ?」

『敵の方に召喚師がいるみたいなの。それにガジェットの動きも変化してるし。』

「じゃあ、その召喚師捕まえればいいじゃん。」

『サーチに引つかかかってないからエリア外にいるわ。だから場所が特定できないの。』

面倒だな。このあたりは木とか崖とか多いから隠れ場所なんていくらでもあるかな。

「ちょっと行って探してくる。」

『え!? 場所分かってるの?』

「さあな。」

俺はそういつて通信を切った。そしてすぐさまレイルカに念話をした。

(レイルカこのホテルが見渡せるようなところにサーチャーを飛ばしてくれ。)

(どうしたんですか？急に？)

(敵に召喚師がいる。今からそいつを探し出す。)

(分かりました。)

念話が終わると俺はすぐに召喚師を探すことにした。敵もこちらの様子を見ているだろうしどこか高いところにいるはずだ。

『今日はとても積極的ですね。』

「退屈よりはましだろ。」

『そうですね。来ましたよ。』

すると前方からガジェットが来た。数は七。俺はまず先頭にいたガジェットに斬りかかった。だがガジェットはそれを見事にかわした。そして後ろにいたガジェットが一斉にレーザーを撃ってきた。横に飛んでかわす。いつもはもっと単調に動いていたのだがまるで誰かが動かしているように動きがよくなっている。

「これはちょっと厄介だな。」

そこで今度はレイルカから念話が入った。

(レインサーチャーが一つ破壊されました。)

(どこだ?)

(そこから北東に一キロのところですよ。ガジェットという可能性もあります。サーチャーには何も映ってなかったのでおそらくはそこにいると思います。)

(分かった。)

俺はすぐにその場所に向かおうとしたがガジェットが俺の周りを囲んでいた。念話の最中に移動したようだ。俺は北東の方向に向かった。ガジェットは俺の後ろからレーザーを撃ってきた。何とか紙一重でかわし前方にいるガジェットに斬りかかるがまたもかわされる。攻撃をかわしたガジェットは俺に体当たりをした。それに当たった俺は下に急降下するが途中で持ち直した。

「うっとしいな。これは。」

どう進もうかと考えているとガジェットが一機爆発した。そしてまた一機爆発する。ガジェットは何がおきているのか確認するため回りを見回している。俺はその隙に近くにいたやつに斬りかかった。さらにもう一機連続で破壊した。

(ガジェットは私が引き受けるのでレインは召喚師を。)

(レイルカか。助かった。)

ガジェットを無視してこの場を後にした。ガジェットは俺を追いか



けようとするがレイルカに狙撃されて落とされていった。レイルカはヴァリスモードで狙撃をしているのだろう。ヴァリスモードは超長距離射撃よりの形態で最大五キロまで狙撃することができる。一キロ先の敵を寸分違わず打ち抜くとわ相変わらずの精密射撃だ。

そして俺はサーチャーの破壊された場所の近くにやってきた。

「何か反応はあるか？」

『今のところは何も。』

「少し辺りを探してみるか。」

『私達に気づいて逃げたのでは？』

「多分それはないと思う。まだ戦闘は続いているみたいだし、転移魔法を使った様子もないしな。ある程度場所は移動してるかもしれないけど飛行魔法を使ってないんじゃないやそう遠くには行ってないはずだ。」

俺は地面に降りて森の中を探してみた。草や木の枝を掻き分けてある程度進むと開けた場所に出た。そこは木が生えておらず日差しが差し込んでいた。そこからホテルの方を見るとバッチリと様子が伺えた。地面には足跡もいくつか残っていた。

「ここにいたのは間違いないな。まだ何も反応はないか？」

『ちよつと待つてください。微弱ですか魔力が残っているみたいですよ。調べれば場所が特定できるかもしれません。』

「分かったすぐにやってくれ。」

が、そのとき三つの魔方陣が現れガジェットが出現した。ガジェットは現れたと同時にこちらにレーザーを撃ってきた。俺はそれを真上に飛んでかわす。

「今度はさっきみたいにはいかないぞ。」

「スファイア・ブレード」

俺の周りに六本の氷の剣が現れる。オートモードでガジェットに向かわせた。ガジェットは器用にそれをかわす。だが俺への注意が一瞬遠のいた。

「はあっ!」

俺はその隙にガジェットを一機破壊した。それに気づいたガジェットがこちらに攻撃しようとするがそのガジェットはブレードに貫かれて爆発した。俺は最後の一機に駆け寄り斬り割く。今度はかわされることなく破壊できた。

そして分かったことがある敵はどうやらこ近くにいるらしい。ガジェットをピンポイントで俺の周りを出してきたから俺の姿は見えてはいるはずだ。俺は気配を探る。そうすると周りが静まり返る。そして一瞬草に触れる音がした。俺は音の方向に駆け出す。そして音の発信源に向かってエリスを振り下ろす。

「な!?子供!」

俺は慌てて攻撃を止める。攻撃はその子供に当たる寸前でとまった。

その子供は体を覆うようにマントで身を包んでフードをかぶっていた。手を顔の前に持ってきてガードの体勢をとっていた。いや単に攻撃に怯えただけか。

「何でこんなところに子供がいるんだ？まさかこいつが！？」

少し考えをまとめていると横から何か飛んできた。エリスでそれを弾く。飛んできたのはナイフだった。そして茂みから甲冑を纏った男が飛び出してきた。男の剣をエリスで受け止める。

「ルーテシア！！下がっている！！」

先ほどの子供はルーテシアと言うらしい。ルーテシアと呼ばれた子供はすぐさまその場から離れた。

「ふんっ！！」

男は俺を押し戻した。俺は二・三メートルほど後ろに下がる。かなり剣の扱いに慣れていようだ。甲冑を着ていることから騎士なのだろう。それよりこの男の顔どこかで見えたことあるような気がする。

「おとなしく下がるのであれば見逃してやる。」

「随分な言い方だな。俺がお前に負けるみたいじゃねえか。」

「先ほどの技量では私には勝てない。」

さつきは全然本気じゃなかったんだけどなあと思ったがあえて言わなかった。そしてやはりこの男はどこかで合っている。俺は記憶を探る。先ほどの声と男の顔を頼りに。そして思い出した。だが俺は

それを否定する。なぜならそれはもう死んだ人間だからだ。だが俺はそいつの死を確認したわけではない。俺の認識が間違っているだけなのかもしれない。

「・・・七年前、あんた大怪我しなかったか？それも死んじゃうかもしれない大怪我を。」

「・・・」

男は答えなかったが眉が一瞬だけ動いた。それだけで十分だった。

「あんたは何で生きてるんだ？」

「お前やはりあのときの少年か。」

「記憶違いでなければそうだな。」

「そうか。」

男は剣を下ろした。戦う必要はないと思った尾だろう。

「何でこんな面倒なことしてんの？」

「それは言えん。こちらにも事情があるのでな。私達を捕まえるのか？」

「いや、別にいいよ。あんた捕まえると色々面倒そうだし。引いてくれるって言うなら見逃してやる。」

「それでいいのか？管理局員だろう？」

「俺は民間協力者だからな。逮捕権限とかないと思うよ。多分だけど。」

「そうか。ならばその言葉に甘えさせてもらおう。」

そついうと男はその場を立ち去っていった。

『なぜ逃がしたんですか。』

「なんとなく捕まえるのはまずいんじゃないかなって思ったただけだ。」

『何ですかそれ？』

もしかしたら未来を変えてしまつかもしれなからとは言わなかった。未来のことにはレイルカから大まかに聞いているが細かいところは知らない。なので物語に関わっているものの行動を制限するのは得策ではないと思った。

「そろそろ帰るか。」

事件も終わったようだし俺はホテルに戻ることにした

## 災厄の予兆

「またか。」

「まただな。」

「またですね。」

「また。」

俺たちは目の前の二人を見ながらそう答えた。俺たちは今朝食をとっている最中だ。視線の先にいるのはティアナとスバルだ。なぜ二人に視線が集まっているかと言うと二人が寝ているからだ。

「何回目だ？」

「ここ最近ずっとですから七回ほどではないですか。」

「ていうか朝飯食いながらよく寝られるな。」

このティアナとスバルの行動が始まったのが丁度一週間前、つまりアグスタでの事件以来からだ。あの事件でティアナはミスショットを犯してしまつて危うくスバルに大怪我をさせるところだったらしい。ヴィーダが割つて入つて怪我は免れたがその後こっぴどく説教をくらつたためかなりへこんでいた。その失敗を挽回するために二人で自主練をしているようだ。

「無理してんなら少しは休めばいいのに。」

「そのうち寝ながら食事する方法を考えるかもしれないぞ。」

「いやいや、そんな麦わら帽子を被った海賊みたいな真似はできないだろう。」

「でも、スバルならできそう。」

「でも大丈夫なんでしょうか？」

俺と弾とセルティが呑気に会話をしているとキャロが心配そうな口調で口を開いた。

「もともと普通の訓練でもいっぱいだったのにそれに加えて朝早くから自主練だなんて体を壊してしまうんじゃないでしょうか？」

「それにティアナさんの方は夜も残って練習してるみたいですし無理すぎだと思います。」

キャロとエリオは若干不安そうな顔をする。確かに自己管理ができていないことは事実だな。このままいくと体が壊れるのは目に見える。

「だったらお前らが注意したらいいよ。こういつとぎのためにチーム組んでるんだろ。言って聞くかは別だけど。」

おれは素っ気無く返す。俺が未来を変えても世界に影響はないが、ここには転生者がいるしな。俺が未来を変えることによつてあいつらがどう関わってくるか分からない。あいつらが関わってまた世界が歪むなんて事態はごめんだ。この前みたいなきともあるし俺はあ

る程度の出来事には傍観をすることにした。

「確かに聞きそうにないな。特にティアナとか。」

「なんか理由でも知ってんのか？」

「それは、まあ・・・」

弾は歯切れの悪い曖昧な言い方をした。理由とはかなり言いにくいものようだ。俺はそれ以上は追及しなかった。その後二人が起きたのでその場は解散となった。

さらに一週間がたった。

あの話の後弾たちはティアナとスバルに休むよう話をしたようだが聞き入れてはもらえなかったようだ。特にティアナにはよく言っただけで聞かせたようだが自主練はやめなかった。ティアナはどこか病的なほどに強くなることを求めている。新人ならありがちな悩みだと思っただがティアナの場合は急ぎすぎている。スバルもティアナのパートナーだからと言ってやめようとはしなかった。

「はい、じゃあ今日はペアを組んで模擬戦するよ。まずはティアナとスバルから。」

高町の声聞きそれぞれが準備を始める。二人以外のFW達は離れた擬似ビルの屋上に移動した。するとテストロッサがこちらに駆け寄ってきた。

「あれ、もう始まってる？」



「遅かったなフェイト。」

「今日は私がやるうと思ったのに。」

「なのはのやつ全然休まないんだ。ここんところずっと新人たちの面倒ばかり見てる。」

「部屋でも訓練メニューを考えてるよ。大丈夫かな。」

「なのはさん僕達のためにそんなにしてくれていたんですね。」

俺はその話を聞きながらよくやるなあと思った。ティアナにしても思ったことだがあいつらは無理をしないと生きていけないのだから？

するとまた新しい人物がやってきた。

「やってるなあ。」

やってきたのは波多野たち三人だった。この三人は基本昼から機動六課に出勤する。それまでは本局で仕事をしているらしい。どうせならその仕事も六課ですればいいものを。そしたら俺が訓練に付き合う必要なんてなくなるのに。

「それにしてもあいつら大丈夫なのか？」

「え？何が？」

「お前らの忠告聞かなかったんだらう？だったらまともに戦えるとは思えないんだけど。」

「さあ、分からねえ。ティアナたちはなのは隊長に認めてもらうように練習してたみたいだし作戦とかあるんじゃないかねえの?」

「作戦ねえ……」

「やけにティアナたちのことを気にかけてますがどうかしたんですか?」

不思議に思ったのかレイルカが俺に聞いてきた。

「なんとなく嫌な予感がする。」

「嫌な予感ですか……」

「気のせいだといっただけだな。」

けれど俺の直感は気のせいなんかではなかった。

「クロスファイアシュート!!!」

掛け声とともにオレンジ色のスフィアが発射される。なのははそれを冷静によけた。

「うおおおおお!!」

スバルはウイングロードでなのはに突っ込んでいく。なのははスバルに向けてスフィアを放った。スバルはその攻撃をシールドで防いだが何発かはかすった。そのままなのはに攻撃を仕掛けるがシールドで防がれてしまった。スバルは勢いよく吹き飛ばされてしまうがなんとかウイングロードに着地した。

「スバル駄目だよ!!あんな危ない軌道!!」

「すみません!!ちゃんと防ぎますから!!」

なのははとっさにティアナを探した。するとティアナはビルの屋上で砲撃の準備をしていた。

(クロスシフトC!!行くわよ!!)

「おう!!」

リボルバーナックルがカートリッジをロードする。そしてスバルは全速力でなのはに突っ込んでいった。なのはは迎撃のためスフィアを放つがスバルはそれを全て回避した。なのははシールドを張りスバルの攻撃を受け止めた。なのははティアナの方を見る。するとティアナの姿が消えた。先ほどのティアナは幻影だったようだ。本人はスバルの作ったウイングロードの上を走っていた。

(バリアを切り裂いてシールドを突き抜ける!!)

ティアナはクロスミラージュをダガーモードにしてなのはに突っ込

んだ。

「レイジングハート、モードリリース。」

ティアナの攻撃により辺りは煙に包まれた。煙が晴れると二人の顔は驚愕に染まった。なぜならのはが素手で二人の攻撃を受け止めていたからだ。

「おかしいな。二人ともどうしちゃったの？」

「え？」

いつもより低い声のなのはに二人は戸惑う。

「がんばってるのは分かるけど模擬戦はけんかじゃないんだよ。」

「練習のときだけ言うこと聞いてるフリして、本番でこんな無茶するんだったら練習の意味ないじゃない。」

「あ、あの・・・」

「ねえ、私の言うこと、私の訓練、そんなに間違ってる？」

するとティアナはクロスミラージユのダガーモードを解除してウィングロードに飛び移る。

「私はもう誰も傷つけたくないから！！失いなくないから！！だから・・・強くなりたいんです！！」

ティアナは砲撃を放とうとする。

「少し頭冷やそうか。」

「フロントムブレ……」

「クロスファイア」

ティアナの砲撃よりさきになのははクロスファイアを撃った。クロスファイアはティアナに直撃する。

「ティアア！……バインド!？」

「よく見ておきなさい。」

なのははまたもティアナにクロスファイアを撃った。だがそれは意外な人物に防がれた。

「何してるのかな、レイン君?」

「おい、あれなんかやばいんじゃないのか?」

弾は高町が素手でデバイスを受け止めているのを見て心配そうに咳いた。そして俺がセルティの異変に気づいたのもそのときだった。

「どうしたセルティ？」

セルティは突然頭を抱えて膝をついた。その顔は苦しみを訴えていた。

「頭が・・・痛い・・・」

「おい、大丈夫か？」

ヴィーダも心配して駆け寄ってきた。

「また・・・来る・・・」

「何が!？」

セルティに問いかけようとしたとき俺にも頭痛がした。そして状況を理解した。歪みが現れたようだ。セルティは歪みとの共鳴を起こしているのだろう。負極の器は歪みに酷似した力だ。だが今までこんなことはなかったはずなのだが今回の歪みは厄介かもしれない。

「エリス、セットアップ。」

「何でバリアジャケット着てんだよ。」

「野暮用ができた。何かあったら対処できるようにはしとけ。」

「アクセル・リング」

俺はすぐに高町たちの方に向かった。歪みの位置を探る。歪みの気

配は空の方からした。今回はかなりピンポイントで狙ってきたな。セルテイの器に引かれたのか、それとも訓練場の雰囲気誘われたのか、それともそのどちらもなのか。今はそんなことはどうでもいいか。とりあえず高町たちなんとかしないと。そして俺は高町がティアナに止めを刺そうとしているところに割り込んだ。高町の放ったスフィアを切り裂いたのだ。

「何してるのかな、レイン君？」

と高町が聞いてきたが無視して俺は上空を見上げた。鮮やかなほどの空色だった空の中に一つだけ黒い点のようなものがあつた。

「ねえ、聞いているの？」

「離れる!!」

俺はエリスを構える。黒い点はかなりのスピードでこちらに飛来しているようである。みるうちにでかくなっていった。大体ではあるが三メートルほどの大きさで形はひし形のようなものだった。飛来してくる物体はまっすぐこちらに向かっていった。俺はウインググロードの上で倒れていたティアナを抱えて近くのビルに避難した。その物体は爆風と轟音を撒き散らしながら地面に衝突した。俺はすぐに歪みが落ちた場所を確認する。歪みが落ちた場所は五メートルほど陥没していてその中心に歪みがあつた。

「何なのこれ!!」

高町がスバルをつれてこちらに飛んできた。状況がいまいちつかめていないらしい。

「ネクロが現れたんだ。お前らはとつとと下がれ。」

「でも今までのネクロと明らかに違う。私も協力したほうが・・・」

「いらぬ。力のないお前がいても邪魔なだけだ。それに今のお前に冷静な判断ができるとも思えないしな。」

そういうと高町は黙った。何か言いたそうな顔をしているが俺にはそこまで気遣う気はなかった。すぐにビルを飛び降りて歪みを確認した。するとひし形だった物体に罅が入っていきついにはぼろぼろに砕け散った。

「人型だと!？」

そいつはいままでにないタイプの歪みだった。人の形をしているが人と呼べる姿ではなかった。全身が真っ黒で腕は肩から下にいくにつれて太く丸くなっていて指はない。腕の先端はジグザグに割れ目が入っている。頭には二つの角が生えていて右側だけ異様にでかい。そして片方しかない深紅の眼がこちらを見つめていた。

「正浄ナルモノ。」

人の声とは思えないほど低い声が聞こえた。俺は突然のことに驚く。歪みがしゃべったからだ。

「我ラガ王ノ邪魔ヲスルモノ。排除スル。」

歪みは俺に向かって跳んできた。ありえないほどのスピードで俺に迫ってきた。俺はとっさに横にかわして回避する。歪みはすぐに方向転換して棍棒のような腕を振り下ろす。それもまた紙一重でかわ



すが腕が叩きつけられた地面は大きな罅が広がっていた。

「はあ！！」

俺は器の力を付与させたエリスで斬りつけるが腕でガードされた。俺はそのまま押し返され後ろに吹っ飛ぶ。何とかエリスを地面に突き刺してとまることができた。

「なんつう馬鹿力からだよ。」

さっきの攻防で分かったが今までの歪みとは格段に戦闘能力が違う。一発でもまともに食らったらお陀仏だ。これは本気でいかないとやばいかもしれないな。

「ウインド・ギア」

俺は魔法をかけた途端に走り出す。歪みとの距離はすぐに縮まり思いつきり斬りつけた。だがまた腕で防がれた。器の力を付与しているのに一ミリも刃が通らない。だが俺はそれでは止まらずさまざまな方向からまた斬りつけた。歪みはそれを全て防いだ。

「くそ、腕硬すぎるだろ。」

歪みはその腕をこちらに向けてきた。すると先端の割れ目が大きく開いた。開いた腕には鋭い牙が何本もあり人を丸呑みできそうなほど大きく開いていた。そして開いた腕の中心に黒い光が集まり放たれた。黒い光弾をぎりぎりかわす。そして三軒もの擬似ビルを貫通し崩壊させた。

「遠距離もいけるって反則すぎるだろ。」

崩壊したビルから歪みに視線を向けたが歪みはいなかった。俺はすぐに歪みを探す。俺は地面に小さな影を見つけて上を見上げる。歪みは腕を振りかぶりながらこちらに降下してきた。

「くっ!？」

振り下ろされた腕をエリスで受け止めたと同時に全身にとてつもない衝撃が走る。何とか足を踏ん張って押し返したが気力が一気に奪われたように力が抜けた。歪みは着地すると同時に跳んできた。歪みの攻撃はガードしたが俺は瓦礫に物凄いスピードで吹き飛ばされた。

「がはっ！」

背中に激痛が走る。歪みは問答無用とばかりにこちらに突っ込んでくる。そして腕が開いて俺を噛み砕こうとしていた。食われる、と思った俺はとっさに右腕を突き出していた。変わった右腕から大量の血液が流れ出し俺にはまたも激痛が襲う。

「ぐああああ!!！」

歪みは止めと言わんばかりにもう片方の腕で噛み付こうとした。それに気づいた俺は器の力で剣を造り歪みの肩に突き刺した。すると剣はすんなり肩を貫通した。歪みはこれにひるんで噛み付こうとしていた腕を引っ込めた。

「ストライク・カノン!!！」

俺は歪みの胸に手を当ててゼロ距離で砲撃を放った。剣が刺さって

いたほうの肩が千切れて向かい側のビルまで吹き飛んだ。俺は千切れて噛み付かれたままの腕をはずした。そして片膝をついた。噛まれた腕からはまだ血が流れている。このままでは出血多量で死んでしまいそうだ。

「けど向こうにもかなりダメージを負わせたはずだ。」

瓦礫を吹き飛ばして歪みが出てくる。肩から腕がない姿は見えていて痛々しい。俺は力を振り絞り身構えるが歪みはこちらには向かつてこず真逆の方向に跳んでいった。一瞬なにがなんだか分からなかったがすぐに理由に気がついた。向こうはセルティがいる。セルティの器を奪う気か。それに気づいてすぐに追いかけた。だが出遅れて深手も負っている状態では歪みには追いつけるはずはなかった。

「やめろ!!」

俺の声は空しく響く。セルティは歪みが近づいた事によってさらに共鳴が強まったのか頭を押さえたまましゃがみこんでいた。波多野たちもとっさのことで対処するには難しいだろう。くそ!!俺は守れないのか!!

「こないで!!」

拒絶の言葉とともにセルティから漆黒の炎があふれ出した。その炎は歪みに直撃して撃ち落とした。無意識のうちに器の力を発動させたらしい。俺はそれを見て安堵する。だがそれも一瞬だけですぐに歪みに向かった。歪みはどろどろと皮膚が溶けていてさらに痛々しい姿になった。

「オオオオオオオ!!!!」

歪みは大きな咆哮をした。するとどろどろだった皮膚が治っていき千切れた腕も今度は細く長く鋭い指がついた腕に治っていた。

「これはやばいかもな・・・」

これを見て俺は焦った。このままじゃ再生能力のある歪みの方が勝つのは目に見えていてる。俺が動ける時間もそう長くはないだろう。最悪相撃ち覚悟で突っ込むしかないな。そう思い俺は身構える。すると突然歪みに閃光が降り注いだ。

「サテライト・レイ」

降り注いだ閃光はレイルカの魔法だった。圧縮したエネルギーを光線として放ち、相手を焼き払う魔法だ。だが歪みには足止め程度が限界だろう。上を見上げるとレイルカがこちらに降りてきているのが見えた。

「大丈夫ですか？」

レイルカは心配しているように見えるのだがなぜか怒っているような気もするような声で聞いてきた。

「結構やばいかもしれない。」

「そうですね。」

今度はあからさまに素っ気無い態度になった。やはり怒っているようだ。

「あの、レイルカさん？」

「何です。」

「何で怒っていらっしゃるのでしょうか？」

「自分の胸に手を当てて考えてください。」

そう言われても俺には思い当たる節なんて何だが。少し考えるとレイルカはため息をついて理由を話した。

「レインは最近ほとんど一人で歪みを退治していますね。」

「はい。」

「一人で先走って毎度毎度怪我をして心配するこっちの身にもなってください。今回だってそんな大怪我をして。少しは学習してください……！」

「わ、分かりました。」

こういうときのレイルカはとことん言ってくる。まるで子供をしかる親のようだ。するとレイルカの魔法が終わり歪みが姿を現した。

やはりダメージは受けてないようだ。

「後どれくらいいけそうですか？」

「がんばって十分くらいだな。目眩がしてきた。」

「分かりました。」

するとレイルカは俺の手を握ってきた。レイルカの手にも俺の血がつくが気にしてはいないようだ。そして呪文を唱え始める。

「我、汝に力を与えし者」

「我、力を欲する者」

俺たちの足元に二つ魔方陣が現れてそれを中心にさらに大きな魔法陣が現れる。

「汝、その身その力を我を守る盾とし、剣となれ」

「我、この身朽ち果てるまでそなたに忠を誓う」

「エンゲージ連結！！」

その言葉とともに魔法は完成する。

「行くぞ！！！」

「はい！！！」

俺は歪みに向かって駆け出す。先ほどのスピードより遙かに速くなつて。歪みは突然速くなつたことに驚いて俺に追いつけなかった。歪みを目の前まで行くとわき腹目掛けて斬りかかった。歪みは反応できずまともに食らった。すぐさま俺を潰そうとするがすでに俺はそこから移動した後だった。

次に来たのは矢の雨だった。数え切れない白い矢が歪みに降り注いだ。無数の矢は次々と歪みに突き刺さっていく。

この矢には器の力が付与されている。なぜそのようなことになっているかという先ほどの魔法だ。あの魔法は一時的に魔力を共有する魔法でその間俺はレイルカの膨大な魔力を使うことができる。それにより俺の魔法は一段と強力なものになるそして副作用として俺の中にある器の力がレイルカにも流れ出していることが分かった。だから今のレイルカは器保持者と同じとなるわけだ。

「オオオオオオオオオオ!!!」

矢の雨に耐えかねた歪みは咆哮によつて矢を吹き飛ばした。それは怒り狂っているようにも見えた。歪みはレイルカを標的にしたようだ。レイルカに向かって突っ込んでいくがその攻撃が届く前に俺がそれを阻んだ。

「女に向かって物騒なことしちゃいけないぜ。」

青い籠手の甲から魔力を最大噴射させて歪みの顔面を殴った。殴られた歪みは物凄いスピードでビルに激突した。

「一気に決めるぞ。」

「はい。アルク、ヴァルキリーモード。」

アルクの形状が弓から剣へと変わる。そして俺たちは歪みへと切先を向けた。

「我が力、剣となりて。現に迷いし患者の魂をあるべき世界に送りたまえ!!」

「断罪の剣!!!」  
ジャッチメント

剣と刀は二つ白い巨剣となって歪みの体を貫いた。その剣に貫かれた歪みは力を失ったようにぐったりと腕を下ろしやがて黒い霧となって消えていった。俺は歪みの消えた場所に近づく。そこには水晶のように透き通った黒い球体があった。吸い込まそうなほど深い黒だ。俺はそれを掴んで力を使う。すると球体は弾けて俺の体に吸い込まれていった。その途端にとつもない疲労感と激痛が襲ってきた。それにより立っていられなくなった俺は倒れそうになったがレイルカが支えてくれた。

「さすがに……もう無理だ。」

「そうですね。ゆっくりお休みください。」

「ああ……悪いな。」

そういつて俺は意識を手放した。



俺が目覚めたのは翌日の昼過ぎだった。起きたときは体中が筋肉痛になっていて動くことすらままならなかった。セルティは俺が死んだんじゃないかと思ってすごく心配して起きたときには抱きつかれた。そしてそこからレイルカのお説教を受けた。もう少し手加減してくれてもよかったのに。レイルカもかなり心配してくれたようだ。ティアナはあれからなんだか人変わった。どう表現すればいいか分からないがとりあえずいい方向に向かっているのは確かだろう。

「さて、これからどうしようか。」

今回のことで管理局から何かしらの行動アクションがあるだろう。セルティのことについても追求があると思う。それに気になることも増えた。

「怪我が治ると忙しそうだな。ずっとこのままでもいいようかな。」

などと考えながら俺は医務室のベッドで眠りについた。

## とある日常

「　　」

現在、レイルカは隊舎の裏庭スペースで洗濯物を干しているところだ。レイルカは六課の仕事以外に寮での家事の手伝いをしている。レイルカは基本早起きだが新人たちの訓練に付き合っているわけではない。なのでデスクワークが始まるまで何もすることがなかった。生真面目な性格の彼女は自分も何かしなければと思い寮長に頼んで手伝いをするようになった。

「今日はいい天気ですね」

少し上を見上げながら独り言を呟く。そして今日はそんな彼女を見つめるものがいた。それは隊舎の壁からひょっこりと顔を出して様子を伺っているようだった。

「どっと思っっ」

「どっっっ」

「そっっっっっ」

「あれは……」

「何なんでしょうっ？」

「動いてる。」

上から弾、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、セルティの順だ。レイルカを見つめていたのは六課のFW陣だった。彼らが訓練をほったらかしてまでレイルカを見にきているのは彼女にあるものがついていたからだ。メンバーは彼女の頭の方を見る。

そこにはぴくぴくと動く愛らしい獣の耳がついていた。ついでに言うとう尻尾も生えている。

「猫耳？」

「犬かもしれないよ。」

「いや、案外狐っていう線も・・・」

「そんなことはどうでもいいでしょうが！」

弾たちのどうでもいい討論にティアナが小声でツツコミを入れた。初めにレイルカの異変に気づいたのは寮長のミレイだった。いつもように手伝いをしてきたレイルカを見ると耳と尻尾が生えていたらしい。だがレイルカには特に変わった様子はなくすぐに洗濯物をほしにいったようだ。その後寮長がどうしたものかと考えていたところに弾が通りかかりレイルカのことを話された。そして現在に至る。

「何で耳と尻尾が生えてるのよ？」

「さあ、俺も寮長の冗談だと思ってたからな。まさか本当に生えてるとは・・・」

「そもそもあれって本物なの？」

「ときどき動いたりしてますね。」

レイルカに生えている耳と尻尾は作り物ではないらしい。彼女が動くたび小さく反応を示している。

「もしかして何か変なものでも食ったんじゃないのか?」

「誰がそんなことするのよ。それに彼女だったら食べないでしょ。そんなもの。」

「じゃあ、やっぱり突然変異で生えたとか。」

「それこそありえないわ。」

「こづいうのはレインさんに聞いたほうがいいんじゃないでしょうか?」

「そうだな。あいつならなんか知ってるはずだ。」

「レインは朝出かけていった。」

「どこに?」

「本局に呼ばれたって言った。」

「肝心なときになんでいないんだよ。」

「あれ?レイルカさんいませんよ?」

弾たちが話し込んでいる間にレイルカは作業を終わらせて隊舎へと

戻っていた。

「仕方ねえな。戻るか。」

「あ。」

「どうしたセルティ？」

「朝練行ってない。」

それを聞くと残りの五人は顔が真っ青になった。

「おい！！急ぐぞ！！今ならまだ間に合うかもしれない！！」

弾の言葉に頷きあったメンバーは全速力で訓練場へと向かって行った。だが、結局大遅刻をしてしまったことは変わらなかった。長陣にこっぴどりと絞られた六人であった。

現在、俺は管理局本部に呼び出されていた。理由は簡単だ。先日の歪みについて聞かせてほしいとかならう。とある一室に呼び出された俺を待っていたのはあの堅物提督だった。

「よう、相変わらず固い顔してるな。」

「君はまともな挨拶だできないのか？」

堅物提督は大きなため息をつきながら俺に座るように進めてきた。俺は真正面のソファに座った。

「それで今日は何のようだ？」

「そう急ぐな。まだ来客が来る予定なんだ。」

「来客？」

すると後ろのドアが開く音がした。そしてドアを開けて数人が入ってくる足音がした。

「失礼します。」

振り向くとそこには波多野、長瀬、一条の三人が立っていた。

「よく来てくれた。三人とも座ってくれ。」

そう促された三人は横の一人と二人に分かれて横のソファに座った。俺の正面に堅物提督、右に一条、長瀬、左に波多野というふうに座っている。

「さて、全員そろったところで早速本題に入る。」

「待て。」

「何だ？」

「覗き見はいけなせ。」

俺はスファイア・ブレードを発動させて部屋の天井の四隅へと飛ばした。するとブレードは何かを切り裂いた。部屋に仕掛けられていたのはサーチャーだったようだ。仕掛けたのは波多野たちだろう。

「どうして気づいた。」

「俺は魔法を視るのが得意なんだよ。それと話が聞きたいなら直接聞きに来て言っときな。」

多分、サーチャーで監視していたのは波多野たちの上司だろう。直接、聞かないと信じれないのだろうか。

「じゃあ、続きをどうぞ。」

「・・・君を呼んだのは先日のネクロの件だ。今回のネクロは今までの報告にあったものとまったく違う。戦闘能力や知能がずば抜けて高かったようだ。六課の訓練場の破損も大きかった。そのネクロについて説明してもらいたい。」

「別に説明も何もないだろう。ネクロが現れてそれが強くなっていたって言うだけだ。」

「言い方を変えよう。なぜネクロは急に強くなったんだ。」

「さあ。それについては分からない。俺はネクロの全てを知っているわけじゃないから。」

理由なら分かっている。また未来が歪んだからだ。時期的にみてアグスタでの任務のとき波多野たちが何かしたか、それとも歪みが言っていた“王”が関係しているだろう。

堅物提督はしばらく黙り込んだ。俺の言葉が嘘かどうか考えているところだろう。

「分かった。それでは次の質問だ。これを見てくれ。」

机の上にホログラムのディスプレイが現れた。それに移っていたのはこの前の歪みとの戦闘の様子だった。

「君は三年前に言ったな。ネクロを倒せるのは自分だけだ、と。けれどこの戦闘記録を見る限りでは彼女の攻撃もネクロに対して効いているように見える。どうということなんだ？」

映像にはレイルカが歪みに向かっていくつも矢を放っているところが映し出されている。確かにその攻撃は歪みに対してダメージを与えられている。

「三年前には嘘を言った覚えはない。」

「ならば、なぜ彼女はネクロにダメージを与えられる。」

「それは魔法による副産物だ。」

「副産物？」

堅物提督ははぐらかされたと思ったのか少し睨みながらこちらを見



てくる。だが俺はそれを無視して説明を始めた。

「あの時、俺が使っていた魔法、連結エンゲージの効果だ。連結エンゲージは二人の魔導師の中にあるリンカーコアを繋げて魔力の共有する魔法だ。それによつて魔力の乏しいものでも莫大な量の魔力を使うことができる。その場合は一方の魔力が高くないと駄目だけどな。」

「魔力を共有するだと？そんなことができるのか？」

「俺のレアスキルは創換リメイク。魔法を創り換えることができる。それによつて新しい魔法だつて創ることが出来る。元々、連結エンゲージは俺の魔力切れを防ぐために創つた魔法だつたんだが使用したときに俺から連結ゲイジした相手にネクロを倒す力が流れてることが分かつたんだ。だから、あの時レイルカはネクロと戦えたつてわけだ。」

四人とも今の話を聞いて驚いているようだ。魔法を創れること自体が異例らしいからな。

「その魔法を使えば僕達でもネクロと戦うことができるんじゃないか？」

今まで黙り込んでいた波多野が疑問をぶつけてきた。

「ああ、そうだな。」

「だったらなぜそれを黙っていた！！」

声を張り上げて怒鳴ってきたのは一条だった。掴みかからんとばかりに聞いてくる。

「聞かれないことには答えられないだろう。それといきなり怒鳴るな。うるさい。」

「三年前に聞いたじゃないか。」

今度は長瀬も混ざってきた。

「そのときにはまだこの魔法は創っていなかったからな。それに連結ゲイジを使わなくても対処できていたしな。」

「だが、今回は相当危なかったようだが。」

「最終的には倒せたんだからいいだろ。」

「それは結果論だ。」

「ネクロに襲われて動けなかった管理局員よりはましだろうか？」

それを言うと三人は押し黙った。

「それにお前らはあの魔法は使えない。」

「どづいづことだ？」

波多野は何を勘違いしているのか怒りながら俺に聞いてきた。どうせ、俺が使わせないとかおもってるんだろうな。

「あの魔法は他の魔法とは違うんだ。本来、リンカーコアから流れる魔力はその人間の体内にしか流れない。魔力の循環する道を回路エンゲイジとすると回路は体内を巡るだけで連結エンゲイジを使っても他人には流れない。」

「それではどうやって君と彼女は魔力を共有したんだ？」

「簡単だ。リンカーコアに外に流すための回路を作ってやればいい。」

「どうやってそんなことを？」

「俺のレアスキルを使って作る。リンカーコアの構成を一部変換することによって回路への道が作れる。ただし、その場合にはリスクが伴う。」

「どんなリスクだ？」

「今までにリンカーコアに損傷を受けたものにしようとするれば最悪リンカーコアが壊れて魔導師ではいられなくなる。傷でなくても疲労が溜まるほど酷使している場合も同じだ。それとリンカーコアに外への回路を作るときは最低でも一ヶ月は掛かる。」

「そんなに掛かるのか？」

「人によって回路の構成は違う。それを調べるだけでもどれくらい掛かるか分からない。俺とレイルカの回路を調べるだけでも半年はかかった。そして回路を作るときも一気にはできない。徐々に変えていかないとリンカーコアが壊れてしまう。それと回路を作っている間は魔力を使うことはできないからな。」

俺は一通り話し終えて一息つく。波多野も先ほどの説明を聞いて冷静さを取り戻したようだ。

「俺にはお前らのリンカーコアをいじる時間があるほど暇じゃないし、お前らだって長期で仕事を休むわけにはいかないだろう。分かっってもらえたか？」

「ああ、理解した。」

するとそのとき制服のポケットに入っていた携帯が鳴り出した。携帯は六課に入ったときに渡されたものだがほとんど使うことはなかった。時たま、弾から悪戯電話とかがくるぐらいだった。

「出ていいか？」

「構わない。」

「もしもし・・・あ、弾か。なんか用か？」

電話を掛けてきたのは弾だった。こんな時間に掛けてくるのは随分と珍しいことだった。

「ああ、今は本局にいる。え、レイルカが大変？って何で・・・猫耳？尻尾？んなもん生えるわけないだろ。悪戯なら切るぞ。」

電話のないようがあまりにも馬鹿馬鹿しかったので俺は電話を切った。そして、しばらく沈黙が広がる。なんだがさっきまでの雰囲気か台無しだな。

「帰っていいか？」

「いや、まあ別に構わないが、君達は六課で何をやっているんだ？」

「さあな、俺は知らん。なんか弾がさあレイル力に猫耳と尻尾が生えたっていつて……」

ふと、俺は説明しているうちに前にもこんなことあったよつな気がしてきた。

「あ。」

「心当たりがあるのか？」

「ああ、うん、まあ。じゃあ俺帰るから。」

そういつて俺は少し足早にその部屋を後にした。

少し時間はさかのぼる。

レインたちが本局で話している間、六課のメンバーはデスクワークに入っていた。ちなみに訓練に遅刻した分今日はFW陣に大量の書類が回されていた。FW陣はそれを終わらせるため黙々と作業をしているところだ。

レイルカもデスクワークの処理をしている。こちらはいつもの量だ。だが相変わらず機械に慣れていないのかスピードはゆっくりめだ。朝と変わらず猫耳と尻尾も生えている。

それをドアの影から覗くものがいた。それは六課の隊長たちだった。

「本当に生えてる。」

「動いてるね。」

「なんかめっちゃ触りたいわ〜」

「だから言ったじゃないっすか。」

ちなみに最後の弾である。弾は隊長たちにレイルカのことを説明するために仕事をサボっていた。

「でも何で耳と尻尾が生えてるの？」

「それが分かんないんですよ。本人も気づいてないみたいで。」

「え？気づいてへんの？」

先ほど弾が遠まわしに猫耳のことを聞いてみたが意味の分からない質問として流されてしまった。

「レインには聞いたの？」

「いえ、本局に行って帰ってきてないらしいです。」

「携帯使えば？」

「あ、そうでしたね。後で聞いてみます。」

「にしてもあれほんまに生えとんやな。」

はやてが時折動いている耳や尻尾を見ながら呟く。FW陣も気になるのか仕事をしながら横目でちらちらとレイルカの様子を見ていた。

「あんなんギャグか罰ゲームやで。」

「ねえ、この際言つてあげたほうがいいんじゃない？」

「そうだね。さすがにあのままじゃちょっと・・・。」

なのはとフェイトがなんとも心優しい提案をしている。弾もそれに賛成しようとしたが一人それに反対するものがいた。

「あかん！！これは気づくまで放置するのが常識や！！」

「ちょっと声大きいですよ。」

「だってこないなおもろいことまだ続けたいやん。」

「でも・・・。」

「二人やってレイルカちゃんの慌てる姿見たいやろ？」

「それは・・・。」

「ちよつと・・・」

レイルカは家事や炊事ができ、礼儀正しく、気品があり、女性としての魅力もある。多少に苦手なものはあるがほとんど完璧超人だ。そんなのがあつてレイルカは出来る女というイメージが強かった。なのはたちもレイルカの慌てる姿には大いに興味があつた。

「ほな、このままや。」

「それじゃ、私は仕事に戻るよ。」

「私も。」

「じゃあ、俺も。」

「え、みんな見ていかへんの？」

なのはたちはそれぞれの仕事場に戻っていった。はやては一人取り残されてしまい仕方なく自分も仕事に戻ることにした。その間、弾はレインに連絡をとった。

そして、昼休みに入ったのでF/W陣は昼食をとることにした。食堂で昼食をとっていると他の局員からの視線が集中した。もちろん、レイルカだ。

「あ、いただいた。みんな」

そう呼ばれて振り返るとそこには寮長のミレイがいた。手には何かの箱を持っている。



「どっしたんすか？」

「さっきねえ、ケーキ焼いたの。だからみんなにも分けてあげようと思って。」

「ケーキ！！食べたい！！」

「こら、スバル。落ち着きなさいよ。」

ミレイはもうレイルカの耳と尻尾のことは気にしないことにしたらしい。そして、持ってきたケーキを切り分けていった。作っていたのはホールケーキのようだ。ケーキの上にはイチゴやキウイといったさまざまな果物が散りばめられていた。

「……いただきます。」

「お、うまい！」

「おいしい〜」

「確かにおいしいわね。」

「おいしい。」

「おいしいです。」

「おいしいね、フリード。」

「キュル〜」

ケーキを食べてそれぞれ感想を述べている。ケーキを作ったミレイも満足げなメンバーの表情を見て微笑んでいた。すると弾がレイルカの変化に気づいた。変化というほどではないが少しうっむき加減でボーっとしていた。

「どうしたレイルカ？」

「え？な、何です？」

「いや、ちょっとうっむいてるからどうしたのかなって。」

「いえ、何でもありませんよ。おいしいですね。このケーキ。」

本人はそういうがどこがおかしい。元からおかしくはあるのだがなんだか急にぼーっとし始めたのだ。

「なんだか暑いですね。」

レイルカは手をパタパタとさせて扇ぎだした。なぜかその顔はほんのりと赤みがかっていた。するとレイルカは制服の上着を脱いだ。

「ちょっとレイルカさん。何で制服を脱ぐの？」

「え？暑いからですよ。」

「そうですかって！？何でシャツのボタン外してるんですか！？」

「だから暑いからです。」

ティアナとスバルはシャツを脱ごうとしているレイルカを止める。

エリオはキャロに目を塞がれていて、弾とセルティは突然のことで何をどうすればいいか分からないといった様子だ。ミレイは傍観を決め込んでいる。

「離してください。」

「駄目です!!」

「何ですか？」

「公衆の面前で服を脱ぐなんて駄目に決まってるでしょ!!」

だんだんとめっちゃくちゃな状況になってきていたその時

「お前ら何やってんだ？」

だるそうな声が聞こえた。その声を聞いたときFW陣はとてもほっとしたそうだった。

「レイン、何とかして!!」

ティアナはレイルカを掴みながら言う。どうなってんだよね。

「あゝレイルカちょっと来てくれ。」

するとティアナたちの拘束を解こうと抵抗をしていたのをやめてレインの方に歩みよってきた。顔は赤く、表情はへらへらとした笑みを浮かべてこれだけでも異常だと分かる。

「レイン。どうかしたんですか〜えへへ。」

言動もかなりおかしい。若干、呂律が回っていない。俺はレイルカの額に手を当てて熱を測る。熱いな。次に喉がはれてないか確認する。手で首を触って汗の量も確認した。

「くすぐったいですよ〜」

「はあ、またか。」

状況を理解した俺はレイルカを抱えあげた。これには驚いたのかレイルカは目と見開いた。

「な、何するんですか!？」

「何って医務室に連れて行くんだよ。」

「だったらひとりでいけますよ〜」

「いいから大人しくしとけ。」

俺はレイルカの意見を無視して医務室へと向かった。

「お、おい待てよ。どうなってんだよ!」

ついでに食堂にいた弾たちもついてきた。

「風邪ね。」

「「「「「「は?」「」「」「」」」」」」

医務室で検査すること十分。レイルカはシャマルに風邪と診断された。

「あの、なんで風邪で耳や尻尾が生えるんですか?」

「ああ、それはなレイルカのレアスキル所為なんだ。」

「レアスキル?」

「レイルカは自然界の動物に変化できるレアスキルを持つてるんだが、病気とかに罹るとその制御が出来なくて耳やしっぽが生えつつてことだ。」

「じゃあ、さっきの奇行は何だったの?」

「酒でも飲んだんじゃねえのか?」

「飲んでないわよ。ケーキ食べてただけだもの。」

「ケーキ?・・・もしかしてそれキウイとか入ってたか?」

「確か入ってたわ。なんでそんなこと聞くの?」

「ああ、キウイはマタタビ科だからな。それで酔ったのか。」

次々とレイルカの奇行の原因が解明されていった。六人は心配して損じたみたいな表情を浮かべていた。

「もういいや。仕事に戻ろう。」

「私も。」

F W陣は次々と部屋を去っていった。

「私もちょっと用事あるからちょっとの間よろしくね。」

と、言ってシャマルもどこか行ってしまった。俺はとりあえずレイルカが寝ているベットの横の椅子に座った。布団を頭まで被って顔が見えない。酔いがさめて自分のやったことの恥ずかしさに気づいたらしい。

「大丈夫か？」

「………」

「せめて返事くらいしろよ。」

「………すいません。」

レイルカは顔を半分ほど出して謝ってきた。顔はまだ赤い。風邪の所為だけではないだろう。

「・・・風邪は疲労から来るものだと言ったとシャル先生が言っていました。ですから休めば治ると思います。」

「疲労ねえ。そういえばお前ずっと俺の看病してたっけ。人の看病して自分が風邪引くって笑える話だな。」

「し、仕方ないじゃないですか。心配だったんですから。」

レイルカはまたも顔を布団の中に隠してしまった。

「人に無茶するとか言ってたからさあ、お前も少しは気をつけろよな。」

「・・・すいません。」

「今回は俺が悪かったんだけど次からこんなことないようになれよ。お前が病気とか怪我したら俺も心配になるんだからな。」

「え？」

「俺だけじゃなくてセルティとか弾とか他の連中も心配するんだ。だからお前も自分の体に気使え。」

「は、はい。分かりました。」

そこで会話が途切れる。なんだか最後は説教みたいになってしまった。

「俺にしてほしいことがあったら言ってくれ。出来る限り何とかする。」

「あ、はい。それじゃ・・・」

「何だ？」

「えと、その、しばらく手を握ってくれてもいいでしょうか？」

レイルカは少し恥ずかしそうこちらを見つめて告げてくる。

「いいぜ。」

俺はレイルカの手を握った。レイルカもそれを握り返した。レイルカの手はなんだかとても小さく感じられた。しばらくすると静かな寝息が聞こえてきた。だが、手はしっかりと握られていた。



## とある非日常

「あ、おはよう。フェイトちゃん。」

「おはよう。なのは。」

昨日の猫耳事件（弾命名）が終わった次の日の朝なのはは部隊長室に向かっていた途中でフェイトに出会った。

「あれ、フェイトちゃんも部隊長室に行くの？」

「うん。はやてに出さなきゃいけない書類があるんだ。なのはも行くの？」

「私もはやてちゃんに書類を出しに行くところ。」

目的地が同じことを知った二人は一緒に向かうことにした。そして、話は自然と昨日のことになった。

「それにしても昨日はティアナたち大変だったみたいだね。」

「うん。レイルカがキウイを食べて酔っ払っただけだよ。」

「キウイ？果物のキウイってアルコール成分なんてあったけ？」

「それはないんだけど。レイルカのレアスキルで一時的に猫化してたから酔っただけだよ。キウイってマタタビ科だから。」

「へえ、キウイってマタタビ科だったんだ。」

「その所為で昨日遅くまで書類書き直してたんだよ。」

なのははため息をつきながら言った。民間協力者がいる場合本局に協力者の資料を提出しなければならぬ。レイルカのレアスキルを記載していなかったので書き直したらしい。ちなみに書き直すのは二回目だ。一回目はレインのレアスキルが発覚したときだ。

「災難だったね。」

フェイトは苦勞している友人に対して慰めの言葉を掛けた。

「そういえば朝方、悲鳴みたいなものが聞こえなかった？」

「え？聞こえなかったけど。」

そうこう話し込んでいるうちに二人は部隊長室までたどり着いた。そして、なのはが扉を開けると驚くべき光景が目に入った。

「ん〜!!ん〜!!」

「ん?」

そこには口をふさがれ天井につるし上げられている友人と男物の制服を身に纏った白い髪の女性だった。

「え!?!何してるの!?!」

時間は少し遡る。場所は男子寮の一室で事件は起こった。いや、起こっていた。

「ふあゝ」

俺は大きな欠伸をしながら体を起こした。起きた俺は大きく体を伸ばした。そして時間を確認する。

「ってまだ五時じゃねえか。」

時計を見て俺はまた欠伸をする。いつもなら訓練の始まる七時くらいまで寝ているのだが今日はなんだか早く目覚めてしまった。だがそこで俺は少し違和感を感じる。だがその違和感は性格には分らなかった。

「ま、いいや。とりあえず顔でも洗うか。」

二度寝でもしようと思ったのだが妙に目がさえていて多分寝れないと思ったのでやめた。ベットから降りて洗面所に向かう。ちなみに俺は弾と共同でこの部屋を使っている。だがそこでまた違和感を感じた。目線の位置が低い気がした。不思議に思った俺は足元を確認してみた。

「え？」

足元は見ることは出来なかった。それは胸が大きく膨れていたからだ。俺は一瞬固まった。それは男にはあるまじきものだったからだ。俺は恐る恐る膨れ上がっているものに触ってみる。柔らかい。俺は途端に部屋を出て洗面所に向かった。そして、鏡に映った自分の姿を確認する。

「ええええええ！？」

腰まで伸びた白い髪に陶器のような白い肌。体つきは出るところは出ていて、引つ込むところはひっこんでいる。顔立ちは整っていて少し細い目が妖艶さをかもし出していた。鏡に映っていた俺は紛れもない女だった。

「待て待て待て待て！！なんでこんなことになってんだ！？」

おかしい俺は昨日まで列記とした男だったはずだ。役所に問い合わせたら即答させるくらい的事实だったはずだ。寝ている間に何があつたんだ？そして俺はまた鏡を見る。

「！？」

俺はまた驚愕する。改めて見て分かったが今の俺の顔は母さんにそっくりだった。いきなりだったのでそこに母さんがいると思っってしまった。しばらく俺はその姿を見つめていた。そしてだんだんと落ち着いてきたので原因を探してみることにした。

「しかし、なんでこんなことに・・・」

自分の体を見回してみるがもの見事に女性の体となっていた。百

八十はあった身長は十五センチほど低くなりレイルカと一緒にくいだ。とりあえず俺は昨日のことを思い出して見ることにした。

「昨日は確か・・・」

昨日はいつもどおり弾の訓練に付き合ってからデスクワークをした。そんでもって怪我してる間に溜まってた仕事片付けてたんだっけ。それが思いのほか時間掛かって十一時くらいに終わったかな。それから八神にあったな。八神が気を利かせてコーヒー入れてくれたな。

「まさか・・・」

いや、さすがにと思いきその考えを否定する。いくら八神でも性別を変えるようなことはできないだろう。でもあのコーヒー、若干変な味がしたような。

「とりあえず、聞きに言ってみるか。」

他に可能性もなかったの俺は確信にも似た予想を抱きつつ部隊長室に向かった。

「と、言うわけで現在に至る。」

部隊長室に行つて八神を問い詰めてみると案の定俺の予想は当たつていた。なので俺は原因を始末するべく八神をつるし上げたところで高町たちが入つてきたのだ。現場を見た高町たちは慌てて俺を押しさえにかかり説明を要求されたので懇切丁寧に事情を話した。

「至るつて、今の内容冷静に受け止められないよ!!」

「ちゃんと現実を見る。そしてあるがままを受け止める。」

「その現実が非現実的過ぎるんだけど・・・」

「なつちまつたんだから仕方ないだろ。」

二人は俺の姿をまじまじと見つめる。本当に女になつたか確認しているのだろう。

「本当にレイン君なの？はやてちゃんと組んでドツキリとかじゃなくて。」

「俺的には今その状況だつたらどれだけよかつたことか。」

「えっと、何でレインは女になつたの？それではやては何で縛られてるの？」

「それはこいつが俺をこんな風にした張本人で、縛られてるのは俺が今からこいつを処刑・・・もとい、オハナシをしようとしたからだ。」

「ん〜!〜ん〜!〜!」

「処刑つてはつきり言ったんだから言い直さなくてもよかつたんじゃない?」

処刑という言葉聞いて縄で吊るされている八神はじゃべれない口で抗議していた。その目は若干涙目だ。

「とりあえず、話聞くために降ろしてあげたら?」

「チツ、仕方ないな。」

俺は吊るされていた八神の縄を解く。縄は魔法で作っていたので消えていった。支えがなくなった八神は地面に落ちた。そして自由になった八神は口のガムテープを剥がした。

「ひどい。ひど過ぎる。まだ十九才の純情無垢な乙女に対してこの仕打ち・・・この鬼畜!!!」

「黙ってる、腹黒狸。勝手に人の体弄くつたてめえに言われたくない。」

八神はよよよ、と口に手を当て泣きまねをしながら俺をののしってきたが俺は睨みを聞かせて黙らした。

「それで何でレインは女の子になったの?」

「あ、それはな。昨日ロツサから送られた薬を飲ませたからや。」

そういつて八神は机の引き出しから健康ドリンクのようなものを出

した。

「何だこれ？」

「ロツサの知り合いが作った薬でな。効果がよう分からんから調べ  
てくれて言われとつたらしいんや。そやけどロツサはめんどくさ  
がってうちに押し付けてきたんや。」

「で？」

「ちょうどええところに残業で疲れとつたレイン君がおつたからコ  
ーヒーに混ぜて飲ませてみました。」

「遺言はそれだけか？」

俺は説明し終えた八神の首筋にエリスを突きつけた。もちろん殺傷  
設定でだ。

「待つて！！お願いやから！！ちゃんと反省しとる！！」

「じゃあ氷漬けかさらし首、どっちか好きなほうを選べ。」

「処刑の内容変えてくれ言つとんちゃう！！ていうかどっちも死刑  
やないかい！！」

「一ミリ単位で切り刻まれるよりましだろ。」

「なんなん！？反省せんかったらそれする気やったんか！！助けて  
えゝなのはちゃん、フェイトちゃん！！」



「レ、レイン君少し落ち着こう、ね？」

「そうだよ。はやても反省してるみたいだし・・・」

二人に宥められて俺は大きなため息をつきながらエリスをしまった。

『あゝもう、さっきからうるさいですねえ。静かにしてくださいよ。マスター？』

待機状態で寝ていたエリスが文句を言いながら起きてきた。デバイスの癖になぜ寝るのは分かかっていない。

『えっと、どちら様でしょうか？』

「はあ・・・お前のマスターだ。」

『何を言ってるんですか？あなたはどつ見たって女でしょう。私のマスターは間抜け面の男ですから。』

「相変わらず、酷い言い草だなおい。」

仕方ないので俺はエリスにこの事態について説明した。

『このボンツ、キュツ、ボンツで大人の色気ムンムンなお姉さんがあの怠け男のマスターなんですか？』

「そや。」

「わざわざ時代遅れな言い方すんな。あとさり気無く俺をバカにするな。」

『はやてさん。いい仕事しましたね。』

「そうやる。」

エリスが八神をほめると八神はこれでもかというぐらいのドヤ顔をしている。こいつ本当に反省してんのか？

「でもすごいね。こんな綺麗になるなんて。」

「ほんま、下手なアイドルより綺麗やで。それに性別変わるって珍しい体験できてええやる。」

「これがお前にとっていい体験なんだつたらその薬こっちによこせ。今すぐお前もトランスフォームさせてやる。」

「すみません。調子に乗りました。」

自分の軽率な発言をものすごい速さで謝ってきた。ていうか普通にお前らのほうが綺麗だろ。俺は男なんだぞ。

「もういいや。とりあえず八神はすぐに元に戻る方法を探せ。それと今日の訓練は休ませてもらう。それくらいはいいだろ。」

「じゃあないな。分かったわ。」

用件を言い終えたので俺は部屋を後にしようとしてドアを開ける。だがドアの先には波多野がいた。それに長瀬と一条もいる。波多野も丁度ドアを開けようとしていたらしくドアノブを掴もうとしていた。だが俺がドアを開けた所為でドアノブを掴み損ねバランスを崩した

波多野はまっすぐ俺の方に倒れてきた。

「うわぁー!!」

「な!？」

ドタツと大きな音を立てて転んだ俺たちは丁度波多野が俺を押し倒すような形になった。波多野の顔面は俺のでかくなつた胸に埋められていた。

「とつとどけ!!波多野!!」

「ん?うわぁ!？す、す、すみません!？」

自分の状況に気づいた波多野は慌てて飛びのいた。俺はため息をついて立ち上がる。今日は朝から災難続きだ。

「椋君。なにやってるのかな？」

「な、なのは!？こ、これは、えっと、不可抗力というもので・・・」

「言い訳なんて聞きたくないの!!」

後ろでオハナシされている波多野を放っておいて俺は部隊長室から出た。出るとき長瀬と一条の視線が気になったが無視した。自室に帰った俺は布団に包まって寝ることにした。朝早く起きすぎた所為で睡眠時間が足りていなかったらしくすぐに眠りに着くことが出来た。

カタカタという音が静まり返った部屋に響く。今日は丸一日寝て過ごそうと思ったのだが八神がデスクワークくらいやれと言ってきたので作業をしているところだ。

チラ……

今日はいつもとより静かだ。理由は分かっている。

チラ……

なんせ同僚が女になって出勤してきたんだからな。驚くに決まっている。

チラ……

「はあ……」

先ほどから集まってくる視線が鬱陶しい。気になるのも分かるし自分が物珍しい存在であることも分かっている。けれどこっちは視線を向けられるとこっちの方が気になってしまふ。

「さっきからジロジロ見るなよ。」

俺が言葉を発すると他のメンバーがビクッと反応する。

「レ、レイン、ここ教えてくれないか？」

すると弾が毎度のごとく分からないところを聞いてきた。どことなく言い方がぎこちないような気もする。

「ここはこうして・・・」

「お、おう。」

俺が説明するが弾は聞いているのか聞いていないのかよく分からない返事をする。それに顔が若干赤いような。

「おい、弾。熱でもあるのか？」

「え!?!」

俺は弾の頭に手を当てて温度を確認する。熱は内容だな。けれど顔はますます赤くなっている。

「だ~~~~!!もう我慢できねえ!!レイン、てめえ!!ちよつとは周りのこと考えやがれ!!」

「な、何だよ。いきなり。」

「そんなエロい格好で近づいてきやがって!!せめて上着の前くらい閉じろ!!健全な男子にとっては毒以外のなものでもないんだよ……」

「いつもと一緒にの格好で何が悪いんだよ。」

俺の今の格好は制服の上着のボタンを前回にして下には黒い半袖のTシャツを着ている。制服の袖は肘まで折り曲げておりズボンにはベルトをきつく締めて着ている。そうしないとぶかぶかで着れないのだ。その所為で胸が強調されていたり少し谷間が見えていたいするが大丈夫だろうと思ったのだ。

「そんなに駄目か？」

「一応俺は他のメンバーに聞いてみた。」

「確かに男の子にとっては刺激的かもねえ。」

「それより私はなんであんたが女になってるかが気になるわ。」

「それはさつき八神が言ってただろ。」

「薬飲んで女になったって説明省き過ぎでしょ。」

ティアナの疑問はもつともだろう。まあ、でもなんて言えばいいんだろうか。本当に薬飲んで女になっただけだからなあ。

「レイン、ちょっと失礼する。」

「ん？」

俺がティアナにどう説明するか考えているといつの間にか後ろにいたセルティが俺の胸を鷲掴みにしてきた。むんずっ、という擬音が

聞こえてきそうな光景だ。

「……凄い……」

「いきなり何すんだ。」

セルティはしばらく俺の胸を揉んだら手を離れた。そして自分の胸に手を当ててなぜか俺に恨めがましい視線を向けてくる。

「レイン、なんかずるい。」

「いや、ずるいって言われても……」

「確かにこれはずるいですよねえ。」

「うわぁ！レイルカか。」

突然、腰回りを触られて俺は小さな悲鳴を上げてしまった。レイルカもしばらく触ると手を離しこちらに恨めがましい視線を向けてきた。

「お前だって変わらないだろうが。」

「私はちゃんと気を使っただけの結果ですよ。なのにレインは何もしてないのに……」

「あゝもう！！その視線やめろ！！」

「そつえばさっき気づいたけど、レインはブラ着けてなかった。」

セルティがそういうと全員の視線が集まった。

「な、何だよ。」

「まさか、ノーブラだったとは・・・この痴女が!!」

「痴女とか言うな!!この変態!!大体、女物の下着なんて着れるわけないだろ!!」

「でも胸大きいんだったらブラ着けないとなにかと不便だよ。運動とかして揺れたり、服と擦れたりすると痛いよ。あ、そうそう、肩こったりもするしねえ。」

スバルがうんざりというような感じで言ってきた。スバルも俺同様胸がでかい。先ほどスバルが言ったことは少しだが共感できることがある。けれどそれでも女物の下着を着けようとは思わなかった。あと、スバルの発言は何人かを敵に回していることも分かった。

「だったら下はどうしてるんだ?まさか下まで履いてな・・・」

「お前はもう黙ってる。」

弾の言葉を遮り俺はエリスを振りかぶる。だが俺は若干倒れこむようにしてエリスを振るった。すると狙いははずれ弾の机に大きな傷を入れた。

「危ないだろ!!レイン!!」

「ちょっとそれはやりすぎじゃない?」



おかしい。峰辺りで弾の頭を叩くつもりのはずが狙いをはずして机に向かつてしまうとは思わなかった。

「す、すまん。」

「え？あ、ああ。なんかやけに素直だな。」

「どうかしたんですか？」

「……いや何でもない。騒がせて悪かった。」

そういつて俺は自分の席に戻った。先ほどまでの空気が一変されどこか気まずい雰囲気になってしまった。仕方ないので俺は自分の仕事に没頭した。

「はあ……」

食堂にて俺は大きなため息をついた。デスクワークも終わり今日はこんな体なので訓練に付き合うこともない。

「はあ……」

そんな俺の様子を見てFW陣はひそひそと話し込んでいた。

「どうしたんだらうね？レイン。」

「さつきからため息ばかりしてる。」

「みんなから女って言われて傷ついたんじゃないの？」

「あいつがそんなこと気にするか？」

「でも、以外とショックだったのかもしれないねえ。」

「弾さんが痴女とか言っていましたからね。」

「あれは普通に傷つくと思いますよ。」

「え？俺の所為？」

と、というような会話をしていたが俺の耳には入ってこなかった。俺が悩んでいるのは先ほどのことだ。エリスをまともに振るえなかったことだ。振ってみて分かったが女の体だと筋力が落ちていてエリスを振るうと逆に振り回される形になってしまっ。このままでは俺は戦うことが出来ない。そして、俺は考えてしまった。

もし、このまま男に戻らなかつたら・・・

そう考えると少しぞつとした。弱いままだと歪みを退治できない。戦ったとしても死ぬだけだろう。だから俺は先ほどから解決策を考えているのだが全然思い浮かばなかった。

「はぁ・・・」

ちょうど晩飯を食い終わったところだったので俺は食器を返し自室に戻って休むことにした。

部屋に戻ると俺は上着を脱いでベッドに倒れこんだ。今日は何かと疲れる一日であった。肉体的には問題ないが精神的にくるものがあった。なのですぐに寝ようとしたがドアが開く音がしたので目だけで見してみた。そこには弾がいた。いつもならもっと遅くに帰ってくるのに今日は随分早いな。

「起きてるかレイン？」

「何だ？俺は眠たいんだが？」

「えっと、俺はお前に伝えなければならぬことがあってだな。」

「だったら手短に済ませてくれ。」

俺は起き上がり弾の方を見る。弾はどこか居心地悪そうな感じで立っっていて気をつけまでしていた。けれどなかなか口を開かない。しばらく静かな時間が流れる。そしてようやく弾が口を開いた。

「レイン！！その、すまなかった！！」

「は？」

「いや、だから、その、お前が落ち込んでたからさあ。俺が痴女とかいって傷ついていたのになって思ってた。」

弾は頭を下げながら理由を説明してきた。まあ、随分と的外れな勘違いをしているものだ。

「誰かのそんなことで悩むかよ。お前の戯言なんか気にもとめてねえよ。」

「え？じゃあどうして？」

俺は仕方なく悩んでいる理由を話した。十分程度で説明は終わった。

「じゃあ、つまりお前は弱くなったことに対して不安を覚えてどうしたらいいか分からなくなっただんだな。」

「別に不安とはいってないだろ。」

「同じようなもんだろ。」

俺は反論しようとしたがやめた。多少の不安は感じていたはずだと思っただからだ。

「何だよ。心配して損したぜ。」

「俺にとっては死活問題だ。」

「別に悩まなくなっただっていいじゃねえか。」

「何だよ。」

俺は軽々と言葉を返してくる弾に少し苛立ちを感じながら聞いてみた。

「弱いんだつたら周りを頼ればいい。お前の頼みなら俺は助けてやる。」

弾は真剣な顔つきで答えた。突然のことだったので少し驚いてしまった。

「それに他のやつらだって助けしてくれると思うぜ。お前さあ何でもかんでも一人でやろうとすんなよ。レイルカにも怒られてたذار。一人で突っ走るから駄目なんだよ。」

「・・・悪かったな。」

「だからもつと周りを頼るようにしろ。まあ、男に戻るまでくらいなら守ってやる。」

俺は弾の言葉を聞き少し小さなため息をつく。

「俺はまだお前に守られるほど落ちぶれちゃいねえよ。そういうのは俺より強くなってからいいな。」

「何だよそれ。せつかく人が手助けしてあげようと思ってるのに。」

「まあ、少しは元気出たぜ。ありがとよ。」

そのとき俺の視界が揺らいだ。頭に激痛が走り俺はその場に倒れた。

目が覚めるとそこは医務室のベッドの上だった。前にもこんなことあったような。俺は起き上がり周りを確認してみた。医務室には誰もおらずとても静かだった。そしてあることに気づいた。

「男に戻ってる。」

髪は長くないし、胸もない。身長も伸びて声も低かった。どうやら俺の悩みは杞憂に終わったようだ。薬の効果でも切れたのだろうか。

「お、起きたか。」

すると、弾が入ってきた。

「いや、いきなり倒れるからびっくりしたぜ。その後体から煙が出てくるもんだから大変だった。」

弾の話によると俺は倒れた後煙を噴出しながら男の体へと戻ったようだ。その後も目覚めなかったので弾がここ運んできたらしい。

「はあ、なんともはた迷惑な薬だな。」

「でも女のレインはめっちゃ綺麗だったな。」

「やめろ。あんなの二度とごめん。」

「そうかい。それじゃ、無事も確認したことだし俺は部屋に戻るわ。あ、そうだ。俺が言ったこと忘れんなよ。」

「ええ、なんかお前頼りなさそうだからいいや。」

「そこは普通に頼りにしてるでいいじゃねえか。はあ、じゃあな。お休み。」

弾はため息をつきながら部屋を後にした。俺も再びベットに横になった。そしてもう一度弾の言葉を思い出す。

「まあ、少しだけ頼りにしてるよ。」

俺はそれを言うと目を閉じて意識を手放した。

とある非日常（後書き）

次回からは本編です。



## 知らない手紙

「はい、そこまで。」

高町が訓練終了の合図をする。それとともにFW陣が地面にへたり込んだ。日に日にハードになっていく訓練はなれるようなものではないようだ。

「お疲れ様。みんなにちょっと朗報があるんだ。」

高町の声聞き顔を上げる六人。朗報という言葉が気になっているのだろう。

「今日の訓練はデバイスの第二段階を解除するためのテストだったんだ。それでどうだった？フェイトちゃん？ヴィーダちゃん？」

六人の顔が一気に緊張する。心内では知りたいけど知りたくないとかそのような思いが渦巻いていることだろう。

「うん、合格！」

「……………早っ！！」「……………」

「私もいいと思うぞ。ま、全員まだただけだな。」

テストロツサの緊張感のない合格発表に思わずツツコミを入れてしまった六人。その所為か一気に気が抜けてしまったようだ。訓練が終わった後よりも気だるそうにしている。

「後でシャーリーのところに行つてね。第二段階の解除をしてくれるように言つてあるから。」

「はい、質問です。」

するとそこで弾が手を上げて高町に問いかけた。

「何かな？弾君？」

「俺とセルテイのデバイスはレインが作ったものなんですけど、俺たちにも第二段階の解除とかあるんですか？」

「えっと、どうなのかな？レイン君。」

「え？ああ、あるけど。」

俺は地面に寝そべりながら答えた。早朝から起こされて訓練なんてするもんじゃないな。

「一応、リミッターをいくつか付けてるよ。エクス、フアング。」

『はいはい。』

『はいよ。』

俺は二人のデバイスの名前を呼ぶ。ちなみにエクスはエクスシアの略称だ。二人のデバイスが光だしホログラムのディスプレイが展開された。

「そこにパスワードを打ち込んだらリミッターが一つ解除されるよ

うになっている。」

「パスワード知らない。」

「ああ、それはエクストファンクが知ってるから後で聞けばいい。」

「なあ、レイン？なぜか俺の画面には難ブレのクイズ画面が表示されたんだが？」

そういつて弾は画面をこちらに向けてくる。そこには『目指せ！！連続正解！！難プレチャレンジ！！』と表示されていた。どこのクイズ番組にも通用しそうな絵だ。

「お前の場合は出題されるクイズに十問連続で正解したときに解除されるようになってる。」

「何でそんな無駄に面倒なシステムにしてんだよ！！！」

「最近の若者は学力が低下していると聞くからな。それを解いて脳を活性化させてやろうと思ってな。それにそのほうが楽しめるだろ。」

「余計なお世話だ！！ていうかお前もその若者だろ！！！」

「俺は十分頭いいから。」

「むかつくなその台詞！！！」

「やっぱりお前の頭じゃ無理だったか。」

俺はやれやれとため息をつくオーバーなリアクションをする。そのリアクションを見て弾は火がついたようだ。

「上等だ！！こんなクイズ一分で終わらせてやるよ！！」

『おう！がんばれ大将！』

そう意気込んでから弾はクイズに挑戦した。

一分後・・・

「一問も解けない・・・」

『大将。せめて二問目には行きましょうぜ。』

弾は地面に両手と両膝をついて落ち込んでいた。意気込んでから五秒後には不正解のブザーが鳴り、そこから一問と解けなかったようだ。

「やっぱりか。フアング、後でパスワード教えといてやれよ。」

『分かりやした。』

「え？どういうことだ？」

「こづいことだ。」

俺は弾の前に表示されているディスプレイに近づき横にスライドさせる。するとセルティ同様のパスワード入力画面が表示された。

「別にクイズ解かなくてもよかつたんだ。これ。」

「はああああ！？今さっきの苦労はなんだ！！あの件全否定か！！」

「まあ、そつだな。」

そういうと弾はまたがつくりと頂垂れた。もう俺に言い返す気力もないようだ。

「そろそろいいかな？」

「ん？ああ、構わないぞ。」

高町が話を進めていかどうか聞いてくる。どうやら先ほどの一連のやりとりを見ながら待っていたようだ。

「新しいデバイスを使った訓練は明日からするからみんな今日の訓練はお休みね。」

「休暇もちゃんとつておかないといろいろ面倒だしな。」

「「「「「え？」「」「」「」」」」

「十代でもうワーカーホリックか。管理局の人格構成プログラムはすごいもんだな。」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。」

FW陣は休みという言葉に驚いているようだ。ていうかこの職場休みてあったんだな。全員なにくわなぬ顔で毎日働いてるからない

のかと思つてた。

「それじゃあ、今日は解散。今日は思いっきり羽を伸ばしてきてね。あとレインくん。」

「何だ？」

「この前の件、許可が降りたつてはやてちゃんが言つてたよ。」

「本当か。」

やっと許可が下りたのか。申請してから何ヶ月たつのかと思つたぜ。高町たちはそれをいうと隊舎へと戻つていった。

「何だつたんですか？許可が降りたつて言つてましたけど・・・」

「無限書庫の入室許可だ。」

それを聞くとレイルカはあゝと頷く。

「レイン。」

後ろから声を掛けられたので振り向いた。声を掛けてきたのはセルティだった。どうしたのだろうか？

「今日は休みになつたからデートしよ。」

いきなりセルティから大胆発言が飛び出した。デートつて付き合つてるわけでもないのにストレートに言うなよ。そういつたセルティも恥ずかしいのか若干頬を赤らめている。

「あ、悪い。今日は行かなきゃいけないところがあるんだ。」

そういうとセルティの表情は暗くなった。目も少し潤んでいるような気がする。

「この埋め合わせはちゃんとするから。」

「あ……」

そう言い残し俺はその場を去った。調べものにどれだけ時間が掛かるか分からなかったのであるべく早く無限書庫に行きたかったのだ。残されたセルティは少しの間立ち尽くしたままだった。

「セルティ、どうしたんだ？」

「……なんでもない。」

「そ、そうか。あのさ、ティアナたちがツーリングするって言うてるから一緒に行かないか？」

「……いい。」

弾の誘いを断ったセルティはとぼとぼと隊舎の方へと戻っていった。表情は暗いままだ。それを見かねたレイルカがセルティに声を掛けた。

「セルティ。」

「ぎゃっ……」

いきなり後ろから声を掛けられたため驚いてしまったようだ。

「今日は一緒に買い物に行きましょう。」

「……いい。」

「行きましょうよ。デートの予行演習だと思って。」

「予行演習?」

「そうです。今日いろいろと下見しておいて今度の埋め合わせのときにつんと楽しめるように計画を立てるんです。ついでにお洋服とかも買っちゃいましょう。それで今度レインを困らせるくら甘えちゃえばいいんです。」

「困らせるのは、ダメだと思う。」

「いいんです。乙女心が分かってないレインへのお仕置きです。だから行きませんか?」

「……分かった。行く。」

レイルカはそれを見て微笑む。セルティの方も元気を取り戻したようだ。先ほどより軽快な足取りで隊舎に向かっていった。

「……はあ。」

「弾。何してんの?早く行くわよ。」



「分かってるって。」

弾はしばらくセルティの後ろ姿を見つめていた。その表情はどこか寂しげだった。

機動六課を出発し一時間ほどで転送ポートに到着した。無限書庫は本局の施設の一部だ。しかも本局は次元世界に浮かぶ巨大コロニーなので向かうためにはいろいろと手続きが必要なのだ。俺は転送ポートで八神からもらった許可証を見せて本局に向かった。八神からロビーに案内役が来るそうなので待つてみることにした。

「な！？貴様は！！！」

「ん？」

突然大声を上げられたので誰かと思って顔を上げたらいつぞやのナルシストが立っていた。

「お、久しぶりだな。誰かと思えばストーカーじゃないか。頭の調子は治ったか？」

「誰がストーカーだ！！僕の名前はロウファ・エバンスだ！！貴様

「はまた僕を罵倒して!!」

「はいはい、分かったからあんまり騒ぐなエバ・エ・・・名前なんだったっけ？」

「貴様覚える気ないだろう!!」

たく、相変わらずうるさいな。まさかこいつが案内役とかじゃないだろうな。

「取り込み中のところ悪いけど、いいかな？」

今度は後ろから声を掛けられた。振り向くとそこには長髪を首の後ろでまとめたスーツ姿の男が建っていた。

「ス、スクライア司書長!？」

ストーカーが体を恐縮させて敬礼する。司書長ということは無限書庫の管理者ってことか。

「僕は部隊の人間じゃないからそんなことしなくてもいいんだよ。」

「いえ、そういうわけには・・・」

こいつ敬語使えたんだな。

「君がレイン・オルハルト君？僕は無限書庫の司書長をやってるユノ・スクライアだ。今日は君の案内役をさせてもらうことになる。」

「わざわざ司書長が案内してくれるとは光栄だな。」

「まあ、僕が一番書庫に詳しいからね。それじゃ行こうか。」

俺は素直にスクライアの後をついていった。そこに理由の分からないまま空気同然だったストーカーだけが取り残された。

「ここが無限書庫だよ。」

案内された場所には巨大な本棚があった。本棚といっても上に向かって伸びているのではなく下に向かって伸びている。長い縦穴型の形状をしていてそのほうは暗くなっていて肉眼では確認できない。

「時空管理局が誇る次元世界最大のアナログデータベース。ここには管理世界のさまざまな書籍や情報がストックされている。いまこのときも書庫に貯蔵されている情報は増え続けているよ。」

「ここまでとはさすがに驚いたな。」

「これを見たら誰でもそんな反応をするよ。さて、君は何を調べたいんだい？」

「あのさ、管理外世界や無人世界の目録とかあるか？」

「あるけど、それだったら普通に調べたほうが早いんじゃないかな？」

「調べたいことは大量にあるからな。それにどれもあるかどうか分からないようなもんだし。だったら情報が大量にあるほうがいいだろ？」

「分かった。ついてきて。」

スクライアは何もないところに歩き出す。だが足元に魔方陣が形成されてそれが足場となって落ちることはなかった。乗ってみると普通の地面と変わらない感覚だった。

「いくよ。」

すると足場が降下していった。一種のエレベーターのようだ。そして五十メートルほど下がったところで停止した。

「あつたよ。」

スクライアが一つの本を手渡してくる。どうやらこれが目的の本のようだ。俺はまずあのエフィアとかいう女に出会った世界を探すことにした。あの世界はなんらかの形で歪みと関わりを持っていたことは確かだ。本は丁寧に写真も載せていてくれたので思ったより早く見つけられた。

世界全体が荒廃していて生命がほとんど存在しない世界。ところどころにある建造物や地面に突き刺さっていた剣などから文明が存在していたことが分かる。建造物の風化ぐあいからして文明が存在していたのは数百年前ほど。

建造物の中には城のようなものもあり王国が築きあげられていた形跡がある。現在確認されているだけで城のようなものは二十ほどある。

そしてこの世界からは多数のロストロギアが発掘されている。

目録にはその世界の写真と簡単な概要が書かれていた。

「シュレイルードか。」

「知ってるのか？」

「ああ、僕は考古学者もやっているからね。この世界はロストロギアが十個も発掘された世界で一時期学会でも騒がれてたんだ。どこかの学者はアルハザードかもしれないと言ってたしね。」

やはりこの世界にはなにかある。もっと調べれば歪みにつながる何かがあるかもしれない。

「この世界についての資料を見たい。出来れば遺跡や歴史について書かれているものを頼む。それとどこか静かに読めるところはないか？」

「それだつたら上に個室があるからあとで案内するよ。それとシュレイルードの遺跡に関する資料はなかったと思うよ。正確には遺跡自体がなかったんだけどね。」

「遺跡がない、だと？」

「どういうことだ？確かにあそこには遺跡らしいものがあった。いや、まだ確認されていないだけか。」

「ロストログアは多く発掘されているけどそういつたものはなかったらしいよ。建造物もほとんど風化してたしその時代より古い建造物だったらもうとつくになくなってるとるんじゃないかな。」

「そうか。」

「俺が見た遺跡は風化しているどころか作られたところとほぼ同じ形を保ったままだったような気がする。だとしたらあの遺跡が完成したのは比較的最近か、魔法的ななかで風化を押さええているからだろうか。だとするとあまりいい情報は期待できそうにないな。」

「じゃあ、まず君を上を送ってから本を集めるよ。」

「ちょっと待ってくれ。集める本を変更する。」

「違つ。」

俺はそう呟いて本を置く。そしてまた違う本を手取る。

「これも違うか。」

また本を置く。先ほどから三時間ほどこの作業の繰り返しだ。スクライアに集めてもらったのは古代ベルカに関わりがある本だ。ジャンルは何でも構わないので小説だったり、学者の研究結果が書かれた本だったりといういろいろある。狭い個室には本の山が積み上げられていた。すると後ろのドアが開いた。

「新しい本を持ってきたよ。」

「そこに置いていってくれ。」

スクライアが台車に山積みされた大量の本を持ってきた。

「すごいね。もうそんなに読んだのか？」

「全内容の読んだわけじゃない。必要な情報がなかったら読むのをやめただけだ。」

「それにしても何で急に古代ベルカについて調べてるんだい？」

「シュレイロードには多くの城が建設されたあとがあったようだ。城を建てるということはそこには王がいて国があったはずだ。そして古代ベルカの時代にはさまざまな国が乱立していて戦が絶えなかつたと言われている。シュレイロードには地面に突き刺さった剣など戦いの痕跡が残っていた。これらのことを踏まえるとシュレイロードがかつての古代ベルカという可能性は十分にある。」

「それはありえないんじゃないかな？古代ベル力はすでに滅亡した世界なんだよ。」

「滅亡したからといって世界がなくなつたとは限らないじゃないか。人類が全て消え去つてしまつただけかもしれないだろう？」

「それは・・・そうだけど・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいいんだけど。俺は調べものが見つかればいいだけだし。」

俺は一度椅子にもたれて天井を仰いだ。体中固まっていたので少し揉み解す。そしてまた新しい本を手を取った。

「今度は童話か。」

俺は休憩がてら読んでみることにした。

あるところに一人の王がいました。名前は聖王。

聖王は強く、気高く、美しく、国民にとっても愛されていた王でした。

そのころはさまざまな国が戦をしていますが聖王はどの国にも負けませんでした。

だがある日そんな聖王にも倒せないものが現れました。

それは黒い化け物でした。

黒い化け物はどんな攻撃もどんな魔法も効かなかったのです。



さまざまな国が黒い化け物に滅ぼされました。

けれどそんなときどこからともなく勇者が現れました。

勇者は聖王とともに黒い化け物を滅ぼしていきました。

そしてついに黒い化け物の王を見つけました。

それはうそつきでした。

うそつきは聖王のととても大切な友人でした。

けれどもうそつきは聖王を騙し、世界を滅ぼそうとしていたのです。

勇者は光の剣を携えてうそつきを倒しました。

そして世界には平和が訪れました。

内容を読んだ感想はどこにでもありそうなきたりな本だ。だがその本には気になる言葉があった。黒い化け物。攻撃も魔法も聞かない化け物。これはもしかして歪みのことじゃないのか？調べてみる価値はありそうだ。思いがけないところでヒントを得た俺は調べものを再開しようとした。すると一枚の紙が床に落ちた。拾い上げてみるとそれには文字が書かれていた。形からして手紙のようだ。

「これはなんだ？」

「え？ああ、それはただの落書きだよ。」

「落書き？」

「調べてみたけどどの古代文字にも該当しなかった。多分、誰かが悪ふざけで書いたんだろうね。貸してくれ。後で処分しておくよ。」

古びた紙に書かれた意味不明な文字の羅列。一見すると一つ一つが絵にも見える。けれど俺は知らないはずなのに、見たことがないはずなのになぜかそれが読めた。

「あなたは・・・なぜ嘘をついたのですか？どうして真実を言わなかったのですか？知っていれば私はあなたを助けにいったのに。あなたは全てを背負って行ってしまった。私の手の届かない場所へ。私はあなたに何もしてあげられなかった。私が笑っている間、あなたはどれだけ泣いたのですか？私が喜んでいる間、あなたはどれだけ苦しんだのですか。もし、あなたにもう一度会えるなら私の全てを捧げます。そして、あなたに幸せを与えたい。けれど私の思いは届かない。せめてあなたに謝りたかった。」

名前の部分は掠れて読めなかった。この文章かた伝わってきたのは嘆きだ。救えなかったことへの嘆き、伝えられなかったことへの嘆き。悲しみの感情が詰められたような手紙だ。

「何でそれを読めるんだ!？」

そのとき耳障りなアラームが鳴り響いた。

## レリック

アラームが鳴り出したすぐ後に六課から通信が入った。モニターに映っていたのは高町だった。

「レイン君、聞こえる？」

「どうしたんだ？」

「エリオとキャロがレリックを持った少女を発見したの。その少女はもう保護してあるから。市街地と地下水路と海上方面にガジェットが現れたの。」

「分かった。ガジェットの位置をこちらに送ってくれ。あとはなんとかする。」

そういつて通信を切った。通信を切った後に高町からガジェットの現在位置が印されたマップが送られてきた。それには六課メンバーの位置も載っていた。地下水路にはエリオ、キャロ、スバル、ティアナそれと地上部隊のギンガという局員が向かっているらしい。海上方面は飛行魔法が使える。波多野、長瀬、一条、アイン、高町、テスタロツサの隊長陣が向かっている。市街地にはレイルカ、セルティ、弾の三人だけだった。八神の守護騎士たちもこちらに向かっているようだがまだ到着には時間が掛かりそうだ。

「にしても、今回は数が多いな。」

表示されたマップには敵であるガジェットを示す赤い点が百個以上表示されていた。単にガジェットがレリックを狙っているだけでは

ないだろう。多分ジェイル・スカリエツティが関わってきている。もう裏で「そこそと動くのをやめたのだろうか。」

「まずは、レイルカたちの所に行くか。さすがに三人だけじゃきついでろうし。」

「出動かい？」

「ああ、というわけだからあんたの話には付き合えないからな。」

「それは残念だ。」

俺はすぐにその部屋を後にした。やっと無限書庫に入れたというのに半日もしないうちに出ることになるとは。また申請しなおさなきゃな。

「さてと、仕事に行きますか。」

ギンガ・ナカジマはもとも別の事件を調べていた。それは地下に見つかったある施設の捜査だった。その施設には多くの円柱状の培

養器とガジエットの残骸が放置されていた。

「私がこの施設を調査しているときに何かを引きずった後があったんです。それを追っていく最中に連絡をガジエットが現れたんです。」

『その施設つてもしかして・・・』

「ええ、多分人造魔導師を製造するためにつくられたものだと思います。」

『まだそんなあったんか・・・』

はやてはモニターごしに苦い表情をした。人造魔導師という単語を聞いてエリオは少し目を伏せた。ティアナとスバルもどことなく気まずげな表情をしていた。

「あの人造魔導師ってなんなんですか？」

話についていけないキャロは控えめに聞いてきた。

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に薬物投与や機械移植を行って後天的に優れた魔導師にする技術かそれによって生み出された魔導師のことだよ。」

その質問に答えたのは以外にもスバルだった。スバルはいつもの明るい口調ではなく機械的に淡々と説明した。

「でも倫理的な問題とかはもちろん、生み出す過程で体にいるんな無理が生じるしコストも合わない。よっぽどどうかしてる連中じゃ

ないと手は出さないわ。」

話を聞き終えたキャラは少し青ざめていた。同員といえどまだ十歳。聞いていて気持ちいいものではないだろう。

「それで施設を調べて分かったんですが、最近まで稼動していたポッドがあつたんです。」

『それってまさか・・・』

「・・・おそらく、さきほど保護した少女は人造魔導師であるかと思われます。」

丁度ギンガが説明し終えたあとキャラのケリュケイオンが警告を發した。

『動体反応確認、ガジェットドローンです。』

「小型ガジェット来ます！！数六！！」

その声とともに彼女らは自らのデバイスを構えた。

市街地にでた俺はすぐさまバリアジャケットを展開してガジェット殲滅に取り掛かった。

「レイルカ、弾、セルテイ、大丈夫か？」

「レイン遅いですよ。」

「悪い、これでも急いだほうだ。状況は？」

「少し厳しいですね。ガジェットの数が多すぎます。私達だけでは防衛が手一杯でした。」

「他の局員は？」

「ほとんどが市民の避難誘導に回っていて救援は期待できませんね。」

「分かった。」

俺は離れている弾とセルテイに通信を入れた。

「弾、セルテイ、聞こえるか？」

『レインか！今忙しいんだが！』

『レインも手伝って！』

「お前らは地上に徘徊しているやつだけをやれ。空に浮いてるやつらは俺たちで何とかする。」

『分かった!』

『了解。』

そういつて通信を切った。

「行くぞ。」

「はい。」

俺は地面を蹴って大きく跳躍した。そして足場を作りながら上空へとあがっていく。俺はガジェットに飛び乗りエリスで串刺しにした。爆発する前に別のガジェットに移りそれも破壊した。ガジェットは小型といえどAMFがある。俺が効率的にガジェットを破壊するには直接攻撃が一番なのだ。

「トルクスピア」

冷気が集まり三本の氷の槍を形成していく。螺旋状の穂先によって貫通力をあげた槍だ。

「貫け。」

氷のやりはそれぞれ別々の方向に飛んでいった。槍は一直線にガジェットへと向かっていきAMFを物ともせずガジェットを貫いた。それでも止まらず何機かのガジェットを破壊してビルの壁面に突き刺さった。

「スプレットアロー」



アルクから放たれた一本の矢は散弾のように分裂して一気に十本ほどの矢になった。矢はガジェットに的確に当たり破壊していく。けれど数が一向に減らない。

「まったくどんだけ作ってんだよ。ていうかスカリエッティって指名手配中の犯罪者だろ。なのにこれだけ兵器を持ってるって反則じゃね。」

「私を知るはずないじゃないですか。口を動かさないで手を動かしてください。」

「ちゃんとやってるって。」

そういいながら俺はミサイルを斬りおとす。相手は数が数だけあって手数が半端じゃない。気を抜いているとミサイルやらレーザーやらの餌食だ。攻勢に移るのも一苦労だ。

「レイルカー気にまとめて打ち落とせ。」

「分かりました。」

アルクから弾丸をリロードする音が聞こえた。レイルカの足元に魔方陣が展開されレイルカは上に向かって弓を構えた。

「フィアンマ・ダストアロー」

放たれた矢は空高く上がると丸い球体となり地上に向かって無数の炎の矢を放った。炎の矢は次々とガジェットに命中し破壊していく。しばらくするとこの辺りのガジェットは一掃された。

「これであらかた片付いたか？」

「いえ、この辺りだけです。西の方角にまだ残ってます。」

「まだいんのかよ。休日丸つぶれだな。」

そして俺たちがガジェットが残っている空域に向かおうとしたとき俺は頭痛に襲われた。突然のことだったので体が揺らいで倒れそうになるが何とか踏ん張った。

「レイン、大丈夫ですか!？」

「ああ、来やがったか。」

「歪みですか？」

「そうだ。お前はガジェットのところに向かえ。それとなるべくセルティたちの近くにいろ。もしかしたらセルティに影響が出ているかも知れないからな。」

「そんな!？私も一緒に戦います。」

「駄目だ。さすがに弾とセルティだけじゃガジェットの対処は難しい。三人でも敵しかつたんだろ？」

「それは・・・そうですが・・・」

レイルカは苦しげな表情で食い下がってくる。すると頭上から高速で歪みが接近してきた。俺はそれをエリスで受け止めた。

「レイン！？」

「早く行け！！レイルカ！！」

「でも……」

「今はガジェット殲滅が最優先事項だ。それが終わったらこっちも頼む。」

「……分かりました。」

レイルカはガジェットがいる方向に飛んでいった。

「はあ！！」

俺は受け止めていたゆがみを押し返す。羊のような頭に太い巻き角。強靱な四肢に漆黒の羽と尻尾。まるで伝承などにでてくる悪魔のような姿をしている。今回も人型に近い。歪みは俺に向かって飛び出してきた。俺はそれをかわすが胴体に何か巻きついてきた。尻尾を巻きつけたようだ。

「なっ！？」

俺の体は重力に逆らい高速で上昇していった。

一方、その頃地下水路では六課のFW陣がレリックの捜索を行っていた。

「はあ!!」

「やあ!!」

スバルとエリオがガジェットを破壊していく。ティアナとキャロもどんどんガジェットをどんどん撃ち落としていった。レリックに惹かれてくるのか地下水路にもガジェットが大量に流れ込んでいるようだ。すると突然後ろの壁が破壊された。その場の全員が身構える。見えたのは人のシルエツトだった。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

現れたのはスバルの姉であるギンガだった。

「よかった。うまく合流できたみたいね。私もレリックの捜索に加わるわ。」

新しくギンガを入れて五人となったメンバーはレリックに向かつて地下水路を進んだ。途中また何度かガジェットとの遭遇があったが、スバルとギンガが見事なコンビネーションを決めて撃退していった。

「この辺りにレリックの反応があります。」

全員辺りを探す。するとキャラロがそれらしい箱を見つけた。

「ありました。」

メンバーは一安心しキャラロの元へ集まっていた。だがそこへ近づく影があった。

「何、この音？」

するとキャラロに黒いスフィアが放たれる。直撃はしなかったが持っていた箱を手放してしまった。そしてさらに追撃がはいる。

「キャラロー!!」

エリオが割って入るが防ぎきれず傷を負ってしまう。すると黒い獣が姿を現した。さらに突然現れた紫色の髪をした少女が箱を抱えて持ち去ろうとした。

「それは駄目！」

「邪魔。」

取り返そうとしたキャラロは少女の放ったスフィアを防ぎきれず後ろに吹き飛ばされてしまった。スバルたちも応戦するが黒い獣は予想以上に強くなかなか少女を止めにいけなかった。

「ちょっと待って。それ本当に危ないものだから。」

フェイクシルエツトで姿を消していたティアナが少女の首にタガーマードのクロスミラージュを突きつけた。それを見て少女は動きを止めるが箱を返す気はないようだ。

「スターリングホイール！！」

地面にスフィアが放たれ閃光と爆音が広がった。それによりティアナは少女の拘束を解除してしまった。すぐさま撃とうとするが黒い獣に阻まれてしまった。

「もう一人で勝手にどっかいつちまうからこんなことになるんだぞ。」

「アギト・・・」

「心配したんだからな。けどもう大丈夫だ。何しろこの烈火の剣精、アギト様来たからな。」

「これは！？」

「幻影と実機の構成編隊！？」

先ほどまで次々とガジェットを破壊していたのはただが敵機の数が急に増えた。攻撃を試みるが爆発せず姿が消えるだけでもものが混ざっていた。

「防衛ラインは越えられない自信はあるけど・・・」

「これじゃキリないね。」

なのはたちはそれぞれシールドを張りガジェットからの攻撃を防いでいる。

「これだけ派手な引き付けをしてくるってことは・・・」

「地下か、へりに主力が向かっている。」

「なのはとフェイトはヴィーダと一緒にへりとFWたちのサポートを。こっちは僕達で食い止める。」

「掠くん!?!」

「大丈夫。リミッターを解除すればなんとか片付けられるから。」

波多野は少し焦っていた。自分が記憶している物語と現実が食い違っているからだ。原作ではここまでガジェットは二百きほどだったのに対して、今ざっと見るからに五百機ほどは確認できる。

「早く行って。嫌な予感がする。」

「割り込み失礼!!」

突如、モニターに映し出されたのは騎士甲冑をまとったはやてだ。た。

「ロングアーチーからシークレット1へ。その案、限定解除も部隊長権限で却下します。いくらシークレットでも今は私の管轄やから逆らえはせんよ、掠くん。」

「はやてなぜ騎士甲冑を？」

「仁君。私も嫌な予感はしとったんよ。だからクロノ君には私の限定解除許可を貰ったんや。空の掃除は私がするよ。」

「けど、この数大丈夫なの？」

いくらはやてがSSランクでも相手の数を見つみると少し不安になる。

「やらなあかんのやから仕方ないやろ。なのはちゃんとフェイトちゃんへりの護衛。ラインとヴィーダはFWたちとケースの搜索。掠君と和輝君と仁君は私の撃ちもらしの破壊。お願いな。」

はやてはそれぞれに指示をすると空高く舞い上がった。

「リミッター、リリース！！」

はやての足元の魔方阵が眩く光だしリミッターが解除された。

「さあ、久しぶりの広域遠距離魔法や。行くでえ！！」

魔導書を出して詠唱を始めた。



## ナンバーズ

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ!!」

はやてが詠唱を完了すると展開されていた五つの魔方陣がさらに眩く光りだす。

「フレーズヴェルグ!!」

魔方陣から複数の大型スフィアが発射される。スフィアはそれぞれ飛行しているガジェットの編隊に向かって飛んでいつている。ガジエツトは飛んでくる大型スフィアに気づき射線から外れるがそれは無意味なことだった。大型スフィアはガジエツトの編隊まで追いつくと大爆発を起こした。編隊のガジエツトはほとんど爆発に巻き込まれて破壊された。他の大型スフィアも見事命中しガジエツトの数は大幅に減った。だが撃ちもらしもあった。

「来たよ。」

「分かってる。朱雀!!」

棕は自らのレアスキル「現実投影リアルブート」で炎の鳥を作り出す。炎の鳥は撃ちもらったガジエツトを破壊していく。

「サンライトスラッシャー!!」

和輝もガジェットに向かって突進していき順調に破壊していく。

「行くぞ、アイン!!」

「分かっています!!」

「グランドザンバー!!」

「エアリアルニードル!!」

仁は市街地にもっとも近い臨海部付近を任されていた。ここは所謂最終防衛ラインということだ。それに仁ははやてはが現場でがんばっているのを見て自分も負けてはられないとばかりに張り切っていた。

「はあ!!」

仁は防衛ラインを越えようとするガジェットサイキックの動きを止める。これは彼のレアスキル「超能力」の一つサイコキネシス念動力だ。動きを止めたガジェットをそのまま別のガジェットにぶつけて破壊する。

「さあ、どんどんいくでえ!!」

はやては久しぶりの現場にも関わらず絶好調であった。そしてフレースヴェルグの第二射が始まった。

(くそっ、息が！)

歪みに捕らえられた俺はかなり上空の方までつれてこられたようだ。かなり酸素が薄くなってきている。それにスピードも尋常じゃないので呼吸もしづらい。

「いい加減離せよ!!！」

俺は器の力を付与させて巻きついている尻尾の付け根を切り裂いた。尻尾が案外容易く切断できた。支えを失った俺はそのまま地上に急降下した。歪みはすぐに追ってきて俺に拳撃を放つ。だがなんなく交わす。歪みはそのまま雲に突っ込んだ。かなりのスピードで突っ込んだので雲にぼっかりと穴が空いた。

「アクセル・リング」

三枚の魔方陣を展開し、通り抜ける。俺の体は加速し、さらに降下のスピードを速める。雲を抜けしばらくすると地上が見えてきた。下は使われなくなったビルが立ち並ぶ廃棄都市区画だった。随分、遠いところまでつれてこられたようだ。

「アイシクル・チェイン」

腕から氷の鎖が伸び、ビルの屋上の鉄柵の巻き付く。地面に激突しないために鎖に掴まりターザンのようにぶら下がりながら落下の速度を和らげた。そして近くのビルに着地した。

「トルクスピア!!！」

すぐさま上空を見上げ魔法を放つ。三本の氷の槍は一点に向かって飛んだ。上空から接近する歪みはそれに気づくが避けるそぶりはみせなかった。歪みは向かってくる槍を自らの拳で砕いた。

「頑丈な体だな！」

歪みはそのまま俺へと一直線に降下してきた。俺はその拳を何とかかわす。だがビルに激突して一気にひび割れが広がりビルは崩壊した。

「ウインド・ギア！！」

別のビルに飛び移りながら新たに魔法を唱える。ビルに着地と同時に目にも留まらぬ速さで歪みに斬りかかった。だがそれは軽々しく防がれてしまった。俺は腕を切断する勢いで切つたのだがびくともしなかった。逆に押し返され俺は後ろに吹っ飛んでしまう。

「相変わらずの馬鹿力だな。エリス、ショートモード！！」

『了解！！』

「はああああ！！」

エリスが光だし二振りの刀になる。そしてまた斬りかかる。今度は一撃ではなく何度も、何度も斬りつける。さすがに歪みもこれにはついてこれず攻撃を受け続けた。その連撃の効果あってか腕には無数の切り傷が出来ていた。いける、と思ったとき何かに足を掴まれ俺はビルに投げ飛ばされた。

「がはっ！？」

派手な音を上げながらビルの中に突っ込んだ。見てみると先ほど切り落とした尻尾が再生していた。やはり器の力があまり効いていない。人型は耐性が強いのか。威力の低い技で戦っても拉致があかないな。かといって強力な技は発動に時間が掛かるし、そんな隙を与えてくれそうにもないからな。すると、歪みはこちらに指を向け黒い光線を放ってきた。

「なっ!？」

ぎりぎりでかわす。黒い光線はいくつものビルの壁を貫いていく。あれ食らってたら確実に頭吹っ飛んでたな。歪みは間髪いれずにこちらに向かってきた。向かってくる拳をかわして、回し蹴りを回避する。今度は俺の頭に向かって拳を放ってくる。空中で身動きが取れなかったので仕方なくエリスを手前でクロスさせてガードする。かなりの衝撃が腕に伝わってくる。勢いを殺すため床にエリスを突き立てるが穴の空いた壁ぎりぎりのところで止まる。

「エリス、通常モード!!」

俺も負けじと応戦する。通常モードに戻したと同時に駆け出す。歪みは顔み向かって拳を放ってくるが刀身で軌道をずらす。そして懐に入って無防備な胴体を下かた斜め上に斬りつけた。歪みはこれは効いたのか少し後ろに仰け反った。

「ストライク・カノン!!」

俺は歪みの顔面を掴んで砲撃を放った。歪みは吹き飛び向かいのビルに激突した。これで少しはダメージを与えられたらどうか。すると瓦礫を吹き飛ばしながら歪みが出てきた。ダメージは負っている

ようだがそれほどでもないようだ。

「そんなことだろうと思ったよ。」

俺はため息混じりに言った。長引きそうだな、こりゃ。

「デイエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

市街地のビルの上に二人の女性がいた。その二人は両方ともボディースーツを着ていて身を隠すマントを羽織っていた。陽気に話しかけた女性は足をブラぶらさせながらビルに座っていた。もう一人の女性は身の丈ほどありそうな布で包まれた棒状のものを持ってヘリが飛んでいるほうを見ていた。

「ああ、遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える。」

デイエチと呼ばれた女性の左目がレンズを調節するように動く。それは離れているヘリをはつきりと捕らえていた。

「でもいいのかクアット口、撃っちゃって？ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる。」

「うふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしなから大丈夫夫だそうよ？」

「ふーん。」

クアットロと呼ばれた女性はこれまた陽気に笑いながら答えた。デイエチは聞いたわりには興味のなさそうに返答する。デイエチは棒状のものに包まれた布を剥ぎ取り、羽織っているマントも脱ぎ捨てた。布に包まれたものは重量感のある狙撃砲だった。それをヘリのある方向に構える。するとクアットロの方に小さなモニターは開かれた。

「クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ。」

画面に映し出されたのは彼女らの姉にあたる人物、ウーノだった。

「あゝそういえば、例のチビ騎士に捕まってましたね。」

「今はセインが様子を伺っているけど・・・。」

「フォローします？」

「お願い。」

会話のやり取りが終わりモニターが切られる。そしてクアットロは先ほど言われたセインに通信を入れた。

（セインちゃん？）

(あいよ〜クア姉。)

セインはルーテシアが捕まっているところから少し離れた場所にいる。その場所は地面の中だ。腕の三分の一だけが出ていてなかなかシユールな絵だと思う。

(こつちから指示をだすわ。お姉さまの言つとおりに動いてね?)

(了解)

地面から三分の一出ていた腕はチャプンと水の中に潜る音を立てて静かに沈んでいった。

その近くの橋の上、地上に出たヴィーダたちはルーテシアとユニゾンデバイスであるアギトを捕まえていた。二人ともバインドを掛けられていて今は身動きが取れない。

(はあ〜い。ルーお嬢様?)

突然、念話で話しかけられるがルーテシアは眉一つ動かさなかった。

(クアット口?)

(なにやらピンチのようなので、お邪魔でなければクアット口がお手伝いします)

(・・・お願い。)

(それではお嬢様?クアット口の言つとおりの言葉をその赤い騎士に。)



少女は念話で伝わってくる言葉を言った。

「逮捕はいいけど……」

突然、少女がしゃべりだしたことにメンバーは驚く。

「大事なへりは放っておいていいの？」

その不吉な言葉にその場にいる全員が驚愕する。無表情で語る少女は不気味ともいえるものだった。

「あなたはまた、守れないかもね……」

「てめえ、まさか!？」

ヴィーダは言葉の意味を理解して青ざめるしか出来なかった。

「インヒューレントスキル、「ヘヴィバレル」発動!！」

デイエチの足元に幾何学的模様が現れて狙撃砲にエネルギーが溜め

られていく。

「あと12秒・・・11・・・10・・・」

カウントダウンは進んでいくたびに狙撃砲に膨大なエネルギーが溜め込まれているのがわかる。そしてエネルギーの充電が完了した。

「発射!!」

狙撃砲に溜め込まれていたエネルギーが一気に放出される。一筋の閃光はまっすぐへりへと向かっていった。その数秒後へりは爆煙に包まれた。

「フフフツ、どうこの完璧な計画!!」

クアットロは自らの思いどおりにことが進んでいるとどこどこ満悦のようだ。

「静かに。今命中確認中。」

デイエチは左目の望遠レンズで目標を確認する。煙が酷くて望遠レンズでもまだ見えない。しばらくすると煙も晴れてきてへりが確認できるようになった。

「まだ、飛んでる?」

「あら?」

見てみるとへりは無傷で飛行していた。そしてへりの前ではなのはレイジングハートをエクシードモードにして構えていた。

「スターズ1からロングアーチへ、なんとかぎりぎりでのヘリの防衛に成功!!」

「いくらこつちもフルパワーじゃないとはいえマジで?」

「あら〜」

すると二人の下に黄色いスフィアが無数に飛んできた。二人はビルから離れてそれをかわす。

「見つけた。」

「こつちも!!」

「速い!!」

だが二人が着地した位置にはすでにフェイトが回りこんでいた。またすぐにその場を離れる。

「止まりなさい。市街地での危険魔法使用、および殺人未遂の現行犯で逮捕します。」

「今日は遠慮しておきます〜」

「逃がさないよ!」

逃げている二人の前に山吹色の閃光が走る。上空から伸びた槍で二人の行く手を阻んだ。

「IS発動、シルバーカーテン!!」

すると二人の姿が消えた。このまま逃走を図るつもりなのだろう。

「惊!!」

「分かってる!!」

フェイトと和輝はその場所から離れていく。二人が離れていくの見てクアットロはシルバーカーテンを解いた。

「離れていく。何で?」

「まさか!?!」

上空を見上げると巨大な青い球体が浮かんでいた。

「広域空間攻撃!?!」

「うっそ〜ん!?!」

「宇宙を生む青き光よ。無限の闇を照らし、新たな世界を創造せよ。」

「派手に行くよ!!ビックバンクラスタ―!!」

放たれた球体は市街地をどんどん飲み込んでいく。二人はその光に追いつかれないように必死で逃がっている。クアットロがデイエチを抱え空に逃げて何とか回避できた。だが空に逃げた二人はすでに囲まれていた。四方向になのは、フェイト、和輝、仁がいる。

「砲撃で昏倒させて落とす!!」

それぞれのデバイスがカートリッジをロードする。二人はもうだめかと思っただが不意に声が聞こえた。

「デイエチ、クアットロ。そこから動くなよ。」

とりあえず二人はその声に従うことにした。

「IS発動、ライドインパルス!!」

「トライデントスマツシャー!!」

「エクセリオンバスター!!」

「ソニックスマツシャー!!」

「ディアボリックザンバー!!」

四つの砲撃が同時に直撃して大爆発を起こす。だれもが一件落着と思っただがそれでは終わらなかつた。

「避けられた!?!」

「アルト、追って!!」

なのははすぐに通信を入れて敵の追跡を頼んだ。けれどもいい結果は見込めないだろうと思っていた。

『反応ロスト……』

『異常反応も消滅……』

「逃がしたか。」

ドンツという音を立ててビルが崩壊していく。もうこれで三軒目だ。歪みが拳を振るうたび凄まじい衝撃が大地に響く。戦闘を開始してもうかなり時間が経っている。けれどもなかなか決着がつかない。歪みの攻撃も俺の攻撃も当たらないのだ。さきほどからそのような攻防が続いている。俺の場合一発でも当たれば致命傷なのだが。

「くっ！」

歪みがまた強い一撃を放ってくる。ガードするが勢いを殺せず後ろに下がってしまう。歪みは飛び上がり上空から黒い魔弾を放った。マシンガンのように連射されるそれを俺は後ろに下がって回避する。連射が終わると辺りが煙に包まれた。するとその煙を突き抜けて歪みが向かってきた。横に飛んで避けるがまた胴体に尻尾が巻きついた。そして俺はビルに投げとばされた。

「がはっ!?!」

すぐに立ち上がるうとするがそのときにはもう歪みが向かってきていた。歪みは拳を放ってくる。当たると思ったその拳を俺はぎりぎりで避けることに成功した。

「その腕貰うぞ!?!」

丁度懐の位置だったので俺は歪みの右腕を切り落とした。歪みは痛みを耐えかね後ろに後ずさる。

「氷鳳一閃!?!」

歪みの足元に向かって剣を振るう。すると歪みの下半身は凍りついた。

「ここで一気に決める!?!」

歪みから少し離れ魔法を唱える。エリスに残っていたカートリッジ4発を全てロードした。膨大な魔力が俺の体からあふれ出た。

「月より来たれし孤独の女神が大地に降り立つとき、大罪の翼を広げ世界に永久の静寂を与える。」

「月神の蹂躞!?!」  
ディアナ・インフラクション

詠唱が終わると魔方陣が巨大化していき半径50メートルほどの大きさになった。そして魔方陣の中心から魔力が吹き荒れる。その魔力は凍り付いていき翼の形を形成していった。そして20メートルの翼が完成した。その翼は天使の羽のごとく真っ白なつばさだった。

翼が完成するころには辺り一面も凍りついていた。何から何まで歪みも凍っていた。

「ヴオオオオオオ!!」

だが歪みは方向をあげながら動き出した。体についていた氷が崩れていく。けれどそれは想定内だった。俺はエリスで巨大な氷の翼を叩く。すると大きさのわりに翼はあっさりと割れた。割れた翼は数え切れない小さな破片となって宙を舞った。

「いけ!!」

小さな破片は全て歪みに向かっていった。大量の破片が体に突き刺さり歪みの体は再び凍り付いていく。全ての破片を撃ち終わると歪みは固まり動かなくなった。そして歪みの体が崩れだし水晶のように透き通った黒い球体が残った。

「やっと終わったか。」

俺はホッと安堵して歪みの核を掴もうとした。

「きゃあ!何これ!？」

突然、後ろで声があったので振り向いて見るとそこには三人の女がいた。



「誰だお前ら？」

突如、現れた三人の女。三人とも体にぴったりと張り付くような服を着ている。いかにも怪しすぎる。

「見つかったよ。どうするの？」

「チッ、面倒だな。片付けるぞ。」

「待って、トーレお姉さま。」

「なんだ？クアットロ。」

「あの男以前ドクターが話していた人間ですわ。」

「あゝあのよく分からない力を持つてるってやつ？」

ドクター？ていうか何で俺のこと知ってたんだよ。よく分からない力って器のことか。そのドクターってやつが俺のこと探ってるのか？俺はどこか聞いたとこのある言葉だと思いき記憶を探ってみた。

「あ、もしかしてお前らスカリエッティの関係者か？」

すると三人の体がぴくりと反応した。凶星か。

「ばれてたか。」

トーレと呼ばれていた女が答える。

「それで何でお前らがここにいるのとかスカリエッティが俺のこと知ってるのか聞かせてくれるとありがたいんだけど。」

「敵にそんなこと教えると思うか？」

「そりゃそうか。で、これからどうすんの？俺的には自首とかしてくれるとありがたいんだけど」

「誰がするか。お前をここで始末する。クアットロ、ディエチ手伝え。死体でも持って帰ればドクターも喜ぶだろ。」

怖いこと言うなよ。俺はため息をつきながらエリスを構える。魔力はそう多くない。持って後十五分くらいか。

「かかってこいよ。」

それを合図にトーレが消えた。転移？いや、高速移動か。俺は後ろにエリスを振るう。するとトーレのグローブとエリスがぶつかりあった。

「へえ、この速さについてくれるのか。」

「スピード勝負なら得意だぜ。」

俺はエリスをショートモードにして連続で斬り付ける。向こうはそれを正確にグローブでガードしていた。今度は後ろから砲撃が飛んできた。俺は上に飛んでかわす。撃つたのは確かディエチだったか。

そいつが狙撃砲をこちらに向けていた。

「アイシクル・チェイン」

三本の氷の鎖がディエチに向かつていく。そして二本の鎖は狙撃砲を貫き破壊した。もう一本の鎖はディエチの体に巻きついて捕縛した。

「一人目。」

「シルバーカーテン!!!」

するとディエチの姿が消え去りまわりにガジェットが現れた。幻影か。俺はそれを無視して周りを見回す。幻覚魔法なら俺の目で見破れる。だが、術者は見つけられなかった。これは魔法じゃない？

「くっ!」

俺は背中を攻撃され地面に落下する。なんとか受身を取り激突は避けた。見上げると、幻影が解かれ三人の姿が現れた。

「お前ら魔導師じゃないのか？」

「そのこともばれちゃったか。鋭いな。」

この言葉は肯定と受け取ってもいいだろう。

「まあいい。殺すんだから関係ないよな。」

と、そこでトーレの前にモニターが開かれた。

『トーレ、何をやってるの?』

「ウーノか。今取り込み中だ。」

『いいから早く戻りなさい。機動六課がそちらに向かっているわ。』

「……さすがにそれは分が悪いな。」

『今はまだことを起こすときじゃないの。ちゃんと命令は守りなさい。』

「分かったよ。すぐ戻る。」

モニターが閉じられ会話が終わったようだ。トーレは釈然としないというような表情でこちらをむいた。

「そういうわけだ。命拾いしたな。」

「逃げんのかよ。」

「なんとでも言え。それとこれは土産に貰っていく。」

「それは!?!」

トーレの手に握られていたのは歪みの核だった。いつの間にか奪ったんだ。

「じゃあな。」

「待て!!」

俺は追いかけてよとするが体が動かなかった。魔力が底をついたのか。次に見たときにはもう三人はいなかった。

「はあ〜やられた。」

俺は仰向けに倒れこんだ。ウインド・ギアの反動とか魔力切れでもう指一本動かせない。持って行かれたけどどうしようか？

「ま、いいや。また今度考えよう。」

核を持っていかれたが俺は特に気にしなかった。反応を追えばいつでも取りにいけるし。それに、調べられても困るものじゃないしな。

「いくら、調べたって何にも分かんないのに。」

俺は空を見上げながら静かに呟いた。

## 予言

「トール、遊ぼう」

「俺は今から仕事しなきゃいけないから遊べない。」

「遊ぼうよ〜」

「いや、だから仕事があるって……」

「遊ぼう〜」

「……はあ。」

俺はがつくりと項垂れたため息をつく。俺の膝の上には五歳くらいの少女は座っている。この少女は先日の事件でレリックとともに発見された子供だ。名前はヴィヴィオ。先ほどから高町に貰ったである。うづさぎのぬいぐるみを抱きしめて俺を遊びの相手をせがんでくる。

「ねえ、トール。」

「……」

「ねえ、ねえ。」

「……」

「トールってば。」

俺は相手は出来ないという意を込めてヴィヴィオの要求を無視した。若干大人気ないがこの際仕方ないだろう。ヴィヴィオはそれを理解したのか大人しくなった。が、そう思ったのもつかの間で、ヴィヴィオは手を伸ばし俺が操作しているキーボードを乱暴に叩きまくった。

「トール、ひま〜!!」

「あ、こら〜!」

画面には不規則な文字の羅列が表示されている。ヴィヴィオはなおもキーボードを叩き続けている。壊されては大変なので俺はヴィヴィオの体を持ち上げ机から離す。

「いきなり何すんだよ。」

「トールが意地悪するからいけないの!!」

「いいから、大人しくしてろって!」

子供の扱いに不慣れなおれはつい怒鳴ってしまった。するとみるみるうちにヴィヴィオの顔が歪んでいき泣き出してしまった。

「うええ〜〜ん!!」

「ええ!?!ちよつと待て!泣くなよ!」

「泣かした。」

「子供相手にねえ。」

「大人気ないよな。」

「その会話やめろ。腹立つ。ていうか泣き止まずの手伝えよ!」

俺は泣いているヴィヴィオを必死であやす。なんでこんなことになってるんだろう。ふと俺は疑問に思った。その理由は少し前に遡る。

「ふあゝ」

俺は大口を開けながら欠伸をした。時刻はもう十一時を回っていた。普段なら完全に寝坊だが今日は特別だ。あの後俺はヘリで迎えに来てもらって六課まで運ばれた。六課に着いた頃にはもうすでに眠っていたらしい。魔力切れやら極度の疲労やらで俺の体全然動かなかった。そして先ほど医務室のベッドで起床した。今回は目立った怪我はなかったが体力の回復に時間が掛かった。そういうわけで今日は午後から出勤することになっている。

「体だるいな」

長時間寝ていたのと筋肉痛でだるさが半端ではない。今日はもう休みみたい。そして、ロビーに差し掛かったところ入り口のところに人



だかりが出来ているのが見えた。そこにいたのは高町、テストロツサ、波多野、長瀬、一条の五人だった。特に興味がなかった俺はそのまま素通りしようとしたのだが何が足にぶつかった。いや、ぶつかったというより何かに掴まれているようだ。

「……………」

「……………」

見てみるとそこには金髪の少女がいた。少女は若干潤んだ赤と緑の虹彩異色の瞳でこちらを見上げていた。

「えっと、離してくんねえか？」

「やだ。」

「やだ、じゃなくて……………」

少女は俺の足にしがみついて一向に離そうとしなかった。そんなことをしていると高町たちがこちらに歩いてきた。

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「なのはママ……………」

「ママ？」

て、ことはこいつは高町の子供ってことか。でも日本人から金髪の子供なんか生まれるのか？

「子供の管理くらいちゃんとしろよ。高町、波多野。」

「そこで何で僕の名前が出てくるんだい？」

「いやだって高町のことをママっていったから。待てよ、別の男の子供という可能性も……」

「こ、この子は先日の事件で保護した子です!!」

顔を赤くした高町が大声で説明してきた。相変わらず冗談の通じないやつだな。

「はいはい、分かってるって。それじゃヴィヴィオとやらを離してくれ。」

「ヴィヴィオ、こっちにおいで。」

高町が優しく声を掛けるがヴィヴィオはさらに力強く俺にしがみついてきた。

「やだ。ツールと一緒にいるの。」

その瞬間、なぜだか俺に視線が集中した。なんだよ？

「ツールって誰だよ。俺の名前はレインだ。」

「ツールはツールだよ。」

「いやだからレインだって。ツールってお前の父親の名前か？」

「うっん。パパの名前は知らないの。」

そのときヴィヴィオの顔に翳りが見えた。聞いてはいけない話題だったようだ。

「それで何で俺がトールなんだ？」

「トールだから。」

「意味分かんねえよ。」

ヴィヴィオの言うことは理解不能だった。ようするにあれか？俺がそのトールとかいうやつに似てるからか？

「なのは時間!？」

「え？あ!?!」

高町たちはなぜか時計を見て焦りだした。待ち合わせでもしていたのだろうか。

「レイン君、ヴィヴィオのことお願いね!?!」

「それじゃ!?!」

「え、あ、おい!」

そっぴい残すと波多野たちは走り去ってしまった。お願いね、って俺が面倒見るのか？

「トール」

ヴィヴィオはなぜか嬉しそうに俺の名前を呼ぶのだった。

と、こんなことがあったのでヴィヴィオは俺に付きまといていて、ということだ。はじめは誰か他のやつらに押し付けようと思ったのだが俺から全然離れなかったので断念した。なぜ懐いているのかとか、なぜ俺のことをトールと呼ぶのかとか謎だらけだ。そして、今俺はレイルカたち女性陣の力を借りて泣き止んだヴィヴィオと話の最中だった。

「いいか、ヴィヴィオ。俺は今仕事の途中だ。」

「うん。」

「だから、お前の相手はできないんだ。分かるな。」

「ヴィヴィオ分かんない。」

「理解できるように努力しろ。そういうわけだからお前は大人しく座ってなさい。」

ヴィヴィオの説得を終え俺は席に戻った。けれど数秒後、トコトコと歩いてきたヴィヴィオが俺の膝によじ登ってきた。説得は失敗したようだ。

「なんで来るかな？」

「久しぶりにお父さんに会えて嬉しいんじゃない？」

みもふたもないこと言うティアナ。

「いや、なんで俺の子供になるんだよ。」

「違うの？そんなに懐いてるのに初対面ってわけじゃないでしょ。」

「これが初対面なんだよな。」

「じゃあ、隠し子だったり。」

「だから違うって。もし俺の子供だったら13くらいに生まれてるってことになるぞ。」

そんなにティアナは俺を駄目人間にしたいのか？

「けど実際どうなんだよ？これだけ懐いてるんだからどっかであったとかないのか？」

珍しくまともな質問をしてきた弾。そう言われて俺は記憶を探ってみるが思い当たる節はなかった。

「トール遊ぼ〜」

「またもヴィヴィオがせがんでくる。仕事があるって……いや、もういいか。この際ある程度遊ばせてから昼寝でもさせたらいいだろ。」

「よし。」

「どうしたんだ？」

「今からヴィヴィオと遊ぶ。」

「そうか。がんばれよ。」

「何言ってるんだ。お前らも来るんだ。」

「……………え？」「……………」

「子供の相手とかやったことねえし。手伝ってくれ。お前らも正直仕事飽きてるだろ？たまには生き抜きも必要だって。」

「そついうと全員戸惑った表情をしている。あとちょっとで落ちそつだな。」

「ヴィヴィオみんなが遊んでくれるって。」

「ほんとー！」

「ヴィヴィオは満面の笑みで笑っている。やっと相手にされて嬉しいのだろう。この場面で断れるものがいたならそいつは勇者だ。そし

て、全員ヴィヴィオの相手をすることになった。

「失礼します。」

「どうぞ。」

中からの返事を聞き掠たちはドアを開け中に入る。

「高町なのは一等空尉です。」

「フェイト・テストロツサ・ハラウン執務官です。」

「波多野椋二等空佐です。」

「長瀬和輝執務官です。」

「一条仁一等空位です。」

それぞれ敬礼しながら名前と階級を答えていった。はやてだけはそれを見てニコニコしていた。

「四人の方ははじめまして。波多野三佐はお久しぶりです。聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。どうぞ、こちらへ。」

席を促されて六人は用意されていた椅子に座った。そして、席にはもうすでにクロノが座っていた。

「お久しぶりです。クロノ提督。」

「ああ、フェイト執務官。」

「お二人とも、そう硬くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ。」

カリムは二人のやり取りをみてクスリと笑う。

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで。」

「平気や。」

クロノは先ほどの固い表情から柔和な表情に変化した。そしてなのはたちも普段通りの態度に切り替えた。

「じゃあ、久しぶりクロノ君。」

「元気だった？お兄ちゃん。」

「・・・それはもうよせ。いい歳だぞ。」

「兄弟に年齢は関係ないよ。」



クロノは気恥ずかしげに反論する。けれどすぐにフェイトに反論されてしまった。他の六人はクスクスと笑い出しクロノは顔を赤くして俯いた。そして笑いが納まった辺りではやてが咳払いをして話を切り出した。

「・・・さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて、機動六課設立の裏表について、それから、今後についてや。」

部屋のカーテンが閉められ一気に室内が暗くなった。まずはじめにクロノが口を開いた。

「六課設立の表向き理由は、『ロストロギア』『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例。」

何もない虚空にモニターが展開され画像が映し出される。そこにはカリム、クロノ、それと彼とフェイトの母親であるリンデイが映っていた。

「知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それと僕とフェイトの母親で上官のリンデイ・ハラオウンだ。」

画面が入れ替わり別の画像が映し出される。

「それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力を約束してくれている。」

なのはとフェイトはこの事実に驚く。彼らは「伝説の三提督」と呼ばれ管理局では知らないものはいないほど有名だ。そんな彼らが強力しているとは思わなかったのだろう。

「僕達が出向したのも三提督のお達しでね。この話があったときに騎士カリムと出会ったんだ。」

「でもどうして三提督が強力を？」

「その理由は私が説明します。」

カリムは立ち上がりテーブルから離れる。彼女の手には紐で括られた紙の束が握られていた。一見するとカードのようにも見える紙。カリムは紐を解いていく。すると紙が光だした。

「私の能力、預言者の著書。」  
プロフェーティン・シュリフテン

光りだした紙はカリムの周りを囲うように浮かび上がった。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません。」

すると一枚の紙がなのはたちのテーブルの上に飛んできると。その紙にはミッドチルダの文字ではない文字が書かれていた。

「預言の中身も古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章。」

世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度、つまりは、あまり便利な能力ではないんですが。」

紙はカリムの元に戻り元の配置についた。

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな。」

「ちなみに地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップがこの手のレアスキルとかお嫌いやしな。」

はやてはため息をつきながら言った。地上部隊のトップはレジアス・ゲイズ中将だ。中将は魔力を持たないため魔法以外の犯罪対策などを多く考案している。その所為か有能な魔導師を好ましく思っていないらしい。

「そんな騎士カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている。」

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は碎け落ちる

その予言を聞いたときその場にいる全員の顔が強張った。

「それって・・・」

「まさか・・・」

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊。」

カリムの言葉を聞いて全員が息を呑んだ。管理局の崩壊など今までに考えもしなかったことだ。にわかには信じられない話だろう。

「その予言ってどこかの組織が管理局を潰しに来るってこと？」

「いや、それはないだろう。有名な犯罪組織ならいくつか知っているが管理局と対抗できるほどの組織は聞いたことがないからな。」

和輝の答えは仁があっさり否定した。

「一応、本局の方でも警備を強化してはいるんだが・・・」

「問題は地上部隊なんです。」

「なるほど、レジアス・ゲイズ中将か。」

棕は問題の核心を口にする。先ほども言ったように中将は有能な魔導師が嫌いだ。カリムの予言も信じていないらしい。

「協力の申請はしているがいい返事は期待できないだろう。こちらが無理を言って内政干渉や強制介入などと言われたくないからな。」

「表立つての主力投入はできない、と？」

「・・・そうだ。すまないな。あまり現場に政治的な話は持ち込みたくないんだが。」

クロノは申し訳なさそうに言う。

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった。レリック事件だけでコトが済めば良し、大きな事態に繋がっていく様やったら最前線で事態の推移を見守って・・・」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると?」

「それが六課の意義や。」

はやては今までになく真剣な表情で語った。なのはたちはその表情を読み取りことの重大さを理解したようだ。

「とりあえず、いつもどおりお仕事をしていればいいってことでしょ。」

「いや、そやけど。なんか軽いな。」

「まあ、でも力入れすぎるよりはいいんじゃないか。」

「そつやな。」

「えっと、お話中のところ悪いですけど、先日新たに予言が書き足されたんです。」

「ええ!?!」

すっかり和んでいたところでカリムが驚きの事実を伝えた。

「それでどんな内容なんです？」

「それが少し変なんです。一週間前ほど急に私の力が発動したんですがその日は月も重なってなかったんです。」

「確かに変だな。予言の解読は？」

「終わっています。」

カリムは新たに書き足された予言を読み上げた。

無知の勇者は未来を変え、人を救い、世界を傷つける

傷ついた世界は歪み、黒い王を再臨させる

黒い王は世界に破滅の種を撒き、世界は滅びの運命を背負う

「なんやそれ・・・」

はやては予言を聞いて驚愕した。今度の予言は世界自体が危ついとを示している。

「これも管理局の崩壊を示しているのか？」

クロノが恐る恐る聞いてみる。けれどそれはカリムに否定された。

「残念ながら前の予言との関連性はないと思います。」

「でも、世界が滅びるって信じられないよー!!」

「待ってください。まだ予言には続きがあります。」

カリムは予言の残りを読み始めた。

うそつきは儂きの思いを手に入れて黒い王と対峙する

全てを知ったうそつきは世界を救う

そして過去の悲劇を繰り返す

「.....」

カリムは予言を読み終えた。室内には重々しい雰囲気か漂っていて静まり返っていた。

「この予言から推測するに世界は滅びないということか？」

「ええ、多分それで合っていると思います。」

「よかった。」

クロノの述べた考察を聞いてその場にいる全員が安堵した。

「ですが、まだ分からないことだらけなんです。特に黒い王や無知の勇者、うそつきについては意味がよく分からないんです。」

「古代ベルカにそういう王様とかいなかったんですか？」

「私もそう思い調べてみたんですけど何も出てきませんでした。」

「レインだ……」

掠はポツリと呟いた。それを聞いてまたその場が静まり返る。

「どうということ掠君？」

「レインなら何か知ってるかもしれない。」

「なんで？」

「黒い王のことをずっと考えてたんだ。もし、その黒い王がネクロだったとしたら。」

掠に言われて皆気づいた。確かにネクロは強大な力を持っている。高ランクの魔導師が束になっても勝てないほどの力を。そして、特徴は体が全て黒いということだ。

「確かにそれなら納得できるが、彼がそうやすやすと情報を話すとは思えないな。」

「そのレインという人はどうゆう人なんですか？」

レインを知らないカリムが質問してきた。



「六課にいる民間協力者です。そして唯一ネクロを倒せる魔導師かな。」

「あのネクロを……」

それを聞くとカリムは少し何かを考えている様子だ。

「レインという方に予言を見せて見るのはどうでしょうか？」

「一局員に過ぎない者に予言を見せるのは……」

「この重大さが分かればその方も知っていることを話してくれるかもしれないでしょう？」

「それは確かに……」

「では、決まりですね。」

カリムはクロノの意見を聞かぬまま勝手に話を進めてしまった。

「では、はやて。また後日その方を連れてきてくれませんか？」

「了解です。」

「本日はこれで解散としましょう。」

カリムの一言でその場は解散となった。

## 臨時査察

「仕事だるい。」

俺はキーボードを叩く指を止めて呟く。毎日毎日、似たような作業の繰り返しだ。つまらないにもほどがある。ノイローゼにでもなりそうだ。

「レイン、終わったんだっいたらこっち手伝ってくれ。」

「面倒だからやだ。」

「頼むって。」

「はあくじゃあ何個かファイルこっちに回せ。」

「助かる。」

机に倒れ付していた俺は上体を起こし画面に向き合う。そして弾がから送られてきたファイルを開く。仕事を始めたころよりは慣れたのか皆当初より早く仕事を終わらせられるようになっていたがときどきこのように手伝うことをしている。

俺は指を止めふと思う。あれ？俺いつからこんな真面目君になったんだっけ？仕事を始めたときか？なんかそう考えたら急に面倒くさくなってきた。そこで俺は処理しているファイルを閉じて弾の元に送り返す。ついでに残っていた俺の分の仕事もプレゼントしてあげた。

「ん？あれ？なんか一気にファイルが増えたぞ？」

「ああ、それやるの面倒になってきたからやっといて。」

「俺が送った分より多いんだけど。」

「俺の残りも入ってるから。」

「送るなよ！！せめて自分のくらいやれ！！」

「俺が？なんで？」

「お前のだろ！！」

「あゝもう！！さっきからうるさい！！」

「うるさい。」

俺が弾で遊んでいると急にスバルとティアナが怒鳴った。一拍遅れてセルティも言ってきた。

「あんたたちちょっとは静かにしなさいよ！！」

「そうだよ！！ただでさえ面倒なのに仕事に集中できないよ」

「こつちだってねえ、同じ作業ばっかでイライラしてんのよ！！」

「レインさん僕の方も手伝ってくださいよ。」

「私もお願いします。」

どうやら仕事がつまらないのは俺だけではないらしい。二人とも仕事で溜まった鬱憤を俺たちにぶつけてきた。エリオとキヤロは便乗して俺に助けを求めた。はいはい、後でな。唯一、不満を漏らさなかつたレイルカはこちらを見て苦笑を浮かべていた。

「だそうだ弾。ほら、謝つとけよ。」

「あ、ああ、すまん。って、お前も謝れよ!!」

「俺の分も頼んだ。」

「いや、どうしろって言うんだよ!!」

「ちよつとごめんな」

騒がしかった室内が一気に静かになった。全員の視線がドアの方へと注がれる。入ってきたのは八神だった。

「あれ、お取り込み中やった？」

「いや、弾が土下座するという形で納まったところだ。」

「俺そこまですんの!？」

「それでなんか用か？」

弾を無視してとりあえず八神の話を書くことにした。

「ええと。今から地上部隊から六課に査察官が来ることになったとる

んよ。」

「え、なんでですか？」

査察という言葉に疑問に思ったティアナが質問した。

「この前の事件で私限定解除してしもうてな。そんで地上のトップの目に触れてどんな部隊か見に来るっていうことなんやけど・・・」

「だけど？」

「実際はもっと別の用とぅいうか・・・」

妙に勿体ぶって話す八神。何か言いにくいことでもあるのだろうか。

「何口ごもってんだよ。ちゃんとはっきり言え。」

「・・・地上部隊ってなうちらみたいな魔導師のこと嫌いなんよ。」

ああ、なるほど。そういつことか。

「査察っていつのは建前で実際は俺たちに問題がないか見つけて告発でもしよつてことか。」

「・・・まあ、そういつことや。えらい、鋭いなあんだ。」

「そりゃどつとも。」

「えっと、それじゃ私達はどつすればいいんですか？」

「みんなはいつもどおり仕事してくれててええよ。しいて言うならなるべくミスはせんようにな。それと問題なんは・・・」

八神は人差し指を俺に向けた。

「君やで。レイン君。」

あの後八神に言われたことはこうだ。八神は今日来る査察官の案内をするらしい。査察といつても六課の仕事員合を見るだけのようだが。そこで問題になるのが俺だ。俺の仕事の態度はいいとは言えずむしろ悪いほうだ。制服は着崩しているし、よく愚痴を言いながら駄弁っている。そしてなにより俺は敬語を話さない。今回はなるべく問題になる芽は摘み取っておきたいようで俺は査察が終わるまで自室待機となった。一人だけ邪魔者にされて俺が怒っているかと聞かれたら答えは否、だ。むしろ公に休みがもらえるのだから俺にとつては万々歳だ。の、はずだったのだが・・・

「トールもう一回読んで。」

「もう一回ってさっきから同じのばっか読んでるじゃん。」

「もう一回」

「はいはい分かったよ。はあ。」

部屋に戻って見るとヴィヴィオが待ち構えていた。ヴィヴィオは例のごとくなぜか俺に懐いているので俺の部屋に来ることは珍しくない。せつかく貰った休みがヴィヴィオの相手に費やされるおとなってしまったのだ。

「昔、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。」

俺はヴィヴィオの要望どおり絵本を読み上げる。下手に拒否して泣かれたらたまらんからな。ちなみに今読む本は『竹取ファンタジー』というタイトルだ。内容はある日山に出かけたおじいさんが竹の中に眠っていた伝説の剣を見つけるところから始まる。剣を見つけたおじいさんはなぜか南の島にいる魔王を倒しに行くことになってしまう。おじいさんは自分を狙いにきたヒットマンとしゃべる猫と語尾にアルをつける韓国人をつれて、ぎっくり腰になりながらも魔王を倒すという王道ファンタジーらしい。正直、奇抜な設定を入れすぎだと思う。

「くっ、こんなときに腰が。」

「ふはははは。ぎっくり腰とは情けないな。今のうちに私が葬ってやるっ。」

「がんばれ〜おじいちゃん。」

「負けんぞ。うおおおお。」

俺は絵本の台詞を棒読みしていく。感情を込めなくてもヴィヴィオは面白いようだ。

「おじいさんは魔王を倒し、バカンスを楽しみました。めでたし、めでたし。」

俺は読み終えた絵本を閉じる。ふとヴィヴィオを見てみるとすやすやと寝息を立てていた。

「なんだ寝たのか。」

やっと遊び相手から解放されたようだ。そういえばもうすぐ昼か。俺も何か食いにいこう。

昼寝中のヴィヴィオを寮長のミレイに預けてから食堂に向かおうとして、足を止めた。今は昼時だ。もしかしたら査察官たちと鉢合わせするかもしれない。見つかると面倒だな。そう考えた俺は昼食の時間を大幅にずらすことにした。自販機でコーヒーを買って外にあるベンチで一息ついた。

「暇だ。」



いざ、休日と言っても特にやることがない。部屋に戻って昼寝しようにも絶対ヴィヴィオに邪魔されるからな。いっそこで昼寝しようか。そう思い俺はベンチに寝転がる。寝心地はいいとはいえないが練れないほどではなかった。すると誰かの足音が聞こえた。その音は少しずつこちらに近づいてきた。

「ちょっといいかしら。」

いきなり声を掛けられた。声の高さからして女だろう。俺は相手をするのが面倒だったのでそのまま狸寝入りを決め込んでいた。

「起きているのに無視するのはどうかとおもっただけれど。」

どうやらばれていたようだ。俺は仕方なく起き上がる。管理局の制服を着た美女がいた。

「起きるのが遅いわよ。女をあまり待たせるものではないわ。」

「俺は待ち合わせをした覚えはないぞ。ていうかあんた誰だ。」

「失礼。私はドワーエ・フロイライン。今日は一応査察官っていうことになってるわ。」

フロイラインは微笑を浮かべて答えた。彼女の雰囲気自体に色香が漂っているのでも妖艶な笑みに見える。それにしても査察官か。厄介なのに見つかつたもんだ。

「よろしく。俺は眠いのでそのまま帰ってくれと助かる。」

「私の方が階級が上なのだけれど敬語は使わないのね。」

「俺は他人に敬意を払うのが苦手だね。減点対象にでもするかい？」

「いいえ。私素直な人は結構好きよ。」

嫌味を言ってみたが軽くあしらわれてしまった。フロイラインは徐々に俺の隣に座った。若干密着度が高いような気がするんだが。

「それで地上部隊の査察官様が平社員の俺に何のようだ？」

「ドゥーエで構わないわよ。」

「結構だ。」

「つれないわね。」

「いいから質問に答えろ。」

フロイラインはせっかちなね、と呟き小さなため息をついた。それでも余裕たっぷりの表情は崩さなかった。

「私は個人的にあなたに興味があるのよ。レイン・オルハルト君。」

「何で俺の名前知ってたんだ？」

「査察官ですもの。それくらいわ知ってるわ。そして、あなたが異質であることも。」

「異質？」

「シークレットの三人や高町なのはたちのような高ランク魔導師にも負けず劣らないあなたの力。管理局で唯一ネックを倒せる力を持っている人間。」

「……どうしてそれを知っている。」

「調べれば分かることよ。」

「調べれば、ねえ……」

「私はあなたについて知りたいの。教えてくれない？」

彼女は顔をこちらに近づけて聞いてくる。

「いやだよ。面倒だ。それと顔が近い。」

「そんなこと言わないで。」

彼女はさらにこちらに迫ってくる。手は俺の胸に、顔は鼻先がこすれあつくらいに近づいている。それに加えて熱い視線だ。男ならたちまちに落ちてしまっだろう。

「だから近いって。離れる。」

そついうと案外素直に離れた。表情は若干すねたような感じだ。

「これだけやって動じないだなんて、ちょっと自信をなくすわ。」

「狙ってやってるやつになんか動じないよ。」

「それは残念ね。」

彼女の表情はすぐにもとに戻った。すねたのも演技だったようだ。

「何でそんなこと知りたいんだ？」

「私わね、人に興味があるの。特にあなたみたいなの他の人とは違う何かを持っている人にね。人は色々な表情や感情を持っているわ。人にはどうでもいいことでも物凄く憎む人もいる。だれかにこれでもかかっていうくらいに愛を注ぐ人もいる。あなたみたいな人を知ることであるんな表情が見れるかも知れないでしょ？私はそういうのを見るのが好きなの。」

彼女が言った理由はとても単純なものだった。知りたいだけ、というただそれだけの理由。これは多分彼女の本心だろう。その言葉は俺には別の言葉に聞こえた。

「あんたの話を聞いてると自分は何も知らないままさらな状態で生まれて、他人から出しか人を学ぶことが出来なかったって聞こえるよ。まるで、機械みたいだ。」

「え？」

「あんたが人を見るのが好きなのは単に興味があるんじゃないのか？あんたが人を知らないからじゃないのか？」

すると彼女の雰囲気が変わる。微笑を浮かべたままなのに痛いくらいの殺気を放っている。

「怖い顔だ。」

俺にそう指摘されると彼女は自分の無意識の行動に気づいたようで慌てて先ほどの雰囲気に戻した。

「ちなみに言うつとさあ、さっきあんたが俺のこと調べたつて言ったけどあれ実は無理なんだよね。」

「どづいうこと？」

「ネクロのことを知つててもおかしくはないんだけど。俺がネクロを倒せるつてことは提督とか将官あたりの一部のお偉いさんしか知らないらしいんだよ。調べるとしたら色々規制とかが掛かつて面倒なことになるわけ。だからあんたが知つてるのはおかしいんだ。」

俺はそこで一度言葉を区切る。さすがにこの事実には彼女も驚いたようだ。さきほどの余裕のある表情ではなくなっている。

「そのことから踏まえて俺が予想するにあんた局員じゃないだろ。少なくとも何かの思惑があつて管理局に近づいたのは確かだ。」

「・・・私がスパイだつて言いたいの？」

「それはご想像に任せるよ。」

「もし、私がスパイだつたらどうするの？」

先ほどの無意識とは違い今度はあからさまにわかる敵意を向けてきた。

「別にどうもしないけど。」

「え?」

俺の答えが予想外だったのか彼女は目を丸くした。

「俺は別にあんたが何者だろうと管理局がどうなるうとどうでもいい。あんたがこっちに踏み込んでこようとしてるから忠告しようとしただけだ。」

「何、忠告って?」

「調べるのは構わないけど時間の無駄になるからやめといたほうがいいぜ。それと知ったところで何もいいことなんてないからな。」

「それってどういう・・・」

「意味は自分で考えな。それじゃ。」

それは彼女の言葉を最後まで聞かず立ち上がった。昼寝はできなかつたが暇つぶしができたのでよしとするか。それはそう思いながら隊舎のほうに戻っていった。すると波多野とすれ違った。まだ査察が終わってないのにどこへ行ってるのか聞こうとしたがなんだか真剣な面持ちだったので聞くのをやめた。俺は気にせず部屋に戻った。

俺が立ち去った後波多野はフロイラインの元へ向かっていた。

「ちよつといいか?」

「あら?波多野三佐じゃないですか。私に何か御用でも?」

フロイラインは普通の局員として波多野に接した。だが今の波多野にそれは必要なかったようだ。

「君に頼みたいことがある。」

「私に出来ることなら協力しますよ。」

「・・・スカリエッティに合わせてくれ。」

## 黒い王

このときの俺はまだ気づいていなかった。

いや、気づけなかった。

だってそうだろう？その日は何も変わらない日常で始まったのだから。

俺はもっと早く気づくべきだった。

自分自身の選択が間違っていることを。

間違いに気づいていたのなら誰も傷つかずにすんだ。

誰も泣かずにすんだ。

誰も苦しまずにすんだ。

俺は心地のよい夢を見ていた。

本当にずっと、ずっと、ずっと、そこにいたくなるような夢を。

けれど夢は夢だ。いつか醒めてしまう。

もうその夢は見ることは出来ない。

世界が壊れていってしまっているから。

だから俺は決めただ。



もう戻れないのなら。

だから俺は誓ったんだ。

もう届かないのなら。

せめてあいつらを救ってみせるって。

“ 例え、全てを捨ててでも ”

「波多野がない？」

「うん。このところ六課に来てなくて。」

いつものようにF W陣と朝食を食べていると高町に話しかけられた。内容はここ最近波多野が出勤していないということだった。

「なんか知ってるか？」

俺はティアナたちに聞いてみるが彼女らも波多野の不在の理由は知らないようだ。波多野が不在だったこと自体を知らなかったらしい。元々波多野は本局の人間だし、六課に来るのも昼過ぎがほとんどだ。そのころF W陣はデスクワークに追われている。午後の訓練の参加も必ずではないから知らないのも無理はないだろう。

「言われてみれば最近顔を合わせてないですね。」

「ていうか何で俺に聞くの？」

「レイン君だったら何か知ってるかなって……」

「俺は波多野の保護者じゃないぞ。波多野のことならお前らの方がよく知ってるだろ。」

「うう……そうなんだけど。本局に問い合わせてみると椋君そっちにも来てなくて。理由を聞いてみると有休とつたらしいんだけど。」

高町は若干不安そうに言う。理由が分かってんならいいじゃんかよ。

「それが少し変なんだ。」

「どこが変なんだよ。日ごろの激務に耐えかねて休みほしかったん

「じゃないの？」

「和輝君たちが言うには旅行とか行く準備はしてなかったらしいよ。部屋に行ったらしいけど服とかもそのままだったみたい。」

「確かにそれはおかしいですね。まず第一に椋さんが一人で旅行に行くってというのが考えられないですし、それに休みを取ることを誰にも言っていないって言うのも引っかかる。」

ティアナは冷静に分析を述べた。さすが執務官志望だな。

「椋さんが有休とったのっていつですか？」

「三日前くらいかな。」

三日前か。地上部隊の臨時査察が終わった次の日だな。

「そういえば臨時査察の日、あいつどっか出かけなかったか？昼ぐらいに。」

「え？その日は査察が終わるまでずっと六課にいたはずだよ。」

あれ？じゃあ、あの時波多野は出かけたわけじゃないのか。だとしたらなんで外に出たんだ？波多野が向かった方向って確かまだあの査察官がいたはずだ。

「あ。」

そこで俺はある仮説を立ててしまった。いや、でもまさかな。

「何か心当たりあるの?」

声を上げたことにより高町が問いかけてきた。

「えっと、心当たりって言うかなんというか・・・」

「もったいぶってないで言いなさいよ。」

「ああ、うん。臨時査察の日俺昼ぐらいに波多野とすれ違ったんだよ。なんか真剣な顔してどっか行ってたんだよ。それで波多野が向かってた方向に地上部隊の査察官がいたんだ。」

「誰だよそれ?」

「確か名前はドゥーエ・フロイラインって言ってなた。」

「え?それってあの美人で有名のドゥーエ・フロイラインか?」

「まあ美人ではなかったかな。」

「マジか!?なんでお前がそれ知ってたんだよ!!!話したのか!!!」

美人と言う言葉に弾が異常に反応する。そんなに有名なのかあいつ。少しうるさい弾はティアナに黙らされた。

「それでどうしたの?」

「さあ、俺はそれ以上のことは知らない。それでさっきのことと今の俺の話とを照らし合わせてみると何が思いつく?」

すると、全員が考え込んだ。しばらくすると高町が気づいたように表情が険しくなる。

「それ本当なの？」

「さあな。あくまで仮説だからな。なんならその査察官が出勤してどうかでも調べたらどうだ？」

高町は無言で立ち上がり食堂を後にした。後ろ姿は黒いオーラを纏っていたような気がする。

「な、なあ、レイン？なのはさんは何をあんなに怒ってたんだ？」

若干なのはの雰囲気気おされた弾が聞いてきた。なんだ、気づかなかったのか。

「仕方ないな。お前みたいな馬鹿にでも分かるように説明してやるう。」

「うるせえ。」

「まず、波多野は誰にも何も言わずに有休をとった。有休をとったのは臨時査察の次の日からだ。そして臨時査察の日の昼、波多野は俺が言った美人の査察官と会っている。」

「何でそういえるんだよ。」

「波多野はその日どこにも出かけなかった。それだったらわざわざ査察中に隊舎の外に出る必要はないだろう？外に出たのはその査察官と話すのが目的だったんだろう。」

「そうだな。」

「ここで一度情報を整理すると、波多野は有休をとる前日、美人の査察官と会っていて、その後誰にも何も言わずどこかへ出かけた。ここまで言えば分かるだろう?」

それを聞いてキャラとエリオ以外は気づいたようだ。ストレートに言うと波多野がフロイラインと秘密のデートをしているということだ。

「え?でも、棕さんがそんなこと・・・」

「人間分らないもんだぜ。進展しない関係に嫌気が差したとか。理解できた五人は困惑の表情を浮かべている。」

「棕さんは何をしたんですか?」

「キャラとエリオにはまだちょっと早いですかねえ。」

「え?」

キャラとエリオは意味が理解できずに困惑の表情を浮かべている。すると食堂の入り口からヴィヴィオが走ってきた。ヴィヴィオはそのまま俺の足にしがみついてくる。

「どっした?」

「・・・なのはママが怖い。」

それだけ言うとより一層力を込めて足にしがみついた。肩が震えているのは気のせいではないだろう。俺は震えるヴィヴィオの頭を優しくなでてあげた。

「はあく疲れた。」

時刻は午後七時。空には二つの満月が上がり幻想的な光を放っている。さきほどFW陣の訓練を終えたところだ。俺はいつもどおり弾をしごいていただけだったのだが高町があれだったので全員訓練どころではなかったと思う。テストロツサたちまで怯えてたからな。個人の指導が一緒なティアナがとても不憫に思えた。

俺は自販機でコーヒーを買ってロビーの片隅のベンチに座る。夜ということもあってか誰もいないこの場は妙な静けさが漂っていた。だがそのとき異変は起こった。

「!?!、ぐあああ!?!」

突然頭をこれまで感じたことのない激痛が襲う。あまりの痛みに頭

を押さえて俺は前のめりに倒れてしまった。これはまさか歪みか？  
しばらくすると激痛を治まった。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

激痛が治まると全身から汗が噴出した。荒い呼吸を何度も繰り返す。

「あああああああああ！！」

「今の声・・・セルティ！」

セルティの悲鳴を聞いた俺はすぐさま外に出た。俺は外の光景を見て驚愕する。そこには大量の黒い骸の兵士がいた。骸の兵士はFWたちを襲っているようだ。狙いは多分セルティだろう。

「エリス！！」

『セットアップ！！』

「はぁ！！」

俺はデバイスとバリアジャケットを展開して骸の兵士に斬りかかる。鎧を纏っていたが簡単に崩れ去っていったのですぐに倒すことができた。俺はそのまま骸の兵士を切り伏せながら進んでいき、FWたちの下にたどり着いた。

「大丈夫か！」

「レインか！これはいったいどういことなんだよ！」



「分からない。セルティは？」

「急に頭を押さえて気絶したんです。」

倒れたセルティはティアナたちが見ているようだ。弾とエリオが骸の兵士をと戦ってたのか。

「弾、この兵士倒せたのか？」

「ああ、倒しても倒してもあいつら増えやがるんだ。」

歪みは俺の力でか倒せないはずだが。歪みが弱すぎる所為だろうか。

「弾、エリオ、こいつらを殲滅するのを手伝え。ティアナたちはそのままセルティのことを頼む。」

俺たちは骸の兵士の殲滅に取り掛かった。相手はそれほど強くなかったので大丈夫かと思っただがどんどん数が増えていく。倒しても倒してもきりが無い。弾とエリオも訓練の後で体力を消耗してるし。このままじゃジリ貧だな。すると空から無数の矢が降り注いだ。矢は一つ一つ骸の兵士に命中し一気に数が減った。

「レイルカか。」

見上げるとレイルカが屋上から狙撃していた。今ので大方片付いたので残りの殲滅はすぐに終わった。全ての兵士を倒し終わるとレイルカが屋上から降りてきた。

「レインこれはいったい？」

「分からない。歪みの仕業だと思うんだが明らかに攻め方が違うんだよ。」

「そうですか。セルティの方は大丈夫なんですか？」

レイルカに言われて俺はセルティの容態を確認する。気絶はしてるが呼吸は整っているし外傷もない。

「とりあえずは大丈夫か。念のため医務室につれて行こう。」

俺はエリスを待機状態に戻しセルティを抱きかかえる。すると突然茂みの中から黒い何か飛び出してきた。俺は何とか反応でき後ろに飛んでかわした。レイルカたちが身構える。現れたのは黒い狼だ。一番初めに戦った歪みを小さくしたようなやつだ。

「ぐっ!?!」

肩が焼けるように熱くなる。そして次に痛みが襲ってきた。見てみると黒い狼が俺の肩に噛み付いていた。痛みの所為で抱えていたセルティを手放してしまった。それを見逃さなかったもう一匹の狼は俺の方に向かってきて落ちるセルティを背中に乗せて走り去っていく。

「くそ!?!」

肩に噛み付いている狼を殴るがかわされてしまう。その狼もセルティを乗せた狼と一緒に走り去っていく。二匹の狼が並ぶと形状が変化し、混ざり合って、巨大な鳥となった。その鳥はセルティを足で捕まえて飛び去った。

「待て!!」

追いかけてしようとするがもう間に合わなかった。噛まれた肩が痛み膝をついてしまう。

「レイン！大丈夫ですか！」

レイルカが慌てて治療しようとするが手で制す。俺は方に手を当てて器の力を発動させた。白い光があふれ出し傷を治していく。そして出血が止まったところで治療をやめた。すると弾が俺に掴みかかってきた。

「おい、レイン！どういふことか説明しろよ！！何でセルティが連れて行かれるんだよ!!」

「ちょっと弾・・・」

ティアナが止めに入るが気にせず俺を睨んでくる。

「理由は検討ついているが、今は教えられない。」

「なんだと!!お前・・・」

「それはセルティの過去に掛かることだ。他人が軽々しく語っているもんじゃないんだ。セルティが話していいと思った相手だけに聞く権利がある。」

そういふと弾は苦虫を噛み潰したような顔をした。俺は弾の手を振り解く。

「俺は今からセルティを連れ戻す。お前らは高町たちにこのことを報告しろ。」

『ウインド・ギア』

魔法を掛けると一気に走り出した。常人では捕らえきれないスピードだ。レイルカも羽を広げ全速力でついてきた。海面に出ると俺は足場を作って進んだ。

「無理してついてこなくてもいいんだぞ。」

「無理なんてしてませんよ。それに妹が連れ去られたのに黙っている姉なんていないでしょう?」

「そうか。じゃあ、とつとと助けるぞ。」

歪みの反応を追ってたどり着いたのは廃棄都市よりも先にある郊外だった。都市開発がされておらず自然がそのまま残っている場所だ。森林が生い茂っている中で一箇所だけ木々に覆われていないところがあった。そしてそこにはセルティもいた。

「セルティー!!」

近づきながら声を掛けるが返事がない。まだ気絶しているようだ。俺がセルティに触れようとした瞬間、地面からあふれた黒い何かはセルティを飲み込んだ。

「なんだ!?!」

俺は慌ててセルティの腕を掴む。だが黒い何かに触れた瞬間腕に激痛がはしった。流れ込んできたのは歪みの源である負のエネルギー。これ自体が歪みらしい。そのエネルギーが肉体に逆流してダメージを与えているのだろう。

「レイン!!」

「駄目だ! 触るな!!」

俺の腕を引き抜こうとしたレイルカを止める。器を持ってないレイルカが触るのは危険すぎる。そうこうしているうちにセルティはものすごい力で引き込まれていく。もう体は見えない。俺の腕も肩まで引き込まれている。激痛が走るが離すわけにはいかない。

「絶対離さないからな・・・!!」

俺は力を振り絞りセルティを歪みから引きつりだす。腕をだんだん引き上げていく。するとセルティの手が見えた。俺は両手で掴みさらに引く。張る。するとレイルカも掴んだ。一瞬驚いたが構わず引く。張った。すると急にセルティを引く張る力がなくなり俺たちは後ろに倒れこんだ。

「うわっ!」

「きゃっ!」

セルティも無事に引きずり出せたようだ。俺はセルティの状態を確認する。息はしているようだが微弱なものだった。歪みの中にいたせいで体力を持っていかれたのだろう。

「レイルカ、セルティに治癒魔法を・・・!?」

俺は気絶しているセルティを見て驚愕する。セルティの髪の色が変色しているからだ。綺麗な黒髪が鮮やかな緑色の髪に変わっている。変色というよりは脱色に近いかもしれない。黒い色素だけを抜き取ったように。

「まさか・・・そんな!？」

「どっぴいっことだ?」

「セルティから負極の器が抜き取られています!」

「器を抜き取る?そんなことできるか?」

「できませんよ!!できないはずなのに、どうして?」

レイルカも状況を理解できていないようだ。先ほどの歪みを見ると黒があふれ出していた。泉の水のごとくあふれ出た黒は全てを塗りつぶしていく。黒はどんどん木々を飲みこんで地面を侵食していった。

「まずい！！一旦ここを離れるぞ！！」

「はい！！」

俺はセルティを抱えとりあえずその場から離れた。そして侵食が及ばない崖の上まで上った。黒は一キロほど広がると侵食をやめ消えた。そのあたり一帯は何もない更地に変わってしまった。

「いったいなんだこれは？」

更地を見渡しながら呟く。すると更地の中心のところにかがいの気がついた。それは人だった。腰まである長髪に細身だが筋肉質な体。身に纏う服は全てが黒だ。にも関わらず肌の色は死人のよう白い。男の目は血の色よりも濃い真紅の瞳だった。

そして男は夜だというのに迷ったそぶりも見せずこちらを見つめて不適に笑った。

## 死

「なのは隊長!!」

パンツという勢いよくドアを開く音が聞こえなのは何事かと思いでアの方を見る。一緒に仕事をしていたフェイトとヴィーダとシグナムもそちらに視線を向けた。

「大変……です……」

「どうしたの!? 弾君!!」

ドアを開けたのは弾だった。弾が息を切らした状態で入ってきたのではのは慌てて立ち上がる。よく見れば後ろには他のFWメンバーがいる。他のメンバーも息を切らしていた。全員、訓練終わりに走ってきたので息が切れるのは当然だろう。

「とりあえず、息を整えて何があったか説明してくれる?」

そういうと弾は二、三回大きく息を吸ってから息を整えた。息が整った弾は説明を始めた。

「さっき訓練が終わった後、隊舎に帰ろうとしたら黒い骸骨の兵士が出てきて……」

「黒い骸骨の兵士?」

黒いと言っ言葉を聞いてなのはが連想したのはネクロのことだった。



「そしたらセルティが急に頭を押さえて倒れて、骸骨たちが襲い掛かってきたんです。」

「骸骨たち？どれくらいいたの？」

「五十は越えてたと思います。」

「五十！？」

なのは驚愕した。それだけの数がいなのに自分は気づかないままだったのかと同時に自分のことも責めた。

「でも、そいつらは全然弱くて、レインも駆けつけてくれてなんとか対処できたんです。」

「レイン君が・・・そういえばセルティはどこ？倒れたから医務室に運んだの？」

メンバーの中にセルティがいないことに気づき質問した。するとFWたちは少し顔を暗くした。

「・・・セルティは骸骨を倒した後に出てきた狼みたいなやつに連れて行かれました。」

「連れて行かれた？どうして？」

「分らないです。レインは何か知ってるみたいでしたけどセルティの過去に関わることだからと言って教えてくれなかったんです。」

「

「レイン君は今どこ？」

「セルティを追っかけて行きました。」

状況はいいとはいえなかった。まず、ネクロの行動がいつもと違うということだ。普段なら単体で向かってくるのに対し、今回は複数体で向かってきたこと。これから考えると敵の戦力は未知数だ。そして、次にセルティを攫ったことだ。ネクロにも知能があることは分かっている。セルティを人質にとられれどもすればいくらレインでも助け出すのは困難だろう。

なのははふと思いついた。前にセルティが見せた黒い力。ネクロにも対抗できる力。ネクロはその力を入れるためにセルティを攫ったのではないだろうか。そしてその力がネクロに渡ったときのことを考えた。なのははすぐに行動をとった。

「フェイトちゃん！すぐに和輝君たちに連絡を！」

「え！？あ、うん。」

「グイーダちゃんにはやてちゃんにこのことを報告して。」

「分かった。」

「みんな疲れてるかもしれないけど今から出動するよ。」

「「「「はい！！」「」「」」」

元々、異存はなかったらしく大きな返事が返ってきた。

「それじゃあ、二十分後へリポートに集合!!」

それを聞いて皆、一斉動き出した。なぜなのはここまで早く行動したかという理由はレインにある。ただでさえ強大な力を持つネクロにセルテイが持っている力が加われば、最悪レインは死ぬかもしれない。その考えが頭をよぎってしまったからだ。

その男が笑みを浮かべた瞬間、俺はもうすでに駆け出していた。あの男を見たときから胸のざわつきが止まらない。器が強く反応しているのが分かる。多分、嫌悪しているのだ。異常なあつ男を。いや、異常な歪みを嫌悪しているのだ。崖の上からアクセル・リングを使い、一気に更地となった地面に降り立った。

「氷凰一閃!!」

カートリッジをロードして氷の斬撃を放つ。放たれた斬撃は地面を凍らせながら男に向かっていった。しかし、男は避けるそぶりも見せず手を前に出し斬撃を受け止めた。

「な!?!」

男は手だけで斬撃の軌道を逸らし近くの瓦礫に当たった。男の手のひらは傷一つない。

「出会い頭に攻撃を仕掛けてくるとは随分嫌われたものだな。久しい再会だと言うのに私は悲しいぞ。」

「再会？何言つて……」

と、そのとき頭の中にノイズが走る。それとともに不鮮明な何かが見えた。なんだ今のは？

「まさかたつた数百年で私のことを忘れたというのか？」

不鮮明な何かはなおも続く。その中では誰かが会話をしている。その声はノイズが激しく聞き取れない。そのノイズが何度も何度も繰り返されてだんだんと明瞭になっていく。明瞭となった映像を見て俺は驚愕する。それに映っていたのは目の前の男だったからだ。そして俺は静かに男の名前を口にする。

「ディネガー……ディネガー・ジヨズ・カタストロフ。」

俺が名前を呟いたら男は満足げに笑った。俺は自分の呟いた言葉に混乱する。なぜ俺は知ってるんだ？先ほどのような映像は前にも一度見たことがある。エフィアに遺跡で見せられた映像と同じだ。だとすればさきほどの映像は記憶だ。俺ではない誰かの記憶。

「どうしてそんなものを俺が覚えているんだ……!？」

「レイン……!」

するとレイルカがこちらにやってきた。

「どうしたんですか？いきなり飛び出して・・・」

「・・・すまない。自分でも分からないんだ。あいつを見ると器が反応して抑えられないんだ。」

「じゃあ、あそこに立っているのは・・・」

「歪みだ。多分前のやつが言っていた王だと思う。」

そういうとレイルカの顔がいつそう険しくなった。それもそうだろう。彼女の目的は歪みをなくすことだ。彼女にとって歪みの王は絶対に倒せねばならない存在だ。

「今更何を言っている。そんなことは当の昔に知りえたことだろう？アストール・クエイサー」

「!?!」

「アストール？」

「何を驚いているのだ。貴様自身の名だというのに・・・」

俺自身の名前？ディネガーの言葉を聞くが何がなんだか分からない。はじめはディネガーが勘違いしているのかと思ったがそれだと先ほどの記憶の説明がつかない。そう思うと自分自身が分からなくなつた。

お前は何でここにる？

あいつを倒すためだ。

何で戦っている？

俺が選んだから。

お前は誰だ？

俺はレインだ。

本当にそうなのか？

頭の中に響く質問。誰かが投げか掛けてくる質問に俺は答えられない。

お前は自分が選んだように見えてただ選ばされているだけじゃないのか？

違う。

お前は自分のことをわかっているつもりになっているだけだ。

違う。

お前は流されて生きてるだけだ。あの頃と何も変わっていない。

「違う！！」

気づいたら俺は大声を上げていた。そして強く頭の中に響いた質問

を否定した。息苦しく呼吸がしづらかった。軽く目眩がして思考が安定しなかった。

「俺は・・・レインだ。レイン・オルハルト、なんだ。アストールなんかじゃない!!」

俺は今までの考えを振り払うように、あるいは自分自身に言い聞かせるように言った。俺はエリスを構えディネガーへと駆け出した。

なのはの指示に従いFW陣はヘリポートへと急いだ。全員もうすでにバリアジャケットを展開していた。すると耳障りなアラムがなり響いた。

「なんだ!?!」

『機動六課にネクロが侵入!!非戦闘員は直ちに退避、速やかに迎撃に当たってください。』

「ネクロってまさか・・・!?!」

弾はヘリポートへの階段を一気に駆け上がった。そしてヘリポートにたどりつくとき先ほどの骸の兵士がいた。ざっと見るだけで十体は

いる。

「こいつらまだいたのかよ！」

「すべこべ言わないで、なんとかするわよ！」

弾を諭しながらティアナは兵士に攻撃する。ティアナの放つ弾丸に当たると兵士は骨が砕けて倒れていく。強さは先ほどと変わらないようだ。スバルたちも兵士を倒していつている。この分ならすすむと思つたがそうはいかなかった。倒したはずの兵士達が再生したのだ。砕けた骨が元通りになってまた襲ってくる。

「なんで！？倒したはずなのに・・・」

「ならこれでどうだ！！」

「デリートバレット！！」

カートリッジをロードしてガンブレードから四つの弾丸が発射される。その弾丸が兵士に当たると爆発を起こし周囲のものを吸い込んでいく。弾の重力の変換資質によって生成された重力球。それはブラックホールのようにも見える。重力に引かれ兵士達はあっさりと砕けていった。

「よしこれで・・・！？」

だがネクロはそれでも再生した。やはり歪みは器の力でしか倒せないようだ。

「さっきは再生しなかったのに・・・」



「もしかしてレインを引き離すため、かも・・・」

「どうゆこと、ティア？」

「こいつらを倒せるのはレインだけよ。さっきは倒せたんじゃないけど再生しなかったただけだと思う。セルティを攫ったのもレインが追いかけてくるって思ったんじゃない。」

「レインさんを連れ出すのが目的だとしたらなんで六課を襲うんでしょうか？」

「足止めだと思うわ。レインに加勢させないようにしてるんじゃない。」

「じゃあレインはまんまと向こうの策に嵌っちまったってわけか。で、どうする？」

ティアナの予想が正しければこのままではレインが危険だ。向こうは多分レインを倒せる力があるはずだ。だが兵士がじゃまでへりに乗り込めない。

「紫電一閃！！」

すると兵士に向かって炎の剣撃が放たれた。炎は兵士を全て巻き込み破壊していく。兵士の残骸は爆風に流されて地面へと落ちていった。さすがに再生する場所は選べないだろう。

「シグナム副隊長！！」

「六課は私達守護騎士が守る。お前達は早くオルハルトの元に向かえ!!!」

「分かりました!!!」

そういつてティアナたちはへりへ乗り込んだ。

「はあ!!!」

キンツという刃がぶつかり合う甲高い音が鳴る。俺は器の力をエリスに付与して斬りかかった。ディネガーはどこからともなく取り出した黒い剣で俺の攻撃を受け止めた。俺は攻撃を続けるがディネガーは余裕の表情で受け流していく。

「その程度か。」

ディネガーが剣を振ると俺はあっさりと押し返されてしまった。そして隙だらけのわき腹に蹴りを入れられた。

「かはっ!」

ただの蹴りと言っても相手は歪みだ。常人のそれを遙かに上回る衝

撃が俺を襲う。俺は地面に転がる。骨が折れなかったのは運がよかったのだろう。

「休む暇などないぞ。」

「くっ！」

頭上で声がしたので俺はとっさにエリスを盾代わりにする。振り下ろされた剣を受け止めると強い衝撃が腕に伝わった。足で踏ん張り何とか耐えることが出来た。だが体勢が屈んでいる状態なので剣を押し返すことが出来ない。すると横から矢が飛んできた。それを避けるためディネガーが飛びのいたので俺も体勢を立て直した。レイル力が援護してくれたようだ

「スファイア・ブレード」

俺の周りに六本の白い氷の剣が生成される。氷の剣はディネガーにまっすぐ向かっていく。だがディネガーは焦った様子も見せずに向かってくる剣を切り裂いた。

「な!?!」

ディネガーは次々に剣を切り裂いていった。器の力を付与して歪みの攻撃には耐性があるはずだ。それ以前に普通の状態でも鉄以上の硬度を持つてるのにあれだけやすやすと壊されるものなのか？

「なかなかこの力は使い勝手がいいな。貴様もいいものを創ってくれる。」

「どっついうことだ。」

「この力先ほどの娘から奪った力だ。」

「まさか、セルティの器を奪ったのか!？」

「ああ、そのとおりだ。」

「だがどうやってそんなことを・・・」

「簡単なことだ。貴様が創った器の力は世界の外側の力だ。世界の物理法則を捻じ曲げ、魂と同化した器を切り離すことも可能だ。」

「そんなことをセルティにしたんですか!？」

するとレイルカが声を荒げてディネガーに問いかけた。

「どういうことだレイルカ？」

「人の魂というのはかなり繊細なものです。少し傷つくだけでも危険なんです。それなのに魂と同化した器を強制的に切り離すなんてことをしたら・・・」

「生きれる可能性は限りなく低いな。だがそんなこと私にとってはどうでもいいことだ。」

「てめえ・・・!!」

俺は怒りに身を任せてディネガーに斬りかかった。またも簡単に受け止められる。だがそれだけでは終わらない。俺はエリスを手放しディネガーの顔面を掴む。

「ストライク・カノン!!」

圧縮された魔力が一気に放出され、ディネガーは後ろに吹っ飛び地面に叩きつけられた。それと同時に砂煙が舞い上がり、ディネガーの姿が見えなくなる。さすがにゼロ距離で食らったんだから無傷ではすまないだろう。姿が見えなかったので煙が納まるまで様子を見て、るといきなり黒い斬撃が飛んできた。俺は慌てて手放したエリスを手に取り構える。防御は間に合ったが受け止めきれず肩に当たった。すると勢いよく鮮血が噴出した。

「くっ!!」

「今のはさすがに危ないと思っただぞ。」

すると煙の中からディネガーが出てきた。先ほどとは違い埃を被っていたり服がきれていたりするが、傷らしい傷は見当たらなかった。俺は肩を押さえて苦悶の表情を浮かべる。正直このままじゃやばい。傷を負った肩は戦闘に支障をきたすほど深い。どうするべきか考えていると体がふわりと浮いた。

「一旦引きますよ。」

「レイルカ何すんだ!!」

「いいですから、静かにしてください。」

そのままレイルカは更地から離れ、森林地帯の方へ飛んでいった。

「大丈夫ですか？」

レイルカは心配そうに俺に聞いてきた。川の近くに下りたレイルカは俺を解放し傷の手当てをし始めた。一方俺はしかられた子供みたくに黙り込んだまま座っていた。

「傷見せてください。あと狼に噛まれた傷もです。止血しかしてないでしょう？」

俺は素直に手当てを受けた。レイルカは非常用の救急セットを取り出してせつせと手当てをしていく。塗り薬は少ししみたが声を上げずに我慢した。

「・・・セルティはどうしたんだ？」

「別の場所に移しました。心配しなくても戦闘に巻き込まれることはないでしょうし、一応防御魔法も掛けています。」

「そうか。」

会話がなくなりまた沈黙が続く。だが今度はレイルカが話し始めた。

「先ほどからどうしたんですか？」

「なにがだ？」

「レインの態度です。取り乱したり、怒りに身を任せて攻撃したりいつものあなたらしくないですよ。」

「……」

レイルカの質問には答えなかった。けれどレイルカがさらに追い討ちを掛けてくる。

「アストールという人物に関係するのですか？」

「!？」

「やはりそうなのですね。」

「……お前に隠し事はできないな。」

俺は観念して話すことにした。三年前あの遺跡で見たことを、俺の中にあるアストールの記憶のことを。

「アストールの記憶がレインにある、ですか。でもなぜ底まで取り乱したのですか？」

「……分からなくなっただんだ。」

「え？」

「お前と神様が俺に世界を救ってくれって頼んだとき、俺は自分で

選んだつもりだった。でもそれは本当は俺の中にいる誰かが選んだんじゃないかって。俺は俺じゃない誰かに今まで動かされただけじゃないかって。そう思ったら頭が混乱して何がなんだか分からなくなかった。」

俺は今の気持ちを全部吐き出した。でも不安な気持ちは変わらないままだった。するとレイルカが俺の手を優しく包んでくれた。

「大丈夫です。あなたはレインです。アストールという過去の人じやありません。例えアストールの記憶があなたにあつたとしても私を今まで護ってくれたのはレインです。あなたがレインであることは私が証明します。セルティや弾も明日香や深澄も知っています。六課のみなんだって知っています。」

レイルカの言葉を聞くと不思議と不安は消えていった。とても安心する心地いい言葉だった。

「ですから大丈夫です。」

「……ああ。」

「まったく、腑抜け面がいつにもまして腑抜けにいると思えばそんなことを悩んでいたのですか？」

突如声を発したのは待機状態だったエリスだった。

『あなたは私のマスターのレインなんですよ！くだらないことで悩んでないでささっとさっきの歪みやっつけてくださいよ！』

エリスはいつもどおり俺を罵倒した。でも本人はそれで励ましてい



るつもりなのだろうそう思うと噴出してしまった。

『なんですか！？なんで笑うんですか！！レイルカ様まで……』

「いや、悪い。ありがとな。」

『罵倒されてお礼を言うなんて気持ち悪いですね。』

本当に素直じゃないデバイスだ。

「さて、そろそろ行くか。」

「はい。」

レイルカは俺の手を握った。

「我、汝に力を与えし者」

「我、力を欲する者」

俺たちの足元に二つ魔方陣が現れてそれを中心にさらに大きな魔法陣が現れる。

「汝、その身その力を我を守る盾とし、剣となれ」

「我、この身朽ち果てるまでそなたに忠を誓う」

「<sup>エンゲージ</sup>連結」

連結を完了すると俺たちはディネガーの元に向かった。器が反応を示していたので見つけるのはそれほど難しくはなかった。

「かくれんぼはもう終わりか？アストール。」

「だから俺の名前はレインだって言ってるだろうが。」

「今更何を言って……いや、そうか。私は大きな勘違いをしていたようだ。」

するとディネガーは何がおかしいのか笑い出した。

「そうか。貴様はその中で手をこまねいて見ているだけか。哀れなものだな。貴様が出てくるなら厄介だと思ったがそうでもないらしいな。」

貴様とは多分アストールのことだろう。どうやら俺はアストールではないと認識されたようだ。

「まともに戦ってもないのに相手を下に見るのはいけないぜ。」

それを言い終わると同時に俺はディネガーに向かって駆け出してい

た。レイルカと魔力を共有しているので先ほどとはスピードが段違  
いだ。俺は最大出力で魔力を噴射しディネガーの顔面を殴った。デ  
イネガーは木々を巻き込みながら吹き飛んだ。

「あんま人間をなめんじゃなねえよ。」

「やっってくれるな、人間！」

ディネガーは木々を吹き飛ばしながら出てきた。今度は少し皮膚が  
切れて傷を負っているようだ。そして背中には闇で象った翼が生え  
ていた。ディネガーは黒い剣を出し向かってきた。翼が生えたこと  
によって機動力が上がったのかかなりのスピードだ。だがまだ俺よ  
り遅かった。俺は正面から受け止めた。

「な!？」

「受け止められないとでも思ったか？」

ディネガーは驚きの顔を見せたが怯まず攻撃を続けた。剣と刀がぶ  
つかり合い凄まじい戦闘が繰り広げられる。このままでは拉致があ  
かないと判断したのかディネガーは上空に逃げた。だがそこにはレ  
イルカがいた。上に上った瞬間矢の雨が降り注いだ。ディネガーは  
回避するがすべては無理だった。

「これはまさか正浄の器の力か!？なぜ器が二つある!！」

「残念。俺が器の力を貸してるだけだよ。」

俺もすぐに追いかけて後ろから斬りかかった。だがそれは翼からで防  
がれた。すると今度は大きな腕のようなものが出てきて俺を押しつ

ぶそつとする。俺はそれを難なく回避する。

「アルク、カートリッジロード。」

『承知。』

「サテライト・レイ」

レイルカはディネガーの頭上に向かって矢を放った。放たれた矢は一メートルほどの球体となった。そしてその球体から濃密な光が放たれた。

「ぐおおおお×!!」

光は容赦なくディネガーを焼いていく。だがディネガーは何とかその光の中から抜け出した。俺はそれを見逃さずさらに追い討ちをかける。

「逃がすかよ!!」

俺はディネガーを蹴り飛ばし地面にたたきつける。

「氷凰一閃!!」

ダメ押しとばかりに斬撃を放つ。斬撃は直撃して大きな氷塊ができていた。

「レイン、倒したのですか？」

「ここまでやればやっただろ。」

と、俺が安心してしていると氷が砕ける音がした。そして黒い剣が俺の足に突き刺さっていた。

「くっ!?」

「レイン!?」

まさかまだ動けるのか？

「人間風情が図に乗るな!!!」

氷の中から出てきたディネガーは怒りが頂点に達したようだ。こちらに指を向け黒い砲撃を放ってきた。かなり広範囲に拡散する砲撃だ。まずい！俺はレイル力を引き寄せ回避する。だがよけきれずエリスと腕が巻き込まれた。肉が焼ける嫌な臭いだった。砲撃を食らったことでバランスを崩し地面に急降下した。何とか着地はできたが傷ついた足では無理があった。

「大丈夫ですか!?レイン!!!」

「・・・なんとか大丈夫だ。」

強がってみたものの実際かなりやばい状況だ。するとディネガーがこちらに向かってきた。

「私にここまで傷を負わせたことを後悔させてやる!!!」

俺はすぐに立ち上がり攻撃を受け止めようとした。だが剣が触れた瞬間、エリスが砕けてしまった。

「な・・・!?!」

先ほどの砲撃に巻き込まれた時に破損したようだ。そして体に激痛が走った。肩からわき腹にかけて切られたようだ。鮮血が一気に噴出す。そして何もかもがスローモーションに感じた。黒い剣の切先が俺の胸の部分に向けられている。切先はゆっくりと近づいていきやがて俺の胸を貫いた。

「がはっ!」

「レイン・・・いや!レイン!!」

剣が引き抜かれ地面に体が倒れた。心臓の鼓動がひどく耳障りに聞こえた。体に力が入らなくなり意識が遠のいていた目の前が真っ黒に染まった。

「いやあああああ!!」

そのとき俺は、死んだ・・・

## 無理だな

レインが黒い剣に貫かれたとき周りが不気味なほど静かになった。貫かれた部分から血があふれ出しバリアジャケットを赤く染めていった。剣が引き抜かれてレインの体が倒れていく。私は倒れていくレインをただ見ていることしかできなかった。そして倒れて動かなくなったレインを見てようやくレインが死んだ、と理解する。私はこの状況を受け止めきれずに絶叫した。

「いやあああああ!!」

頭の中が真っ白になり何がなんだか分からなくなる。誰かにうそだと言つてほしい。これは悪い夢だと思いたい。でも倒れたレインを見てそう思わせてはくれなかった。レインが倒れている周りは血溜りができている。明らかに致死量の血が流れ出ている。

「フハハハハハ、哀れなものだな。その女を助けようとしなければ死なずにはすんだらうに。」

ディネガーは動かなくなったレインを見下ろして言う。

「まあ、いい。これで器を破壊する手間が省ける。」

そういうとディネガーはレインの首を掴んで片手で持ち上げた。そしてもう片方の腕をレインの胸に突き刺した。

「!?!」

突き刺したように見えたが実際は違った。レインの胸に届く前に黒

い空間が開きそれに手を入れているようだった。

「まさか器を・・・!?!」

そんなことをしたらもう誰もディネガーを倒せなくなる。私はそれを阻止するためにディネガーに攻撃をした。魔力が収縮していき大きな矢が放たれる。だが器の力が付与されていない攻撃では大した威力は期待できなかった。予想通りあっさりと矢が弾かれた。だがそれでよかった。ディネガーの注意が一瞬こちらに向く。私はその隙にレインを奪い返して逃走した。

「な!? 貴様!?!」

私はレインを奪い返すと全速力で逃走した。できるだけ遠くへ、遠くへ向かった。私は抱えているレインを見る。先ほどまで笑っていたのに今は痛々しいほどな無表情になっている。私は我慢できずに涙を流した。すると突然背中に激痛が走った。私はバランスを失い森の中に落ちていった。どうやらディネガーに撃たれたようだ。

「きゃあ!」

木の枝を巻き込みながら落ちていくがレインだけはしっかりと抱きしめた。そして転がるように着地した。全身が傷だらけになりもう歩く力もなかった。私はレインをもう一度抱きしめた。そしてレインの力になれなかった自分を嘆く。レインを助けられなかった自分を嘆く。冷たくなってきているレインの体に触れると留めなく涙が溢れ出した。

「逃がすと思ったか? あまり梃子搦らせてくれるな。」



背後を見るとディネガーが上空から地面に降りてきたところだった。体を見てみると先ほどレインにつけられた傷がなくなっていた。さきほどの短時間で回復したようだ。

「あきらめてその男をこちらに渡せ。」

「……いやです……」

「なぜだ？その男は死んでいるのだぞ。貴様がいくら懇願しようとも目覚めることはない。」

「それでもいやです……」

するとディネガーは哀れむような視線を私に向けてきた。

「ならば貴様もその男と同様に葬ってやる。」

ディネガーは黒い剣を出現させ、こちらに歩いてきた。私はもう抵抗する気力もなかった。だが不思議と怖いという感情はなかった。ディネガーが私の前まで来て足を止める。

「その男も一人で逝くのは寂しいだろう。貴様も一緒に逝ってやれ！」

冷たい言葉とともに剣が振り下ろされる。私は死を覚悟して目を閉じる。死ぬ、と思ったが黒い剣は私に触れなかった。

「女の子に手を出しちゃいけないよ。」

「男としては最低だな。」

目を開けるとそこには長瀬さんと一条さんがいた。銀色の槍と赤黒い大剣を交差させてディネガーの剣を受け止めていた。

「何だ、貴様らは？」

「その子たちの・・・」

「仲間だよ！！」

今度は上空から大量の桃色と黄色のスフィアが飛んできた。大量のスフィアはディネガーに降り注いだ。見上げるとなのはさんとフェイトさんがいた。だがディネガーはすばやく回避した。

「そんなことをしても私には効かないぞ。」

「だからどうした！！」

すると地面から鎖が生えてディネガーに巻きつく。動けなくなったディネガーに三色の砲撃が放たれた。砲撃は見事に直撃して爆発を起こした。ヘリからFWたちも降りてきた。

「大丈夫か？レイルカ。」

「弾・・・みんな・・・」

「怪我してるんだったゆっくり休め。後は俺たちがやる。」

「！？・・・そんなの無理ですよ！レインでさえ倒せなかったのに・

・・・」

「それが何だ!!」

私は弾を止めようと腕を掴むがそれは乱暴に振り解かれた。

「レイルカ、俺はなあ。親友を殺されて黙ってられるほどお人よしじゃないんだよ!!あいつだけは絶対に許さねえ!!」

「まったく、人間というものはつくづく愚かな生き物だな。」

爆煙が一気に晴れて無傷のディネガーが姿を現す。

「あれだけやっても無傷とかちょっと自信なくすよ。」

「貴様らの攻撃など私には効かないと言っただろう。」

ディネガーは最初の時と同じような余裕のある表情でこちらを見ていた。レインという最大の障害を取り除いたことによって恐れるものがなくなっただからだろう。

「無意味と知っていてなぜ戦う？抵抗しても何も変わらないことを理解しろ。」

「人間はねえ、人生に一度は絶対にやらなきゃいけないことがあるんだよ!!」

上空から白い閃光が放たれた。白い閃光はまっすぐディネガーに直撃した。

「遅くなつてごめん!」

「掠！」

「掠君！」

降りてきたのは音信不通だった波多野さんだった。

「今までどこに行ってたんだ？」

「ちよつとした野暮用だよ。」

「ふうん、どんな野暮用なの？」

「え！？あ、後で説明するよ！（なんでなのはが怒ってるの？）」

なのはさんは黒いオーラを出しながらニコニコ笑いながら波多野さんに聞いていた。朝レインに言われたことをよっぽど気にしていなかったらしい。

「貴様、この力をどこで手に入れた！！」

デインガーは爆煙を抜け出し突然大声を上げた。その体には傷がついていた。

「僕の力、リアルブート「現実投影」は頭に思い描いたものを投影できる。さっきの砲撃はレインの力を思い描いてみた。どうやらうまくいったみたいだね。」

波多野さんの説明を聞き、私は驚愕した。器の力をまねることができるとは思ってもなかったからだ。

「だが、所詮は紛い物の力のようだな。」

するとディネガーの傷がみるみるうちに治っていく。

「でもこれで僕もお前と戦えることが分かった。」

「だからどうだと言うんだ？人間共がいくら集まろうと私には勝てない。」

「お前は危険だ。だからレインもお前を倒そうとした。勝てる勝てないじゃない！！やらなきゃいけないんだ！！」

波多野さんは自らのデバイスであるセフィロスを構え戦闘を開始した。ほかの六課のメンバーもそれに続いていく。けれど私はまたそれを見ているだけだった。誰かが戦ってるのを見ているだけ。いつも守られてばかり。

「・・・これではダメですね。」

もうレインはいないのだ。守ってくれるのを期待することはできない。私はレインを見て決心する。レインの体をもたれさせ、ふらふらとした足で立ち上がる。そして全身に治癒魔法をかける。

「レイン、見ていてください。私は必ずディネガーを倒します。」

返事が返ってこないのは分かっているが私は静かにつぶやいた。背中の中の火傷の傷は治らなかったが大半の傷は治療できたので私は歩くを展開した。

「行きましよう、アルク。」

『承知いたしました。』

一対の羽を広げ私も戦場へ向かった。

「……ここはどこだ？」

目を開けてはじめに映ったのは白だった。あたり一面真っ白で延々と続いている。

「えっと、確か俺は死んだんだっけ？」

そういいながら俺は自分の体を確認してみるがそれはできなかった。自分の体が見えなかったからだ。正確には自分の体も周りの景色と同様に白で塗りつぶされていたからだ。体はそこにあるはずなのに景色と同化して何も見えない。試しに手を動かしてみるが結果は同じだった。

「いったいどうなってんだよ……」

夢という可能性は低いだろう。俺はあの時、ディネガーに心臓を貫かれて殺された記憶があるし、そのときの感覚も覚えていている。ということとは、ここは死後の世界と考えるべきなのだろうか。

「殺風景なところだな。死後の世界っていうのは。」

俺は天国か地獄のどちらに着いたんだ？天国ってわりには若干違うようだし、白い地獄っていうのもおかしい。前に死んだときは綺麗な場所だったんだけどな。天使とか悪魔とか迎えは来ないのか？あ、そうだ。神様だったらいるかもしれねえ。

「・・・けどあったら謝らないとな。」

俺は神様との約束を思い出す。俺は世界を救えなかった。大口叩いてこの世界に来て、でも結局殺されて失敗した。神様に安心させるようなことを言ったのに、レイルカは自分を犠牲にしてまでついてきてくれたのに。俺は失敗した。

「そうだ君は失敗した。僕よりも早くにね。」

すると突然俺以外の声が聞こえた。若い男の声だ。周りを見渡してみれば、先ほどと変わらず白が続いているだけだった。

「君に僕の姿は見えないよ。今の僕に形はないからね。」

「誰だ、お前は？」

「そつだねえ、君と同じように世界を救えなかった者かな。」

「世界を救えなかった者？」

「そう。あ、あと君をここに連れてきたのも僕だよ。」

緊張感のない声で言ってくる。まるで知り合いと話しているような感覚だ。

「連れてきたって、ここどこだよ。」

「言葉で説明するのは難しいんだけど、天国へ逝く一歩手前くらいのところかな。」

「それはまた微妙なところだな。」

俺って天国に逝けたんだな。ちょっと驚いた。

「それでお前はなんの用があるんだ？」

「君の選択を聞きにきたんだ。」

「選択？」

「そう。君はディネガーに負けた。世界を救うと豪語しておきながら呆気なく殺された。そして今世界はかつてないほどの危機に晒されている。」

「・・・そうだな。」

声の声色が少し変わった。先ほどの緊張感のない口調から淡々と説明をする機械のような口調。変化のふり幅が大きかったのでとても



冷たい印象を受けた。

「それは君が世界に甘えていたから招いたことだ。」

「俺が世界に甘えていただと？」

「そうだよ。君が転生者の変える未来を早々に修正していればあそこまで歪みが肥大化することはなかった。君は未来を変えることを未然に防げたのにそうはしなかった。」

「それは……」

「世界がこうなったのは君の所為だ。」

「……そうだな。」

俺は認めたくない真実を語られ反論することもできなかった。せめてできたのはその真実を受け入れ、自分を納得させるしかなかった。

「それでお前は世界を危機に晒した俺に罰でも与えにきたのか？」

「違うよ。さつきも言ったじゃないか。僕は選択を聞きに来たって。」

「今更俺に選択することなんてないと思うけどな。」

「今の君だからこそできる選択だよ。」

「それでどんな選択なんだ？」

俺はあきらめたような口調で聞いた。どうせ死んだんだ。できることなんて高が知れてる。

「もし、もう一度戦えるとしたら君はどうする？」

俺はそれを聞いて驚愕する。

「まさか・・・生き返れるのか？」

「そうだね。それは君の判断によって決まるよ。簡単だ。君には一つだけ質問に答えてもらうだけだから。」

ということは俺の回答が気に入らなかつたら俺は生き返れないということか。

「それじゃ聞くよ。君は世界のために戦えるかい？」

それはあまりにも簡単な質問だった。そして回答もすぐに思い浮かんだ。その回答は言えば誰もが賞賛するほどの言葉だろう。だが俺は・・・

「無理だな。」

その回答がとても気に食わなかった。

「どうしてかな？」

「世界はいつだって俺たちに理不尽な選択を投げかけてくる。そんな優しくない世界を助けてやる義理なんてないだろ。それに俺は世界のために戦ったことなんて一度もない。」

「じゃあ誰のために戦ったんだ？」

「お前だってもう分かってるだろう？」

そういうと謎の声の問いかけはぴたりと止まった。いや、もう謎ではないか。

「言葉にしてほしいなら言ってやる。俺はいつも自分の護りたいもののために戦ってきた。お前だってそうしたはずだ。アストール。」

俺は声の主の名前を呼ぶ。するとアストールはやれやれというようなたたため息をついた。

「どうやら君にとってこれは茶番でしかなかったみたいだね。」

「そうでもないさ。気づいたのは話の途中からだ。」

「そうか。色々と酷いこと言ってごめんね。本当は僕の責任なんだけど。」

「別にいいけど。一応聞いておくが俺の回答はどうだった？」

「とてもいい答えだったよ。」

アストールは笑顔で言った、様な気がした。

「それじゃ、ご褒美をあげないとね。」

「ああ、でも本当にできるか？」

死んだ人間を生き返らせるなんて半端な力ではできないはずだ。

「僕の魂を君と同化させてもう一度体に戻す。傷は僕が治すから君は後のことを頼むよ。」

「・・・分かった。」

あえて同化したらアストールがどうなるかは聞かなかった。聞かなくても予想するのは簡単だったからだ。

「それじゃ、頼む。」

「いくよ。」

すると真っ白だった世界がだんだんと黒く染まっていく。どこまでも続いていた白は黒に塗りつぶされなくなっていった。そこで姿の見えないアストールが口を開いた。

「君はこれから今よりも大きな選択をしなければならなくなるよ。それは君を確実に苦しめる。」

「・・・」

俺はアストールの言葉を黙って聞いた。

「君がどんな選択をしても構わない。けど選んだのだとしたら絶対に止まっちゃダメだよ。」

「」忠告どうも。」

もうすぐこの空間のすべてが黒く染まる。それに伴いここに居られるリミットも近づいていた。

「そろそろ時間だ。後のことは頼んだよ。」

「ああ、任せろ。」

その空間が黒に塗りつぶされたところで俺の意識は途絶えた。

決めたんだ

「その程度か!!」

「ぐっ!!」

ディネガーが剣を振るい棕が吹き飛ばされる。背中から地面に叩きつけられ呻き声を漏らした。

「棕君!? アクセルシューター!!」

「スプラッシュアロー!!」

レイルカとなのはが波多野さんから注意を逸らすため二十ほどのスフィアを展開して放った。ディネガーにさまざまな方向からスフィアが降り注いだ。

「無駄だ。」

ディネガーの背中黒い翼が広がりすべてのスフィアをかき消した。

「サンライトクラッシュャー!!」

「ソニックムーブ!!」

今度は和輝とエリオが閃光となり突進した。だがディネガーはそれでも慌てることなく受け止めた。槍と剣がぶつか凄まじい衝撃が撒き散らされる。

「その脆弱な力では私に届かんぞ？」

「だったらこれでどうだ！！！」

すると和輝の体<sup>フォルムチェンジ</sup>が変化した。蛍日の髪に赤銅色の肌。彼のレアスキルである「形態変化」を発動したようだ。地面や周りに残っている木々からエネルギーを吸い取り力を増大させている。

「うおおおお！！！」

「まだまだ弱いな！！！」

黒で象られた巨大な腕が和輝を横から殴った。和輝の体に巻き込まれエリオも吹き飛んだ。

「フェイト！！仁！！キャロ！！！」

吹き飛ばされながらも長瀬さんは上空にいた三人の名前を呼んだ。仁はアインをユニゾンして銀色の騎士甲冑と白銀の大剣を携えている。キャロも竜魂召喚をしてフリードの背中に乗っていた。フェイトもすでに魔法の詠唱を終えているようだ。

「トライデントスマッシュャー！！！」

「ラグナロクスパーダ！！！」

「フリード、ブラストフレア！！！」

強力な雷撃と斬撃と爆炎が一気に放たれ大爆発を起こした。轟音と暴風が襲い掛かってくるがメンバーは足を踏ん張り何とか耐える。

そしてそれが収まるとあたりは火の海となっていた。だがその中にはディネガーが何事もなく立っていた。

「いい加減、自分たちの行為が無駄な努力だと理解しろ。」

「まだまだ、ロスト・グランデー！」

ディネガーの頭上に黒紫色の巨大な球体が現れる。その球体は急降下してディネガーを押しつぶす。

「さすがのお前も重力の渦の中じゃ動けないだろ！！」

弾はディネガーがどんなに強力な相手でも自然の法則には逆らえないと考えていた。だがその考えはすぐに打ち砕かれた。弾が作り出した重力の渦は裂け中から平然とした顔でディネガーが出てきた。弾はそれを見て驚愕し、体を硬直させていた。

「私は歪みの根源たる王だ。この世界の物理法則など通用しない。」

ディネガーは弾の方向に指を向ける。そしてその指先から黒い光線が放たれる。弾の体はまだ硬直し玉まだ。

「ディバインバスターー！！」

「クロスファイアシュートー！！」

するとティアナとスバルがディネガーの腕に向かって砲撃を放つ。その砲撃を受けてからディネガーの腕のが微かに動く。それによって弾に当たると思われた光線は弾の顔のすれすれではずれ後方にある山に当たった。光線が当たった部分は大きな爆発を起こし黒煙を



上げていた。

「この馬鹿！！ちゃんと避けなさいよ！！」

「・・・悪い。」

ティアナの言葉を聞いて弾は体の硬直が解けた。すぐさまディネガーから距離をとる。

「みんな離れて！！」

弾たちは上空からの声を聞きその方向を見上げた。そこには五つの魔方阵の上に立っている棕がいた。棕のレアスキルである「リアル投影ト」は頭の中に思い描いたものを現実に投影する力だ。だがそれを発動させるには多大な集中力が必要だ。先ほどまでなのはたちがやっていたのは棕が「リアル投影ト」を発動させるための時間稼ぎだった。だがそれもこれが限界だろう。レインの力という曖昧なものを投影するには普段よりも多くの集中力がある。

「ビッグバンクラスター！！」

棕が放ったのは広域殲滅魔法だ。白い光が辺りを飲み込んでいく。六課のメンバーは自分たちが巻き込まれないようにその場から離れた。これを食らったらディネガーもただではすまないだろうと誰もが思った。だがディネガーはその場から動かなかった。

「そろそろ終わりにするか。」

そう冷めた口調で静かに呟いた。ディネガーの剣が黒い光を纏う。そしてその剣を振るうと黒い斬撃が放たれた。その斬撃は白い光を

切り裂いた。

「な!？」

切り裂かれた光は虚しく霧散していく。彼らの抱いた希望は無残に崩れ去っていった。

「人間にはがんばったと言っておこう。だが人間では私には勝てない。」

ディネガーは翼広げる。そしてディネガーから黒があふれ出した。その黒は一瞬で周りを飲み込んでいく。掠たちは成すすべもなく飲み込まれていった。そして黒が消え去るとまた大地が更地に変わった。その更地には掠たちが倒れていた。

「くそ……!？」

「体が、動かない……」

他のメンバーもほとんど同じ状況のようだ。気絶しているのも何人かいるようだ。そんな中一人だけ立ち上がる者がいた。それはレイル力だった。傷だらけの体にもかかわらずふらふらした足でよろめきながらも立ち上がった。

「まだ立ち上がるのか。いい加減あきらめろ。」

「……まだ、まだ終わってません。」

「自分の行動が無意味だとなぜ気づかない。もう敗北したことは分かっているだろう?」

「・・・さつきレインに誓ったんです。絶対あなたを倒すって・・・」

そういつてレイルカはアルクをディネガーに向けた。ディネガーはレイルカを哀れむような目で見た。

「そうか。ならばまずは貴様から殺してやる。」

ディネガーはレイルカに向かって飛んだ。レイルカは矢を放とうと魔力を集めようとするがそれはできなかった。

(まさか魔力が・・・！？)

レイルカの魔力は先ほどの戦闘で全て使い果たしていたようだ。そして向かってきたディネガーに容赦なく殴られた。レイルカは煙を巻き上げながら地面を転がる。すぐに立ち上がるうとするがもうその体力も残ってはいなかった。ディネガーはレイルカを見下ろし黒い剣の切先を突きつける。

「哀れな女だ。抵抗しなければ楽に逝けたものを。」

「くっ・・・！」

「あの男のまとへ逝くがいい!!」

ディネガーは剣を振り下ろす。レイルカは今度こそ死を覚悟し目を閉じる。けれど死の恐怖に耐え切れず涙を流す。そしてもう二度と会うことのない自分を護ってくれていた者の名前を呼んだ。

「レイン!!」

すると聞こえてきたのはキンツという金属同士がぶつかり合う音だった。それを聞いてレイルカはすぐに目を開けた。すると先ほどよりも多くの涙があふれ出た。その涙は悲しみからくるものではなくこの上ない喜びからくるものだった。その男はぼろぼろのバリアジヤケットを纏い、刀身が半分折れた刀でディネガーの剣を受け止めていた。

「俺はここ居るぞ。レイルカ。」

「・・・遅い、ですよ。レイン。」

レイルカは泣きじゃくりながら答えた。

「貴様、なぜ生きている・・・!?!」

「さあな。詳しいことはアストールが知ってるんでね。」

「な!?!そうか。あの男ならば可能だな。」

アストールの名前を出すとディネガーは俺が生き返ってきたことに

ついて納得した。どうやらアストールはかなりすごいやつだったらしい。

「だが生き返ったところでどうということはない。すぐにあの世へ送り返してやる!!」

ディネガーは空いている右腕にもう一本の黒い剣を生み出す。それで俺を斬りつけようとしたがそれはできなかった。ディネガーが斬りつける前に俺がディネガーの肩に白い剣を突き刺したからだ。

「ぐっ!?!」

「ストライク・カノン」

そしてほぼゼロ距離で砲撃を放った。それを食らってディネガーは後ろに吹っ飛び地面に激突する。俺は倒れているレイルカの方に向き直った。

「大丈夫か、レイルカ。」

「・・・本当にレインなんですよね?」

「ああ。俺がレインってことはお前がよく知ってるんだろ。」

そういうとレイルカは俺に抱きついてきた。そして大粒の涙を流す。

「本当に、生きてて・・・良かったです。」

「心配かけて悪かったな。」

泣きじゃくるレイルカの背中に手をまわし抱きしめ優しく撫でてやる。しばらくそうしていたが長くは続けていられない。

「レイルカ。俺は終わらせるよ。この物語を。」

「・・・え？」

「もう二度と世界がこんなことにならないようにする。お前らがちゃんと未来に歩いて行けるようにする。中途半端はもうやめだ。俺はもう最後まで立ち止まらない。だから・・・」

その言葉を言うのに一瞬、戸惑うがかまわず言った。

「だからお前は俺のことを忘れないでくれ。」

「それはどういう・・・」

レイルカの言葉を遮るようにして後ろから轟音が聞こえてきた。振り返ると傷を再生したディネガーがこちらを睨んでいた。

「死にぞこないが、やってくれるな!!」

ディネガーはすぐさまこちらに向かってきた。かなりのスピードだったが俺は難なく受け止めた。

「今度は簡単にやれると思うなよ。」

ディネガーはとっさに俺から離れる。そして俺から光があふれ出す。その光はどんどん伸びていき空まで届いている。その光が収縮し形を変える。形成されたのは器の力で象られた純白の法衣だ。法衣が

体に定着すると光の柱は消え、その残滓が雪のように舞い降りた。

「これは……」

「体が動く。」

光の残滓は器の力と同様の特性を持っている。それによって倒れていたやつらの傷が回復したようだ。

「うそ……どうして……」

「な！？レイン、何でお前が！！」

傷が治ったことで気がついた弾が俺を見て驚愕する。

「それは話すと長いから終わってからでいいか。」

「終わってからって、大丈夫なのか？」

「ああ。任せろ。」

俺の自信に満ちた回答を聞いて弾はそれ以上何も聞いてこなかった。正確には聞こうとしたが必要ないと思い押し黙ったようだ。

「そつえばお前を直してなかったな。」

俺は刀身が半分折れた刀を見つめる。それに器の力を流し込んだ。正浄の器の力は修正する力だ。それは人に限らず壊れたものも例外なく効果を発揮する。器の力の影響を受け刀身が形成されていく。形成されたのは刀ではなく剣だった。左右対称の片手剣を二つに合

わせたような剣。真ん中は二股に分かれている。大きさは俺の肩ぐらゐまである。細部には控えめながらも綺麗な装飾がされていて美術館に飾られている芸術品にも見える。

『・・・あれ、ここは？』

「目覚めたか？」

『確か私は壊されて・・・ていうかなんて格好してるんですか？ペンキでも頭に被ったんですか？ドジですね。』

一度壊れても俺を罵倒する癖は直っていないようだ。

「口を開いたらそれかよ。」

『うわっ！知らない間に私の体もずいぶん格好よくなってる。』

「さりげなく自画自賛すんな。」

「そろそろ余興は終わりにしてもらおうか？」

『だそうですよ。』

「見せ物のつもりはなかったんだけどな。」

このやり取りもずいぶん久しぶりな気がする。昨日のことがとても昔のことのように思えてくる。

「物と戯れている間に死ぬ覚悟はできたか？」



「さすがにもう死ぬのは嫌だな。だから・・・」

『私も壊れるのはごめんです。なので・・・』

「『絶対、勝つ！』」

俺とエリスはほぼ同時に言い放った。

剣と剣がぶつかり合う。お互いの剣技はほぼ同等。幾度となく剣をぶつける攻防が繰り返られていた。ディネガーが握っている剣は先ほどのような小さな剣ではなく黒い巨剣だった。長さはエリスと同じくらいの湾曲剣だ。刃の部分ののこぎりのような突起が禍々しさをかもし出している。

「一つ聞きたい。」

俺はつばぜり合いとなったところでディネガーに問いかけた。

「お前はどのようにして世界を殺そうとする？」

「何をくだらないことを・・・」

「いいから答える。」

「フンツ、簡単だ。世界を創りかえるためだ!!」

ディネガーは翼を広げ加速する。それによって体が押され体勢が崩されてしまった。そこに蹴りが飛んできたが何とか防いだ。だが衝撃は殺せず後ろに押し返されてしまう。

「世界を創りかえるだと?」

「そうだ。私にはその権利がある。世界を彩る権利がな!!」

ディネガーは黒い光線を放った。防ぐのは無理だと思い俺はとつさに避けた。黒い光線は地面に当たり大地を消滅させていく。それを見ていた俺はディネガーから注意を逸らしてしまった。

「余所見をしていていいのか?」

「な!?!」

ディネガーはその隙を見逃さず一瞬のうちに俺に近づき容赦なく地面にたたきつけた。

「かはっ!?!」

肺から酸素が一気に吐き出され呼吸ができなくなる。

「世界は傲慢だ!!身勝手に他を見ようともしない!!誰かが傷つ

「知っていることも知らずに!!」

「デインガーの追撃は終わらない。上空からまっすぐ俺に向かって急降下してきた。俺はそれを何とか受け止める。腕にかつてないほどの衝撃が走る。その衝撃が地面に伝わりひび割れて隆起した。」

「貴様も分かっているだろう!!この世界がどれだけ不条理かを!!」

「デインガーは俺から離れ一メートルほどの黒い球体を生み出す。それを思いっきり俺に投げつけてきた。大きさに似つかわしくないスピードで向かってくるそれを俺は剣で受け止めた。」

「な!?!」

「はああああ!!」

「そして球体を真っ二つに切り裂いた。球体は俺を避けるようにして地面に着弾した。」

「くだらない。」

「・・・なんだと?」

「お前の理由がくだらないって言ってんだ。」

「デインガーは怒りを露にして隠そうともしない。体からは歪みがあるふれ出ていた。」

「貴様に何が分かる!!世界の苦しみを押し付けられた私の何が!

「！」

「分からねえよ。」

「ならばなぜそのようなことを……」

「だったら、お前は俺の苦しみを分かるって言うのかよ？」

「!?!」

そういつとディネガーは言葉を詰まらせた。

「他人を理解しようとしなくせに自分だけ理解してもらおなんて都合が良すぎるんだよ。」

「くっ……!?!」

「他を見ようとしていないのはお前も同じだ。そんなの自分の考えを押し付けているだけだ。世界となんら変わらない。」

「違う!! 私はある世界とは……」

ディネガーは俺の言葉を聞くたびに顔を歪めていった。

「世界は私に押し付けたのだ!! 自らの選択によって人から生み出した怒りを、悲しみを、苦しみを、憎しみを!! 全て、私に!!」

それはディネガーの悲痛な叫びだった。

「人はは誰しもなんらかの苦しみを抱えている。世界によって与え

たれた選択で生み出された苦しみをな。けれど人はその中でも幸福を求めて今まで生きてきたんだ。自分だけが苦しんでるなんて間違いだ。」

ディネガーは反論せずさらに顔を歪めた。

「世界に在り続けたことのないやつが甘ったれたことを言うな!!」

「黙れえ!!」

ディネガーは俺の声を振り払うように叫んだ。

「これは私を生み出した世界と人に自らの罪の重さを教えるための復讐だ!!」

そう叫びながらディネガーは黒い剣を生み出す。空中に浮かんだ黒い剣の数は百を超えているだろう。ディネガーはこれ以上の問答は自分が不利になるだけと判断したようだ。

「死ねえ!!レイン・オルハルト!!」

「だからやられねえって言ってるだろ。」

黒い剣は一気に俺に放たれた。俺は器の力を発動させる。すると背中から八枚の薄い羽が生えてきた。ひし形の細長い羽は左右対称に背中についている。その羽が伸び剣に向かっていく。途中で羽がいくつも枝分かれしてきどんどん黒い剣を貫いていく。貫かれた黒い剣はぼろぼろと砕けていった。全ての剣を貫くと俺はディネガーに向かって飛び上がり剣を振るった。

「はあっ！！」

「くっ！？」

デインガーも剣を構え応戦する。俺たちは剣をぶつけながら上空へ上がっていった。空で白と黒が目まぐるしくぶつかりあう。

「なぜだ！！なぜ貴様はそこまでして世界を守ろうとする！！そこまで大事か！！世界が、人が！！」

デインガーは斬りかかりながら問いかけてきた。

「別に世界も人も守るつもりなんてねえよ！！」

俺はそれを押し返しながら答える。

「ならば何のために戦っているのだ！？」

「俺は、俺の護りたいもののために戦ってるだけだ！！」

「貴様を傷つけたのは世界と人だろう！？」

言葉を交わしている間にも何度も剣をぶつけた。

「この世界には俺を変えてくれたやつがいる。この世界には俺の生きた証がある。もう何も感じなかったあの頃とは違う。俺は歩む道を決めたんだ！！」

「そのために自らを犠牲にするのか！！」

「それで護れるなら!!」

「くっ・・・だが私とて止まらない。もうすでに破滅の種は巻かれたのだ。貴様を、貴様の護りたいものも殺す!!そして私は世界を手に入れる!!」

ディネガーは片腕を高らかに上げる。そこに黒い球体が生み出される。その球体は何倍にも膨れ上がる。球体は一瞬のうちに百メートルくらいの大きさになった。それが放たれば俺も、下にいるレイルカたちも、この辺り一帯の大地もすべて消滅してしまうだろう。

「これで終わりだ!!」

ディネガーは掲げた腕を振り下ろす。巨大な黒い球体はゆっくりと地面に降下してくる。

『これはまたピンチという場面ではありませんか?』

「まあ、そうだな。」

『解決策はありますか、マスター?』

「ねえよ。けどなんとかするよ。お前には最後まで付き合ってもらっせ。」

『仕方ないですね。それじゃとっと終わらせてください。』

「はいよ。」

エリスとの会話を終えた俺はその球体に向かって飛んだ。球体にぶ

つかると俺の体はすんなりと入った。中は一面真っ黒で何も見えな  
い。器の力で象られているエリスも黒く塗りつぶされている。俺は  
その中で器の力を発動させる。すると俺の辺りだけは眩く輝きだ  
した。背中の羽はどんどん大きくなり全長で二十メートルほどにな  
った。そしてエリスからは光がのびていて巨大な剣のようになって  
いる。俺はそのまま球体を切り裂いた。すると周りの黒は晴れてい  
き景色が元に戻る。ずたずたに切り裂かれた球体はすぐに霧散した。

「なんだと!？」

「言っただろ。絶対勝つてな!!」

ディネガーに全速力で向かい、エリスを胸に突き刺した。ディネガ  
ーの動きが止まる。そして腕から禍々しい黒い剣が落ちた。

「貴様は……この世界で……満足なのか？」

ディネガーはとぎれとぎれの言葉で俺に聞いてきた。

「そんなわけないだろ。」

「なら……なぜ……殺そうと……思わなかった……のだ？」

「それは世界は誰にも優しくないってことを知ってるからだ。」

それを聞くとディネガーの体が消滅していった。後に残されたのは  
ディネガーが奪った器だけだった。



辛くなるように

「……」

目蓋を開けると暗闇が広がっていた。今の自分の体勢を見るとどうやら俺は寝ていたようだ。かけてある布団から抜け出しベッドの柵に腰掛けるように座る。起き上がってみるととても体がだるかった。かなりの時間、眠っていたらしい。しばらくすると目が闇になれて周りが見えるようになってきた。窓の外を見てみると二つの月は半分に欠けていた。

「どつりで体がだるいわけだ。」

俺がこの前月を見たときは満月だった。なので俺が眠ったのは数時間前ってことはないだろう。せめて一日、二日は経っているはずだと、そこまで考えてふと太もも辺りに何かに触れた。そして微かな寝息が聞こえてくる。そこに居たのはレイルカだった。レイルカはベットにもたれるように寝ていた。床には椅子が倒れている。まさか俺が起きるまですっとここに居るつもりだったのだろうか？

「はあ、お前だったらやりそうだな。」

そういつて俺は寝ているレイルカの頭を撫でてやる。

「……ん……ん？」

「あ、起こしちゃったか。」

撫でられた感触に気づきレイルカは微かに目を開けた。そして寝ほ

けた目でこちらを見てくる。

「あれ、レイン？私はいっつい・・・」

「おう、寝てたみたいだな。起こして悪い。」

寝ぼけている所為か状況が掴みきれていないようだ。そして周りを見回すように首を動かす。子供のような仕草だ。

「レイン・・・レイン!？」

レイルカはようやく状況が掴めたようだ。起きている俺を見てなんかめっちゃ驚いている。

「おいおい、今何時だと思ってんだ。あんま大きい声出すなよ。」

ちなみに現在、時計の短針は二の部分を長身は七の部分を指している。騒ぐにはあまりよろしくない時間だ。

「すみません・・・ってそうじゃなくて!!いつ起きたんですか!」

「だから大声だすなつて。起きたのはついさっきかな。あと俺っていつから寝てたの?」

「覚えてないんですか?」

「ああ、ディネガーを倒したところまでは覚えてんだけどそれ以降の記憶が曖昧なんだ。」

「レインはあの後、負極の器を自分の身に宿したんです。そして意識を失ってずっと寝てました。」

「そんなことしたのか俺は。どのくらい寝てた？」

「今日で一週間になります。」

一週間か。レイルカが驚くのも無理はないな。

「・・・本当に、心配したんですよ・・・」

レイルカは消え入りそうな声で呟いた。顔を見ると起こったような表情で泣いていた。

「また・・・目覚めないと・・・思いました・・・」

「・・・悪い。」

「あなたはいつもそういつて!!・・・えっ!？」

俺はレイルカの体を強引に抱き寄せる。突然のことでレイルカは間抜けな悲鳴を上げた。

「な、何をす、するんですか!？」

「いつも心配させて悪いって思ってるのは事実だ。」

俺はレイルカのことを無視して会話を続けた。

「俺は変わったんだ。この世界で初めて生きられた。そして、失う

ことの怖さも知った。俺が傷つくことで、がんばることで、救えるのなら俺は迷わず自分を犠牲にする。俺はお前らを失いたくない。失うくらいなら痛みも苦しみも我慢する。」

「そんなの誰も望んでませんよ！！私はあなたが傷つくことが一番辛いです・・・」

「大丈夫だよ。」

「何が大丈夫なん・・・」

「大丈夫だ。俺にはやるべきことができた。護るべきものができた。俺はやるべきことを成し遂げるまで死んだりはしないから。ちゃんと帰ってくるから。」

俺はレイルカを強く抱きしめ耳元で囁くように言った。するとレイルカも俺の背中に腕を回してきた。

「レインはずるいです。そんなことを言われたら怒れないじゃないですか。」

先ほどのような怒った声ではなくいつものようなおっとりとした穏やかな声だ。抱き寄せた体を離し俺を見つめてくる。

「病み上がりだからお説教とかは勘弁してほしいからな。」

「分かりました。けど私から一つだけ約束させてもらいます。」

「なんだよ。」

「もしレインが帰ってこなかったらどこへ居ようとも問答無用でつれて帰りますからね。絶対ですよ。それと連れ帰ったらきつ〜いお仕置きですからね。」

「それは勘弁願いたいな。」

「ダメです。受けたくないなら約束守ってください。」

「了解。」

会話をしているうちにいつものような雰囲気になった。レイルカも涙をぬぐって笑顔浮かべている。俺はそれを見て少し罪悪感を感じた。

「そつだ。怪我治してやるよ。見せてみる。」

「え！？いいですよ。別に・・・」

「遠慮すんなつて。いつもやってただろう。」

「そうですね・・・分かりました。」

そついつてレイルカは上着を脱ぎだす。いろんな世界を渡り歩いていると強力な原生生物とであったり超自然現象にであったりする。そうなる結構な怪我を負うことだってある。そういう怪我は俺がいつも治していた。なのでこのようなことをするのは初めてではない。上着を脱いだレイルカは背中を向けてベットのふちに座った。

「これはまた派手にやられたな。」

レイルカの背中にさらしのように巻かれていた包帯をとると酷い火傷が現れた。陶器のように白い肌が焼けただけ赤くなっており見るからに痛々しい状態だ。一週間も経っているが完治には程遠い有様だ。これも俺の所為で負った傷か。

「あの、レイン？」

「なんだ？」

「は、恥ずかしいので早くしてください。」

「あ、悪い。」

レイルカに言われて俺は背中に手を当てる。一瞬レイルカが小さな声を漏らす。治療しているとはいえ痛みはまだ引いていないようだ。俺は器の力を発動させる。手で触れている部分が光だし治療を開始した。十分ぐらいすると皮膚はほとんど元通りになっていた。

「終わったぞ。一、三日すれば痕も消えると思っぜ。」

「ありがとうございます。」

レイルカはそそくさと上着を着なおし倒れていた椅子を直しこちらに向いて礼を述べた。若干顔が赤いのは気のせいではないだろう。それに少し不満げな表情をしている。

「裸を見せたのに無反応というのは傷つきますね……」

「なんか言っただか？」

「い、いえ！？何でもありません！」

「そうか。それより気分とかはどうだ？」

「特に問題はありませんけど。」

「じゃあ、今日はちゃんと自分の部屋で休め。睡眠不足は体に毒だぞ。」

「・・・なんだかレインがレインじゃないみたいです。」

いきなりなんて失礼なことを言うんだ。

「俺が体の心配したらおかしいのか？」

「そうではなくてですね。いつも以上に優しいというか、優しすぎるとうつとか・・・」

「俺の善行は疑われるものなのか？それはそれで傷つくな。」

「すみません。変なことを言って。」

「まあ、いいけど。じゃあ罪滅ぼしに飲み物かって来てくんない？何でもいいからさあ。」

「分かりました。」

俺の要求をすんなり受け入れたレイルカは椅子から立ち上がりドアの方に歩いていった。そしてドアノブに手をかけるとこちらに向いた。

「どうした？」

「レインはどこにも行ったりしないですよね？」

俺はその質問を聞いて一瞬言葉を詰まらせそうになる。けれどなんとか間をおかずに答えることができた。

「当たり前だろ。早く行かないと寝る時間どんどん削られるぜ。」

それを聞くとレイル力は安心した表情になり部屋を後にした。そして俺はそれを見て大きなため息をつく。

「俺は最低だな・・・」

今の自分の言った言葉を思い出して自己嫌悪に浸る。あんなに自然にうそをつくのが難しいとは思わなかった。

『まったく何を言ってるんですか。そんなことは分かりきってるところでしょう？』

そこからもなく聞きなれた電子的な声が聞こえてきた。声の元を探してみるとベットの隣の棚の上に青いバンゲルがあった。そして母さんのペンダントも一緒に。

『まったく起きた早々女性を抱きしめて、あまつさえ服を脱がして体に触るなんて変態のやることですよ。』

「お前はなんでそういう誤解を招く言い方をするんだ。」



『いえいえ、私は事実を言っているだけですよ。』

俺は反論しようとしたがやめた。こいつに何を言っても無駄だと考えたからだ。俺はため息をつきながらベットから降りた。異常がなにか少し体を動かしてみるが問題はないようだ。

「セルティはどこに居るんだ？」

『隣で寝てますよ。』

「ずっとか？」

『ええ。レイルカ様が言うには魂に損傷を受けているのでかなり危険な状態だそうです。』

「そっか。」

俺は隣のベットに歩いていきカーテンを引いた。そこにはまるで御伽噺にでもできそうな姫のようにセルティが眠っていた。微かな呼吸を繰り返しほとんど死んでいるようにも見える。セルティの髪の色は黒が全て抜け落ち鮮やかな黄緑色に変わっていた。これが彼女本来の髪の色なのだろう。

『御伽噺だと王子様がキスをして目覚めるといパターンですね。』

「誰がするか。」

エリスの茶々を流してセルティの胸の中心に触れる。そして器の力を発動した。触れている部分が光だし損傷した魂を修復していく。これで多分大丈夫なはずだ。手を離れた俺はセルティの頭を撫でた。

「……………ん……………レイン？」

するとセルティは少しだけ目を開ける。瞳の色が変わっていて黒から金色になっていた。

「……………レインの手、暖かい。」

セルティは嬉しそうに目を細め、微かに微笑んだ。

「私はどうしたの？」

「今は何も心配しなくていい。もうお前が苦しむことはなくなったんだから。だからゆっくり休め。」

「……………分かった。」

セルティは再び目を閉じ眠りについた。それを確認すると俺は柵の上にあるエリスを腕につける。そして一瞬ペンダントを取ろうと思ったがやめた。ペンダントはそのまま置いていくことにした。

『どこへ行くつもりですか？』

「とりあえずこの世界を離れる。あとのことはそのと考えるぞ。」

『レイルカ様は連れて行かないのですか？怒られますよ。』

「そのためにうそをついたんだ。」

俺は病院着からバリアジャケットに着替える。さすがに病院着じゃ

そとを歩き回れないからな。そして俺は窓から飛び降りた。

『まったく世話が焼けるマスターですね。』

エリスの呟きは俺には聞こえなかった。

六課のメンバーのほとんどが就寝しているとはいえ、夜勤で見張りをしている局員はいる。すぐに転移魔法でも使おうものならセンサーに引つかかって俺が抜け出したことに気づくだろう。なのである程度六課から離れた場所で転移しなければならぬ。

「やっとここまでこれたか。」

設置してある監視カメラに映らないように玄関付近まで来た。後はもうこのまま歩いて立ち去れば何の問題もない。そろそろレイルカも気づいていることだろうしなるべく早くしないとな。

「.....」

『名残惜しいのですか?』

「いや、なんでもない。」

少しの間隊舎を見つめていたがエリスに言われたのでその場をあとにした。俺は隊舎に背を向け歩き出す。

「どこに行くんだよ。こんな時間に？」

「・・・お前こそ今日はずいぶんと早起きだな。」

声をかけてきた人物はすぐに分かった。三年間ずっとつるんでいたのだから聞き間違えることなんてない。俺はゆっくりと後ろに振り向く。そこには俺と同様にバリアジャケットを着ている弾が立っていた。

「妙な知らせがファングに届いたんでな。」

ファングに知らせが？まさかレイルカが連絡したのか？いや、それだとしても対応が早すぎる。弾がここに居るのだとしたら少なくとも俺が病室から出るときに動いていないと追いつけない。となると

「エリスか。余計なことを。」

『はて、何のことでしょうか？私はただファングに遠出することを伝えただけですが？』

エリスはわざとらしい口調で言った。

「お前、絶対俺のこと嫌いだよ。」



「俺が今からすることはこの世界で一番正しくないことだ。誰も喜ばないし、誰も笑わない。大勢の人が傷つくんだ。だから・・・」

「それがどうした!!」

弾は俺の言葉を遮った。

「例え、今からお前のすることが誰かを傷つけることだろうと、世界を敵に回すことだと、それは必要なことなんだろう？」

「!?!」

「お前はいつだって正しくても間違ってたとしてもでも必要なことだけをしてきたはずだろ。俺は親友の頼み<sup>タチ</sup>だったらいくらでも聞いてやるよ。もうお前だけには背負わせねえ!!」

弾の言葉を聞いて心が揺らぐ。けどここで俺が弾を頼っても余計に辛くなるだけだ。

「それでも俺は・・・」

「置いてなんて行かせません!!」

すると今度は弾の後方から声が聞こえた。そこに居たのはレイルカだ。息を切らして荒い呼吸を繰り返している。そしてこちらを見つめる目は若干潤んでいた。

「レイルカ・・・」

「もう二度とあなたを失いたくはありません!!あなたがなんと

おうと私はついてきます!!」

また心が揺らぐ。ここでまたレイルカの気持ちに答えそうになる。弾の気持ちに答えそうになる。俺はそれを必死で抑えた。

『いい加減逃げるのは止めにしたらどうですか？もうあなたは変わつたはずでしょう？』

エリスにそう言われたとき俺の頭は真っ白になった。しばらく考えがまとまらずエリスの言葉だけが何度も響いた。

「……はあ。まったくなんでお前ら俺なんかそこまでできるのかねえ。」

俺はあきらめた様に呟いた。

「そこまで言うんだつたコキ使つてやるよ。」

すると弾とレイルカは呆気にとられたような表情をする。そしてしばらくすると二人とも笑みを浮かべた。

「まず、二人ともしばらくは六課で待機だ。俺はその間いろいろと準備しておく。」

「なんでいきなり待機なんだよ？」

「お前らはしばらく訓練に励め。今の状態じゃまだ強いとは言いがたい。今後のことは追って伝える。」

「分かった。」

「分かりました。」

「それじゃしばらくお別れだ。元気してるよ。」

「レインも無理しないでくださいよ。」

「なるべく気をつけるよ。」

俺はそういつてレイルカたちと別れた。一人になったところで俺はまた自己嫌悪に陥る。俺はあいつらに辛い思いをさせることになる。分かっていて止められなかった。けれどだったら俺は少しでもあいつらが辛くなくなるようにする。俺はそう決心した。



## 伝えるべきこと

山の麓に見慣れない光が見えた。それは俺の魔方陣の輝きだった。

「着いたか。」

転移魔法を使って訪れた世界は俺の故郷でもある地球、それも海鳴市だった。レイルカたちと別れたあと行くあてが特にあるわけでもなかったのとおりあえずよってみた。

「とりあえず場所を変えるか。」

そう呟いて俺は山の中から出ることにした。幸い麓ということもあってかすぐに山の中からは抜け出せた。山から出ると海沿いの道路に出た。少し肌寒い風が潮の香りを運んでくる。転移した場所は海鳴市から何キロか離れたところのようだ。

「こっから歩くのだるいなあ。」

『来て早々何言ってるんですか。』

海鳴市は目と鼻の先にあるのだが、普通に道をたどって行けば一時間くらいはかかるだろう。

『ですがなぜ地球に戻ってきたのですか？』

「え？あゝまあ気分的に？」

『まさか今後の事を何も考えてないじゃないでしょうね？』

「実を言うとまだ結構漠然としてるんだよねえ。」

『はあ〜これだからマスターは・・・』

俺だってまだ目が覚めてから一日くらいしか経ってないのにそんな計画とか求められても困るんだけど。むしろ、めんどくさがりな俺が起きて一日で行動を開始したことを褒めてほしいくらいだ。

『というか私はまだ何をするかも聞かされてないんですが？』

「・・・それはまたちゃんと話してやるよ。とりあえず今は街にたどり着くことが優先事項だ。」

そういつて俺は海沿いの道を歩き始めた。こうしているとレイルカと色々な世界を回っていたころの記憶を思い出す。あの頃も計画なんて丸でなしで旅してただけだったな。それに最近は忙しすぎてこっぴどしたゆっくりする時間がなかった。そうだ、街に着いたらまず母さんたちの墓参りをしようか。何年もやっていなかったから母さんたち怒ってるかな？俺はそんなことを考えながら足を進めた。

医務室にはFW陣が勢ぞろいしていた。それはセルティが目覚めた

からだ。レイン同様セルティも一週間も目を覚まさなかったのだ。セルティの仲間であり、親しい友人でもある彼女らはとても心配したことだろう。今はセルティのベットの周りをみんなで囲んでいる。そしてその中には私と弾の姿もあった。

「体の方はもう大丈夫なの？」

「うん。ちょっとだるいけど普通に動く。」

「セルティ、リンゴの皮向けましたよ。食べますか？」

「うん。ありがとう。」

「私もちょうだい！」

「スバルさんが食べてどうすんですか・・・」

「うっ！じゃあ、あたしが食べさせてあげる。はい、あーん。」

スバルは私が切ったリンゴに爪楊枝を刺してセルティの口元に近づける。セルティは少し恥ずかしそうにしながらそのリンゴを頬張った。

「おいしい。」

そう言いながら微笑んだ。その微笑みはリンゴがおいしいからではなく、セルティ自身が彼女らと触れ合えて嬉しいという事だろう。

「それにしてもどうしたんだろう？セルティの髪？」

ふとそこでスバルが疑問に思ったことを口にする。

「そうですね。目の色も金色に変わってますしね。」

そう言われてセルティは自分の髪の色を確認する。腰まで伸びた長い髪を手に取り不思議そうに見つめていた。セルティの髪の色が黒だったのは彼女の中に負極の器があったからだ。器の力は強力で体にも影響を与える。器がなくなったことでセルティは本来の髪と目の色に戻ったのだ。ちなみにレインの肌が普通の人よりも白いのもこれが原因だ。

「変?」

セルティは若干不安そうに聞いてきた。

「うん、変っていうよりなんというか、雰囲気が変わったというか・・・」

「前より少し大人っぽくなったわね。」

「そう!それ!それが言いたかった。」

「大人?」

セルティはあまり理解できていないようだ。病み上がりの所為かどこか落ち着いている感じがするのは確かだ。スバルはそのことを言ってるのだろう。するとそこで医務室の扉が開いた。

「おはようさん。思ったより元気そうやな。」

入ってきたのははやてさんだった。はやてさんはにこやかに笑いながら私たちに挨拶をしてきた。それを見てティアナたちも挨拶をした。

「どうしたんですか？はやて隊長？」

「ちょっとレイルカちゃんに聞きたいことがあってな。来てくれる？」

そういつてはやてさんは手招きをする。ここではなく外で話をするようだ。私は黙ってそれに従った。椅子から腰をあげはやてさんのあとを追うように外に出た。そして医務室から少し離れた廊下の曲がり角ではやてさんはこちらに向き直った。

「ごめんな。わざわざ移動させて。」

「いえ、それは構いませんが聞きたいこととは？」

「レイン君のことや。」

質問の内容は大体予想通りだった。一週間も目覚めないままだったのに起きたら起きたでどこかに言ってしまったレインの行動。一応管轄下に置いてある部隊長としては咎めないわけにはいかないのだらう。

「レイン君が今どこにおるか教えてくれん？」

「残念ですがそれはできません。」

淡々と返した私を不審に思ったのかはやてさんの眉が少し動く。な

にか勘違いしているようなので誤解は解いておくことにした。

「今レインがどこにいるかは私も分かりません。」

「え、どういうこと?」

はやてさんはキョトンとした顔で聞き返してくる。レインがいつもやっているように私が黙秘を貫いているとでも思ったのだろうか。

「昨夜、アルクに通信が入っていてレインが旅立ったことは知りましたが、どこに行ったかまで知らされていません。」

「そうなん?ほんまに?」

「本当です。まったく病み上がりだというのに一人で行くなんて何を考えているんでしょうか。」

と、そこでつい愚痴がこぼれてしまった。本当はあそこで私もついていきたかった。けれど私が弱いのも事実。足手まといにはなりたくないのに黙って命令に従った。ですが、行き先くらいは教えてくれても良かったんじゃないでしょうか?

「えっと、ほんなら、レイン君と連絡とれへん?」

予想外の回答でペースを崩したはやてさんは少したどたどしい口調で聞いてきた。

「取れないことはないですがこちらに帰ってくるのはまだ先だと思いますよ。」

「そっか〜どないしようかな。」

「一応伝えてはみますが、どのような用件で？」

「レイン君に見せたいものがあるんや。それと色々聞きたいこともあるってことを伝えといて。」

色々という部分が強調されたのは気のせいではないだろう。

「分かりました。今度は私の方からいいですか？」

「ん？何？」

「ティアナたちの訓練に私も参加させてほしいと思ひまして。」

「急にどないしたん？」

「えっと、単にこの前の戦闘で自分の力不足を実感したので鍛えなおそうかと・・・ダメでしょうか？」

「ああ・・・そういうことか。うん、それやったら私がなのなちやんたちに話しくよ。」

「お願いします。それでもう戻ってもよろしいですか？」

「ええよ。時間とらせてごめんな。」

私は軽く頭を下げてはやてさんと別れた。そして、医務室に戻った。

「あれ、もう話終わってたんですか？」

「はい。それほど重要なものでもなかったの。」

私に聞いてきたのはティアナだ。セルティはまだスバルたちと話をしている。そんな中、弾は腕を組みながら真剣な表情でセルティを見つめていた。そういえば、私が部屋を出る前も一言もしゃべっていなかったと思う。ティアナはそれに気づき弾に話しかけた。

「どうしたのよ。あんたさっきから黙り込んで？」

「・・・いや、ちよつとな。」

「セルティが目覚めたことが嬉しすぎて声が出ないとか？」

スバルが茶化するのも気にせずなにかを考え込んでいるようだ。

「あゝ！！もう悩むの止めた！！この際どうにでもなれだ！！」

突然叫びだした弾に一同皆驚いている。そして、弾は少し身を低くし椅子にどっしりと構えセルティを見つめる。

「急に何言ってるのよ？頭おかしくなったの？」

「違うわっ！ちよつと黙ってる。今から大事な話するんだから。」

そう言っただけセルティの方に向き直る。セルティは大事な話と言われてなんだか緊張している様子だ。弾は大きく深呼吸をして口を開いた。

「セルティ、お前の過去に何があったんだ？」



その瞬間空間が静まり返った。セルティは大きく目を見開いて固まったままだ。他のメンバーも同様に固まっている。理由は自分たちも知りたいことだったからだ。こんなときに聞くことではないかもしれないがその理由が止めるべきか分からなくしているのだ。

「お前がネクロに連れて行かれた理由ってなんなんだ？レインはお前の過去に関わることだからって何も言わなかった。そんでお前が話してもいいって思えるやつだけに聞く権利があるとも言ってた。俺はできれば、お前の過去を知りたい。お前が話してもいいって思えるなら話してくれないか？」

弾は静かにセルティを見つめていた。一方セルティはどうすればいいか分からないといった顔をしている。そして、とても不安そうで怯えた顔をしていた。沈黙が流れる。誰も口を開かない静かで思い時間。それを破ったのがティアナだった。

「セルティ、話したくないなら話さなくてもいいのよ？あんたの過去があんたにとって忘れたいくらい辛いものだったら思い出さなくていい。」

それを聞いてセルティはさらに戸惑う。彼女は今必死に考えて何を選択すべきか考えていることだろう。そんなセルティを見て私は助け舟を出すことにした。

「セルティ。」

そう名前を呼ぶと不安げな瞳でこちらを見てくる。

「そんなに深く考えなくてもいいんですよ。あなたにとって弾たち

がどのような存在かを考えればいいだけです。」

「どんな存在か？」

「そうです。大丈夫あなたがどんな選択をしようと誰も責めたりなんてしません。だから素直に考えてみてください。」

それを聞いてセルティはまた考える。今度は先ほどのような不安げな表情ではない。そして、セルティは答えを出した。

「みんなには・・・私のこと、話してもいい。」

セルティはそう言ってゆっくりと話し始めた。自分の生まれた村のこと、そこで歪みに襲われたこと、そして自分が迫害されていたことを。一通り話終わるとセルティは大きく息を吐いた。弾たちは予想以上に思い話だったのでどう声をかけていいか分からないといった様子だ。

「セルティは・・・辛くないの？」

「え？」

「お母さんやお父さんとか友達とかにそんなこと言われて悲しくないの？」

「・・・最初はとつても辛かった。みんな、私のことを嫌ってずっと一人で寂しかった。」

「・・・」

「でもレインが助けてくれた。」

「え？」

「レインは私を抱きしめてくれて、私は化け物じゃないって言うてくれた。私のために怒ってくれて、戦ってくれた。されに今はみんながいる。だからそんなに悲しくない。」

セルティは満面の笑みを浮かべてそういった。それをみて我慢できなくなったのかスバルはセルティを抱きしめた。

「うえ〜ん！！セルティ！！私たち一生友達だからね！！」

なぜか大泣きしながら宣言した。

「そういうことなら私もね。ていうかなんであんたが泣いてんのよ。」

「

「それじゃあ、僕も。」

「私も。」

「俺も。」

次々に他のメンバーもそれに加わっていた。それは見ていて実に微笑ましい光景だった。すると視線が私に集中する。

「私にとってセルティは友達というより妹ですからね。大切な家族だと思っていますよ。」

「それだつたら安心。」

「さて、仲が深まったところですがもうすぐお仕事の時間ですよ。遅刻しないようにしましょうね。」

一同が時計を確認する。それを見るともうそんな時間かという風に立ち上がっていく。

「それじゃね、セルティ。また来るね。」

「ちゃんと休んでなさいよ。」

「お大事に。」

「ゆっくりしててくださいね。」

セルティに一言ずつ声をかけて部屋を出て行く。私と弾も立ち上がり扉に向かう。

「あんま無理するなよ。」

「何かあったらいつてくださいね。」

「うん。ありがとう。」

セルティに見送られ部屋を出る。すると弾は部屋を出るなり盛大にため息をついた。

「どうしたんですか?」

「いや、なんか勝てないなあって思ってたさあ。」

「勝てない？なににですか？」

「レインに。あんなこと言われたらちよっとへこむわあ。」

「レインに？ああ、そういうことですか。少し意外ですね。」

私は弾が頂垂れている理由を理解し、笑みを溢す。

「なんだよ。悪いか？」

「いえ、諦めるのはまだ早いんじゃないでしょうか？応援しますよ？」

私は不貞腐れ気味の弾にそう言って少し慰めの言葉をかけておいた。

「やっぱり花とか持ってきた方が良かったかな？」

『別にいいんじゃないですか？マスターは礼儀知らずだと知っているはずですから。』

「はいはいそうですね。」

街について向かった先は母さんたちが眠っている西洋人墓地だ。ここに来るのはずいぶん久しぶりだ。地球に帰ってくるのがあまりなかったから仕方がないと言えば仕方がないのだが親の墓参りをしなかったのは自分でも礼儀知らずだと思った。

「お、あつた。」

地面に寝かされるような形で埋められている墓標を見る。そこには母さんと父さんの名前が記されていた。

「えつと、しばらく墓参りできなくてごめんな。あと、魔法のこととか黙っててごめん。」

誰も聞いていないのは分かっているのだが黙っては何をしにきたか分からないのでとりあえず謝っておいた。でも話すことはそれほどあるわけでもないのですぐに黙ってしまった。俺はため息をつきながらしゃがみこんで墓標をさわる。気にならなくなっただけがここにくると改めて母さんたちが死んでるってことを実感する。

「もう、八年もたったのか・・・」

少し感傷に浸っていたがしょぼくくれているも仕方がないので俺は立ち上がった。

「じゃあな。母さん、父さん。」

そう呟いて墓地をあとにする。もう、ここにくることはないだろう。

すると、ポツポツと地面にシミができる。空を見上げると雲に覆われていて雨が降り出していた。

「雨か……」

雨は次第に強くなり俺の体はすぐにびしょぬれになった。

『風邪引きますよ?』

「大丈夫だよ。これくらい。」

俺は構わず歩いた。服はもう濡れてしまっているし、行き先もないのだ。このままぶらぶらと歩こうと思ったのだ。それに今は雨の感触が少しだけ心地いい。墓地から離れ住宅街の方まで歩いていく。その間雨は降りやまず俺の体はすっかり冷たくなってしまった。傘を差してすれ違う通行人に見られたりしたが気にしなかった。

「あの、そのままだと風邪を引きますよ?」

すると後ろから誰かに声をかけられた。どこか聞き覚えのある声。振り向くとそこには傘を差したポニーテールの女性がいた。買い物帰りなのかスーパリーの袋を持っている。顔立ちは整っていて大和撫子を思わせる女性。その顔も見覚えがあった。女性の方も俺の顔を見ると気づいたようだ。

「お前、まさかレインか?」

「……久しぶりだな。深澄。」

俺は軽く手を上げながら名前を呼んだ。深澄は驚いたという顔にな

る。

「久しぶり、だな。というかこんなところで何をしている？」

「まあ、ちよつと色々とな。」

「とりあえず、場所を移動するぞ。このままでは風邪を引いてしま  
うからな。」

深澄はスーパーの袋を持っている方の手で俺の手を掴み引つ張る。  
そのまますたすたと歩いていき公園の中に入ってしまった。そして屋  
根つきの休憩所まで来た。休憩所といっても壁はなく、円形のテー  
ブルと木のベンチが置かれているだけだ。俺はベンチに座った。

「ほら、これで少し体を拭け。」

差し出されたのはハンカチだ。体中びしょ濡れなのでハンカチで拭  
いた程度では気安めにしかならなかった。深澄は傘を折りたたんで  
向かい側のベンチに腰掛けた。

「全くお前は雨の中傘をさすのも面倒になったのか？」

「なんだよそれ。俺もそこまでじゃないさ。今日は傘を持ってなか  
っただけだ。」

「だったら、すぐに雨宿りできる場所をさがすか、傘を買いぐらい  
はしろ。」

「はいはい。」



深澄はまるで子供を叱るような感じで言ってくる。中学の頃に戻ったみたいだ。

「で、お前はあんなところで何をしていたんだ？」

「墓参りの帰りだよ。それより深澄は何してんだよ？学校とかは？」

今日は土日でもなければ祝日でもない、ただの平日だ。深澄なら大いにいける学力は余裕で持つてるから進学していると思ったのだが。まさか就職したのか？

「ああ、そのことか。私は今浪人しているんだ。」

「深澄が？何でまた。」

これは少し驚きだ。東大辺りでも目指したのだろうか？

「それは進路に迷っていたんだ。私の家はあまり裕福な方ではないからな。」

深澄は少し目を伏せながら言った。

「私は両親にあまり負担を掛けたくないと思って、就職することを選んだ。そのときは色んな人に止められたよ。でも私は聞き入れずに進路を変えなかった。けど、大学に行きたい部分もあったんだ。母さんと父さんがそれを見抜いていてな。学費のことは心配するな、何とかしてやると言われた。けれどもうそのときは受験することはできなかつたんだ。それで浪人しているというわけだ。」

「大変だな。」

「それでもない。だが、お前たちが居なくなって少し寂しくなった。」

そういえば、明日香も弾もミッドに居るんだったな。レイルカと俺も旅に出たし、結果残ったのは深澄だけということになる。

「そうだ。こっちに帰ってきたということは用事は終わったのか？」

「いや、まだ半分つてとこだ。」

「そう、か……」

深澄は残念そうな顔をする。そういえば、ずっと待たせてるんだよな。いい加減答えを出さないといけないか。

「深澄。」

「なんだ？」

「返事、今言おうと思う。」

すると深澄の動きが止まる。そして、ちょっと待ってと手で合図し深呼吸をした。

「よし、い、いさぞ。」

「えっと、じゃあ、言っぞ。俺は……お前とは付き合えない。こんなやつのために待たせて悪かった。」

俺は頭を下げながら答えた。深澄は何も言わない。頭を下げたまま待っている。と大きく息を吐く音が聞こえた。

「顔を上げる。レイン。」

俺はゆっくり顔を上げる。そこには普段と変わらない深澄がいた。

「何だその意外そうな顔は？」

「正直、泣かれるか、ぶたれるかは覚悟してたから。」

「実際、お前をぶって、泣きたい気分だ。」

「す、すまん。」

「冗談だ。薄々、気づいてはいたからな。ある程度覚悟はできていた。」

深澄はいつにもまして穏やかな表情で心境を語った。

「一つ、私の我が儘を聞いてくれないか？」

「何だ？」

「私をお前の用事に同行させてほしい。」

「な!？」

いきなり何を言い出すんだ。冗談には性質が悪いぞ。

「冗談ではないぞ。私は本気だ。」

「何でそんなことを？大体、大学行くためにがんばってるんじゃないのか？」

「そうだよ。でも、私は気づいてしまったんだ。」

「何を？」

「私はお前を本当に好きだということだ。」

「!?!?」

深澄は俺を真剣に見つめながら言ってきた。よく恥ずかしげもな言えるな、そんなこと。

「断られるのは気づいていた。お前から返事が来れば諦められると思っていた。でも、さっきお前から返事を聞いたとき諦められるとは思わなかった。むしろ悲しみがあふれて、この気持ちを忘れたくないって、お前を思っていたって、それしか考えられなくなった。」

深澄は苦しさを吐き出すように俯きながら語った。けど涙は流していなかった。

「それにお前と再会したとき、お前は悲しい顔をしていた。少し泣いているようにも見えた。」

「そんなことはない。」

「していたさ。お前は私に言っただろ。俺が困ったら助けに来て。だから今その約束を果たす。もう、私だけ一人は嫌なんだ。連れて行ってくれないか？」

深澄は今に泣き出しそうな顔で俺を見つめる。

「もう戻れなくなるんだぞ。」

「いい。」

「傷つくことになるかもしれないんだぞ。」

「お前となら大丈夫さ。」

深澄はぎこちなく笑って答えた。俺はそれを見て大きなため息をつく。俺にはなんでそこまでできるのか分からないよ。

「分かった。お前にも協力してもらおうことにする。」

「・・・ありがとう。」

「礼を言うのはこっちのほうだ。」

すると深澄は立ち上がって俺の方のベンチに座ってきた。

「さすがに、もう我慢はできない。」

深澄は俺に抱きついて大粒の涙を流した。俺は深澄が泣き止むまで優しく頭を撫でていた。

## 覚悟

そこは不気味なほどに静まり返っていた。目の前に広がるのは闇だ。どこまでも続いていつている闇。穴の開いた地面から差し込む光が俺の周りを少し照らしているだけだった。

『どうかしましたか？』

「・・・いや、なんでもない。」

しばらく闇の中を見つめていたが俺はすぐに歩き出した。魔法で発光する球体をだす。それにより暗闇が照らされる。その球体は俺の斜め上を定位置とし同じスピードでついてくる。俺は壁に沿って歩いていく。壁には見たこともないような模様が刻まれている。中には魔方陣に似た幾何学模様もある。しばらく歩いていき目的の場所についた。

「あれ？直ってる？」

目の前には重厚そうな扉が天井近くまでそそり立っていた。三年前、歪みに破壊されたこの扉は見事なまでに塞がっていた。壊された事自体なかったかのように。

「ま、いいや。」

俺はそう呟き扉の右の方に向かう。そして扉の近くの壁を触る。手を何度か移動させながら壁を押ししていくと壁の一部がゴトンツという音を立てて窪んだ。

「お、あつたか。」

すると扉の前に六角形の柱が伸びてきた。六角形の柱は腰ぐらいの高さまで来ると停止した。俺はその六角形の柱の元まで行く。六角形の柱の上には魔方陣が刻まれていた。その魔方陣に手をかざすと魔方陣が光だした。光りだした魔方陣はホログラムのように俺の前に浮かび上がる。映し出されたのはパズルだ。このパズルが扉を開く鍵なのだ。

「えっと、これをこうして、これは・・・」

俺はそのパズルを悩むことなくすらすらと解いていく。ちなみにパズルを解き間違えると侵入者撃退用の罠が作動するようになっていく。パズルを解き終わると魔方陣は元の位置に戻り柱も沈み込んだ。そして、数秒もすると重厚な扉が床と擦り合う大きな音を立てながらゆっくりと開いた。扉が全て開き終わると俺は中に入った。それと同時に俺はエリスを振りぬく。金属と金属がぶつかり合う甲高い音が空間に響く。鎖の先に短剣がついたような武器は地面に転がる。

「ここに来るの二回目なんだけど、毎回これなわけ？」

俺は誰も居ない祭壇の上を見つめながら問いかける。

「違うぞ。招いていない客にたいしてだけだ。」

「へえ、お前って知り合いとかいたんだ。」

「いや、この世界にそのような者は存在しない。」

「じゃあ、毎回あれをするわけか。」

暗闇の中から気配を感じさせずにそいつは現れた。豪華な黒を貴重としたドレスに身を包み、幻想的なほど綺麗な銀髪を靡かせて、どこからともなく舞い降りた。現れるなり無表情な顔でこちらを睨み付けてくる。名前はエフィア・プリフィオニス。

「一つ聞こう。貴様はなぜ扉の開き方を知っている？」

「知っているっていつより覚えてるって方が正しいかな。」

「ふざけているのか？この場所のことは私しか知らないのだぞ。」

「そう言われてもなあ。こっちにも色々あるしな。覚えてるとしかいいようがないんだよ。」

そう、俺は覚えている。世界のこと、この場所のこと、エフィアのことも覚えている。

「あのさあ、俺一応招かれた客の部類に入ると思っただけど？」

「私はそのようなことを言った覚えはない。」

「ちゃんと言ったよ。世界の終焉が始まるときにまた来いって。」

それを言った途端エフィアの動きが止まる。次に酷く辛そうな顔をする。だがそれはほんの一瞬の間だけですぐにもとの無表情な顔に戻った。

「・・・そうか。また世界が壊れるのか。ならば、貴様に全てを教えてやる。」



「いや、それはいいよ。」

「……どういうことだ？聞きたくはないのか？世界のことを。」

「それも覚えてる。そして、俺がこれから何をしなきゃいけないのかも、全部な。だから俺はお前に会いに来たんだ。エフィア、お前と契約するために。」

それを言うとエフィアは表情に大きな変化を見せた。俺が契約について知っていることに驚いているのだろう。

「……覚えているというのも存外嘘ではないらしいな。」

「だから言っただろ。」

「しかし、それならばこれから自分がどうなるかも分かっているな。」

「……ああ。」

エフィアは一度目を閉じて息を吐く。そして、目を開きこちらを見つめる。睨みつける視線ではなく少しだけ優しい目だ。

「分かった。ならば、契約を始めよう。」

エフィアの足元に見たことのない魔方陣が現れる。いや、これも覚えてるな。俺はその魔方陣へと足を踏み入れる。

「汝、我が契約者なり。その真名を答えよ。」

「俺はレイン・オルハルトだ。」

「ふあゝああ、眠い。」

あれから一週間が経った。ちなみにあれからというのは俺が起きてからで地球に帰ったり、エフィアに会いに行ったりした諸々の時間を含めて一週間が経ったのだ。俺は欠伸をしながら自動ドアをくぐる。俺が今居るのは機動六課だ。とりあえず一段落したので報告も兼ねて戻ってきた。

「あ！トールだ！！」

入った途端元気のいい声が聞こえてきた。廊下の隅の方からヴィヴィオがこちらに走ってきて俺の足に抱きついてきた。

「お前はいつでも元気だな。あと、俺の名前はレインだ。」

「トールはどこ行ってたの？」

「ちょっと世界を見てただけだよ。」

「?????」

俺の答えが理解できないのかヴィヴィオは不思議そうな顔をする。

「じゃあ、もつどこにも行かないの?」

「え?あゝまあしばらくはここに居るかな。」

そういつとヴィヴィオは満面の笑みを浮かべる。

「じゃあ!ツール一緒に遊ぼう!」

「遊ぼうって、今からか?」

「うん!」

「いや、さすがにそれは・・・」

俺はなぜヴィヴィオに出くわしたのかと後悔する。遊びの要求をしてきたヴィヴィオは絶対に諦めない。今までも仕事中に何度かせがまれて遊ばされたことがある。俺ばかりではなく高町たちにもせがめばいいのに。

「あ、ヴィヴィオこんなところに・・・ってレイン君?」

「おう、高町。」

「いつ帰ってきたの?」

「さっきだ。それよりヴィヴィオをなんとかしてくれないか？」

「え、あ、うん。ちょっと待ってね。」

すると高町は後ろを向きポケットから通信端末をだす。誰かに連絡を取っているようだ。

「うん・・そう。え？別にそこまでしなくていいんじゃない・・・はい、分かりました。」

会話が終わって高町はこちらに向いた。するとなぜか高町はデバイスであるレイジングハートを取り出す。

「何してんだ？おい！？」

そして俺はバインドで縛られた。それも結構なプロテクトが掛かっているやつだ。

「えっと、ご、ごめんね！！」

高町はレイジングハートを高々と振りかざし容赦なく俺の頭に叩きつけた。疲れていた所為もあってか俺はすぐに意識を失った。

「はあああああ。」

「どないしたん？おっきいため息ついて。」

「普通さあ、こんなめんどくさいことになったらため息の一つくらい出るって。」

俺が目覚めた場所は車の中だった。高町に気絶させられたあと乗せられたようだ。ちなみに運転しているのは八神で付き添いとしてシグナムが俺の隣に座っている。

「この手錠外してくんない？それよりなんで俺は気絶させられたわけ？」

「ちょっと付きおってもらいたいところがあつてな。気絶させたんは何も言わんとどっか言つたお仕置きや。」

「はあ。別に付いてきてほしいなら普通に言えよ。俺を何だと思つてるわけ？」

「そつやな。きかん坊の問題児つていうところや。」

お前は小学校の先生か。そう思いながら俺はまたため息をつく。

「それでどこに向かつてるわけ？」

「まあ、もうすぐ着くからそんとき話すわ。」

八神の言つたとおり目的地にはすぐに着いた。着いた場所にはミッ

ドチルダにはあまり見られない建物が建っていた。外観的には中世のヨーロッパに建てられていた建物に似ているだろう。

「どこだ？」

「聖王教会や。ここにあってほしい人がおんねん。」

聖王教会ってヴィヴィオを預かっていたところか。車から降りるとシグナムが手錠の鍵を外してくれた。さすがに手錠をしたまま面会させる気はないらしい。

「これから会う方は主の友人であるがあまり失礼のないようにな。」

「善処する。」

シグナムの忠告を軽く受け流しながら教会の中に入っていった。八神は教会の中をすたすたと進んでいき突き当たりの扉の前で止まった。

「失礼します。」

「どござ。」

二回ノックすると中から声が聞こえた。それを聞くと八神は扉を開けて中に入る。続いてシグナムが入り最後に俺が入った。

「ごめんな。急に無理言つて時間作ってもらつて。」

「いえ、構いません。もともと彼との面会をお願いしたのは私ですから。」

返事をしたのはソファに座っている金髪の女性だった。彼女が合わせた人らしい。その後ろには紫色の短髪のシスターと緑色の長髪の男が立っていた。シスターの方は生真面目そうな顔をしていて、男のほうは軽薄そうな笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「どうぞ。お掛けになってください。」

席を勧められたので素直に座った。俺は金髪の女性と対面となるソファに八神はその横の椅子にシグナムは八神の横に立ったままだった。

「初めまして。私は聖王教会、教会騎士団の騎士カリム・グラシアです。後ろに居る二人は女性の方が私の秘書を勤めるシャツハ・ヌエラ。男性の方は査察官のヴエロツサ・アコースです。」

カリムが紹介すると二人が頭を下げてきたので俺も下げ返す。ヴエロツサどこかで聞いたことのある名前だ。あ。

「一つ聞くがその男の愛称はロツサとかいうのじゃないか？」

「？ええ、そのとおりですが知り合いだったのですか？」

「いや、変なことを聞いてすまない。男の方は八神と一緒に地獄に落ちろ。」

「なんでだい！？」

不意打ち気味に指摘されたので男は心底驚いているだろう。事情を知っている八神は苦笑いを浮かべていた。

「あの、問題がなければ話してもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わない。」

「分かりました。では、まずこの紙に書かれていることを読んでください。」

ソファの前の机に差し出された紙を受け取る。その紙に書かれていたのはミッドチルダの文字ではなかった。もちろん日本語でもない。

「古代ベルカ文字か。」

「・・・ええ。あなたはそれを読めますか？」

「いや。文献で何度か読んだことはあるが解読はしたことないな。それより、何で俺がこの文字を読めると思ったんだ？」

「失礼ながらあなたを調べさせてもらいました。そのときあなたが無限書庫で誰も読めなかった手紙を読んだと聞いてもしかやと思ったのです。」

なるほど、スクライアの前であれを読んだのは少しまずかったな。実際のところ俺は古代ベルカ文字を読める。だが理由の追求をさねては面倒なのであえて否定した。

「その紙には何が書いてあるんだ？」

「これは予言です。私のレアスキルは未来を予知することができます。」

「



そうやってカリムはその予言を読み始めた。

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

「それが本当だと管理局は崩壊するってことか？」

「はい。解釈としては間違っていないと思います。」

「続きはまだあるのか？」

カリムは、はい、と呟いて続きを読み始めた。

無知の勇者は未来を変え、人を救い、世界を傷つける

傷ついた世界は歪み、黒い王を再臨させる

黒い王は世界に破滅の種を撒き、世界は滅びの運命を背負う

うそつきは儚きの思いを手に入れて黒い王と対峙する

全てを知ったうそつきは世界を救う

そして過去の悲劇を繰り返す

聞き終わった俺はまず思った疑問を口にした。

「その予言を俺に見せた理由は？」

「この予言に出てくる黒い王というのはネクロではないかと推測しています。ネクロを退治できるあなた何か分かるかと思ひまして。予言の後半の部分はほとんど何も分かっていないのです。私たちは何が起こるか理解し対処しなければならぬ。ご協力してくれませんか？」

カリムは真剣な眼差しでこちらを見つめる。

「結論だけでいいなら。」

「・・・できれば理由も教えていただきたいのですが？」

「理由には俺の個人的な事も入るから聞かないでほしいんだが。」

「・・・分かりました。」

「予言から解釈すると今後起こる事件は管理局の崩壊だけだな。あんたたちはそれに備えるかそれを未然に防ぐかの努力をしていますがいいんじゃないか。」

俺がはつきり断言するとなんともいえない視線が集まる。疑っている視線、不思議に思っている視線など。

「話はそれだけか？」

「え、ええ。あのあなたの言葉は真実なのですか？」

「少なくとも二つの大事件が重なるっていうことにはならないな。」

「そうですか。ご協力ありがとうございました。」

カリムはそう言って頭を下げた。

「うちからもちょっとええか？この前のネクロについて報告してくれへん。」

「レイルカがやったんじゃないのか？」

「ちょっと気になることがあるんや。それと一週間どこいったかも話してな。」

「はいはい。この一週間はいろんな世界を回ってたよ。前の戦いでどんな影響が出たか気になってんでな。」

「それでどうやったん？」

「特に変化は見られなかった。」

だがどの世界にも歪みの気配がした。ほんの微々たる物だったけど。

「それで気になったことは？」

「報告には前のネクロは王やって書かれとったけど、王ってなんなん？」

「言葉通りの意味だ。ネクロの王でネクロの根源。」

「根源？それやったらもうネクロは襲ってこんのか？」

「さあな。そこまでは分からない。」

「じゃあ、次で最後や。何で君生きかえったん？」

その瞬間、場の空気が一気に静まり返った。カリムたち教会側の人間は俺が生き返ったということについて驚いている。

「それについては答える義務はない。」

「いいや、答えてもらうで。死んだ人間が生き返るなんてありえへんことなんや。そんで世界には今そのありえへんことが起こってる。まだ続くようやったらうちらも何も知らんままじゃいかんや。今日は是が非でも話してもらうで。」

八神は少しいつもより低い声で言った。目は自分は本気だと語っている。けれど……

「お前にはそれを知る権利はない。」

「あなた……!？」

「貴様はまだそんなことを言っているのか？」

八神が怒鳴る前に出てきたのはシグナムだ。彼女はレヴァンティンを俺の首に突きつけている。カリムたちの表情が固まった。

「なんの真似だ？」

「こちらとしても貴様のただに付き合っている暇はないのだ。」

「だから力づくでもしゃべってもらうか。別に俺はただをこねてるわけじゃないぜ。それにこんなことをしても無意味だ。」

「脅されてもしかべる気はないということか？」

「それもあるけど、前提からして間違ってるからな。脅しって言うのは・・・」

俺はおもむろに突きつけられている刃を掴む。非殺傷設定がついていたとしても刃物は刃物だ。握り締めると皮膚が切れ血が流れ出す。そしてその刃を首に近づける。

「相手が恐怖を感じないと成立しないからな。」

切先は俺の首に食い込みレヴァンティンに血が伝う。シグナムもこれには驚いたようだ。俺はなお近づけるのを止めない。

「シグナムっ！！」

八神の声でシグナムはとつさにレヴァンティンを引き抜いた。引き抜かれた勢いによって床に血が飛び散る。

「できないことすんなよ。これじゃ俺が怪我損じゃないか。」

俺は多少息を荒くしているシグナムを見つめていった。表情はどこか苦しげだ。俺は切れた手を見つめて器の力を発動させる。発動さ

せると傷はすぐにふさがった。ディネガーとの一件以来器の力が強まったためこの程度の怪我ならすぐに治るようになった。

「八神、お前は俺がなぜ真実を語らないか考えたことはあるか？」

「え？」

「お前たちは何を勘違いしているのか知らないが真実を知ることによってそれが救いに繋がると思っている。」

「助けたい相手のこと知らなかったら何も始まんやろ。」

「けれど、実際は違う。真実を知るということは選び、捨てるということだ。」

「どづいづことや？」

八神は自分の考えが否定されたことに苛立ちを覚えたのか、少し目を細める。

「八神、お前が知りえた真実はどんなものだった？思い出してみろ。」

「私の真実……！？」

八神は俺の言葉の意図を理解したようだ。

「その真実は酷く残酷なものだっただろうか？」

「それは……」

「真実を知ったときそれは救いになったか？ 違う。お前は真実を知ったとき絶望に叩き落とされた。」

「じゃあ、あんたは私たちを絶望させないために黙っとるってことか？」

「違う。俺はそこまで優しくくない。」

八神の推測を俺はあっさりと否定した。

「お前たちは謎を知りたい好奇心と自らがされてきたように助けなければならぬという使命感から真実を求めているだけに過ぎないけれど、真実を知るために必要なものはそんなものではない。」

「必要なものってなんなんや？」

「覚悟だ。真実を知り、逃げるのなら逃げ続け。真実を知り、戦うのなら戦い続け。真実を知り、救うのなら救い続ける。必要ならば自らが滅びようと、今まで得たもの全てを捨て、選んだ道を最後まで歩み続ける覚悟だ。」

「自分の全てを・・・」

「そうだ。地位も名誉も権力も家族も友も恋人も絆も心も思い出も日常も世界もそれら全てを犠牲にできると言うのならお前が知りたいうことを全て教えてやる。さあ、選べ。覚悟があるというのなら。」

俺は抑揚のない声で語った。それはとてつもなく冷静で冷たい声だった。気を抜いてしまうとこうなってしまう。八神は目を大きく見

開き固まっている。それもそうだろう。真実を知るための代償が大き過ぎるのだ。自分が今まで得たもの全てを犠牲にしろと言われても誰もできないだろう。

「時間切れだ。」

八神が選ぶのは初めから無理だと分かっていたのでそうそうに切り上げた。八神はどこかほっとしたような顔をしている。そしてどこか苦しげであった。

「話は終わりか。それじゃ俺は帰らせてもらっぜ。」

そう言っただ俺はソファを立ち上がる。先に帰ろうと思ったのはこんな状態の八神たちと帰っても気まずいだけだと思っただからだ。

「ちょっと待ちい!！」

「なんだ?」

部屋を出ようと思ったたら突然八神に呼び止められた。

「真実を知るんにそこまでのもんが必要なんやったら、何であんたは知ろうと思ったんや?」

「……別に俺は知ろうとしたわけじゃない。知ってしまったただけだ。」

俺はそう言い残して部屋を出た。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2115s/>

---

うそつきは世界を救う

2011年12月5日23時54分発行